小林市文化財調査報告書　第11集

霧島東地区栗巣野団地畜産環境整備特別対策事業に伴う

梅木原遺跡発掘調査報告書

２０００年３月

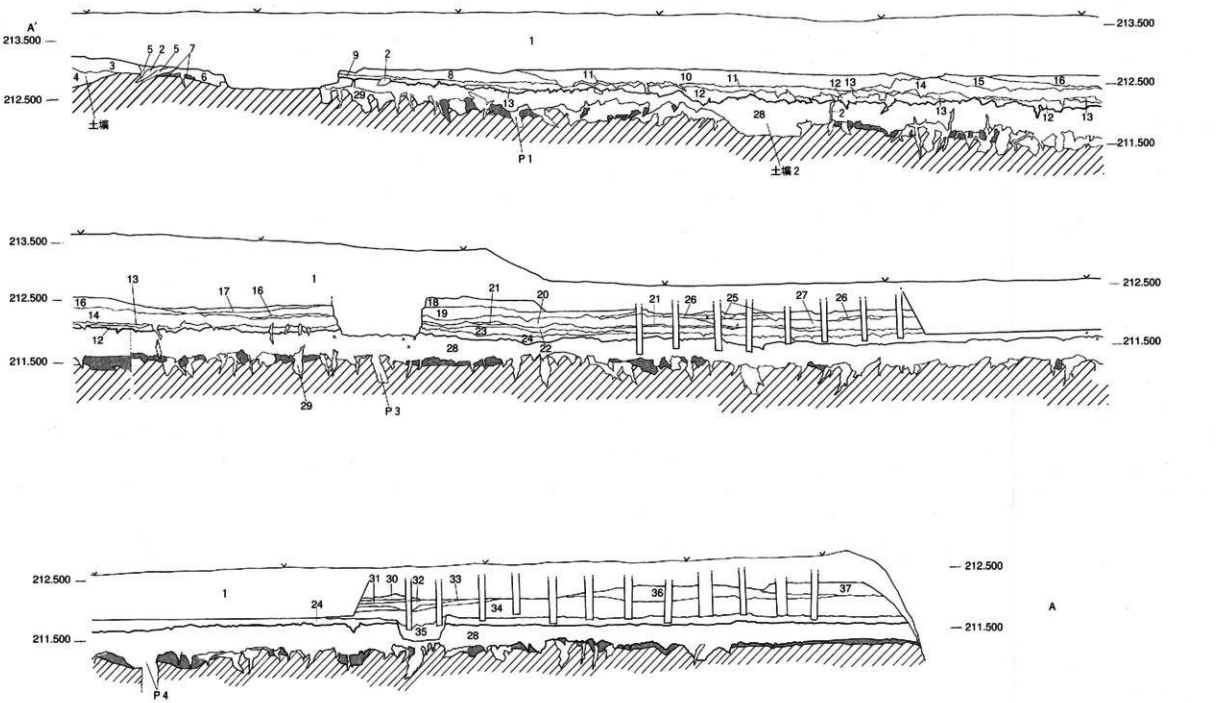
宮崎県小林市教育委員会

梅木原遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁／行	誤	正
2頁、2行	両者ついて	両者について
3頁、3行	られた発掘例	られた遺跡の発掘例
3頁、25行	前期	早期
7頁、35行		(28)「荒迫遺跡」 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集 平成10年　宮崎県埋蔵文化財センター
8頁、22行	としていて	として
19頁、29行	黒色土層が	黒色土層を
21頁、22行	土壌な	土壌に
21頁、37行	3mを	3mが
25頁、23行	機械痕の	機械痕に
49頁、4行	押し型文	押型文
49頁、21行	堺	境
50頁、34行	段つくらず	段をつくらず
108頁、7行	もは少	ものは少
109頁、3行	成形と	成形が
128頁、9行	軸とした	軸として
128頁、31行	形式	型式
132頁、9行	今回の今回の	今回の

頁／行	誤	正
序、 2行	残す町です。	残す街です。
凡例、 4行	陥穴状土壙	陥し穴状土壙
Ⅰ頁、36行	４区陥穴状土壙	４区陥し穴状土壙
Ⅱ頁、 6行	陥穴状土壙１	陥し穴状土壙１
7頁、32行		平成9年 宮崎県埋蔵文化財センター
7頁、33行		平成11年 宮崎県文ヴの市教育委員会
13頁	（１／８００） 0 20 40m	（１／４００） 0 10 20m
14頁	（１／８００） 0 20 40m	（１／４００） 0 10 20m
19頁、36行	陥とし穴状土壙	陥し穴状土壙
20頁、8･9行	陥とし穴状土壙	陥し穴状土壙
21頁、 5行	陥とし穴状土壙	陥し穴状土壙
21頁、 7行	堆積0.665㎥	体積0.665㎥
23頁、37行	陥とし穴状土壙	陥し穴状土壙
25頁、23行	床面平面	床面は平面
31頁	４区陥穴状土壙	４区陥し穴状土壙
33~34頁	ＳＧ６－１	ＳＣ６－１

頁／行	誤	正
33~34頁	ＳＧ６－３	ＳＣ６－３
41頁	陥穴状壙１	陥し穴状土壙１
46頁、 3行	堺界	境界
49頁、30行	擦消縄文	磨消縄文
49頁、33行	擦消縄文	磨消縄文
49頁、34行	擦消縄文	磨消縄文
49頁、38行	擦消縄文	磨消縄文
50頁、 3行	擦消縄文	磨消縄文
50頁、 7行	擦消縄文	磨消縄文
50頁、13行	擦消縄文	磨消縄文
50頁、29行	擦消縄文	磨消縄文
58頁、23行	付部	杯部
59頁、24行	体部	脚部
64頁、11行	堺	境
128頁、17行	形式	型式
130頁、 2行	近年では	近年
130頁、15行	弥生式土器	弥生土器
130頁、20行	外反すしている。	外反している。
132頁、 6行	陥穴状土壙	陥し穴状土壙
133頁、13行	前期	早期



1 耕作土及び盛土
2 黒色土　黄色の粒が混ざる（撹乱）
3 黒色土　鈍い色をする。黄色と白灰色の粒子を含む。締まらない粘質の土
4 黒色土　やや鈍い色をする。黄色の粒子を含む。良く締まった粘質の土（土壙）
5 暗灰色土　暗い色をする。黄色の粒を含む。締まらない粘質の土
6 黒色土　鈍い色をする。黄色の粒子を含む。締まらない粘質の土
7 暗褐色土　明るい色をする。良く締まった硬質の土（基本土層Ⅲ）
8 暗褐色土　暗い色をする。砂礫のブロックを挟む。良く締まった硬質の土
9 暗灰色土　鈍い色をする。良く締まった硬質の土
10 褐色土　やや暗い色をする。黄色の粒子を含む。締まらない粘質の土
11 暗灰色土　鈍い色をする。褐灰色の大きな粒を含む。良く締まった硬質の礫層
12 暗灰色土　暗い色をする。良く締まらない粘質の土
13 暗灰色土　暗い色をする。褐灰色の砂を含む。良く締まらない粘質の土
14 暗灰色土　やや暗い色をする。多量の褐灰色の粒を含む。良く締まった硬質の礫層
15 暗褐色土　やや明るい色をする。灰色の粒を含む。締まらない粘質の土
16 暗褐色土　暗い色をする。灰色の粒を少量含む。締まらない粘質の土
17 暗褐色土　暗い色をする。青く砂礫の塊を挟む。良く締まった硬質の土
18 暗灰色土　やや暗い色をする。少量の灰色の粒と白色の粒子を含む。良く締まった硬質の土
19 暗灰色土　やや暗い色をする。少量の灰色の粒と白色、黄色の粒子を含む。堅く締まった砂質の土
20 暗灰色土　暗い色をする。多量の灰色の粒と白色、黄色の粒子を含む。堅く締まった砂質の土
21 灰白色土　明るい色をする。ブロック状に入る砂質の土
22 暗灰色土　鈍い色をする。良く締まった砂質の土
23 暗灰色土　やや暗い色をする。多量の褐灰色の粒を含む。締まった砂質の土
24 黒色土　赤味のある光沢性の色をする。良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ黒色土上層）
25 暗灰色土　鈍い色をする。多量の灰色の粒を含む。良く締まった砂質の土
26 暗灰色土　鈍い色をする。ブロック状に入る暗い砂質の土
27 暗灰色土　鈍い色をする。ブロック状に入る暗い砂質の土。26よりも暗い
28 黒色土　光沢性のある明るい色をする箇所に黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ）
29 黒色土　光沢性のある明るい色をする。多量の黄色の粒が混ざる。板碑を含む。良く締まった粘質の土（遺構を含む）
30 暗灰色土　やや淡い色をする。締まった砂質の土
31 暗灰色土　淡い色をする。灰色の粒を少量含む。締まった砂質の土
32 暗灰色土　鈍い色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土
33 暗灰色土　やや暗い色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土
34 暗灰色土　淡い色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土
35 暗灰色土　明るい色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土（イモ穴）
36 暗褐色土　やや明るい色をする。若干の灰色の粒を含む。良く締まった粘質の土
37 暗褐色土　明るい色をする。多量の礫が混ざる。良く締まった粘質の土

第20図　6、7区南側壁土層図

小林市文化財調査報告書　第11集

霧島東地区栗巣野団地畜産環境整備特別対策事業に伴う

梅木原遺跡発掘調査報告書

２０００年３月

宮崎県小林市教育委員会

序

小林市は、宮崎県の南西部、霧島火山の麓にあり、古くは日向国十六駅の一つである夷守駅の所在地に比定されるなど、歴史と伝説を残す町です。現在は花と星空と湧水の美しい田園観光都市として発展を続けています。

市教育委員会では、社団法人宮崎県農業開発公社からの依頼を受け、平成9年度から2ケ年に渡り、市内東方栗巣野地区にある梅木原遺跡の発掘調査を行いました。その結果、梅木原遺跡からは縄文、弥生、古墳時代、古代、近世の遺物が多数出土しました。特に縄文時代においては、南九州で特徴的な遺物だけでなく、中九州、東九州を代表する土器も出土しております。これらの結果により、熊本県、鹿児島県に隣接する小林地方の当時の様相の一端が解明されました。

最後に、調査にあたりご指導、ご協力いただきました宮崎県文化課の方々をはじめ、畜産課の方々、地元の方々、また発掘、整理作業に従事くださいました皆様に対して厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

小林市教育委員会
教育長　瀬戸口　克　彦

例　言

1．本書は霧島東地区栗巣野団地畜産環境整備特別対策事業に伴う発掘調査報告書である。

2．本事業は、社団法人宮崎県農業開発公社の依頼を受け、平成10年1月5日から平成11年1月30日まで、小林市教育委員会が調査主体となっておこなった。

3．本事業の調査主体は、以下の通りである。

調査主体　小林市教育委員会

教　育　長	瀬戸口克彦
社会教育課長	山口　末男
社会教育係長	堀　　英博
庶務担当	堀　　英博（平成9年度）
同　主事	三澤　悦子（平成10年度～）
調査担当主事	中村真由美（平成9年度）
同　委託	工藤　基志（平成10・11年度）

4．発掘調査は平成9年度に中村、同10年度に工藤がおこなった。発掘は以下の作業員の協力を得た。

[redacted]

5．発掘調査の実測は杭打ち、及び1～3区のピット群と1～3、7区の地形測量は㈲ジパング・サーベイに委託し、その他は中村と工藤がおこなった。平成10年度の測量は工藤がおこない、[redacted]が補助した。

6．本書で使用した方位は全て磁北である。

7．整理調査は平成11年度に小林市教育委員会において工藤がおこなった。整理調査は以下の作業員の協力を得た。

[redacted]

8．本書の執筆及び編集は工藤がおこない、[redacted]が補助した。

挿図の実測は工藤がおこない、[redacted]が補助した。トレースは工藤がおこなった。図版の写真は工藤、[redacted]がおこなった。拓本は[redacted]がおこなった。

9．梅木原遺跡に関する出土遺物および図面、写真は小林市教育委員会に保管してある。

凡　例

1．遺構番号は「遺構記号―区番号―順番」号の順になる。(例：SC３－２)発掘時は仮番号を使用していた。本文遺構番号とは異なる。記号は以下の通りである。
SC：土壙　SR：焼土壙　ST：陥穴状土壙　P：ピット　SX：不明、根痕
2．焼土はスクリーントーンで表現した。
3．梅木原遺跡では第Ⅳ層のアカホヤ火山灰層を地山とし、遺構検出をおこなった。第Ⅳ層は斜線で表現した。第Ⅳ層と第Ⅲ層の間はスクリーントーンで表現した。
4．本書で使用した標高は海抜高を表す。
5．土器の実測は口縁部と底部が残るものを中心におこなった。復元径が不明なものは断面のみ実測した。また土器の表面に文様が残るものは拓本をおこなった。
6．黒色土器及び彩色土器はスクリーントーンで表現した。
7．石器の実測は表・裏の２面を中心におこなった。側面は主に断面と見通しの２つ方法を用いている。混乱しているため観察表に明記する。
8．土器及び土層の色調は「1994年版標準土色帖」を参考にした。

本 文 目 次

第Ⅰ章 序
1 はじめに……1
2 位置と環境……2
3 梅木原の歴史的環境……3
第Ⅱ章 調査の結果……8
1節 遺構……8
1 基本層序……8
2 3区……11
3 4区……19
4 5～7区……21
5 地形……26
2節 遺物……45
1 土器……45
2 石器……107
第Ⅲ章 まとめ……128

挿 図 目 次

第1図 九州・小林市位置図……1
第2図 宮崎県・小林市梁巣野位置図……2
第3図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図……4
第4図 遺跡の位置及び周辺包蔵地……5
第5図 梅木原遺跡調査区周辺地形図……9
第6図 小林市周辺地形図……10
基本土層図……8
第7図 1～3調査区地形図……12
第8図 1区遺構実測図……13
第9図 2区遺構実測図……14
第10図 3区遺構実測図……15
第11図 3区土壙3、1実測図……16
第12図 3区焼土壙2実測図……17
第13図 3区2、3、4土層図……18
第14図 4、5、6、7、及び11調査区地形図……27
第15図 4－a、b、c、d区遺構実測図……28
第16図 4区トレンチ4、5土層図……29
第17図 4区トレンチ8、9土層図……30
第18図 4区陥穴状土壙1及び焼土壙1実測図……31

第19図　4－e区及び5、6、7区遺構実測図 ……33～34
第20図　6－7区南側壁土層図 ……35～36
第21図　6－7区中央壁土層図 ……37～38
第22図　7区集石状土壙実測図 ……39
第23図　5区焼土壙3、2　土壙1実測図 ……40
第24図　5区焼土壙1　陥穴状土壙1実測図 ……41
第25図　6区井戸状土壙　大土壙実測図 ……42
第26図　6区焼土壙3、7、4　7区焼土壙3、4、7実測図 ……43
第27図　7区焼土壙3、6、1実測図 ……44
第28図　出土遺物実測図　土器（1） ……65
第29図　出土遺物実測図　土器（2） ……66
第30図　出土遺物実測図　土器（3） ……67
第31図　出土遺物実測図　土器（4） ……68
第32図　出土遺物実測図　土器（5） ……69
第33図　出土遺物実測図　土器（6） ……70
第34図　出土遺物実測図　土器（7） ……71
第35図　出土遺物実測図　土器（8） ……72
第36図　出土遺物実測図　土器（9） ……73
第37図　出土遺物実測図　土器（10） ……74
第38図　出土遺物実測図　土器（11） ……75
第39図　出土遺物実測図　土器（12） ……76
第40図　出土遺物実測図　土器（13） ……77
第41図　出土遺物実測図　土器（14） ……78
第42図　出土遺物実測図　土器（15） ……79
第43図　出土遺物実測図　土器（16） ……80
第44図　出土遺物実測図　土器（17） ……81
第45図　出土遺物実測図　土器（18） ……82
第46図　出土遺物実測図　土器（19） ……83
第47図　出土遺物実測図　土器（20） ……84
第48図　出土遺物実測図　土器（21） ……85
第49図　出土遺物実測図　土器（22） ……86
第50図　出土遺物実測図　土器（23） ……87
第51図　出土遺物実測図　土器（24） ……88
第52図　出土遺物実測図　土器（25） ……89
第53図　出土遺物実測図　土器（26） ……90
第54図　出土遺物実測図　土器（27） ……91
第55図　出土遺物実測図　土器（28） ……92
第56図　出土遺物実測図　土器（29） ……93
第57図　出土遺物実測図　土器（30） ……94
第58図　出土遺物実測図　土器（31） ……95

第59図　出土遺物実測図　土器（32）……96
第60図　出土遺物実測図　土器（33）……97
第61図　出土遺物実測図　土器（34）……98
第62図　出土遺物実測図　土器（35）……99
第63図　出土遺物実測図　土器（36）……100
第64図　出土遺物実測図　土器（37）……101
第65図　出土遺物実測図　土器（38）……102
第66図　出土遺物実測図　土器（39）……103
第67図　出土遺物実測図　土器（40）……104
第68図　出土遺物実測図　土器（41）……105
第69図　出土遺物実測図　土器（42）……106
第70図　出土遺物実測図　石器（1）……112
第71図　出土遺物実測図　石器（2）……113
第72図　出土遺物実測図　石器（3）……114
第73図　出土遺物実測図　石器（4）……115
第74図　出土遺物実測図　石器（5）……116
第75図　出土遺物実測図　石器（6）……117
第76図　出土遺物実測図　石器（7）……118
第77図　出土遺物実測図　石器（8）……119
第78図　出土遺物実測図　石器（9）……120
第79図　出土遺物実測図　石器（10）……121
第80図　出土遺物実測図　石器（11）……122
第81図　出土遺物実測図　石器（12）……123
第82図　出土遺物実測図　石器（13）……124
第83図　出土遺物実測図　石器（14）……125
第84図　出土遺物実測図　石器（15）……126
第85図　出土遺物実測図　石器（16）貨幣、キセル……127
第86図　第Ⅱ層　平面図（1／600）……129

図版目次

図版1　調査前風景　調査風景　基本土層……170
図版2　2区全景　3区全景　4－c、d区全景……171
図版3　6区全景　7区全景……172
図版4　4－a、d、e区全景……173
図版5　6区全景　5区全景　11区全景……174
図版6　遺構検出状況……175
図版7　遺構検出状況……176
図版8　遺物出土状況……177

図版 9　出土遺物　土器（1）……178
図版10　出土遺物　土器（2）……179
図版11　出土遺物　土器（3）……180
図版12　出土遺物　土器（4）……181
図版13　出土遺物　土器（5）……182
図版14　出土遺物　土器（6）……183
図版15　出土遺物　土器（7）……184
図版16　出土遺物　土器（8）……185
図版17　出土遺物　土器（9）……186
図版18　出土遺物　土器（10）……187
図版19　出土遺物　土器（11）……188
図版20　出土遺物　石器（1）……189
図版21　出土遺物　石器（2）……190
図版22　出土遺物　石器（3）……191
図版23　出土遺物　石器（4）……192
図版24　出土遺物　石器（5）石塔　古銭　キセル……193

表　目　次

第1表　土器観察表……134
第2表　石器観察表……161

はじめに

第1図　九州・小林市位置図

梅木原遺跡は小林市大字東方梁果野にある。

小林市は宮崎県に所在し、宮崎市から西へ約50km離れた内陸部に位置する。南北を鹿児島・熊本県と隣接するが、鹿児島県は天孫降臨の舞台となる霧島連山に、熊本県とは九州山地に挟まれ、小林市との直接の往来は無きに等しい。同様に、隣の市町村とも、程度の違いであって、やはり往来には不便を要する。このように小林市は標高200m級の山間の都市であり、盆地に形成された街である。

そのため、宮崎市をはじめとする海岸線に立地する各市町村とは、イメージが著しく異なる。「観光の街宮崎」を連想させる温暖な気候とは違い、夏は避暑地として全国から観光客を集めるが、冬は霧島連山から吹きおろす風が厳しさを増す。

精神性もまた独特なものとなる。宮崎県は、豊臣から徳川の時代にかけて分割統治の対象となり、直轄地と各藩が細かく重なっていた。この時代小林市は、島津家薩摩藩領である。薩摩藩は他藩からの流れを厳しく監視したといわれ、その風習は、言語から風俗にいたるまで、独自性を発揮している。現在の小林の気質はこの時培われたもので、鹿児島から遠く離れ、他領に近かったこの地では、さらにより地域的なものに発展したものと思われる。

現在の小林市は、1945年以降、全国的な戦後復興と伴に大きく変化していき、これまでの薩摩藩統治や地理的条件等の諸々の制限は取り除かれていく。自動車の普及に伴い、九州自動車道や国道の整備は隣県や各市町村との流通を円滑にさせ、伝統的な独自性は薄れつつあるが、新しい力を柔軟に受け入れる要素を作り上げている。特に小林は、九州地方の経済・文化の中心である西九州からの物流を、かつての地理的制限を活用して都城市・宮崎市等の分岐点としての役割を果たしてきた。

ところで、小林市は伝統的に林業と農業、そして畜産を中心としてきた街である。古代より日向の地は良質の牧地として、その記録を留めている。[二]現在も、その土壌を継承しているのか、周辺を含め、畜産は盛んで、上等の牛を産しているとうかがった。

山間部の街として、林業の発展は当然の帰着ではあるが、狭い土地を開墾する労力は世代に引き継がれていき、その流通も小規模なものだったと思われる。しかしながら今日までの大規模な開発は、これまでの伝統的な農法も一蹴させる。全国規模で行われる交通網の整備は、需要と供給を拡大していく。小林市においても、事は同様であり、同市の地場産業は全国に展開していかなければならない。大量の消費に答えるためには、大型機械の導入が必要である。そして大型機械の導入には、運搬通路の確保と、より広い単位の農地が不可欠である。梅木原も、このような事情が伴って、各地でおこなわれている農地整備の一端と思われる。

梅木原遺跡の調査から報告書の作成にあたって、多くの方々のご協力を得た。調査において伊東但（宮崎県清武町教育委員会）、森田浩史（同田野町教育委員会）のご指導を受け、縄文土器や石器等の資料整理において金丸武司（同出野町教育委員会）、重留康宏（小林市教育委員会委託職員）、宮崎県埋蔵文化財センター、宮崎県えびの市教育委員会、須木村教育委員会（敬称略）の多大なるご指導を賜ったことを、感謝の意で表したい。

位置と環境

第2図　宮崎県小林市栗巣野位置図

梅木原遺跡は、宮崎県小林市大字東方栗巣野に所在する。東方は小林市の中心街から東を占める。隣の野尻町と須木村の境界線となる。そして他区と同じく農業・林業・畜産の生産場を中心とする地区である。栗巣野は、東方にある生産場の集落の一つである。梅木原は、栗巣野集落の農地の一つである。最初に梅木原とその周辺の環境から見ていきたい。栗巣野集落は、大淀川の上流、西から廻る岩瀬川[1]と東からの谷ノ木川の合流点に形成された州の高台に営まれる。梅木原は、谷ノ木川を渡り、北に坂道を上がった台地にある。梅木原から南側を望むと、標高1500m級の霧島連山を背景に小林市をパノラマ状の広がりを映す。北側を望むと、標高1200m級の白髪岳を筆頭に九州山地の山々が面々と続く。このように梅木原は、山林に囲まれた景勝の地にある。

梅木原は、九州山地から舌状に延びた支脈の最先端部に位置している。梅木原の北限は、急な斜頸地にぶつかる。切り崩された坂道を上って行くと、永野集落を抜け、大久津集落に行き当たる。

ところで南九州は、シラスの層が厚く堆積している。シラスの特徴の一つとして、もろく崩れ易いことがあげられる。そこを流れる河川はシラスを侵食し、断崖絶壁の地形を形成していく。岩瀬川はこのような絶壁の河川である。岩瀬川の侵食は激しく、対岸を大きく離れている。このことが東方を複雑な地形にし、中世には4つの城が、岩瀬川沿いに築城されている。

また梅木原の東側は、開析谷地形を形成している。城ノ岡山（標高365m）を最高とする九州山地の300m級の支脈（以後城ノ岡丘陵）に挟まれた地形である。この支脈の尾根部は、野尻町との境界線となっている。開析谷の下部は複雑に入り組んだ地形となり、主に水田が作られる。梅木原は、九州山地から舌状に延びる山と侵食した岩瀬川に挟まれた場所と想定できる。

次に梅木原周辺の歴史的環境を見ていきたい。人々の営みを考慮する時、周辺の地理的条件を切り離して考えることはできない。梅木原周辺の歴史的環境もまた、地理的環境が大きく関わっている。同地の地理は、城ノ岡丘陵と岩瀬川で構成される。両者ついて、もう少し詳しく述べていき、特に岩瀬川を中心に歴史的環境を見ていきたい。

栗巣野集落からさらに岩瀬川を下ると、城ノ岡山に当たり、山に沿って大きく南に曲がる。上流と比べ川幅が広くなると対岸との隔たりが大きくなり、ここから河川は小林市と野尻町の境界となる。この付近は、2～3段になる河岸段丘を形成している。小林市と野尻町の間には城ノ岡山とその西側を流れる岩瀬川によって大きく遮断される。城ノ岡丘陵はさらに東南に延び、霞ヶ丘（標高342m）に続く。岩瀬川の渡りを古代から交通の難所としていた。岩瀬川の河川名の明記は古く、『日本書紀』『古事記』の景行天皇紀にその名が見られる。江戸期の古図には、「渡り」が明記され[2]、橋の記述はない。現在の道路は、律令期の駅制による肥後街道の整備が本格的なものと思われる。岩瀬川付近の通路は、城ノ岡山と霞ヶ丘の低い場所と思われる。その前後の野尻（野後）[3]と小林（夷守）[4]には駅家が設置されている。両者とも所在は不明だが、両者を結ぶ推定通路は現在の国道268号線を平行していると思われる。以上のように城ノ岡丘陵と岩瀬川によって分けられた小林と野尻の境界は、

時には天然の要害ともなり、戦国と明治の時代には岩瀬川を境界に戦場となっている。

また岩瀬川を境界線とする野尻町儀に柿川内遺跡が所在する。同遺跡は岩瀬川によって形成された河岸段丘の最上部一帯に位置し、岩瀬川と霞ヶ丘々陵に挟まれた平地部の遺跡である。柿川内遺跡は、段丘上に営まれた縄文時代前期から古墳時代後期までの複合遺跡になり、時期ごとに遺跡が区分できる。縄文時代前期の柿川内第1遺跡、縄文時代後期から弥生時代を柿川内第2遺跡、古墳時代後期の地下式横穴墓群で構成される大萩地下式横穴墓群の3支群である。梅木原遺跡から最も近い大規模な遺跡となる。柿川内遺跡は、梅木原遺跡を考慮するにあたって重要視するものと思われる。

（1）岩瀬川の上流は、地図や各種文章では「浜ノ瀬川」と明記されてる。本文では全て「岩瀬川」とする。
（2）『野尻町史』に記載
（3）所在不明。
（4）所在不明。『小林市史』と『宮崎県史』ではそれぞれ候補地を挙げている。

梅木原の歴史的環境

南九州地方の発掘調査では、火山灰による層序の考察が重要視される。火山灰の分析による年代考察と土器型式は、セットで捉えられる。つまり発掘調査に当たって、何処の火山灰層を掘ることで、時代や遺物を推察していく。

この点から、梅木原周辺の旧石器から縄文時代早期の層まで下げられた発掘例は現在の所無い。従ってこの時代の遺構はまだ例を見ないが、遺物は表採によって確認される。この時代の遺跡は、存在すると思われる。梅木原周辺の各遺跡の成果を時代を追って紹介していきたい。

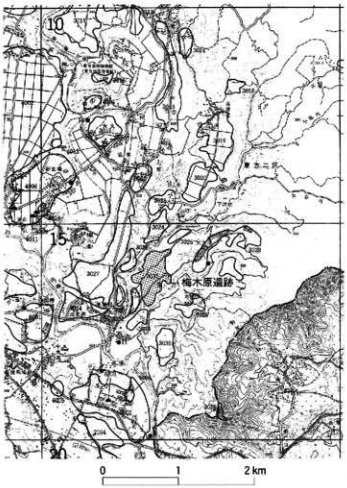
現時点では、遺跡の所在は平成4年に実施された分布調査に大きく頼る。(1) 分布地図（図4）によると、梅木原周辺の開墾されたほとんどの畑から、遺物が収集されている。小林市の他区と比べても包蔵密度は高い。そして採集された畑から縄文時代の遺物が多く入っていることから、東方地区の縄文時代の密度は高いと予測できる。(2) (3) (4) 野尻町でも同様であり、対岸の遺跡の大部分は分布調査に依存する。(5)

岩瀬川沿いで、現在最古にあたる遺跡は縄文時代前期になる。本田遺跡 (6) は、梅木原遺跡から直線距離で6～7km離れた岩瀬川上流に位置し、民家から離れた山間部の遺跡である。発掘が行われた昭和41年当時、考古学的に空白に近い同地域における組織的な発掘調査として注目され、成果を出した遺跡である。調査の結果、アカホヤの上層面から竪穴住居が検出され、前期を中心とした土器、前平式土器と曽畑式土器が多量に取り出された。本田遺跡は、宮崎県考古学の学史としても、山間の定住性と曽畑式・前平式の組み合わせの例として大きな位置を占める。

柿川内・大萩遺跡では、縄文時代前期の柿川内第1遺跡から始まる。霞ヶ丘と岩瀬川の間、第2段丘に位置する。報告では (7) 曽畑式土器の単純遺跡になる。標高190m出、河川の段丘上に位置する点で、梅木原遺跡と立地条件が類似する。

弥生時代に入ると、柿川内・大萩遺跡では、大萩第1～3遺跡（大萩遺跡）で確認される。住居址 (8) と土壙墓 (9) が、多数検出された。土壙墓は2群、それぞれ17基と2基の計19基から構成される。地形図から周辺より小高い位置に群集する。平面の形態は長方形、楕円形が主である。5号土壙墓のみ、断面を2段から成る。副葬品が認められるのは4、5、6号土壙墓である。土壙内からガラス製の玉類と貝輪が出土する。土壙直上から免田式土器等の壺や高杯が、意図的に破損されたと思われる状況

第３図　遺跡の位置及び周辺遺跡分布図（約１／70,000）



第４図　遺跡の位置及び周辺包蔵地（１／50,000）

で検出され、葬送儀礼に伴う共献土器と指摘される。住居趾は土壙墓群が立地する第３段丘下の第２段丘から５軒、竪穴住居が検出された。この住居趾からH型をしたものや、一部が張り出した床面を持つ住居が確認され、後に「日向型」間仕切り住居、または花弁状住居と命名させる南九州特有の変型住居が初めて出た遺跡として、学史に残る。出土した土器より土壙墓と同時期のものとされ、弥生時代後期の山間部の集落趾として大きな位置を示す。

古墳時代は、前方後円墳を代表とする高塚墳が確立、定着し、衰退していくまでの時代である。宮崎県下の古墳時代は、墳丘や土器の視点からも、その始まりは曖昧で、一時期の爆発的な導入から一気に衰退してしていく。

県下における古墳の形態は、大きく３種に分けられる。高塚墳（竪穴式土壙、横穴式石室）、地下式横穴墓（以下地下式墓）、横穴墓の３種で、古墳の形態は地域性をよく表し、しかも地域ごとに分布が限定されている。そのため現在の行政区分で県下の古墳時代を研究することはできない。このことは律令期に成立した「日向国」の範囲をほぼ踏襲している現行の行政区分に対して、律令期以前の文化圏を想定できると思われる。墓制の分布にあたって、河川を単位として紹介される。[10]

時期として、墓制そのものは古墳時代から古代へと形態を変えて面々と続く。中期から後期にかけて高塚墳、後期から終末期にかけて地下式墓、終末期から古代にかけて、横穴墓が盛行する。高塚墳は、各河川下流域の平野部を中心に分布する。横穴墓は、大淀川下流域、宮崎平野を中心に分布する。そして地下式横穴墓は、大淀川以南に分布する。小林市は、東側を日向灘に流れる大淀川の支流のひとつとなる河川である岩瀬川の上流である。古墳時代の梅木原は、大淀川支流岩瀬川流域・山間部のグループに入る。墓制は、地下式墓の分布圏である。地下式墓は横穴式石室の一形態といわれ、その最古のものも古墳時代後期にあたる。従って当地における古墳時代前・中期の古墳は無い、といわれる。地下式墓の発見は偶然に頼るところが多い。小林市でもかつては所在したといわれてる場所が多い。[11] 大淀川上流の地下式横穴墓群を、立地条件から分けて見ていく。

東二原地下式横穴墓群 [12] は岩瀬川沿いの中で最も上流に位置する。段丘上の端の位置に営われ、４支群16基が確認される。地下式墓群から南東へ約30mの所、段丘の急斜面に入る位置に、人工と思われる土盛が確認される。以前から高塚墳といわれていたが、調査の結果、周溝が確認される。主体部の発掘は、おこなわれていない。地下式墓との関係について等の不明な点は多い。

新田場地下式横穴墓群 [13] は、岩瀬川と石氷川の合流点に所在する。東二原地下式横穴墓から１段下がった低い段丘上にあり、川面から最も低い場所に営まれた墓群である。新田場一帯は小林盆地の

低位置にあたり、河川が最も集中する場所である。その肥沃な土壌の恩恵により、早くから開けた場所と思われる。新出場地下式横穴墓は、このような場所にある。報告は、大正年間から始まり、現在2支群9基が確認される。

下の平地下式横穴墓群[14]は野尻町と境界線となる岩瀬川沿いの段丘、岩瀬川と国道268号線に囲まれた水流迫の集落に所在する。梅木原から最も近い地下式墓群である。前述のとおり、肥後街道を縫に通る最も交通の多い地に営まれた墓群である。現在2基が調査されている。

柿川内・大萩遺跡では大萩地下式横穴墓[15]が営まれる。前述の弥生後期の土壙墓群を中心に3支群38基が確認される。土壙墓群から西に約40mの場所に直径10mの円墳が所在する。墳頂部の調査はおこなわれていないが、地下式墓に封土の有無について論議があった時期に、直下に地下式墓が確認されたことで注目される。

以上の4つの地下式横穴墓群が、岩瀬川の河岸段丘沿いに立地することで共通点とする。岩瀬川周辺の地下式横穴墓群は、三山[16]・尾中原[17]・湯ノ崎[18]・切畑[19]・九塚地下式横穴墓群[20]が所在する。いずれも岩瀬川支流を共通点とする。その他近辺の地下式横穴墓群として、旭台[21]・日守[22]・立切地下式横穴墓群[23]が所在する。

古代の小林市は、日向国諸県郡に所属する。日向の国府は現在の西都市と推定され、関連遺構が確認される。諸県の郡衙現在所在不明で、有力地が高岡町又は国富町付近と言われる。[24]小林市を含め宮崎県下における古代は不明な点が多いが、近年の発掘はその視点を変えはじめ、成果をあげている。特に宮崎市余り田遺跡[25]やえびの市昌明寺遺跡[26]から約150点の墨書土器が出土し、都城市大島畠田遺跡[27]では大型の掘立柱建物が検出されている。古代の遺跡として最も近い所で荒迫遺跡[28]がある。梅木原遺跡から約6km離れた高原町との境に所在する。今回梅木原遺跡において参照とした遺跡である。

11世紀には県南部で摂関家領島津本荘が成立している。島津本荘は島津院を中心に島津一円荘として拡大を続け、12世紀には島津荘寄郡を加え、当時最大の荘園となる。諸県郡はこの島津荘寄郡となり、諸県は真幸院として発展していった。島津荘寄郡の真幸院の中には栗巣野を含む小林も入っていたと思われる。

古代においては在庁官人日下部氏が管理し、末期には北郷氏にかわる。鎌倉時代に島津氏が島津荘の地頭職として日向に下っている。しかし日下部氏が鎌倉・室町時代を通じて、真幸院郡司としていたとされる。15世紀から真幸院は北原氏による支配となる。戦国時代には島津・伊東氏の勢力争いに挟まれる。1560年頃の小林は伊東氏の勢力圏であった。そして1576年の高原城陥落とともに伊東氏は小林を撤退し、小林は約300年の間、島津氏領となる。この時小林に郷制が施行される。以降九州征伐・関ヶ原を経て、梅木原は薩摩藩小林郷東方村に置かれる。廃藩置県後は鹿児島県から始まり、美々津県、都城県を経て宮崎県に編成される。

古代末に成立した島津荘は現在の都城が中心となる。後に成立した真幸院も現在のえびの市を中心とする。このため古代の小林は不明な点が多い。治承・寿永の時期に小林市細野に三山城が整備され、現在の小林市の原型ができたと思われる。戦国期には同市真方に三ツ山城が築かれ、藩政時もこの場所が中心となり、今日に至ると思われる。

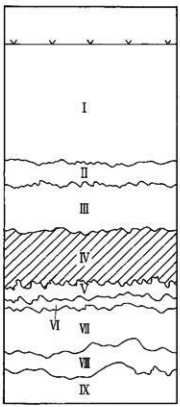
最後に近年戦時の遺跡に注目が集まり出したことを踏まえて、戦時下の栗巣野を述べて終わりとしたい。戦争末期に本土決戦に備えて、栗巣野に武器弾薬を収める大洞窟が掘られたいう。規模は不明だが、現在も残る防空壕の一部がそれだという。

以上、周辺の歴史環境を踏まえた点で、梅木原の成果を報告していきたい。

(1)「小林市遺跡詳細分布調査報告書」『小林市文化財報告書第7集』平成5年　小林市教育委員会
(2) 収集した縄文式土器の中で、時期的に分けていくと前期以降が多い。
(3) 文化庁が昭和52年度に発行した『全国遺跡地図：宮崎県』によると、栗巣野集落を上がった所に畑地があり、栗巣野遺跡として登録されている。梅木原遺跡とは谷ノ木川を挟んだ岸に位置する。調査当時は大量の土器が散布していたと聞くが、平成11年に当地を踏査したが、散見する程度であった。
(4) 昭和40年度発行の『小林市史』を編纂にあたって、委員会が東方周辺で収集されたとされる遺物を聞き取りしている。当書においても、当地域の高い収集率を上げている。
(5)「野尻町遺跡詳細分布調査報告書」『野尻町文化財調査報告書第6集』平成6年　野尻町教育委員会
(6)『「宮崎県史」資料編　考古1』平成元年　宮崎県
(7)「柿川内第Ⅰ・第Ⅱ遺跡」昭和51年　宮崎県教育委員会
(8)「大萩遺跡（二）」昭和51年　宮崎県教育委員会
(9)「大萩遺跡（一）」昭和50年　宮崎県教育委員会
(10)『「宮崎県史」資料編　考古2』平成5年　宮崎県
(11)『「小林市史」第1巻』小林市　昭和40年発行
(12)「東二原・下の平地下式横穴墓群」『小林市文化財調査報告書』平成2年　小林市教育委員会
(13)『宮崎県文化財調査報告書　第20集』昭和53年・第34集　平成3年　宮崎県教育委員会
(14)『宮崎県文化財調査報告書　第24集』昭和56年　宮崎県教育委員会
(15)『宮崎県文化財調査報告書　第5集』昭和35年・第23集　昭和55年・第27集　昭和59年・第28集　昭和60年　宮崎県教育委員会
(16) 小林市細野に所在したとされる
(17)『宮崎県文化財調査報告書　第9集』昭和39年　宮崎県教育委員会
(18)『宮崎県文化財調査報告書　第17集』昭和48年　宮崎県教育委員会
(19)『宮崎県文化財調査報告書　第20集』昭和53年　宮崎県教育委員会
(20)『宮崎県文化財調査報告書　第29集』昭和61年　宮崎県教育委員会
(21)『宮崎県文化財調査報告書　第19集』昭和52年　宮崎県教育委員会
(22)『宮崎県文化財調査報告書　第15集』昭和45年・第22集　昭和55年・第23集　第24集　昭和56年　宮崎県教育委員会
(23)「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書　第1集』平成3年　高原町教育委員会
(24)「国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書」平成元～10年　宮崎県教育委員会
(25)「余り田遺跡」
(26)「昌明寺遺跡」
(27)「大島畠出遺跡現地説明会資料」平成11年　宮崎県埋蔵文化財センター

調査の結果

調査の方法



基本土層図

調査は、遺構を畑地の区画に従って分割し、1区から7区までを調査対象とした。検出面は、全区画アカホヤ（Ａｈ）上層面までにした。重機で耕作地を掘削後、さらに黒色土層を掘り進め、遺物が多く出土しだした場所で重機を止めた。以降は、手作業によって遺物を拾いながら掘り下げていった。黒色土層の下に10cm程度の赤褐色の固い層があり、そこを岩干削りながら精査をした後、遺構検出をおこなった。遺構検出後、手作業によってピット等を掘り、再び精査、写真撮影後、平板による実測に入り、調査の終了とした。これを1区から7区まで、同じ手順で進行した。遺物の出土状況図や出土地点の図面落としは、参考のため一部行ったのみで厳密にはおこなっていない。

基本土層図

第Ⅰ層	耕作土及び盛土	**土器を採集**
第Ⅱ層	暗灰色土層	軽石やスコリヤを含む2～3の薄い層が重なる。 砂礫や鉄分を含むブロックが入る　**土器を採集**
第Ⅲ層	黒褐色土層	（黒ボク土）光沢のある粘性の軟らかい土　**土器包含層**
第Ⅳ層	橙色土層	（アカホヤ火山灰層）粘性のある締まった土　**遺構検出面**
第Ⅴ層	灰色土層	硬質の締まった土。ブロック状に割れる。
第Ⅵ層	暗灰色土層	Ⅴから切へと色調が変化していく。
第Ⅶ層	浅黄色土層	硬質の締まった土。黄色と橙色の粒子を多量に含む。
第Ⅷ層	浅黄色土層	硬質の締まった土。 淡黄色のブロックや黄色と橙色の粒子を小量含む。
第Ⅸ層	淡黄色土層	粘性のあるやや締まった土　軽石を岩干含む。

地形

現地形の観察と調査時のアカホヤ層の流れ方から、梅木原の地形は3つに分けられる。全体図から、まず梅木原の旧地形は1区～3区の東側にみられる丘陵と谷ノ木川の段丘に挟まれた斜面上の地形を開墾して平地化していったものと、2つめは4区で、前述の丘陵の先端部を切り崩して平地化していったもの、最後に4区から5区～7区方向に段丘沿いまでの丘一帯を切り崩していった3つに分けられる。

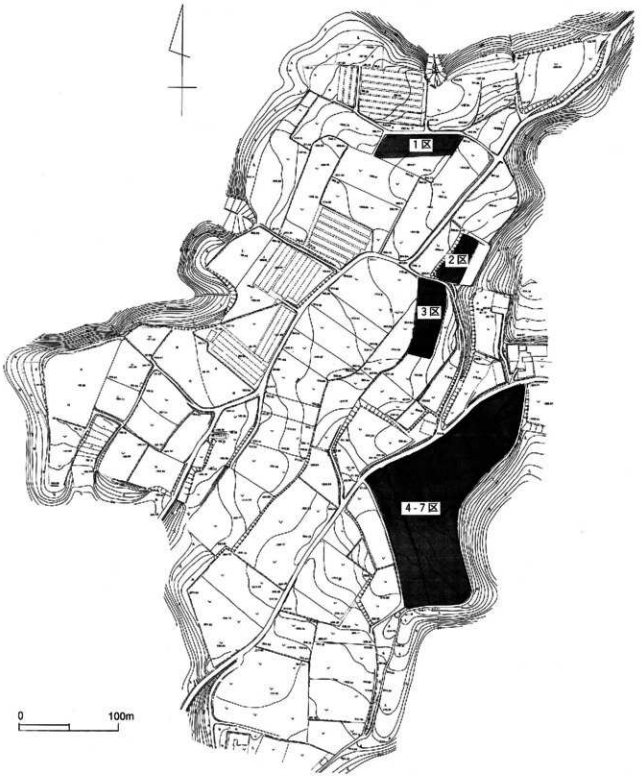
梅木原は地元の方々の話しによると、1960年頃から大型機械が入りだし、機械による拡張を各自におこなってきて現在に至るという。かつては狭い区画を棚田状に広がっていたと聞く。4～7区横を走る道路は、その当時に作られたもので、永野・大久津と栗巣野集落を直線的に結ぶ目的としていていた。そのため地形を崩して道路を造成している。旧道は4区～7区の東脇で調査終了時まで残っていた。

基本層序

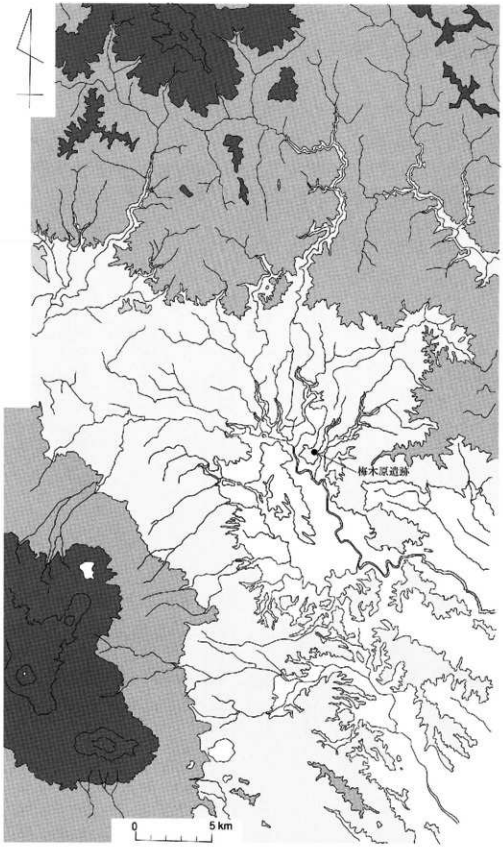
土層の堆積は基本的に全区同じであるが、細かい部分や層の厚さに違いがあった。

撹乱

畑地の大部分は「トレンチャー」と呼ばれる幅20cm、高さ1m弱の撹乱溝が縦横無尽に走っていた。これは1980年頃作られたと思われるゴボウを植える機械の跡である。黒色土層の大部分は撹乱されているが、アカホヤ層は黒色土層の厚い部分では撹乱を免れていた。また幅50cm、長さ2～3m、深さ



第5図　梅木原遺跡調査区周辺地形図（約1／4,000）



第6図　小林市周辺地形図（約1／250,000）

50㎝、壁面を丸く削りこんだものと、直径１～1.5m、深さ0.2～１m，壁面を同じく丸く削りこんだ２種類の土壙が全区画で検出された。地元や農家の方々の話によると、「イモ穴」と呼ばれる掘り出したイモ類を入れておくための穴と似ている、ということで調査時は撹乱として処理していた。平面図４のみ点線で図化している。

遺構

遺構の９割以上は、ピットであった。しかしその中には木の根痕等の自然の穴も多数含まれていると思われる。深さは20㎝から60㎝がほとんどで、深いもので２m近いものまであった。

埋土

遺構に埋まっていた埋土は、全てアカホヤ上層の黒色土層と同じ黒色の土であった。これによって検出した遺構の全ては、黒色土が堆土した時期のもの考えられる。黒色土は20～50㎝の層で間々に0.5～５㎜程の黄色の粒や硬軟の違いは、観察できた。しかしこれが埋没するにあたっての堆積の段階にあたるのかは不明。

根痕

直径２m前後のほぼ円や楕円に、中央にアカホヤが残ったドーナツ状の形をしている。中央のアカホヤは、１m前後の塊で黒色土に浮いた様に見えた。アカホヤの塊は、下層の牛の糞層まで含み、45°前後傾いていた。そのため黒色土層を掘り下げている段階から確認できた。５～７区を中心に多く見つかった。椀状の形をしており、深さ80㎝前後出会った。壁面は、柔らかいアカホヤで掘りやすくなっていた。以上のような条件のものは、調査時は根痕としていた。４区では２つ、５～７区では14確認された。

３区

丘陵斜面の下に位置し、梅木原のほぼ中央にあたる。急斜面から緩やかな斜面に変化した所で、丘陵と３区の間に農道が走る。調査の結果、道路に面する部分はアカホヤ上層まで削られていた。第３区は、東側の丘陵から流れる緩やかな斜面上の遺跡である。

基本土層は同じであるが、高い所ほど土層は平地化により削られていた。黒色土層の上面は、耕作時に半分は失っていた。東側は、すでにアカホヤが露出していた。

遺構

断面３－１

西側壁から６m離れた所から斜面の段差が目視できた。その段差のある西面から、細かく分けられた層が黒色土層を切る形で確認できた。上面は削平されていた。隣接する畑とは石垣を組まれ、大きな段差があった。後に試掘調査で、隣の畑は大きく削られて平地化されていることが分かった。そのため断面3—1の左以降は確認できなかった。ただしNo.２やNo.３のように溝状に上がっていく部分もみられた。このことで丘陵から落ちて行った最深部とも考えられる。

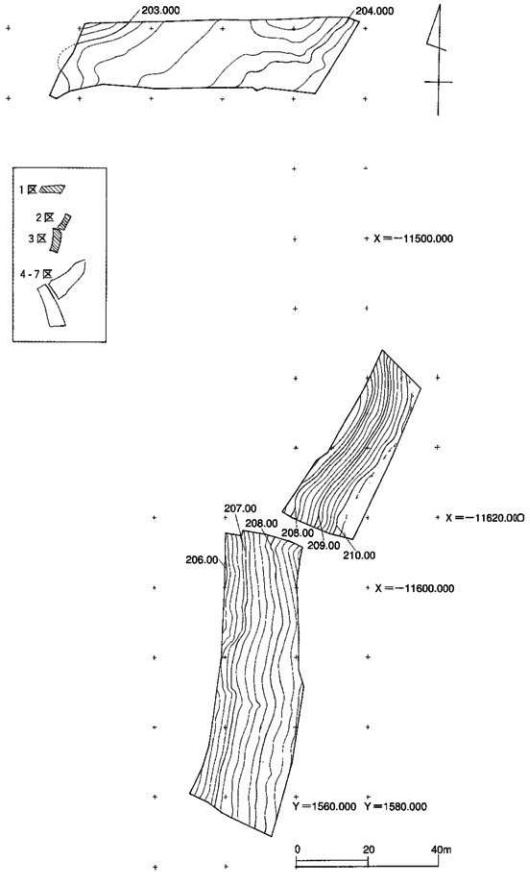
土層では土層から上層までは薄い堆積層で砂利や鉄分を含む物で固く締められていた。この層について、第６区で似た層が確認されている。

土壙（ＳＣ３－１～７）

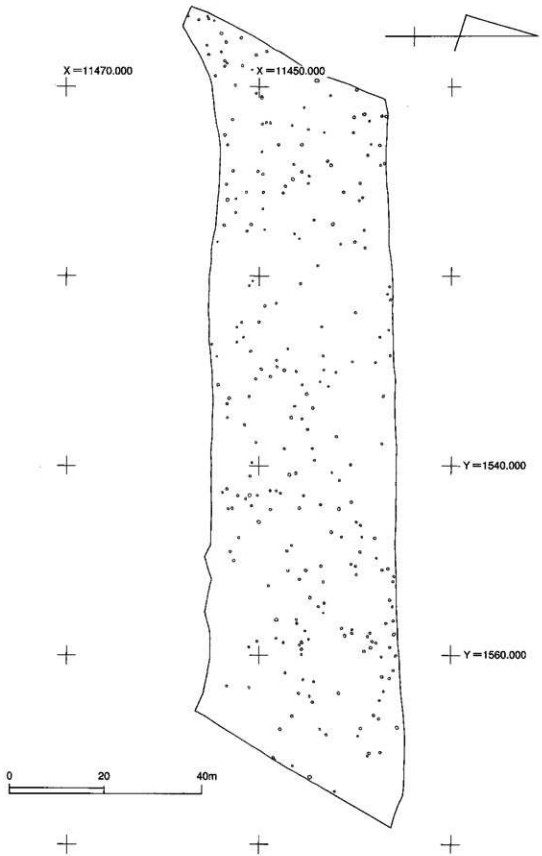
３区では、大土壙３基と小土壙４基確認された。小土壙は円・楕円で、最長1.5～２m、幅50㎝を計る。ＳＣ3—1を中心に南側に集中して検出された。

ＳＣ３－１（第11図）

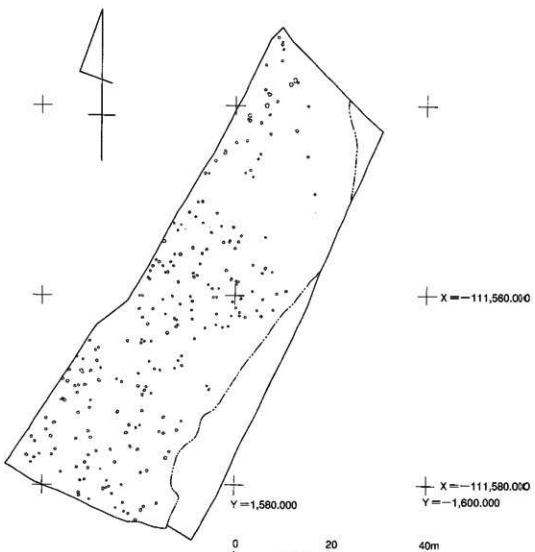
南よりやや西から検出された遺構で３区中、最も状態の良い土壙であった。北西側にアカホヤの盛り上がりが確認できたが、赤褐色土が下から確認できなかったので、土壙の捨て土等ではないと思われる。



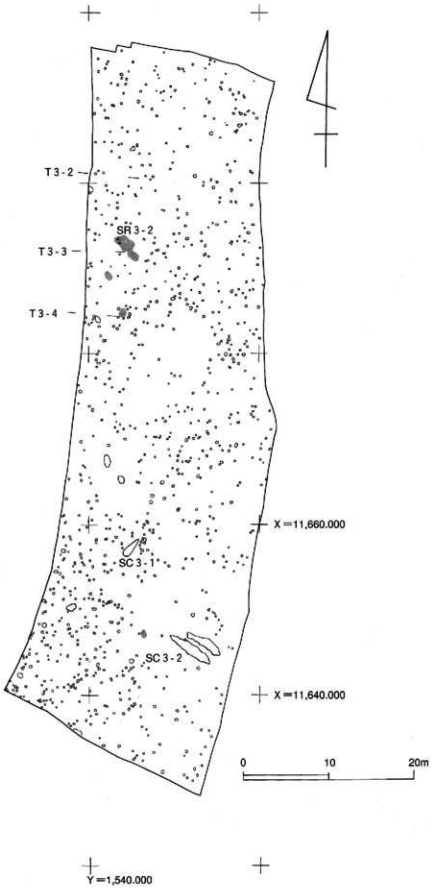
第7図　1～3調査区地形図（1／1,000）



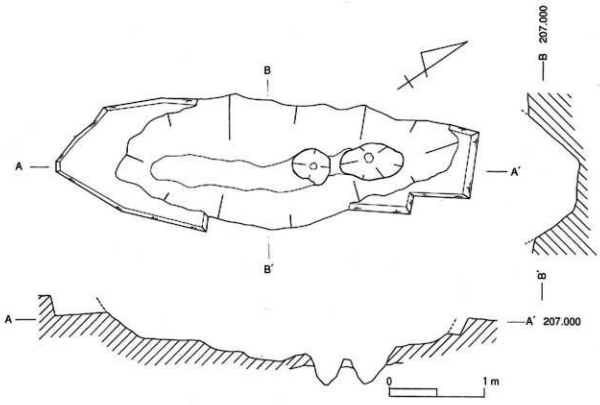
第8図　1区遺構実測図（1／800）

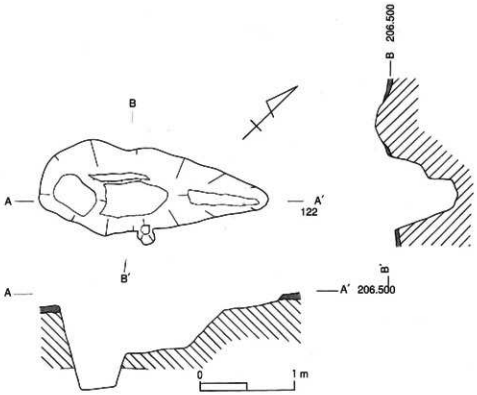


第9図　2区遺構実測図（1／800）

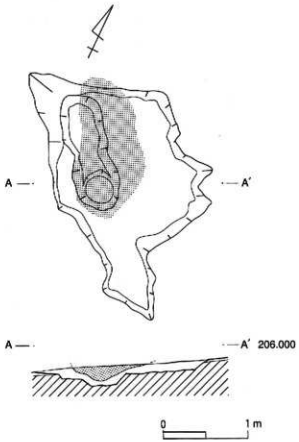


第10図　3区遺構実測図（1／400）



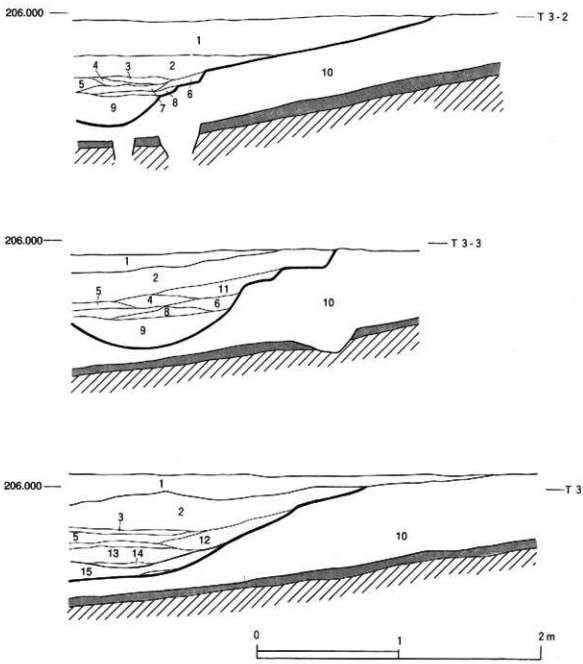


第11図　3区土壙遺　3、1実測図（1／40）



1　橙色土　濃い色をする、よく締まった土
2　黒色土　薄い色をする、橙色の粒子が混ざる

第12図　3区焼土壙2実測図（約1／40）



1　淡色土　　やや明るい色をする。灰色の粒を含む粘質の土
2　淡色土　　淡い色をする。灰色の粒を含み締まった土
3　暗灰色土　褐を含み、良く締まる礫質の土
4　暗灰色土　砂質を含み、良く締まる礫質の土
5　黒色土　　黄色の粒子を含み、締まりがない粘質の土
6　5と同じ
7　暗灰色土　赤味がかかる。鉄分を含み、良く締まる礫質の土
8　暗灰色土　やや明るい色をする。灰色の粒を含む礫質の土
9　灰色土　　やや暗い色をする。灰色の粒を含む粘質の土
10　黒色土　　良く締まった硬い粒子の上。光沢性がある(基本土層Ⅱ)
11　黒色土　　光沢のある青黒色。しまりがなく黄色の粒子を若干含む
12　黒色土　　純い黒色。黄色の粒子を含む。第5層と明瞭に分離
13　黒色土　　青味のかかる青黒色。黄色の粒を若干含む
14　暗青灰色　純い灰色。砂質を含む良く締まった礫質の土
15　黒色土　　やや緑味がかかる。黄色の粒子を含む粘質の土

第13図　3区　2、3、4土層図（約1／30）

ＳＣ３－３（第11図）

土壙3—1から南東約20mの位置で検出された。３区中最も撹乱を受けていた場所で、上部は削られていた。撹乱が激しくて図化できなかったが、北側直ぐに土壙状の遺構が確認された。北側壁は固いアカホヤ上層の赤褐色土に覆われ、南側壁は柔らかいアカホヤ土であった。

焼土（ＳＲ３－１～４）

３区では、計４基確認された。いずれも黒色土層中から確認された。北側西よりに３基、南側中央に１基、それぞれ２群に分けられる。北側焼土は、所面図３－１付近に位置する。黒色土層の高い位置から確認できた。焼土の上面は、黒色土層中から染み状に確認できた。３基中２基は、直径50cm程度の範囲内で集中し、黒色土層中のみ確認できた。隣のＳＲ3—2（第12図）は、上部で拡散して検出できた。上部は染み状で確認されたが、下部では土壙状に検出できた。その直下、アカホヤ面から不定形土壙が検出された。

南側焼土は単独で、ＳＣ3—2から西５m付近に位置する。アカホヤ層に近い、黒色土下層から検出された。焼土はアカホヤ層まで掘り込まれているため、焼土壙と認められる。

２地点の焼土は、北側焼土が黒色土上面から、南側焼土がアカホヤ直上と、異なる面から出土している。しかしほぼ同じレベルから検出されたことが、共通していた。

ピット群

合計925個、ピットとして図化した。

４区

調査以前

４区は３区の南方向、丘陵に沿って登った地点、梅木原の中で最も標高の高い位置の耕地である。土地は北東から南東にかけて延びる砲弾型で、面積約7431㎡の区画である。先端部以外、周りとの段差が激しく立ち入ることが出来なかった。地権者の話では、1960年代に丘陵の尾根上の土を削って、北側斜面を埋めて平地にしている。その際に多くの土器や石器を見たという。元はいくつかの畑地だったのを一つにしたという。道路側の北西斜面は一部２段に構成されており、旧地形の畑地の名残があった。

調査区域の設定

試掘や表土剥ぎの過程で、上層に黒色土を辛うじて残したアカホヤ面は、北東部側だけだった。北西と南西斜面は埋め立ての際に、土の流失を防ぐ目的の２～３の段を形成するため大きく削られていた。これらによって大部分は遺物を包含する黒色土層が失っていることが分かった。調査は当初の発掘計画に乗っ取り、北東部側のアカホヤ面による遺構検出と旧地形の復元に努めることにした。

調査の結果（第15図）

重機による掘削の結果、北東部でも一部でアカホヤ上層が削られていることが分かった。遺構が残る箇所は調査時、ブロックごとにａからｄ区まで設定しておこなった。さらに南西斜面からも遺構と思えるものが検出されたので、ｅ区を追加した。

遺構のほとんどはピットであった。計712個検出され、深さ１m以上あるピットも確認された。その他に焼土壙、小土壙、陥とし穴状土壙、畑状の溝が確認された。

ａ区

４区の北東角に位置する。面積は約181㎡を有した。地形は西から東に落ち込んでいく。機械痕はなかった。遺構は表土から約0.5～１m下から検出され、ピット群、小土壙、焼土壙、その他根痕、いも穴等が出た。

b区

北西と南西側を廃屋で挟まれた区画で、面積53㎡を有した。地形は北々東から南々西へ落ちていく。機械痕はなかった。遺構は表土から約0.5～1m下から検出され、ピット群、小土壙、焼土壙、その他にいも穴等が出た。

c区

4区の南西側中央より、廃屋の南西隣に位置する。造成時に削平と埋め立てを多くおこなった場所で、急斜面上の区画である。面積は約174㎡を有した。地形は南東から北西に落ち込んでいく。等高線の高い場所程、撹乱が激しい。遺構は表土から約0.2～2.5m下から検出され、ピット群、陥とし穴状土壙、その他にいも穴等が出た。

d区

4区の南東側、廃屋の南西隣に位置する。面積は約232㎡を有した。地形は北西から南東へ落ち込んでいく。遺構は表土から約0.5m下から検出され、ピット群、焼土壙、その他にいも穴等が出た。

e区

畑状の溝で明記。

断面4－8（第17図）

c区の南西壁を北西方向にトレンチを掘り、下の段の確認をした。その結果、上段斜面から下段にかけて、アカホヤ層が大きく削られていることが確認された。

断面4－4（第16図）

4区の南西側、撹乱区域に位置する。撹乱区から隣の人工杉の間を経て、旧農道までトレンチを設定した。北西—南東方向に延びる。撹乱はゴボウの機械掘と農薬用のゴミ穴があった程度で良く残っていたがアカホヤ層は複雑に入り組み、赤橙色土はブロック状に分層された。斜面上に入るとアカホヤ層はなくなり、浅い黄色土の層が基層となる。基本層の色合いは黒色土層の黒が基本であった。遺構は焼土壙、ピットが3～4確認できた。浅い黄色土の面から掘りこみが確認された。

断面4－5（第16図）

断面4—4の北東側、13m先に設定したトレンチの断面図である。畑地から旧道にかけている。土層は基本的に断面4—4と同じである。各層の基本色は黒色土層の黒だが、斜面では茶色が基本色となる。アカホヤは上面のみで、斜面は浅い黄色土になる。断面4—5からも各層で遺構が確認される。土壙1はⅢ層目をアカホヤを切った形で確認された。片側は掘り形が良く残り、2段で構成される。焼土壙はⅤ層上を切った形で確認される。土壙2はⅤ層面から確認される。土壙3は薄い黄色土の層を検出面とする。

土壙

4区では直径50㎝、深さ50㎝程度の小土壙が2点確認された。

焼土壙（SR）4－1～3

SR4－1

a区北東壁際から検出された。黒色土が最もよく残っていた箇所で、焼土も黒色土を掘り下げている途中で見つかった。50㎝を直径に拡散していた。深さは1～20㎝程度だった。

SR4－2（第18図）

b区南西側廃屋の壁際から検出された。黒色土と明確に分けることのできた焼土壙の一つである。直下にピットがあり、流れ込むように焼土が分層できた。ピットは他と同じように黒色土で埋められていたが、黒色土に明橙色の粒子が混ざっていた。

ＳＲ４—３

ｄ区の中央付近から検出された。黒色土は消滅していたが、土壙はアカホヤ内にまで達していたので下部が観察できた。最長70㎝、最短30㎝の細長の土壙に黒色土と混ざりあったような焼土が確認された。

陥とし穴状土壙（ＳＴ）４—１（第18図）

ｃ区の東側、廃屋から西５ｍ程離れた場所から検出された。長軸を北東—南西に向ける。横1.90m、縦0.5m、深さ0.7mとなり、堆積0.665㎥を計る。横：縦：深さの比率は、約４：１：1.5になる。北西側の横壁は耕作機により崩れがあったが、比較的残りは良好であった。埋土は黒色土で、黄色粒子の混ざり方に３つには分層することができる。

平面は縦がやや膨らみをもった長方形となる。横壁はほぼ垂直に落ちていくが、縦壁はハの字型に開いていく。北東側縦壁は真っすぐハの字型に落ちていき、下部で調整気味に垂直に落としている。対して南西側はアカホヤ層ではほぼ垂直に落としていくが、牛の脛層からえぐるように中に入っていく。底部は凹凸はあるが、ほぼ平面に削られていた。また直径15㎝、深さ18㎝の小ピットが横壁に平行して４列、縦壁に平行して２列検出できた。さらにＳＴ4—1周辺にピットが多数検出された。直径15～40㎝、深さのピットが周辺にある。

畑状の溝（第19図）**断面図４—２、**

遺構はｅ区全面から検出された。上層の黒色土は畑地造成時に削滅されたおり、検出はやや削られたアカホヤ面となる。ｅ区は４区の南西側に位置し、北東側遺構から約70m離れている。横約55m、縦約6.0m、面積約340㎡を計り、横軸を平行に南西に下がっていく斜面上の区画である。

畑状の溝は幅約50㎝、深さ3～40㎝を計る。断面はＵ字、Ｖ字など一定していなかった。等高線に沿って、北西—南東を軸に延びていく。両端はそろえた形で終わっている。最長が42mで、最短が5.5mを計る。埋土は黒色土だが、ピットや土壙な入る黒色土とはやや目立って黄色の粒の混在があった。遺構の掘り形となるアカホヤの土は、模裏に見られる柔らかい土であった。また北西側中央に土壙4—4が検出された。直径約２ｍを計る不定の円形土壙で、掘り形は柔らかいアカホヤ土であったが、中央にアカホヤ塊は見られなかった。

５～７区

調査以前

５～７区は４区の下の畑地で、２段３面で構成されていた。５区は４区の直下の畑地の区域である。４区とは２ｍ近い壁に隔てられ、アカホヤ層が露出していた。面積は約1494㎡を有する。６区は５区の隣、４区の南東壁まで延長した区域である。６区は４区の丘陵の延長で先端部になり、地形上は段丘から突き出た形になる。６区北東壁は削平を受けておりアカホヤ層が既に露出していた。面積は約3662㎡を有する。７区は５、６区の下段の畑地で、上段とは約１ｍの高低差があった。７区の下段の畑とは1.5mの段差があり、壁面からアカホヤ層が露出していたため、７区の状態が確認できた。この壁面からは小林軽石層まで観察することができた。面積は3593㎡を有する。

調査区の設定

５、６区北東壁はアカホヤが露出していたため、両区のアカホヤ層が残る箇所で設定した。試掘の結果北東壁から約３ｍ、道路側北西部３ｍを撹乱区であった。７区は道路側北西部が撹乱されていた。５、６区と７区の間は段があったが、調査では段を取り除き、最終的には同じ区画とする。結果５～７区の発掘面積は約6046㎡を有する。

調査の結果

5—7区は、ほぼ南—北に延びる長方形の形をする。黒色土層は南側は深く、北にいくほど浅くなっ

ていく。ゴボウ機械痕は黒色土が浅い所でアカホヤ面まで達した。5区は全面、7区は北側4分の3撹乱していた。6区はなかった。

断面1（第20図）

6区と7区の南壁にあたる。東—西方向を取り、約47.75mを計る。アカホヤ面の低い場所で、丘陵上の端にあたる。基層はⅠ層からⅣ層まで分けられる。

Ⅰ層は耕作土及び埋土とした。Ⅰ層は3～4層分層できたが、東端から観察できたアカホヤ面まで達した土壙からビニール類が見つかったことで造成時の埋土とした。

Ⅱ層は、表土から0.7～1.5cm下Ⅱ—8～27まで分層できる。黒味のかかった灰色を基本色とする。1cm大のボラを含む。Ⅱ層はさらに上層と下層で分けることができる。上層はⅠ層によって削られているが、土が東から西に流れていることが観察できる。6区中央付近で6.5m幅で落ち込みが見られ、下部で根痕が観察できた。ボラは若干含み、黄色の固い粒子が観察できた。下層はほぼ水平に堆積している。6区と7区の間、断面図の中央付近が特に細かな分層となった。ボラを多く含む。砂質や硬質、白色の層が5～10cmの間隔で観察できる。西方向の7区端に移ると、Ⅲ層は大まかな層が、細かい層の下にくる形で観察できる。下層からは根痕も観察できた。

Ⅲ層は黒色土層になる。3～40cmの堆積となる。Ⅲ層の上層から、赤味を帯びた黒色土の土質に近い層が、Ⅱ層とⅢ層を明確に区切っている。若干ボラを含むのでⅡ層にしている。Ⅲ層は図面では単層にしているが、土の密度や含有物等によってブロック状の分類が観察できた。遺物の包含はⅡ層とⅢ層間、Ⅲ層上層に多く集中した。また参考の6区黒色土層平面図はこの付近である。

Ⅳ層はアカホヤ層になる。東端と西端の高低差が50cmと緩やかに落ちていく。遺構面は根痕による撹乱が観察できる。根痕付近のアカホヤ土は木痕に見られる柔らかいものである。根痕の埋土は黒色の土に黄色の粒子の混入率が高く、複雑な混ざり方を見せる。上層の赤褐色土はブロック状に入る。

断面図から確認できる遺構はピットが4、土壙が2である。いずれも埋土は黒色土に黄色の粒子が混ざる。また赤褐色土もアカホヤ層に土壙状や根痕状に入り込んでいるのが観察できた。

断面2（第19図）

7区の中央と5区と7区の境壁に、東北東—西南西を軸にする。長さ約67mを計る。断面図1と同じくⅠ～Ⅳ層大別できる。

Ⅰ層は耕作土である。第3層が第4層を切った形で入っている。また東北東端でアカホヤ層を切っていることからⅠ層は第3層までと考える。第Ⅰ—2,3層は造成以前の旧耕作土と思われる。

Ⅱ層は2層で構成される。Ⅰ層に大きく削られていれば、断面図1のⅡ層の最下層部にあたる。また落ち込みが観察でき、遺構の可能性がある。第Ⅱ—5層は断面図1の第Ⅱ—24層にあたる。

Ⅲ層は黒色土層になる。上下2層に分層できるが、断面図1のⅢ層の様に複雑な入り組みはない。

Ⅳ層はアカホヤ層になる。断面図1から約2.5mの高低差がある。根痕による検出面の撹乱は見られない。東北東端から約13mから上がり始め、大きく削減を受けた約4mの場所で急激に上がり、4.5m先の4区の斜面、4mの高低差に連なる。

断面3

5、7区の北西壁、北東—南西を軸に長さ28.5mを計る。アカホヤ面まで削平を受けていた。

遺構

5～7区ではピット群、25基の焼土壙、土壙状遺構、その他多数の木痕、イモ穴等が検出された。

ピット

総数3116基のピット群が検出された。直径10～30cm、深さ10～50cmを計る。全て不定形の円形で、任意に掘った様な形をしている。大部分が直下に落ち込んでいくが、P1～4は斜めに掘り込まれて

いた。

土壙状遺構

1　集石土壙ＳＣ７―１（第22図）

７区の西側の壁の中から、重機による壁の掘削中にアカホヤ面から検出された。５～７区の中央から北西約27m先に位置する。アカホヤ面のほぼ水平ラインに位置する。土壙から西側寄ぐは下段の畑地によって削平されている。周辺からは複数のピットも検出された。土壙の形は上部が長径約85cm、短径約75cm、深さ約16cmの不定形の円形で、下部が長径約62cm、短径約44cm、深さ約37cmの楕円の円筒形で、底は牛の脛まで達する。全体的に断面の形は漏斗型となる。

土壙内には大小９個の石が詰められていた。石の特徴として、石(3)を除き全て河原石であり、また石(7)以外割れていることが挙げられる。被熱を確実に受けた痕跡が見られるのは石(4)石(9)である。

石類の取り除き作業から、３段階に分けて積まれたと思われる。第１段階は、割れた面を上にした平らな石(1)を土壙下部の底の角に置かれていた。中央に石の小片(2)が同じく底から見つかった。２段階目は石(3)～(6)が詰まれる。上面を揃えたように置かれている。石(3)～(5)を詰めた後、石(6)を詰めた形となる。石(3)は石(1)の上に置かれている。平らにした割れ面を上に、長方形の石を立てた様に詰めている。３段階目は石(7)～(9)が置かれる。石(8)は石(5)の間を詰めた形で置く。石(7)は２段両の石の上に乗せるように置かれている。最後に石(9)が土壙の掘り形と石(3)に合うように置かれている。石の配置については、石(1)～(6)は土壙内に詰める様に置き、石(7)～(9)はその上に乗せる様に置かれていた。

埋土は上・下部で様相が変わる。上部はⅢ層の黒色土に若干黄色の粒子が入る。下部の埋土は小さい土壙に石が暗詰めに積まれている中で、隙間にまで黒色土が埋まっていた。下部土壙の壁や底は固い暗褐色の土で覆われていた。黒色土は基本的に石の間を詰めるように堆積していた。土壙内埋土には、わずかな炭化物が含まれていたが、焼土はなかった。ところで石(1)は最長50cm、断面直径22cmを計る川原石で、梅木原遺跡の中で最も大きな石である。他の石と違い、土壙内では埋土によっても位置の安定が保たれている（断面Ａ）。上部はⅢ層から検出される。そのため土壙の上面はアカホヤ面より上とも考えられる。また割れ面を上に置かれているが、その割れた一方の石は、同じ７区南東約30m離れた位置からⅢ層最下部Ⅳ層直前からから検出された。割れ面を下に置かれており、一方向から圧力がかかり割れた痕跡が観察できた。石(4)も一部薄片が接合できた。

以上の様に、土壙内から９個の石が検出されたが、縄文時代の層に顕著な集石土壙とは違う。ほとんどが河原石で、それぞれ色や質が異なるものであった。梅木原周辺から、河川の氾濫による層は見つかっていない。他所から持ちこまれたものと考えた方が自然であろう。石(1)が土壙内に埋設か、土壙上に露出か不明だが、２段階以降は意図的に埋められたものと考えられる。土壙自体に熱を受けた痕跡は見当たらない。さらにほとんどの石が割れた状態であったが、被熱によるものや石器を製作するための人為的な打痕は観察されなかった。しかし一部で接合できる石が遺跡内から検出されたことは、同遺跡内に持ちこまれた以降、「割られた」と考えた方が自然で、ある目的を持って集められていたことは十分考えられることと思う。

2　陥とし穴状土壙ＳＣ５―１（第24図）

ＳＴ5―1は、５区の北西壁ほぼ中央から検出された。横1.48m、縦0.44m、深さ0.51mを計る。縦壁、横壁は垂直に落ちていき、Ⅴ層面を底にする。底は平らに整形されている。長軸を北東―南西に向ける。縦がやや膨らみをもつ角柱型の土壙である。横：縦：深さの比率は約３：１：１となる。体積は0.33m³を計る。埋土は黒色土が基本で部分的に黄色の粒子が入る。底から３つのピットが長軸に

合わせて等間隔で検出された。直径7㎝、深さ22㎝、25㎝、37㎝を計る。断面は逆茂木形になる。ピットの埋土は黄色の粒子を多く含む黒色土が入る。

3　井戸状土壙ＳＣ６―１（第25図）

ＳＣ6―1は５区と６区の間、断面２を取り除いた後検出された。平面横1.25m、縦0.74mを計る長方形に近い形をする。長軸を北東―南西に向ける。縦南西側は直線に切られ、北東側は膨らみをもって切られている。

深さは５m以上を計る。縦南西壁と横両壁は約0.92m下まで垂直に落ちる。対して縦北東壁は約80°の傾斜で南西に下がっていく。途中３カ所、約1.22m下と約2.22m下、さらに約2.96m下に足場状の段がある。１段目と３段目が広く、１段目はここを足場の様にして南西壁も約80°の傾斜角で南西方向に入り込んでいく。南西の壁体は崩れやすくなっていた。１段目の段から平面形は楕円となる。３段目の段は楕円の底をしており、ここから約60°の傾斜角南で西方向に入り込んでいく。平面が直径37㎝のほぼ円形で、人が入れる幅ではなかった。

埋土はⅢ層の黒色土で部分的に黄色の粒子が混入する。しかし１段目の足場状の段から様子が変わる。南西側の壁体は黄色と黒色の混在土が10～15㎝厚さで張りついていた。また２段目の足場状の段下からⅥ層の小林軽石層になるが、微妙に水色のかかった白色のシルト質の土が、土壙表面を覆っていた。底にあたる３段目の足場状の段には、10～15㎝程度堆積していた。３段目足場状の段から下は空洞になっていた。基本層はシラスとなる。３段目から深さ約３mの所まで確認できたが、以降は再び堆積していた。埋土はシラスと多少の黒色土と思われる。

以上の観察から、ＳＣ6―1は３つの段階があったと思われる。１段階は１段目の足場状の段を底として、楕円状の長方形型をほぼ垂直に掘りこまれている。２段階は３段目の足場状の段を底として、横に約0.3m程ずらした位置で掘られている。３段階は３段目以降の管状の土壙が奥に延びていく。このことは埋土の状況からも分けることができる。掘り形と埋土の状況から、１段目は人為的なもので、２段目は人為的なものだが半ば崩れた後埋まったものと思われる。そして観察上洞窟に近い形から３段階は自然に空いたものと考えられる。自然に空く現象は、第１に水流が予測できる。

ＳＣ６―２（第25図）

ＳＣ6―2はＳＣ6―1から東へ約5.7mの場所から検出された。アカホヤ面攪乱に近い所で、急斜面直下に掘られている。南々西―北々東を縦軸とする約2.48mの長楕円形の土壙である。長楕円形だが、北々東側から約35°の傾斜でＵ字型に下がっていく。北々東側から距離約1.66m、深さ約0.92mの所で傾斜約80°となる。傾斜の変わり目にはＳＣ6―1と同じく足場状の段が見られる。

南々西側は始めから傾斜約110°で下がっていく。ＳＣ6―1のように壁体は崩れやすくなっている。途中で段があるが、突出部である。深さは約2.14mを計る。平面を円形に落ちこんでいく。しかし下部にいくほどいびつになっていく。底部分は南方向に入っていく。大人一人がしゃがんで入れるくらいの空間となる。

埋土はⅢ層の黒色土に黄色の粒子が混ざる。南々東壁体及び底は黒色土と黄色土の複雑な混入土で覆われている。

以上のことからＳＣ6―2は長い楕円形の一方のみを深く掘っていることが特徴で、それだけではＳＣ3―1と同形態である。しかしＳＣ6―2は直径約90㎝の円形の土壙に補助のような形で斜めに切り込みをいれた土壙と思える。また立地は４区の尾根部に上がり始める所で、長軸を等高線が上がっていく場所にほぼ合わせていることも特徴として挙げられる。

ＳＣ５―１（第23図）

ＳＣ5―1は７区の北東側ほぼ中央に検出された。南西方向に緩やかに流れていく、ほぼ平地形にち

かい場所に位置する。アカホヤ層から検出された。Ⅲ層は半分ほど削られていた。長軸推定2.5m、短軸約0.6m、深さ約0.16mの浅い不定形土壙である。大まかにすれば2段に分けられる土壙である。埋土はⅢ層の黒色土である。特色として、埋土中から多少の木炭を含む炭が検出された。焼土壙の部類に入る。しかし他の焼土壙と違うのは、唯一木炭が確認されたこと、焼土壙のように焼けたような赤い土が含まれていないことである。

焼土壙

ＳＲ５－３（第23図）

ＳＲ5—3は５区のやや北西より、北東壁側の撹乱面に近い所で検出された。Ⅲ層上部は削られており、耕作土を剥がした段階から確認された。Ⅲ層中から土壙状に黒色土と橙色土が混ざって入る。底はアカホヤ面まで達する。東—西を長軸に約1.6m、短軸約0.6m内に長方形に近い不定形に入り込む。

断面図は橙色土の濃度で分層している。ここから黒色土単色で占められ、橙色土が凹状に入る。さらに橙色土が下に流れ込むように入ることも観察できる。しかし焼土壙の橙色土の密度は場所によって異なるため、焼土壙の分層はその面に限ってのことである。

ＳＲ５－２（第23図）

ＳＲ5—2は７区の北西壁角から検出された。アカホヤ面撹乱区に入り、アカホヤ層に入り込んだ部分のみ確認できた。橙色土は北東—南西を長軸に約1.2mを蛇行して走る不定形土壙内の中央に入る。ほぼ黒色土の混ざらない橙色土が確認された。

ＳＲ５－１（第24図）

ＳＲ5—1は７区の南西壁から検出された。遺構の南西側は下段畑地によって消滅していた。アカホヤ面の撹乱区となりアカホヤ層に入り込んだ部分のみ確認できた。ＳＲ5—1は焼土壙中最も広範囲に橙色土が広がる遺構である。橙色土は土壙内のほぼ中央に集中しているが、粒子レベルまで見ると、土壙内全域に広がっている。土壙は北西—南東を幅に約4.0mで北東側は消滅し、南西側はゴボウの機械痕のよって撹乱されていた。当初、竪穴の住居跡を予測していた。しかし床面平面に近いが、複雑に入り組んでいたことで、上面がほぼ削られた土壙（ＳＣ）とした。

橙色土は北を中心に濃度を濃くし、南縁にいくほど薄くなる。最も濃い部分にはピット上となる。土壙内からピット１つ、小土壙１つ検出された。ピットは直径約53㎝、深さ約55㎝で、橙色土はピット内に半分ほど入り込んでいた。小土壙は根痕に近く、枝状に入り組んだ細かい部分まで橙色土が入っていた。

断面図は橙色土の濃度の濃淡差で分層している。特に集中している部分にアミ線を貼った。断面から、橙色土の分層は交互に入り組んだ複雑さを見せる。また濃度の高い赤土の断面両端は斜めからアカホヤ面を切るように入っていることが観察できる。

この焼土壙からは焼土壙を切る形で、埋土を黒色土とするピットが２つ観察された。両ピットとも深さ15㎝程度の浅いものだが、大量に検出されたピット群の時期差を示す唯一のピットである。

ＳＲ７－１（第27図）

ＳＲ7—1は７区南東側北東壁付近から検出された。長軸推定1.76m、短軸約0.92m楕円形の焼土壙である。最も深い部分が約0.18mで、最初に検出されたとき、小円だったことから、断面レンズ状であったと思われる。ＳＲ7—1から橙色土上面から礫および土器が検出された。多数の焼土壙から、赤土埋土中からではないが、礫が伴う唯一の焼土壙である。

その他の焼土壙群

その他５～７区から20基の焼土壙が確認できた。全てⅢ層の黒色土を掘り下げている段階で、高い位置から検出された。Ⅲ層中から検出される焼土壙は黒色土との混在土で、最も橙色土の濃度の高い

部分を中心とした。従って図化は観念的なものであり、濃度に関係なく橙色土の広がりを線でくくったものである。このことは断面図でもいえることで、土壙という概念では捕らえにくい。しかしアカホヤ層にまで達している橙色土は、土壙内に入り込んでいる。Ⅲ層上面から検出された焼土にも、土壙はあると考えられる。

橙色土の広がりは楕円形から長楕円が一般的と思われる。深さは10cm程度の浅いものから50cm以上の深いものまである。

地形（第14図）

検出の結果、4区から7区にかけてのアカホヤ面上の等高線が確認できた。調査前の周辺踏査によって多くの場所でアカホヤ層までの撹乱は予想されていたが、残った箇所と削平を受けた箇所を結んで大まかな復元ができた。4区北東a区から7区下段トレンチ南西方向まで順に述べていく。

a区は南西から北東に下がっていく地形で、c区は北東から西に下がっていく。

b区は南から北に下がっていく。a区とc区の間は牛の脛層が出ており、a区とb区の間もアカホヤ土が大きく削られていた。このことからa区とb区は尾根状の丘陵の両斜面にあたり、c区は丘陵の尾根部にあたる。尾根は牛の脛層露出部分を最高所として南西に下がっていく。この尾根は4区から北西に位置する山頂から延びる丘陵で、c区からさらにd区に下がっていく。

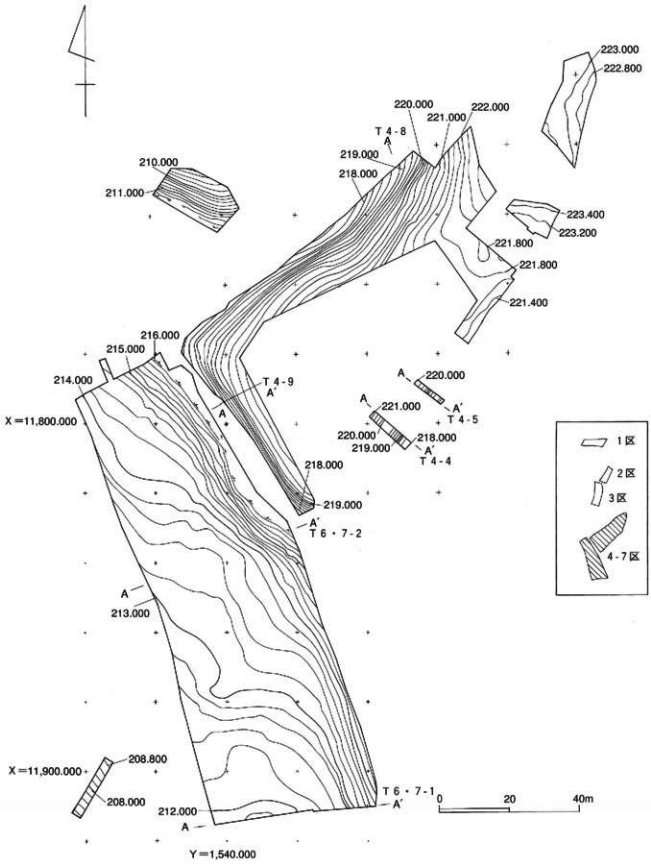
d区から南西以降はアカホヤ層の撹乱区域として調査区域外となった。そのため南西以降は大部分がトレンチによる確認調査に頼った。前述のとおりc区は傾斜地の深部だが、隣に道路が走るため、段差掘りによって造成されている。そのため辛うじてアカホヤ面は残るが、上部の包含層は失っていた。その結果安全面も考慮した末、c区南西以降もまた部分的なトレンチ調査で終了した。断面4—4と5の調査も諸制限からトレンチ調査になった。調査の結果、南西トレンチは南東から北西に下がっていく。等高線はc区とe区に接続する。斜面は南西方向に延びていく。南東トレンチは北西から南東に下がっていく。斜面は南西方向に延びていく。これをd区とe区につなげていくと、等高線はd区の下方向に延びる。しかしe区とトレンチの間は6区造成時に消滅している。

以上から両トレンチはd区から続く尾根の左右の傾斜地にあたり、撹乱区域は尾根部であったことを示す。撹乱区のトレンチ調査では南西側e区寄りから小林軽石層までの露出が確認された。このことから撹乱区域は、かつては丘陵上に小高い丘があったと想像する。小高い丘はe区を斜面に北東から南西に下がっていく。斜面は5区北東側で結ぶことができ、第図の断面図からも確認できる。また約3～40%の急な傾斜率を示し、南西—北東を軸に延びていく。撹乱区から丘陵が南西方向と北東方向に分かれて下がっていくと思われる。北東方面は6区東北東域が小林軽石まで露出していたことから分かる。

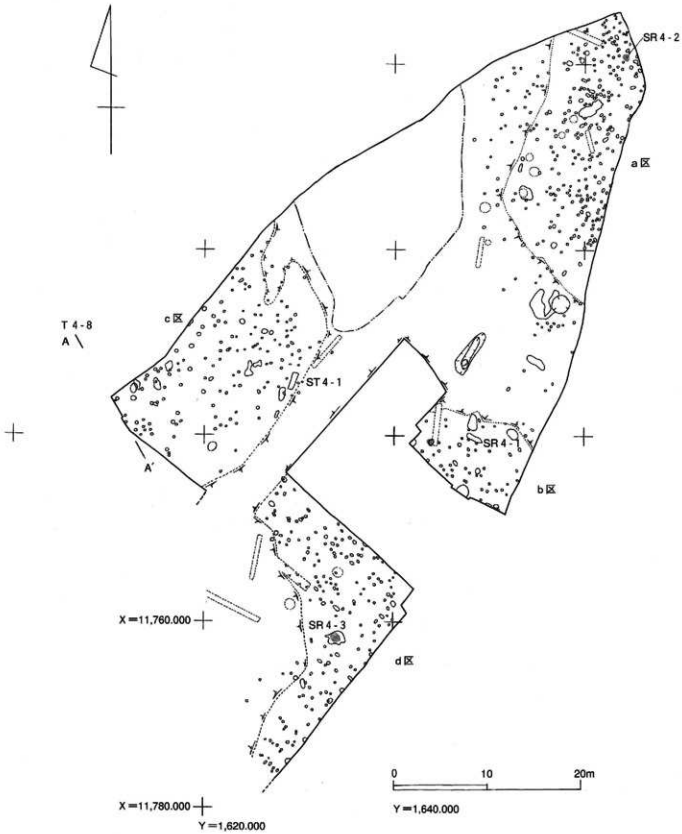
また調査区から道路を挟んだ畑地の北東角をグリット設定した。グリッドは南西から北東に下がっていく傾斜地で、北西—南東を軸にする。グリッドからはピット群や木痕が確認された。

グリッド周辺の確認調査で、傾斜地の上部はシラス層まで露出していた。このシラス層は4区から南西方向にいく尾根部と考えられる。斜面南東方向は4区の北西斜面の一部と結ぶ。4区北西側斜面は北西方向から延びてくることから、谷地形が形成されていたと思われる。

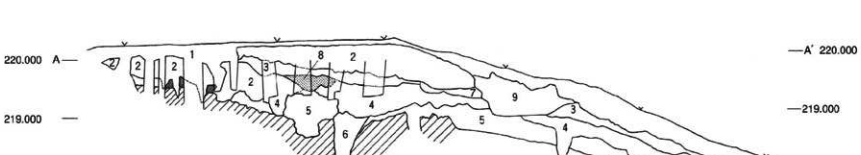
5～7区は北西—南東に続く尾根部を段に、5%の緩やかな傾斜率で南西方向に流れていく。下段の畑地はトレンチ調査で小林軽石まで削られおり、さらに調査区から約30m離れた下段の畑地の調査ではⅠ、Ⅱ層下約2mから傾斜率10%の地形が確認された。5～7区と下段の畑地に大きな段差は確認できなかったが、5～7区は南側に面した広い面積のテラス状の地形であったと思われる。



第14図　4、5、6、7及び11調査区地形図（1／1000）

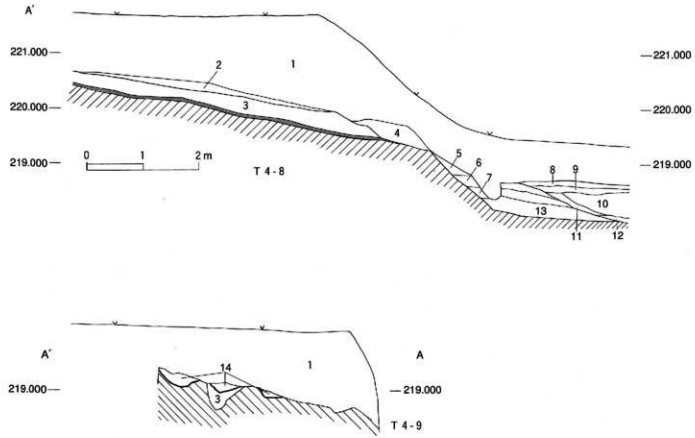


第15図　4 -a、b、c、d区遺構実測図（1／400）



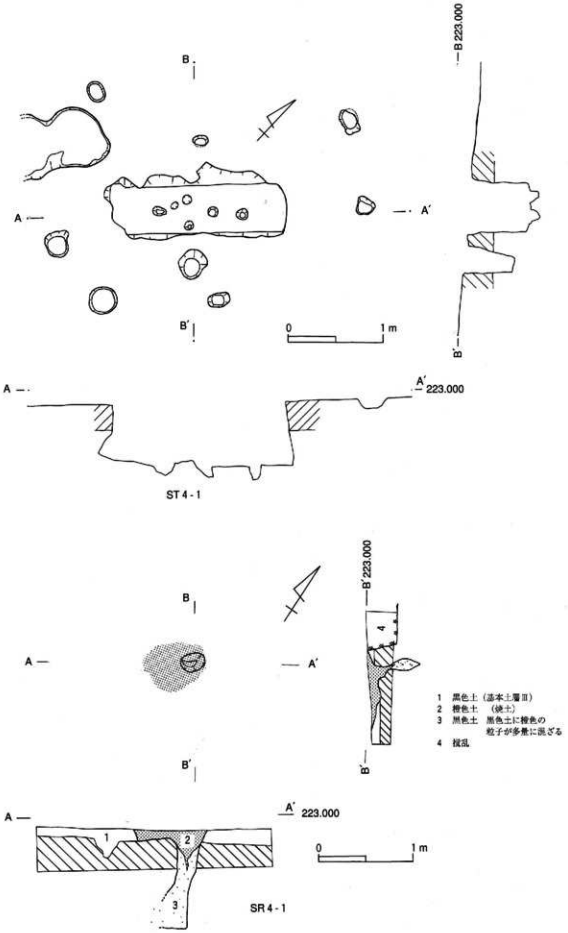
1 表土及び耕作土
2 暗灰色土 鈍い色をする。茶色の粒子が混ざり若干乾燥気味の土
3 暗灰色土 淡い色をする。灰色の粒子を含む。締まった土
4 黒色土 淡い青黒色をする。黄色の粒子を含む粘質の土
5 黒色土 良く締まった細かい粒子の土。光沢性がある(基本土層Ⅱ)
6 黒色土 青黒色をする。黄色の粒子を多量に含む粘質の土
7 暗灰色土 鈍い色をする。大きな粒子が入らない。良く締まった硬質の土
8 赤色土 赤褐色の細かい粒子。やや粘質。炭を僅かに含む(焼土塊)
9 撹乱土 黒色土や茶色土が混在
10 黒褐色土 やや明るめの色をする。橙色の強い粒子を含む。良く締まった硬質の土
11 赤褐色土 やや暗い茶色。細かい粒子で粘質の土
12 橙色土 淡い色をする。締まらない粘質の土
13 黒色土 やや明るい青黒色をする。黄色の粒子を含む締まった粘質の土
14 暗茶褐色土 鈍い色をする。赤色の粒子が混ざる締まった土
15 褐色土 鈍い色をする。細かい粒子の締まった土
16 暗赤褐色土 白炭色の粒子を若干含むやや軟質の土
17 暗茶褐色土 鈍い色をする。良く締まった粘質の土
18 灰褐色土 明るい色をする。良く締まった粘質の土
19 暗褐色土 やや暗い色をする。良く締まった粘質の土
20 暗灰色土 炭色の層がブロック状に入る
21 暗褐色土 鈍い色をする。良く締まった粘質の土

第16図　4区トレンチ　4、5土層図

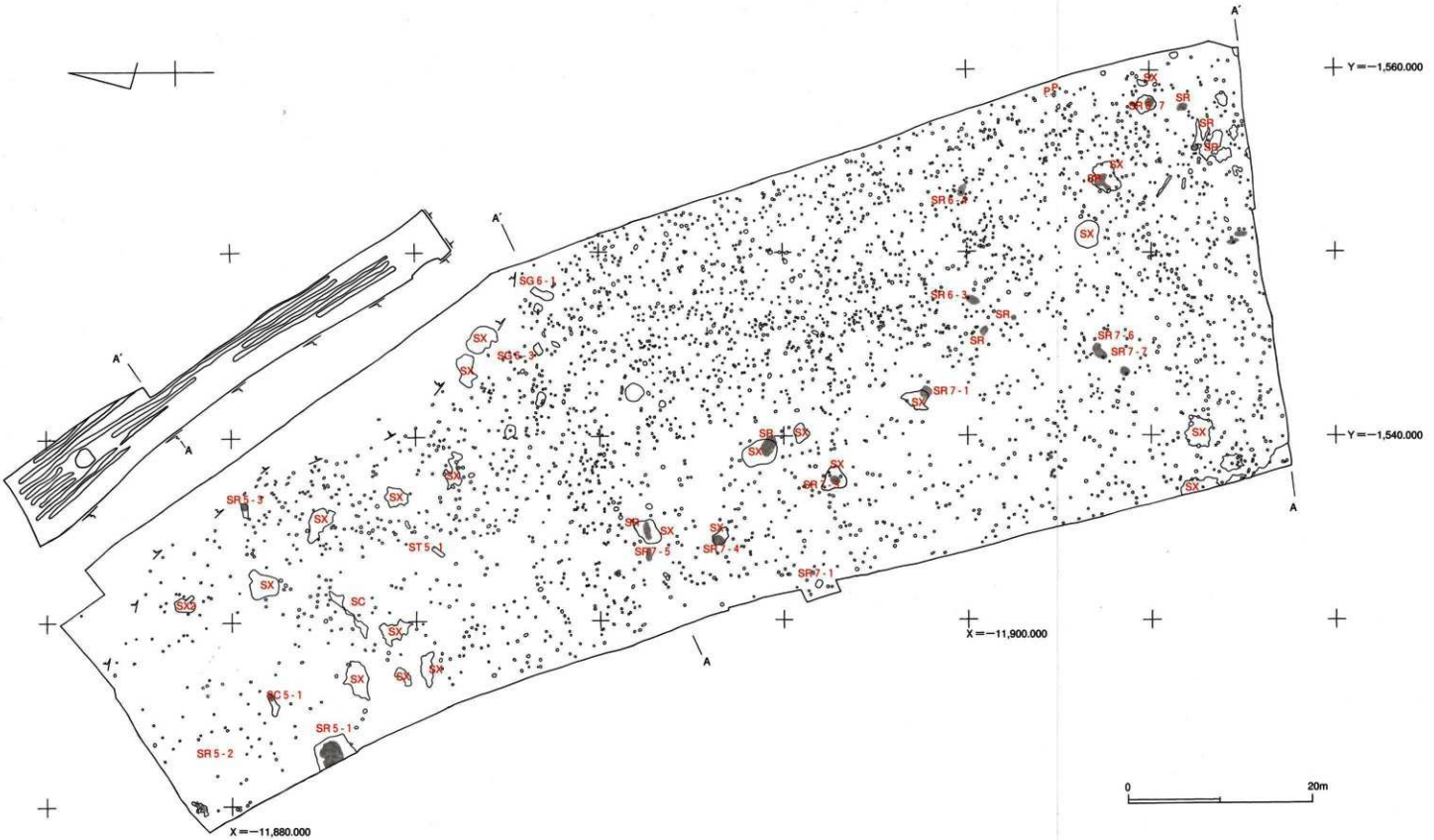


1 耕作土及び盛土
2 明褐色土　やや明るい色をする。礫が若干混ざる。締まった粘質の土
3 黒色土　光沢性がある。良く締まった粘質の土。微量に黄色の粒子が入る(基本土層II)
4 混化土　明るい色をする。黒色土や黄色土が混ざる
5 明褐色土　やや残い色をする。黄色土や礫が混ざる
6 灰褐色土　残い色をする。礫が混ざる。締まらない粘質の土
7 暗褐色土　淡い色をする。礫が混ざる。締まらない粘質の土
8 明褐色土　やや明るい色をする。礫が混ざる。締まらない粘質の土
9 黄褐色土　やや暗い色をする。礫が混ざる。締まらない粘質の土
10 混化土　やや暗い色をする。礫が混ざる。締まらない粘質の土(旧造形)
11 暗赤褐色土　暗い色をする。礫が混ざる。やや締まった粘質の土
12 暗赤褐色土　礫を多く含む。
13 暗褐色土　やや暗い色をする。締まった粘質の土
14 黒色土　光沢性がある。黄色の粒を多く含む。やや締まった粘質の土

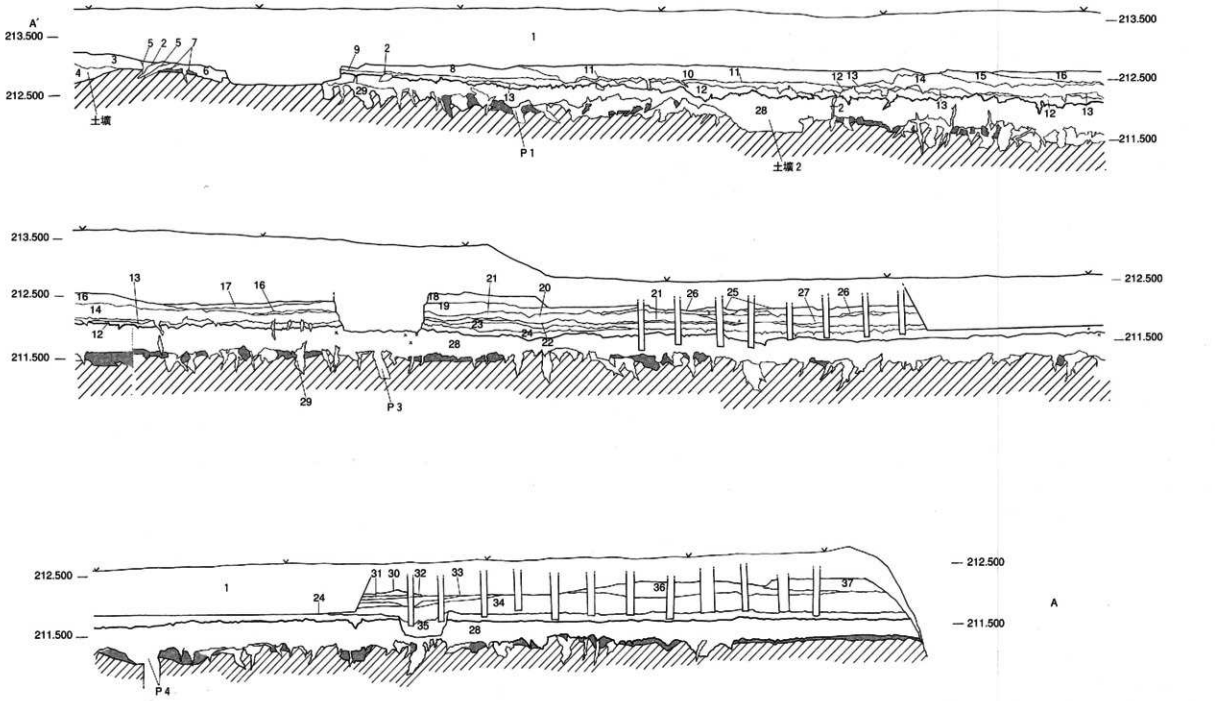
第17図　4区トレンチ　8、9土層図



第18図　4区陥穴状土壙1及び焼土壙1実測図（1／40）

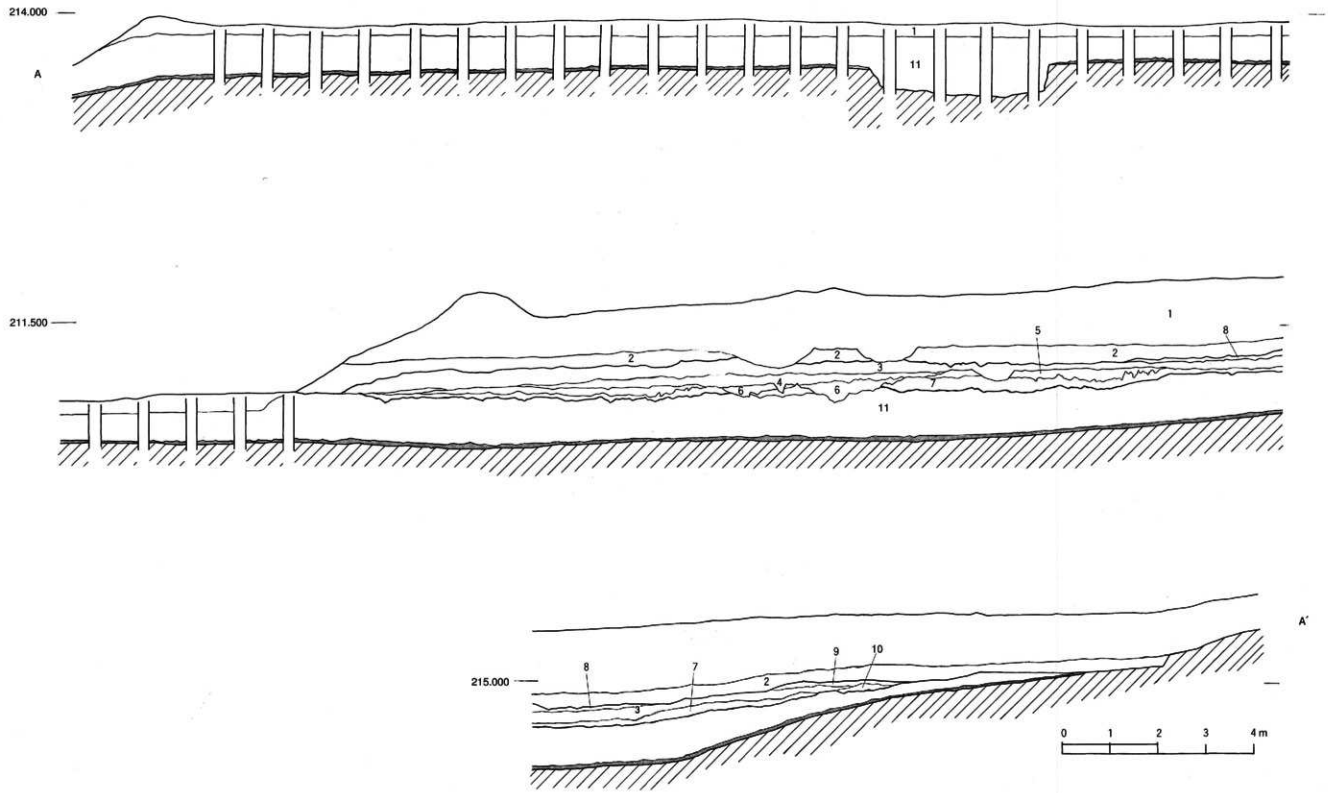


第19図　4 - e 区及び 5 、 6 、 7 遺構実測図



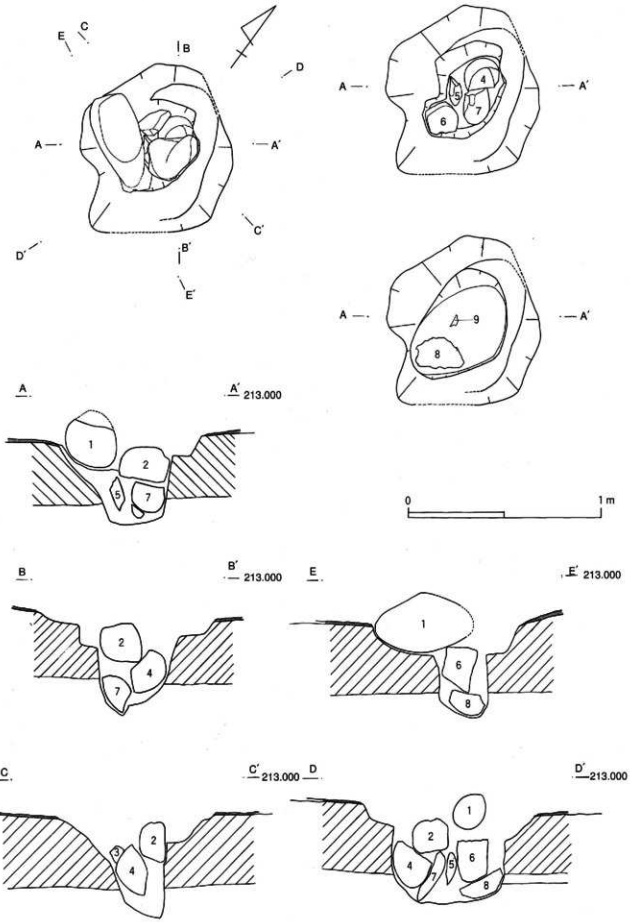
1 耕作土及び盛土
2 黒色土　黄色の粒が混ざる（根痕）
3 黒色土　黒い色をする。黄色と白灰色の粒子を含む。締まらない粘質の土
4 黒色土　やや黄い色をする。黄色の粒子を含む。良く締まった粘質の土（土壙）
5 暗灰色土　暗い色をする。黄色の粒を含む。粹まらない粘質の土
6 黒色土　黒い色をする。黄色の粒子を含む。粹まらない粘質の土
7 暗褐色土　明るい色をする。良く締まった礫質の土（基本土層Ⅱ）
8 暗褐色土　暗い色をする。砂礫のブロックを含む。良く締まった礫質の土
9 暗灰色土　黒い色をする。良く締まった礫質の土
10 褐色土　やや暗い色をする。黄色の粒子を含む。締まらない粘質の土
11 暗灰色土　黒い色をする。褐灰色の大きな粒を含む。良く粹まった礫質の礫層
12 暗灰色土　暗い色をする。良く粹まらない粘質の土
13 暗灰色土　暗い色をする。褐灰色の粒を含む。良く締まらない粘質の土
14 暗灰色土　やや暗い色をする。多量の褐灰色の粒を含む。良く粹まった礫質の礫層
15 暗褐色土　やや明るい色をする。灰色の粒を含む。締まらない粘質の土
16 暗褐色土　暗い色をする。灰色の粒を少量含む。粹まらない粘質の土
17 暗褐色土　暗い色をする。青く砂礫の混を含む。良く締まった役質の土
18 暗灰色土　やや暗い色をする。少量の灰色の粒と白色の粒子を含む。良く締まった礫質の土
19 暗灰色土　やや暗い色をする。少量の灰色の粒と白色、黄色の粒子を含む。堅く締まった砂質の土
20 暗灰色土　暗い色をする。多量の灰色の粒と白色、黄色の粒子を含む。堅く締まった砂質の土
21 灰白色土　明るい色をする。ブロック状に入る砂質の土
22 暗灰色土　黄い色をする。良く粹まった砂質の土
23 暗灰色土　やや暗い色をする。多量の褐灰色の粒を含む。締まった砂質の土
24 黒色土　赤味のある光沢性の色をする。良く粹まった粘質の土（基本土層Ⅱ黒色土上層）
25 暗灰色土　黄い色をする。多量の灰色の粒を含む。良く締まった砂質の土
26 暗灰色土　黄い色をする。ブロック状に入る堅い砂質の土
27 暗灰色土　黄い色をする。ブロック状に入る堅い砂質の土。26よりも堅い
28 黒色土　光沢性のある明るい色をする微量に黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ）
29 黒色土　光沢性のある明るい色をする。多量の黄色の粒が混ざる。根痕を含む。良く粹まった粘質の土（遺構を含む）
30 暗灰色土　やや淡い色をする。粹まった砂質の土
31 暗灰色土　淡い色をする。灰色の粒を少量含む。粹まった砂質の土
32 暗灰色土　黄い色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土
33 暗灰色土　やや暗い色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土
34 暗灰色土　淡い色をする。灰色の粒を多量含む。良く粹まった砂質の土
35 暗灰色土　明るい色をする。灰色の粒を多量含む。良く締まった砂質の土（イモ穴）
36 暗褐色土　やや明るい色をする。若干の灰色の粒を含む。良く締まった粘質の土
37 暗褐色土　明るい色をする。多量の礫が混ざる。良く締まった粘質の土

第20図　6、7区南側壁土層図

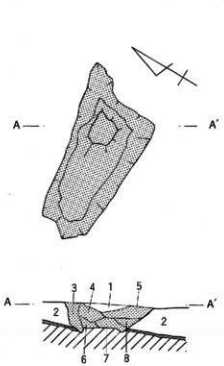


1　耕作土及び盛土
2　褐色土　　明るい色をする。礫を含む（旧耕作土）
3　暗灰色土　黄い色をする。黄色の粒と白灰色の粒を若干含む。締まった砂質の土
4　暗灰色土　やや明るい色をする。灰色の粒を多く含む。良く締まった砂質の土
5　暗灰色土　やや淡い色をする。灰色の粒を多く含む。良く締まった砂質の土
6　暗灰色土　4と同一。やや明るい色をする。灰色の粒を最も多く含む。良く締まった砂質の土
7　黒色土　　赤味のある光沢性の色をする。良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ黒色土土層）
8　暗灰色土　明るい色をする。灰色の粒を多く含む。良く締まった黒い砂質の土
9　暗灰色土　黄い色をする。灰色の粒を多く含む。締まった砂質の土
10　暗灰色土　やや明るい色をする。灰色の粒を多く含む。良く締まった堅い砂質の土
11　黒色土　　光沢性のある明るい色をする。微塵に黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ）

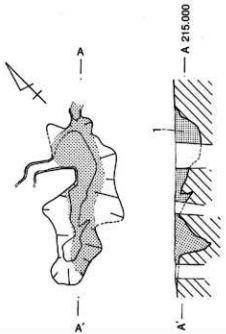
第21図　6、7区中央壁土層図（T 6-2）



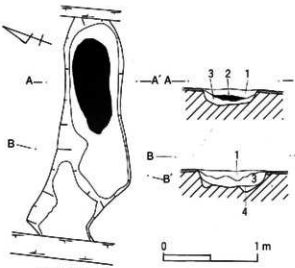
第22図　7区集石状土壙実測図（約1／20）



焼土壙（SR5-3）



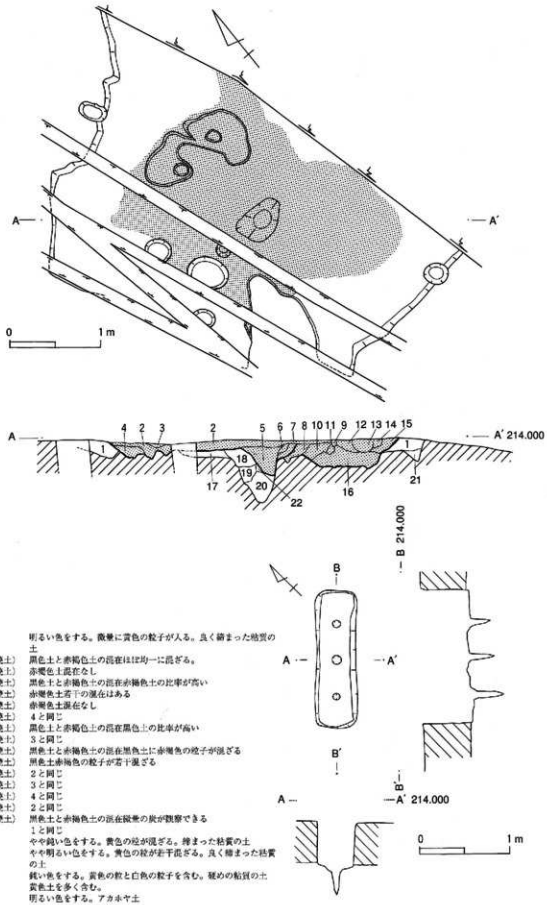
焼土壙（SR5-2）



土壙（SC5-1）

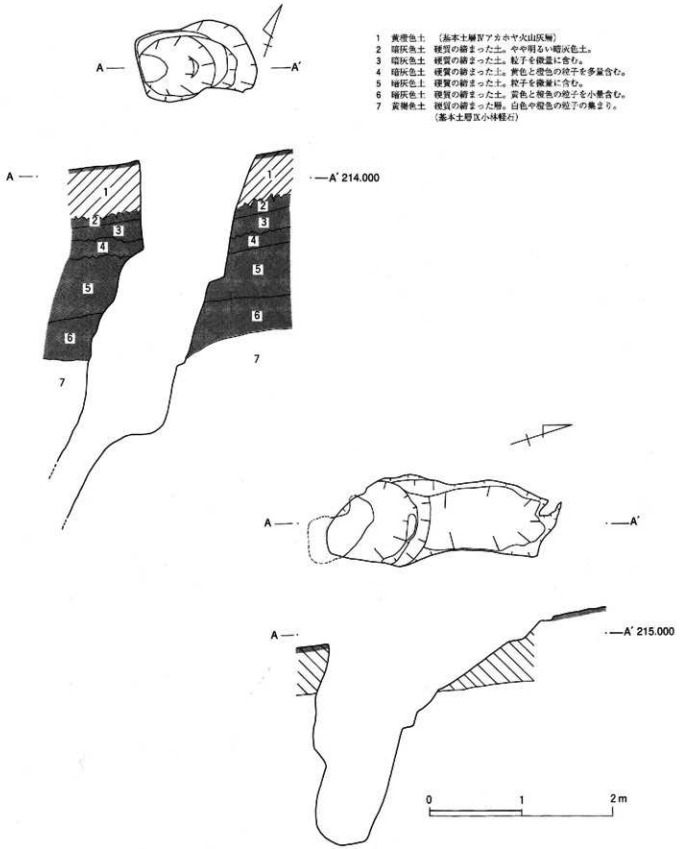
1	暗灰色土	鈍い色をする。灰色の粒を多く含む。締まった砂質の土
2	黒色土	光沢性のある明るい色をする微量に黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ）
3	赤褐色土（焼土）	明るい色をする。やや粘質の細かい粒子。炭を僅かに含む
4	赤褐色土（焼土）	明るい色をする。黒色土が混ざる
5	赤褐色土（焼土）	明るい色をする。黒色土の割合が大きい
6	赤褐色土（焼土）	やや鈍い色をする。黒色土の割合が小さい
7	赤褐色土（焼土）	明るい色をする。赤褐色土のブロック
8	赤褐色土（焼土）	やや鈍い色をする。黒色土の割合が小さい
1	赤褐色	明るい色をする。やや粘質の細かい粒子。（焼土）
1	黒色土	光沢性のある明るい色をする。微量に黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土
2	木炭	
3	黒色土	やや鈍い色をする。黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土
4	黒色土	明るい色をする。黄色の粒が多く混ざる。締まった粘質の土

第23図　5区焼土壙3、2　土壙1実測図（1／40）

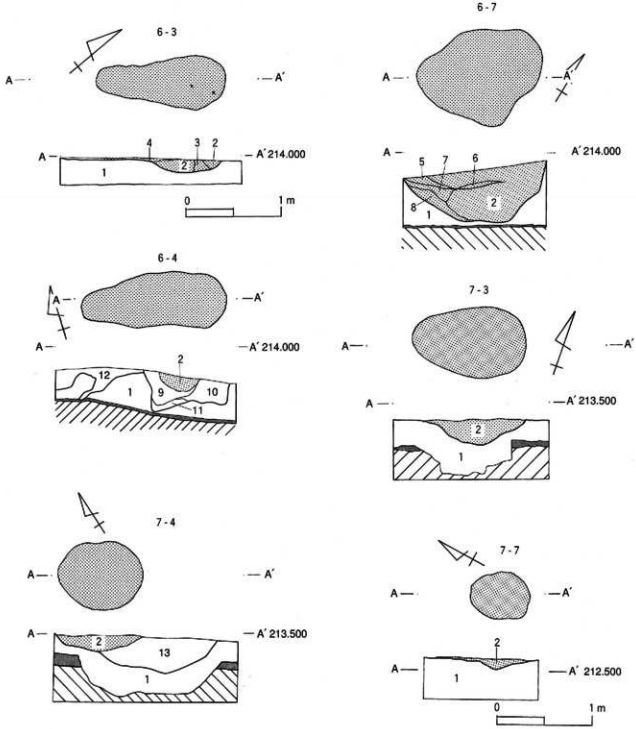


1 黒色土　明るい色をする。微量に黄色の粒子が入る。良く締まった粘質の土
2 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在はほぼ均一に混ざる。
3 赤褐色土（焼土）　赤褐色土混在なし
4 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在が褐色土の比率が高い
5 赤褐色土（焼土）　赤褐色土若干の混在はある
6 赤褐色土（焼土）　赤褐色土混在なし
7 赤褐色土（焼土）　4と同じ
8 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在黒色土の比率が高い
9 赤褐色土（焼土）　3と同じ
10 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在黒色土に赤褐色の粒子が混ざる
11 赤褐色土（焼土）　黒色土赤褐色の粒子が若干混ざる
12 赤褐色土（焼土）　2と同じ
13 赤褐色土（焼土）　3と同じ
14 赤褐色土（焼土）　4と同じ
15 赤褐色土（焼土）　2と同じ
16 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在程度の炭が観察できる
17 黒色土　1と同じ
18 黒色土　やや褐い色をする。黄色の粒が混ざる。締まった粘質の土
19 黒色土　やや明るい色をする。黄色の粒が若干混ざる。良く締まった粘質の土
20 黒色土　褐い色をする。黄色の粒と白色の粒子を含む。硬めの粘質の土
21 黒色土　黄色土を多く含む。
22 黄色土　明るい色をする。アカホヤ土

第24図　5区焼土壙1　陥穴状壙1実測図（約1／40）

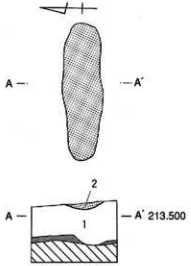


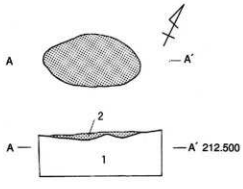
第25図　6区井戸状土壙　大土壙実測図（約1／45）



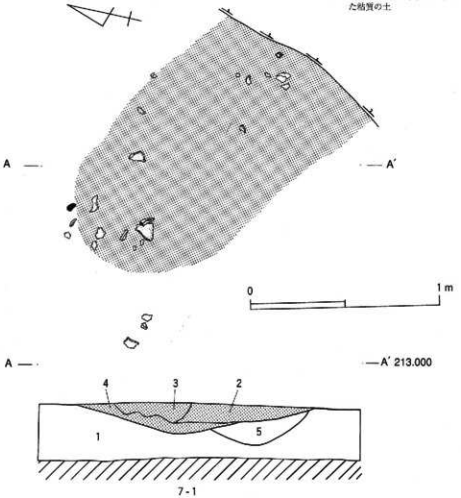
1 黒色土　光沢性のある明るい色をする。微量に黄色の粒子が入る。
　　良く締まった粘質の土（基本土層Ⅱ）
2 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在はほぼ均一に混ざる。
3 赤褐色土（焼土）　赤褐色土混在無し
4 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土黒色土に赤褐色の粒子が混ざる。
5 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土赤褐色の粒を多く混ざる
6 赤褐色土（焼土）　3と同じ
7 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土黒色土を多く含む
8 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土赤褐色の粒を多く混ざる
9 黒色土　やや明るい色をする。黄色の粒子を含む。締まった粘質の土
10 黒色土　薄い色をする。黄色の粒子を多く含む。締まらない粘質の土
11 黒色土　明るい色をする。黄色の粒子を若干含むよく締まった粘質の土
12 黒色土　黄色と黒色の土の混在模様を含む。
13 黒色土　9と同じ

第26図　6区焼土壙3、7、4　7区焼土壙3、7、4実測図（1／40）





1 黒色土　　光沢性のある明るい色をする。微量に黄色の粒子が入る。
　　良く締まった粘質のシ（基本土層Ⅱ）
2 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土の混在はほぼ均一に混ざる。
3 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土赤褐色の粒を多く混ざる
4 赤褐色土（焼土）　黒色土と赤褐色土黒色土に赤褐色の粒子が混ざる。
5 黒色土　　明るい色をする。黄色の粒子を若干含むよく締まった粘質のシ土



第27図　7区焼土壙5、6、1実測図（1／20）

遺物

梅木原遺跡の遺物は土器と石器類で占められる。他は金属類が少量出土した。時期は縄文時代から近世にまで至る。出土した地区は、90%以上が4～7区である。

遺物が出土した層は第Ⅲ層の黒色土内からである。ただし4区のみ第Ⅰ層の耕作土および撹乱層から採集される。観察から、縄文～歴史時代までの遺物全てが同一の層から出土している。近世・近代は耕作土および撹乱層から取り出された。遺物は第Ⅲ層の上部ほど多量の遺物が出土し、下部にいくほど少量になっていく傾向があった。6区と7区からは第Ⅱ層にも土器が包含していることが、断面図（第20図）から観察することができた。第Ⅳ層直上には全く遺物が見られなかった。遺構から出土した遺物もほとんど無い。数点のピットから、土器小片と黒曜石の剥片が確認された程度である。従って梅木原遺跡の遺物は4～7区に大半が分布し、第Ⅲ層から掘り起こされたものと耕作土から採集されたものからなる。

土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器そして近世・近代と思われる陶磁器が出土した。量的には土師器、縄文土器が最も多い。

石器は石鏃、石斧、石錐、石匙、石皿、磨石、敲石が出土した。他に石類として、大量の焼礫と剥片、そして五輪塔の空風輪が出土した。

金属類は貨幣とキセルが出土した。

その他に鉄滓が出土した。

Ⅰ　土器（1～796）

礫を含む遺物の50%程が土器である。コンテナ20箱程度の量である。その内70%以上が細かい小片で出土した。以下、出土した土器について概要をおこなっていく。

今回陶磁器類の図化は見送った。

土器の出土状況

土器は主に6、7区から出土した。4区からは採取という形になる。道路を挟んで西側にあたる1～3区からは数十点しか出土しなかった。5～7区の中では、全体的に散布していたが、南傾壁から20m離れた区域が集中していた。検出された層は第Ⅱ層下から第Ⅲ層上の0.5m程の厚さに集中していた。アカホヤ層上層部ではほとんど出土されていない。第Ⅲ層を埋土とするピットやアカホヤ層上の茶褐色土内からは3～4㎝の小片のみ確認された。

A　縄文時代の土器

梅木原遺跡から出土した縄文時代の土器は、コンテナ3箱分程度であった。接合できる資料はなく、大部分が土器片としての出土であった。形を復元できた資料は数点である。縄文時代に関する土器は、大まかに文様や口縁部の形、そして調整によって分けている。Ⅰ類からⅧ類まで分けることができた。Ⅰ類が最も多く、他は3～5点と少なくなる。以下これに乗っ取り記述していく。

Ⅰ類（1～133）第28～32図

長短の縦・横・斜の沈線文の組み合わせによって器面一帯に文様を施している土器を集めた。曽畑式土器を指す。図は基本的に文様と口縁端部の形で分けてみた。始めにこれに従って分類を試みた。個々の詳細は観察表による。

1　口縁部～胴部周辺

I－a（1）

一点のみとする。4－a区から検出されたもので、削られたアカホヤ層と埋土の堺界から見つかった。口唇部の形は不明だが、頸部から胴部の部分が残る。施文は裏面も施される。頸部の表裏面に多重の刺突連点文を施しているのを特徴とする。胴部は縦列に横、縦の沈線を引く。連点文とともに粗雑な施文をおこなう。

I－b（2）

一点のみとする。口縁部は一度内側に括れ、端部を外開きに折り曲げて尖端を横に延びていく。端部は裏面で段ができる。施文は裏面も施される。文様は頂部上に刺突連点文を打ち、縦列に羽状文、横の短沈線を裏表に引く。

I－c（3～8）

口縁部をハの字型に延び、そのまま端部を尖らせる。端部は裏面で段をつくる。施文は裏面も引く。頂部上に刺突連点文を打ち、表面は縦列に縦、横、縦、やや長目の沈線を引き、裏面に横沈線の上に山形文を引く。

I－d（9～13）

胴部からほぼ直行して延び、口縁端部を尖らせる。頂部の段が裏面や表面にある。施文は裏面も引かれるが、(12) のように条痕のような引き方も見られる。頂部の刺突連点文は上、表、裏と様々である。表面は横列に縦、横の沈線を引き、裏面は横沈線のみ観察できる。

I－d′（14）

(14) はdの文様に近いもので、口縁端部を横に折り曲げている。また裏面の施文に、縦の沈線が観察できる。

I－e（15～21、51～53）

その他一括となる。口縁端部まで、ほぼ直行又はやや外開きで延びていく。端部は尖らせるものから丸いもの、そして断面角形になる。頂部の刺突連点文の間隔が、主に無くなっているのが特徴である。文様は (19) では裏面の施文が消える。基本的に表裏に横の短沈線と羽状文が引かれるが、沈線が交差する粗雑なものもある。

I－f（29～30）

口縁部端部を下方に舌状に延ばし、明確な端部の段を外側に向けた形をつくる。端部の面には工具の刺突面の広い面を取ったレンズ状の刺突連点文を斜方向に短い間隔で打つ。施文は裏面も引く。表面は横の沈線が引かれる。その下は (37) から縦の沈線が来ると思われる。裏面はI－cと同じ文様が来る。

I－g（31）

f類とは異なる。端部を舌状に延ばして端部の面を広く取ることなく、端部断面を角形に成形して、外側に折り曲げたのみの形をする。端部の面はf類と同じ刺突連点文が打たれる。施文は裏面も引く。表面はf類と同じだが、横の沈線の間に1条の縦沈線が観察できる。裏面は縦列に2条の押し引き文と1条の刺突連点文が引かれる。

I－h（32、33）

(32) は (31) とほぼ同じ形をするが、(33) は端部を外側に折り曲げた形ではなく、開いた形をする。端部の面はf類と同じである。施文は裏面も引く。表面は横列に横から縦の沈線を引き、格子目状の文様を引く。裏面は縦列に3条の押し引き文から横の短沈線が観察できる。

Ⅰ—i（40、41）

端部の形がf類と同じになる。端部の面はd類に似た短間隔の刺突連点文を打たれる。施文は裏面も引く。表面は短・長の縦・横の沈線を組み合わせた文様を引く。この表面の施文をi類の特徴となる。（43）は縦列上を押し引き文から始まっている。裏面には2条の押し引き文が引かれる。

Ⅰ—j（96、97）

やや舌状に延びた幅広の端部をつくるが、折り曲げられることなく端部に延びていく。端部は刺突連点文だが、棒状の工具とヘラ状の工具によって形が異なる。施文は裏面も引く。表面はc類の裏面に似るが、山形文が2条となる。裏面は横の短沈線を引く。

Ⅰ—k（88～93、95）

主にその他の形となる。端部断面は折り曲がったもの、肥厚させたもの、直線的に延びていくものと様々となる。

以上最初に口縁端部が残る土器片を集めることから始め、次に端部の形態の違いによって分けていき、最後に文様の違いで組み合わせていった。多少細かく述べてきたが、口縁部の端部の形は、（12）のように胴部から直線的に延び、先端を鋭角気味にするものと（41）のように胴部から一度折れ曲がり、先端を角型にするものに大きく分かれる。この2群を基準に、丸くなるものや舌状に大きく肥厚するものがでてくる。曖昧な土器片も見られるが、前者はc～e類となり、後者はf～k類となる。

さらにA類とB類を基準として文様も分けられる。文様の点から言えば、Ⅰ—a、bの2類を入れて4つに分けられる。4類の共通点は口縁部裏面まで施文をおこなわれていることで、（19）の1点のみおこなわれていない。a類は胴部に見られる刺突連点文を特徴とする。出土地点も含めて唯1点のものである。b類は端部が残る。c～e類に入るが、口縁部に見られるクの字に打たれた羽状文を特徴とする。c～e類は縦列に一定の長さの横→縦→横の比較的単純な文様に対して、f～k類は長短のある縦・横線の組み合わせによる複雑な文様を引く。c～eとf～k類の共通点は表裏に引かれた山形文が両方から観察されたことである。

2　胴部～底部周辺

主に前述の口縁部との関連性の薄いものは後ろの方へ置き、関連性があると思えるものは口縁部の近くに置いてある。ここでは関連性の薄い土器片を中心に述べていく。

文様は胴部では、前述の縦・横の単純線と組み合わせの線に加えて、縦線と横線を渦巻き状に引いた四角文と綾杉文が観察できる。

底部は弧を描くものや折れ曲がる土器片を中心に集めた。主に横の沈線と下から放射状に広がる沈線が観察できる。

Ⅰ—l（22～28）

主に縦・横の単純線を引く。沈線の長さに統一感がなく、線の前後が消えるように引かれる。彫の深さもやや浅い。

Ⅰ—l′（110）

横→縦→縦の単純線となる。沈線の引き方からc類に最も近いと思われる。

Ⅰ—m（42、44～50、80～87）

主に組み合わせの文様となる。口縁部のi類と組み合わされる。薄手の器壁に彫の深い明確な沈線を引き、丁寧に表面を撫でている。表面からは赤い朱のような色が観察できる。

Ⅰ－n（98～108）

主に四角文を引く。しかし土器片の復元からひし形になると思われる。図ではひし形と捉えている。口縁部のｊ類と組み合わされる。やや統一感のない器壁厚にヘラ状工具によって、Ⅰ類中最も幅の細い沈線が引かれる。

Ⅰ－n′（109）

同じ四角文だが、沈線の太さを始め、大きく異なる。やや厚手の器壁に短い間隔で沈線を引く。そのために表面に凹凸感がでる。線の重なりがあるが全体的に丁寧な施文をおこなっている。

Ⅰ－o（111～113）

主にひし形文の変形である綾杉文となる。断片のみで確認されるために口縁部は不明である。２～４条の縦線を軸にひし形の線を引く。個体によって引き方が異なる。施文方からＢ類に近いと思われる。

Ⅰ－o′（55～71）

ｏ類だが、小片と（70）のように粗雑なものを集めた。

Ⅰ－p（77、78、129～133）

主に胴部のその他となる。全体的に彫の浅く、条痕のように見えるもので、（78、133）のように最も粗雑な沈線も含まれる。また（131）のように弧を描く沈線も入れている。

Ⅰ－q（114～120、122、123）

主に縦列を横の沈線からひし形文の変形と思える三角文を引く。

Ⅰ－r（121、124～128）

ｐ類に含まれる彫の浅く、条痕のようにも見えるもので集めた。

以上最初に器壁の文様と施文の違いから分けていき、次に断面の変化によって分けていった。口縁部の分類とは逆の方法でおこなった。

文様は主に４つのパターンからなり、それぞれ工具の違いや施文の工程に変化が観察された。形の変化は、断面から直線的なものから緩やかに弧を描くもの、そして大きく描くものから折り曲がるものがある。前者はｌ～ｐ類となり、後者はｑ～ｒ類となる。

ｃ～ｅとｆ～ｋ類が主に口縁部の形態の違いによって分けたことに対して、ｌ～ｐとｑ～ｒ類は胴部と底部で分けている。

3　土器の復元

以上の点から考察も踏まえて、土器の復元を岩手おこないたい。

Ⅰ類の土器は当遺跡において多く出土した土器であるが、全て土器片として出土しているために接合できるものがなく復元は容易ではない。土器片から、口縁部・胴部・底部の３カ所は分けることができた。Ⅰ類の土器の形は、曽畑式土器の典型的な形である深鉢型から外れるものではないと思われる。３つの部位の内、口縁部の器形の違いが観察できた。端部の形が大きく２つに分けられることに述べたが、全体的に見ると、前者は張りのない胴部から直行した立ち上がり気味の形態をしていると思われる。後者は口縁部を横に広がる形をつくり、そして胴部は膨らました形をつくるものと直行して底部にいくものがあると思われる。

文様は、概略すると、口縁部表で９パターン（１、２、３、12、29、32、41、88、96）確認できる。胴部で大きく４パターン（42、109、110、111）、底部で３パターン（115、121、126）確認できる。

各部位のパターンは沈線の太さ等によって分かれ、さらに口縁部では端部の連点文や口縁部裏のパターンによって細かく細分される。

Ⅱ類（134～136）第33図

横方向の山形文を文様とする押し型文土器である。施文状況と施文箇所によって2種類又は2個体の土器と考えられる。

Ⅲ類（137～139）第33図

口縁部と胴部の間に斜方向に連続した貝殻腹縁の刺突文を施されている。斜めの向きや間隔、長さが異なる。形態は端部の先端を鋭角にする。口縁部を膨らせるものと内湾するものに分かれ、器壁の厚さがそれぞれ異なる。

Ⅳ類（140～159）第33、34図

形態によって大きくまとめている。端部を角形につくり、上に向かって平坦にする。口縁部と胴部の間に粘土紐を余分に付け加えることで、両者間に段を形成している。胴部から直行すると思われる。鉢形の土器類と思われる。

Ⅳ—a（140～143）第33図

浅い沈線を蛇曲して引く。そしてその円内又は円外に貝殻腹縁の刺突文を連続して詰めていくように打っていく。（140）では押し引き文が観察できる。形態は胴部から外反気味に直行していく。

Ⅳ—b（144、145）第33図

浅い沈線を横方向に流水から波状に変えて引くものと縦方向に流水状に引いていく。形態は端部に部分的に突起部をつくる。内湾しながら直行していくと思われる。

Ⅳ—c（146～152）第34図

斜め方向から工具を刺突していき、横列に連続した連点文を施文する。主に胴部と口縁部の境となる段の上側に施文されるが、段の有無が不明である。（146、149）は口縁部上に1条または2条施文されている。形態は付近を最も肥厚させ、裏面をクの字に曲げて外側に直行していく。端部は（149）から山形の突起を連続した3つまで確認できる。

Ⅳ—d（153～159）第34図

口縁部にやや浅い沈線と押し引き文を引き、図形的な文様を施文している。形態は胴部から内湾しながら直行していく。端部を平坦に成形し、山形の突起を連続した2つまで確認できる。

Ⅴ類（160、161、172～178）第35図

胴部から内湾気味に大きく開いて、口縁部を山形状に成形している土器である。（160）と（161）は同じ3区から出土した同一個体又は同一形態と考えられ、両者から胴部に擦消縄文と刺突連点文の文様が見られる土器である。胴部の文様体に違いが見られる。

Ⅴ—a類（160、161）第35図

口縁部はヘラ磨きをおこない光沢をだす。口縁部の縁は2条の沈線を引き、間に擦消縄文を施す。胴部は口縁部との境から円錐形の刺突連点文を施す。そして下に2条の沈線を引き、間に擦消縄文を施す。

Ⅴ—b類（172～178）第35図

胴部の文様体が残る。口縁部の残存からナデによる調整がおこなわれる。文様は刺突連点文と沈線、擦消縄文で構成される。刺突はやや深目の三角錐状、浅い球状、竹管状、巾状の工具を使用している。沈線は（161）より幅広の施文をおこなわれている。

Ⅵ類（167～171）第36図

口縁部をやや外反気味に開いていき、端部で直立する。Ⅴ類とは出土地区が異なる。施文は端部の表面に2～3条の沈線を引く施文と調整によりそれぞれ異なる。(169) は端部下側に擦消縄文を施される。(170) は端部に (169、171) と比べて、省略された沈線を引く。口縁部は表裏にヘラ磨きを施され、特に表面は黒色の光沢をもつ器面となる。

Ⅶ類（179～185、220）第36図

沈線とその間の擦消縄文による文様で構成する。主に胴部上側付近と思われる。形態から膨らみをもつものと直線的なものに分かれる。(184) は2つの刺突が見られる。

Ⅷ類（186～215、237～246）第36、37、39図

主に沈線、刺突文、条痕等の施文が観察できるが、上記の土器群とは明確に異なる土器である。全体的に厚目の土器が多い。個体数が少なく、1～2点の土器片又は1個体である。概略で述べていきたい。

(186) はⅦ類と同じく沈線に囲まれた擦消縄文を施す。(187)、(188)、(189) は条痕が施されている。(190) は口縁部に胴部が入り込む形で段をつくる。口縁部は波状となる。口縁部には山形に横の沈線が引かれ、頂部には刻み目を施す。

(191) は深鉢型の土器で全体の1/4程度の残存を残す。丸味を帯びた体部を最高径として頸部から短く直行して端部で立ち上がる形をつくる。口縁部は波状の形をし、肥厚した端部をもつ。体部と口縁部に欠損しているが、左右に把手状の帯が付くと考えられる。文様は頸部から口縁部に3条の凹線を引き、体部に渦巻の沈線を引いている。そして把手の部分となる貼り付け部には、沈線による2つの文様がある。

(192) は頂部に丸型の刺突連点文を打たれ、口縁部には横と丸の凹線を施している。(193) は波状の口縁部をする。頂部を軸に外側に張り出した形をする。口縁部には横方向の凹線を引くが内側に窪んだ形をする。(194) は胴部付近と思われる。やや幅広の浅い沈線を施文している。(195) は端部をやや尖がらせ、頂部を凸の形で突起する。口縁部は下方向から円柱形の工具で刺突された連点文を施し、その下に横方向の凹線文を施文する。(196) は横方向に凹線を引き、下に中央に突起が残るようなパイプ状の工具で刺突された連点文で施文される。

(197) は口縁部が立ち上がり、丸味を帯びた端部をする。表面に浅く粗雑な沈線を施文する。(198) は胴部に爪形のような弧状の線が並ぶ。(199) は胴部に浅く粗雑な沈線を施文する。(200) は横の浅い沈線を引き、その間に擦消縄文を施文する。(201) は横に浅く細い沈線を引く。(206) は厚目の胴部に浅い沈線を鋸歯状に施文する。

(207) は約1/3を残して出土した。胴部と底部は接合できないが、同地点から検出されている。厚めの器壁をした壺型の土器となる。体部中央を14.7㎝の最大径として、内傾しながら立ち上がり、口縁部との明確な境をもたずに緩やかに括れていき、やや外反して端部に至る。端部は丸味を帯びた角形となる。底部は0.3㎝の上げ底をする。内側は段つくらず、丸味を帯ながら底の中央に至る。口縁部には沈線と線刻による文様が施文される。縦の2条と1条の線に長短の斜めの線刻を組み合わせた図柄と、その間に2つ以上連続した2条の菱形の施文を残す。

(208)、(209) は胴部を残す。表面に貝殻条痕が残り、裏面は指で抉るように強く撫でられている。(210) は胴部に刻み目の連点を施す。(211) は胴部と頸部に突帯を貼り付け、刻み目を施す。(212) は丸味を帯びた胴部に、横と縦の貼り付け突帯を残す。(213) は立ち上がる口縁部の先端にやや幅広の突帯を貼り付け、楕円の連点を押圧している。(214) は立ち上がる口縁部の先端に突帯を貼り付け、

一部をさらに張り出させる。張り出した部分の端部はV字に切られた形で残り、その形に沿ってV字の線刻が残る。(215) は厚目の胴部に条痕が残る。

(237) は鉢形の土器になると思われる。全体的に摩滅している土器で不明な点が多い。形態は胴部から浅い段をつくり、やや外反気味に立ち上がる。口縁端部は角形に成形する。摩滅と欠損で不明である。一部に突起物の貼り付けと端部を内側に折り曲げた箇所が観察できる。

(238) は外反気味に立ち上がる口縁部を羽状に成形している。端部は丸味を帯びている。頂部には3条の短沈線を施文する。

(239) は約1/2残る。横半分が削られた形で出土した。口縁部から底部まで残った形で検出された。底部からやや外反気味に立ち上がり、口縁部で僅かに内湾する。口縁部を最大径とする。底部は偏面を外側に張りだし、厚目にする。裏面は裏底偏平の薄い平底となる。内底は体部から一度段をつくり平坦につくられる。口縁部は端部を丸味の帯びた角形をして、偏面やや下に幅広の突帯を貼り付ける。突帯には貝殻腹縁を刺突している。調整は体部全面に貝殻条痕が観察される。

(241) は体部から口縁部まで、ほぼ直行して外傾に開き、端部で立ち上がる。(171) と同じだが、無文であり、ヘラ磨きを全面におこない、鋭角な削りで製作している。(242) ～ (245) は (239) と同じく、ほぼ直行して立ち上がる口縁部に突帯を貼り付けている。いずれも無文となる。(246) は直行して立ち上がり、口縁部を肥厚して段を成形している。

底部1 (216～236) 第38図

6区と7区を中心に底部が100点近く出土した。体部及び口縁部と接合できたのは (239) の1点だけであった。底部を分類する基準の一つにした。底部の分類にあたって、底部1と後述の底部2に大別した。基本的に底部2の厚底に対して薄い平底のを、底部1としている。(239) は底部1となる。底部1は焼成が軟らかく、色調は褐色で占めている。調整に条痕が観察できる。底部底の最大径は12.3cmを計り、最小に5.5cmを計る。

形態は底部から立ち上がり気味に外側に開いていく。(219、222、231、232) は、(239) のように外側に肥厚する。底部は薄い平底となり、裏面は調整にナデがおこなわれる。(234) のように土圧痕を残すものもある。(220)、(221) の底は網代底となる。(234) はやや厚底の底部となる。文様も若干観察できる。(235) はやや肥厚した底部に横の沈線が見られる。(236) は刺突点が打たれる。

B　弥生～古墳時代の土器

縄文時代の土器と同様に、弥生時代以降の土器もまた形式の分類を主としている。以下これにのっとり記述していく。

Ⅰ類　主に突帯の付いた土器類

主に胴部に1～5条の突帯を貼り付けた土器が出土している。残存部位から考えても、器種の中で最も多い数量となる。a類からc類の3つに分けられる。形状から甕形土器と壺形土器に分けられる。

Ⅰ－a 1　主に5条の突帯を持つ土器 (263～284) 第42、43図

胴部に5条の突帯を貼り付け、肥大した口縁端部を持つ土器を中心にまとめた。同じく底部を伴うもの、または接合できる固体はなかった。甕形土器となる。

(法量)

検出された土器群の中で最大径約50cmを計るもの (263) が属する。口径32～20cmまでを計る。

(形態)

口縁部は体部から外側に折れた直後に肥大した丸い端部となる。体部は肩部から胴部にかけて残る。丸味を帯び、張った肩部をつくる。最大径が肩部にくる。Ⅰ類中唯一、口径を上回る。

突帯は、残るもので5条の多重の帯から構成される。体部最大径の辺りを一番下にして、上部に重ねて巻かれる。粘土紐は3類の中で最も細いものを使っている。またヘラ状工具で左斜めに刺突された刻み目を持つものがあり、突帯の上部（266、274）と下部（281）に刻み目が刺突される。

細かな点をみると、口縁端部や胴の張り方等でそれぞれが異なる形をする。Ⅰ－a類は全てが肩部の張った胴部ではない。肩部を張らない体部は、口径と体部最大径が同じ程度となるもの（264）や肩部がなく口縁部が最大径となるもの（272等）がある。

帯状突起の位置も分けることができる。肩部の傾斜途中にあるもの（266、312）や体部最大径から下にあるもの（281）等がある。

（266）は3条の突帯で構成され、胴部から肩部にかけて内傾していく途中に貼り付けられる。突帯上部に連点が刻まれる。傾きから肩部から胴部にかけて大きく膨らむ体部となる。（267）は肥厚した端部の下側に、棒状の工具で斜め方向に軽く押圧している。（269）は口縁部と体部が残る中で口径と体部径の差があるものとなる。器壁の厚さから端部は肥厚してなく、右上に短く延びた形となる。

（成形および調整）

Ⅰ－a類の甕形土器は体部を頸部までつくり、外側に向けた口縁部（264）を、または直行したもの（267）を一度つくりあげ、さらに太い粘土紐を巻き付けて口縁端部を形成する。粘土紐の太さが異なるため頸部と端部の間に補助的に別の粘土を貼り付けているもの（271）が観察できる。調整にはナデがおこなわれ、肩部に膨らみを持たせるために内側からの指押サエのあとがみえる。

突帯は粘土紐の中で最も細いものを使用している。蔓状の紐を3本または5本並べて貼り付けている。突帯の断面は、やや外側に張り出した二等辺三角形となる。突帯の間隔が1㎝前後と、狭い幅のため突帯間の調整は細い棒状工具によってナデ調整がおこなわれている。

Ⅰ－a 2（285～293）第43図

ほぼ上に直行した体部の横部に同じ厚さの粘土紐を貼り付けて、突帯部としている。厚さから突帯よりも口縁端部に近い。刻み目はない。体部の突帯は（173）のみ認められるが、後述のb1群とa1群のように明確な突帯ではない。体部にやや膨らみを持つ凸線となる。形態はa類とb類の間で曖昧になっている。土器（285）は土器aの（271）の端部貼り付け方が同じとなる。

以上のように土器Ⅰ－a類の概観をしてきた。全体的に肩部の張った体部が多いと思われる。（264）や（272）のように肩部の張らない体部と、形態は甕形と壺形の2種に分けられるが、全体像が不明なために分けることは困難であった。大型は壺形のみ構成され、小型に甕形が見られる。肥大された口縁端部は、基本的に大型の土器にみられるもので口径が小さくなるにつれて肥大部分が縮小、又は形骸化していく。このために口径の小さな土器Ⅰ－a 2類と後述の土器1－b 2類は区別が困難となる。

Ⅰ－b　主に口縁端部に突帯を有する土器（294～331）第44、45図

底部からやや内湾気味に直行して口縁部に至る。口縁部は端部に突帯を貼り付け、大きく肥厚する形態と口縁部の突帯を基準としている。主に法量と成形によって大きく2種類に分けられる。

Ⅰ－ｂ１（294～321）

（法量）

口径35㎝前後から、最小16㎝前後までを計る。ｂ類の中で大型を含める。

（形態）

体部から内湾ぎみに直行する。端部に突帯を付け、横の頂部に刻み目を施す。最大径は口縁部とする。後述の土器ｃ群と似たような、バケツ状の形をする。体部にさらに突帯を付け加える等のバリエーションが見られる。体部は突帯の有無に関わらず、直行して端部に延びていく。Ⅰ－ｂ１類も同じく底部を伴うまたは接合できる個体はなかった。

突帯は１㎝幅の紐状の粘土で、断面三角形を形成する。突帯の頂部には刻み目を施すものとされないものがある。ｂ類の端部の突帯は刻み目が施されている。

（バリエーション）

ｂ１類は口縁端部の突帯をベースに、体部の突帯と刻み目を組み合わせて構成されている。突帯の先端は様々で、ほぼ横に向けているのがほとんどだが、上に向けて受部のような形をするもの（297）や、下に向けるもの（295、303）の３つに分けることができる。

体部の突帯は端部から0.3㎝程下がった箇所に１条（298等）と、４㎝程下がった箇所に２条（297、294等）の突帯が貼り付けられる。主に１条の突帯と２条の突帯、そして突帯のないものに分けられる。体部の突帯の代わりに、２条のヘラによる横線が刻まれたもの（304）が見られる。

突帯に刻まれる刻み目は、断面が三角形となる頂部に刻まれる。やや間隔を空けて刻まれるものから、狭い間隔で刻まれるなど様々である。主に口縁部の突帯は細く、密に刻まれる。対して体部の突帯は広く、間隔があまり統一されていない。また刻み目を刻まれるものと刻まれない突帯がある。刻み目のある突帯は断面が主に台形となる。大型のものは主に刻み目まで刻まれるが、小型になる程刻み目を省略されている。大型のうち（295）は、２条のうち１条しか刻まれてない。

（成形および調整）

一部でハケを使用していると思われるが、内外をナデで調整されており、やや丁寧なつくりをしている。しかし焼成は全体的に軟らかく、（553）のみ堅い焼成を見せている。

突帯部の貼り付けは、突帯上下をナデで安定させている。貼り付けにはやや粗雑さも見られ、特に端部突帯の下部では粘土紐の線が残る箇所がある。突帯は均一して巡ってなく、やや波打つ様に巡る。刻み目は細く削られた棒の先端と、丸または四角の削られた棒の腹部で刺突または押圧されている。主に正面または右方向から刻まれている。刻み後は軽くナデる程度で、刻まれた粘土の滓が残る。

Ⅰ－ｂ２（322～331）第45図

口縁端部に突帯を持つが、土器ｂ１とは様相の異なる土器を集めた。土器ｂ１の突帯より太い紐状の粘土を使用し、上面を平坦に仕上げている（322、326）。また突帯横は凹線を入れている（322～327）。土器（322、323）は口径23㎝程の大きさを計る。小形の部類に入る。

以上のようにｂ１類は口縁端部および体部に刻み目と１～３条の突帯を組み合わせた土器である。土器（553）は、この中で突帯と刻み目を最も多く施された土器である。端部の刻み目は深く、近い間隔で刻まれており、丁寧におこなわれている。対して（312）等の小型になると、刻み目は省略され、体部の突帯は１条あるかないかとなる。従って大型から小型になるにつれて、刻み目および突帯の省略化の傾向が強いと思われる。さらにｂ２類になると突帯の形も大きく変わり、肥厚した突帯の端部となり刻み目の代わりに凹線等が引かれる。

突帯は、特に体部のものは装飾的なものと思われ、同じく体部に突帯を持つ土器a群の突帯、(332)や(333)等の大型の土器に関すれば、重量を支える機能的な要素を持つと考えられることからも比較できる。体部の突帯は(258)等に見られる帯状突起に近い。

土器(553)は、また突帯端部を上向きにして口縁上部に窪みを入れていることも他とは異なる様相を持つ。

また土器b1には付着した煤を観察できる(304等)。これは他の甕に見られる不完全燃焼による黒色化とは異なる。

Ⅰ－c　主に縄目状の刻み目突帯を持つ土器(332～463)第46～51図

縄目に模した1条の突帯を体部に貼り付けた土器を基準にする。主に外側に開きながら直行する円筒形の部分を残す。a～c類中最も大きな形態となる。

Ⅰ－c 1類

体部から口縁端部まで大きく括れることなく直行していく。甕形の形態となる。

(形態)

Ⅰ－c類は体部から外側に直行して、端部に至る。形態はⅠ－b類と類似する。最大径を口縁部とする。底部を伴う土器Ⅰ－c類は検出できなかった。従って(333)が高さ24.1cmまで復元できた土器である。土器は突帯部を境に口縁部と体部を区切っている。体部はほぼ共通して突帯部まで垂直に立ち上がり、突帯部付近でやや膨らみを持つ程度で、口縁部までラッパ状に開くバケツ形をする。法量は口径約14cmの小型(403～408)と口径約20cmの中型(343～345)と口径30～40cmの大型(332～342)に分かれる。また器壁の厚さと突帯の太さからは大中型と小型に分かれる。

(成形及び調整)

調整は内外共にハケで調整される。外面は口縁部を中心に横から左斜め方向に調整され、端部でナデ消しされる。内面は横方向に均整の取れたハケ調整c－②がおこなわれ、ユビ押さえc－③がおこなわれる。

(口縁部)

突帯から上部を口縁部とする。3cm前後と10cm前後の短胴と長胴に分かれる。基本的に外側に開いていくものだが、土器Ⅰ－cの違いは主に口縁部で観察できる。突帯を境に形の変化が見られる口縁部(332、333等)と、体部の延長上的な口縁部(334、343等)の2つに分かれる。さらに内湾して開いていくもの(333、336)と外反して開いていくもの(332、334)に分かれる。口縁部高は3～10cm、直径23～41cmを計る。端部は丸および丸味のある角形の単純な形で、歪みが見られる。

(突帯部)

口縁端部から下に1条貼り付けられる。粗状の粘土を巻き付け、指で断面三角形に形成しながら器壁に安定させる。粗状粘土は太いものと細いものに分かれるが、前者が多い。(344)の様に、突帯の太さと土器の法量に比例関係はない。帯の上下はナデまたはハケで調整し、その後ヘラまたは棒状の工具で一定の角度と一定の間隔を保ちながらエグリを入れていく。刻み目には布目状の痕跡を残すものと無いもの(395、399等)に分かれ、角度には右斜めに刻まれるものと垂直に刻まれるもの(398等)に分かれる。全体的に布目状の痕跡を残し、右斜めに刻まれた突帯が多く、後者は例外的である。また垂直に刻まれた突帯の土器(398)は他よりも肥厚した粘土に、太目の棒状工具を使用している。

突帯を貼り付けた土器の部位は突帯が補強の役目を果たしているものがある。しかし突帯部分周辺の土器の巻き上げ痕が残るなどの粗雑さが観察できるものがあり、突帯によって被熱に差ができ、安定性が無くなっている。破損したc類の大半は突帯部で割れている。

Ⅰ－ｃ２類（409～417）第50図

突帯部を境にして体部と口縁部を明確に括れる。体部からほぼ直進している土器ａ１に対する。

体部と口縁部の境界で大きなくびれ部を持ち、くびれ部に刻み目の突帯を貼り付ける。胎土や色調は土器1－ｃと変わらない。口径13～21㎝を計り、括れ部は14㎝を計る。法量は中型になる。調整もまたハケを主体としている。突帯の貼り付け方や布を巻いた棒状工具による刻みは同じだが、突帯の刻み目はⅠ－ｃ１類の持つ刻み目よりも横に刻むため、一単位が細長く施文されている。

口縁部は（409、413、411）の３つと思われる。ほぼ直立し端部でやや内湾する（409）、大きく内湾する椀形をする（413）、外側に延びていき、端部でやや外反する（411）の３つである。また突帯と口縁端部が、つながる個体はない。しかし（409）と（410）、（413）と（414）は、部位が違うが、同一と思われる。口縁部は短く延びる。以上からⅠ－ｃ２類は小型の短脚壷と思われる。

以上口縁部や体部に貼り付け突帯が見られる土器を見てきた。ａ、ｂ、ｃ類の３種に分けられ、それぞれ甕形と壷形が見られる。甕形と壷形の比率をを見ると、ａ類は壷形が占め、ｂ・ｃ類は甕形が占める。いずれも比率の高いものは大型を含み、技法も丁寧に成形されている。ａ・ｂ類は小型になるほど粗雑になっていき、ａ類とｂ類の明確な分類が困難となる。刻み目突帯は主にａ・ｂ類とｃ類で大きく分かれる。前者は肩部や胴部に貼り付けており、突帯による体部の変化は見られず、後者は突帯による体部の変化が見られる。機能的にも両者は異なる。構造上からもａ類は突帯を軸に壊れやすくなっている。色調はａ類は暗褐色、ｂ類は灰白色、ｃ類は赤褐色を基調とする。含まれる胎土はａ類は透色の粒を多量に含み表面がザラザラする。ｂ類は茶色の粒を多量に含む。ｃ類は胎土が少なく、表面を硬くする。

Ⅱ類　主に突帯のない土器群（453～555）第52～57図

体部から口縁端部にかけて短く外側に開く、断面「ク」の字から逆の「Ｌ」字形の土器を基準に土器Ⅱ類とした。調整、色調、胎土、焼成等に様々な違いが観察できる土器群である。図は主に調整と形態を基準に分類をおこなった。主に甕形と壷形に分けられる。

Ⅱ－ａ類

主に体部から口縁部にかけて「ク」の字に折れる土器で、最大径が口縁部になると思われる。胴部が余り張らない。甕形土器となる。

（法量）

口径は30㎝前後で、口縁部高は３㎝前後となる。ほぼ統一的な法量となる。（466～468、479）が口径17㎝を計る。Ⅰ類と比較すると大型の小さい部類と小型となる。端部と括れ部の差は1.4～3.0㎝を計る。高さは体部を最大限まで残すもので22㎝を計る。

（形態）

口縁部が外側に開いていくこと以外は、全体的な統一感は無い。回転台を使用した様にバランスのとれた土器（453～467等）があれば、手捏状の不得手な指ナデ成形の土器（484、487等）もある。口縁部は３㎝程ほぼ直行し、端部を丸く成形する。Ⅱ－ａ１～２類もまたⅠ類と同じく底部まで残る土器は見つからなかった。Ⅰ類のように体部まで残る個体もなく、大部分が口縁部付近しか残らない。

体部まで接合できるものはほとんどない。体部最大径を残すものも無く、わずかに（480）のみ体部最大径より下があった。（490）は口縁部の立ち上がり方や体部の形、色調に違いが見られ、前述の突帯のあるⅠ類の形に近い甕である。

体部は丸味を帯びているものａ１類（468、486、480等）と、ほぼ直行してドに開いていくものａ２類（457、475、478等）がある。さらに開きがなく真下に直行していくものａ３類（496、491等）

の３つに分けられ、「ク」の字から逆の「L」字となる。ａ１、２類においては胴き具合から体部の最大径は口縁部の最大径を越えないと思われる。また同一個体と思われる土器片は、丸味のあるものは少なく、偏平としたものが多い。体部は最大径を肩部とした長胴形と思われる。

ａ３類においてはａ１、２類土器と口縁部の形から様相を変える。器壁がやや厚く、外面と内面の口縁部の位置が大きく異なるもの（364等）、横に向かって大きく開くもの（494、497等）、外面の口縁部と体部の境が不明瞭なもの（473、493等）など様々である。（501）はａ３類の中でも形態を異にする。端部は角形に成形している。器面を丁寧なナデ調整をおこない、口縁端部から体部まで均一の器壁をつくる。

（成形及び調整）

調整は主にナデａ―①とハケａ―②の２調整で分けられる。

口縁部では外面を指ナデまたは横ナデと、横ハケに分かれる。そして内面は指ナデと、横ハケまたはカキ目に分かれる。

体部は外面で横ハケまたはハケが施されているものが観察できる。内面に対しては縦方向と若干の横方向のハケと思われるが、強弱に違いがある。器壁の厚さを統一するように、大まかな壁面調整を内面でおこなわれている。中には（478）の様に削り込むような調整も見られる。

前述したが、同一の形態ではあるが、均勢の取れたものと予捏のようなものには、その趣に差がある。これは調整時において横ナデと指ナデの違いで分けることができる。さらに端部においても均一感があるものとないものから、回転台の使用の有無も想定できる。また全体的にハケで調整された土器Ⅱａ類は少数で、ハケ調整を主とした土器Ⅰｃ類とは反対に近い。土器Ⅱの半数は焼成が軟らかいもので調整痕が見られないものもあるが、ハケとナデの調整の違いに形態等のつくり分けは見いだせないと思う。

以上Ⅰ類に対する突帯のない甕は丸味を帯びた体部から頸部で外側に折れ曲がる形をする。全体的に、色調・焼成・胎土からそれぞれ個々に異なる。

Ⅱ　ｂ類　突帯を持たず、口縁部を外側に開く土器群（504、503）第56図

全体像不明の土器をもって甕類と壷類の識別は、事実上困難なものと思われる。前述のⅡａ類では最高径が口縁部を上回ることがないが、体部が丸味を帯びて頸部で大きく括れているⅡ類をⅡｂとして、壷形の土器とした。口縁部から体部にかけて、大きく括れて「ク」の字となる。体部最大径が口径を越えないⅡａ類に対する。体部最大径が口径を越えたもの（504）。また口径20㎝以下となったもの（503）を壷（2―b）とした。口径15㎝前後の小型の壷となる。

以上Ⅱ類を概観してきた。基本的に突帯のない土器群として総括しているが、統一感がない。主に成形の粗雑なものと丁寧に製作されたものに差が見られる。形態は肩部をやや上に置き、体部が張らない形をする。壷形は少なく、小型のものしか見つかっていない。

Ⅲ類　特殊な形態をする土器（255～262）第41図

Ⅰ・Ⅱ類とは形態の異なる土器群である。Ⅰ・Ⅱ類と比べて少数で、土器片で出土した。

壷と思われるのは（255～261）である。（255～257、269、270）は口縁部を残す。形態、調整、色調など異なり、焼成が軟らかい土器が多い。

（255）は体部と頸部がくびれる。口縁部は外側に直行し、さらに角度を曲げる。端部は丸みを帯びた角形となる。朝顔形の二重口縁となる。（256）は口縁上部のみを残す。やや外反する口縁部から端

部の下方に突帯をつけ、二重の縁を作る。(257) は口縁部のみを残す。頸部から外反して延び、内側貼り付けでやや短く内傾する断面クの字の二重口縁となる。端部は角形となる。貼り付け部分近くで、内外から摘まみを入れて外側に反るようにしている。(257) は頸部のみを残す。三重の突帯が巡る。(259) は体部と頸部が明確に分かれてなく、頸部付近から垂直に立ち上がる。すぐに外反し端部に至る。端部に一重の沈線を引く。短頸壷の形をする。(260) は口縁部を残す。体部から外反し、垂直に立ち上がる。端部は外に突帯状に貼り付けて、逆のL字状になる。長頸壷の形をする。(261) は底部のみを残す。厚みのある逆台形の平底からさらに外側に広がっていく。内部には段を形成し、丸みのある底を作る。色調、焼成程度から (260) と同一個体と思われる。(264) は土器片である。ハケ調整がおこなわれた後、器壁にヘラで線が刻まれる。土器は平板状であり、上下の確定はできない。線刻は太線、細線の二種に分かれる。細線は途切れ途切れの細さとなる。

以上主に口縁部に特徴がでている土器である。長胴から短胴とそれぞれが個々に異なる。口径は17㎝前後を計る。

底部 2 (577～621) 第59、61図

前述の底部と異なり、主に厚底となる。底部1と比べると個々に細分できる。色調は赤褐色から灰白色と多彩で、焼成は硬くしまっている。調整にはヘラ磨き等が観察できる。底部底最大径は10.0㎝を計り、最小径は4.4㎝を計る。

(形態)

形態は最初にⅠ脚台無し (577～609) とⅡ脚台付 (610～621) に大別した。そして次に底部底がa半底 (577～584、588～596、600～609等)、B上げ底 (598、615等)、C丸底 (609) に分かれる。数的に平底で占める。内側底は尖底または直径2㎝程度の丸底をつくる。

底部底から体部へ向かう形は、主に① 一度立ち上がり、外側に開くもの (577～596)、② 底部底から外側に開き、折れ曲がってさらに開くもの (597～601)、③ 底部底からそのまま外側に開くもの (602～609)、④ 底部と底に明確な境界がなく、丸底に近いもの (609)、⑤ 底部底から内傾し、くびれをつくり外側に開くもの (610～617)、⑥ 主に上げ底で杯の器台のような形をするもの (618～621) の6種に分かれる。

①の立ち上がり高は、底部底から少し立ち上がり、すぐに開いていくものから、2㎝程度立ち上がって開いていくものとそれぞれの形をする。これは断面を観察すると、最初に底部を作る粘土の台が、それぞれの厚さをしているためと思われる。このことは基本的に立ち上がり高が高いもの程、底部底と内側底の差が開くことになる。

上げ底の中空部には底部径に対して、a 1/2以下の径をとり、断面角形になるもの (586、587)、b約1/2の径をとり、断面門錐形となるもの (604、613) c 1/2以上の径をとり、杯の器台に近いもの (597、598) および (618～620) の3種に分かれる。

(成形および調整)

調整には外側が主にナデをおこない、内側は指押サエをおこなう。(577～579、616) は外面に縦方向のヘラ磨キがおこなわれる。(615) は指ナデ、接合の跡消しにハケ調整がおこなわれる。

(583) 等には土圧痕が観察され、底部底は未調整と思われる。しかし (578) の底部にはヘラによる線がみられる。また (589等) のように底部底から粘土滓がはみでており、軽くナデて巻きこんでいる。底部底を調整してできた粘土滓と思われ、底部の裏側にもいくらかの処置が施されている。

底部は、紐状の粘土を渦巻き状に巻いていき、一重か二重にすることによって高さを調整している。

渦巻きの痕跡は（585）で観察できる。（607、608）は焼成時に側面が剥がれたと思われる。ところで底部底は主に平底と中空の上げ底がみられるが、上げ底ａの中心部の粘土を省略したものと思われる。（586、587）省略部に対しての断面を角形にある程度調整がされるが、（585）は未処理である。対して上げ底ｂは同じく省略によるものか不明だが、ナデによって丁寧な円錐形にして、意図的ものに仕上げている。

製作法は①～⑥ともに同じと思われる。⑤、⑥は別に台を作ってから、合わせていることが（618）から観察できる。底部底から開く角度もそれぞれ異なる。傾斜をもって上がっていくもの（578、606等）や横に広がりを見せるもの（599等）に分かれる。

以上底部２をまとめてきた。基本的に底部１と異なる底部としてまとめている。底部１と異なる点は統一感がなく、個々に細分できる。主に底部と体部を明確に分ける平底となる。（609）は丸底となり形を異にする。

形状や技法面等からみても、同一遺跡出土という性格からもⅠ・Ⅱ及びⅢ類の甕形土器や壺形土器の底部になると思われるが、Ⅰ・Ⅱ類の個体数に対してバリエーションの多さと個体数に差がみられる。（577）等のように、口縁部を中心とするⅠ・Ⅱ類では観察されなかったヘラ磨キの調整が観察され、決定的に組み合わせることはできない。底部（599）は（261）と類似する形をする。また法量面からも口径が20～40㎝と大小20㎝の格差があるのに対して、底部径４～７㎝と大小３㎝程度の格差しかないことから、土器の大きさにかかわらず、底部径はほとんど変わらないことを示す。

Ⅲ類　高杯（622～662）第62、63図

高杯は土器群の中で少ない数量で検出された。残存は杯部、脚部である。杯部と脚部で接合できるものはなかった。また脚部の端部も確定的な資料が確認できなかったため、図化を取りやめた。杯部の端部の土器片は主に土器Ⅰ、Ⅱに対して器壁の薄い土器を選びだした。

（法量）

付部は口径20㎝前後、器高８㎝前後を計る。脚部は接合部の口径４㎝前後を計る。脚端部は不明で、脚部の形態から様々な法量をだすと思われる。

（形態１）杯部

杯部では端部から杯底部まで復元できたものが１点（622）、ほぼ完形に近いものが１点（623）が確認できた。杯部と脚部の接合が確認できたものは３点（624等）である。

杯部はⅠ　体部と底部が明確な境界をつくるもの（622）とⅡ　つくらないもの（624）となる。少数なので個別にみていく。

（622）は杯部Ⅰになる。脚部の接合部からやや外反気味に延びていく底部をつくり、体部下で内傾する段を形成する。体部下から端部にかけて外反して延びていき、端部を丸味の帯びた角形を形成する。杯内部は外部の曲線に沿った格好でつくられる。そのため器壁の厚さが一定している。底部は中心部から上っていく形をして、体部は外側と平行して外反しながら上がっていく。杯部と脚部の接合面は均勢の取れた箇所にある。

（623）と（624）は杯部Ⅱになる。高杯（623）は脚部の接合部から内湾しながら口縁端部に延びていく。底部と体部は、丸味を帯びて曲がっていく。明確さはないが、体部と底部の境界を形成する。内部は高杯（622）と同じ形態をする。ほぼ平底に近い底部から明確な境界をつくって端部までやや外反して延びていく。外面とは断面で平行線をたどらず器壁の厚さが不安定となる。脚部の接合部は中心からずれている。高杯（624）は内部が丸底となると思われる。

（形態２）脚部

脚部は主に杯部の接合面から残り、脚の端部まで残るものはない。個体数は少ないが成形や調整、色調等でそれぞれ違う。断面の観察からになるが、脚部は、Ⅰ　下部で大きく曲がり胴部と口縁部を形成する（624、650等）、Ⅱ　接合部から端部までほぼ直接延びていくと思われるもの（652）に大きく分別できる。数的に脚部Ⅰが占めていると思われる。脚部Ⅰでは高杯（624）が接合部から広がりをみせながら、4.5㎝下まで下がった箇所で大きく外側に開いていくと思われる。脚部の中で唯一、直径0.3㎝の円形透かし孔をもつ。高杯（654）は胴部下に膨らみを持ち、口縁部と胴部にくびれをつくる。高杯（655）は接合部からやや膨らみながら直下に下がっていく。そして胴部で大きく曲がるものと思われる。脚部Ⅱでは高杯（652）接合部からラッパ状に開いていき、胴部と口縁部に若干の変化をだす。

（成形および調整）

高杯は杯部と脚部の接続法に違いをみることができる。成形Ⅰ　円錐型の中心軸をつくり、最初に杯部を円錐形の広い部分が内部底になるように巻き上げ、別に製作した脚部を円錐形の先端部にはめ込む。そして体部と脚部の接合部を別の紐状の粘土を貼り付け、継ぎ目を消していく作業をおこなったと思われる。高杯（622～626）にこの技法がみられる。成形Ⅱ　Ⅰの円錐形粘土を軸につくられていないものとなる。杯部と体部をそれぞれ製作し、軸なしで直接貼りつけたと思われる。高杯（645、647）等にみられる技法で、中心部に直径0.3㎝程度の刺突がみられる。中心の基準にされたと思われるが詳細は不明。

調整には個体によって異なる。杯部（622）は内外を横ハケで調整される。杯部（623）はハケをおこなった後、適当にナデ消しをおこない、最後に縦方向にヘラ磨キを数条引いている。内面には全面ハケ調整がおこなわれている。脚部（653、652等）は縦方向ヘラ磨キが施される。脚部（655）は横方向ハケが施される。

以上高杯をまとめてきた。確認される個体数は少なく、それぞれが個別の成形がみられる。高杯を分けるには主に杯部と体部の接合の方法と思われ、成形ⅠとⅡと分けてみた。ⅡはⅠに対して省略したような製作になる。見た目上、厚い円錐形の粘土をつけることによって重心を中心に集めることは、安定性をだす。さらに高杯の最も弱い部分である接合部の補強にも役立てている。しかし実際には焼成面で軟らかいものが多く、高杯（625）はパーツがきれいに剥がれた形で検出された。

高杯と思われる土器について

高杯と思われるものが数点出土している。個別に観察していく。土器（657）は口径6.7㎝、高さ4.4㎝を計る。摩滅しているために杯部との接合は不明である。中央に0.6㎝の孔が空いている。成形Ⅰの被孔部は径2.0㎝前後を計り、成形Ⅱの被孔部は0.6㎝前後を計る。高杯ならば成形Ⅱに近い。土器（656）はやや内傾しながら立ち上がり、口縁部で内側に引っ込む段をつくる。直径4.4㎝を計る。接合面は摩滅している。段の側面には右斜め方向にヘラによる線刻の列点がみられる。高杯（624）の接合部にも似たようなものが観察される。土器（660）は巻き上げ痕が全面に残り、粗くつくられる。外面と内面口縁部にはハケで調整される。破損面も堅く焼成されている。（660、661）は割れ方から脚の端部と思われたが、底部２の中空された脚台の平底とも思える。

Ⅳ類　杯（663～780）第64～67図

杯類は小片を含めて甕類に続いて多く出土した。完形品はなく、器高は不明。口縁端部から底部底まで復元できるものは一点のみである。杯類では素焼きの土師器である杯１と内面を黒色に覆ってい

る杯2に大別できる。底部に対しては高台を貼り付けない底部1と高台を貼り付けた底部2に大別できる。杯1、杯2はともに底部1と底部2を伴っている。また墨書土器2点、ヘラによる記号が1点確認される。

Ⅳ—a類　杯1

杯（690）

記録された杯身中、唯一完形が復元できたものなので表記する。口径12.9㎝、底部径6.7㎝を計る法量に対して、器高4.7㎝を計る。外面は底部を強く指ナデすることで、底部底から一度立ち上がり、高台の形をつくりだす。0.6㎝程上がった後、外側にくびれて内湾気味に上がっていく。口縁部付近でわずかに外反し、口縁端部を丸く成形する。

内面は底部底の中央を指ナデをおこない最も深く成形し、内湾しながら上がる。そのまま口縁部まで至らず、外面の立ち上がりの高さに合わせた所で、底部と体部の境界を強く横なですることによって水平の段のくびれをつくりだす。体部中央付近まで外反して上がり、また内湾して端部に至る。断面から底部外側に向けて肥厚して、体部中央で薄く造形されている。底部底はヘラ切り離し後、ナデ消しをおこなわれている。内面は内側底の形で分かれる。

内面1　内面底と体部で大きく曲がり明確な境界ができる。内面底は平底、内面底中央を深部とする丸底、そして中央に人差し指大のくぼみを入れた丸底及び平底からなる。

内面2　内面底を深部として弧を描くように口縁端部まで上がっていく。

底部1（690～711、725～731）第65、66図

高台を伴なう杯の底部で、底径は5.0㎝から8.0㎝の間を計る。底部はヘラによる回転切り離しの痕跡が残る。調整は内外とも横ナデをおこなわれ、一部指ナデがされる。横ナデ痕である凹凸を良くだすものとないものがあり、特に丁寧なものは布または革で横ナデされている。器形の変化は底部底から体部へ向かい方で現れる。

底部1—a（690、694～698、703）

底部底の横部を強く横ナデすることによって、底部底から立ち上がり、高台をつくったような形をする。杯（690）ではやや内湾して端部にいたる。体部と底部は明確ではなく、やや丸まったもの（690、697、698、703）から底部から丸味を帯びて体部にいたるもの（694～696）に分かれる。

内面は底部底中央を指ナデによる成形で窪みが入る（690、694～696）。最も薄いもので0.2㎝となる。さらに底部と体部の間を横ナデによって窪みを入れている。体部の接合付近を肥厚させて、口縁部に延びていく。また同じく底部底中央を最深部とするが、0.4㎝以上の厚さとする（697、698、703）。前者のように凹凸による変化はみられない。

底部1—b（692、693、705、725～731）

回転台から切り離した後、横に飛びでた粘土の滓を切り取らずに、外側に巻き込み、横ナデ処理で終えている。場所によって円盤状の低い高台を貼り付けたように見える。0.5～1.0㎝程度を円筒状に立ち上げた部分から切り離している。杯（727）は成形時に約1.0㎝下から切り離して、飛びでた粘土滓を巻き込むスペースをつくっている。

内面は底部1—aの凹凸のない内面とはぼ共通する。丸底の底部から体部で曲がり、口縁部に至る。中央付近が残るものは人差し指大の窪みをつくっている。

底部1—c（699～701、706、711）

底部からくびれや段がない、無台の杯となる。底部1—a、bに対して回転台からの切り離しを体部付近でおこなわれている。残存は体部下まで残り、底部底と体部の境界をやや曖昧にし、丸味をも

って上がっていく。

内面は上記の底部と同じように底部中央を人差し指大のくぼみを入れる。底部1－aと同じく底部と体部の境を肥大させている。

底部1－d（702、704、707～710）

底部1－cと同じく、無台の杯である。底部底と体部の境界を明確にする。体部を残す土器は、口縁部へ直線的に上がっていく。

内面は、底部と体部を明瞭な境界をもたない。底部底からやや上がり気味に体部で大きく屈曲するもの（704、707、709、710）と、口縁部からなだらかに底部底中央に下がっていくもの（702、708）に分かれる。

底部1　その他（691）

底部1－aのように、底部底が立ち上がり、体部の境界が底から上に位置する土器。1.0㎝程度立ち上がり、円錐状高台となる。内面は底部1－d（702、708）のように底部底中央からなだらかに上がっていく。

底部2（712～724）第66図

貼り付け高台を伴う杯になる。半数以上の高台底部が破損する。高台と体部の接合部の口径は6.0㎝から8.0㎝を計る。

底部2－a（717、720、721、723、724）

厚手の器壁となる高台で分けられる。高台の高さは最長1.8㎝から1.0㎝を計る。接合部から垂直に下がり、端部付近で外反する。端部は丸く肥厚して成形される。

内面は底部の底を平底に成形し、体部と底部の境界で大きく立ち上がる。杯（720、688）は底部の底中央にくぼみを入れるものや、杯（684）は底部の底を反時計周りの横ナデ痕がみえる。

（底部の切り離し痕）

切り離し痕は、反時計回りの渦巻きとなる。丁寧なものは切り離し後ナデ消されている。切り離し後ナデ消されたものが多くみられる。底部1－a類は底部から体部にかけて、再び横ナデが入れられる。また杯（691）はナデ消し後に土圧痕がみえる。

底部2（685）

杯部と高台の接合部を強く横ナデを入れることによって、高台の下部を内湾気味に落としていく。端部は角形に成形される。内面は底部底中央に向かって反時計回りに横ナデされる。底部底中央から体部にかけてなだらかに上がっていく。

底部2－b（679～681）

底部2－aに対する。杯部と高台の接合部から細くなって端部に向かう。接合部から「ハ」の字型で外に開いていく。最も細くなるのは高台の中間付近で、端部でまた肥厚する。

内面は底部底中央から口縁部に向かって底と体部の区別がなく上がっていく。同じく杯（681）は底中央に向かって反時計回りの横ナデがみえる。

（底部の切り離し痕）

切り離しの痕跡はa類とb類では異なる。杯部と高台の接合は、ヘラ切り後は未調整で貼り付けていると思われる。底部2－a類は丁寧に高台の接合部や切り離し痕をナデ消したもの（687、690等）と切り離し痕を残す粗雑な指ナデで終えるもの（684）に分かれる。底部2－b類は複雑な調整をおこなう。ヘラ切り後は未調整で高台を接合し、接合部の周辺のみナデ調整をおこなう。そしてヘラ切りによって出た粘土滓は、時計方向によじりを入れながら中央に集めている。底部（685）も同じ底

部の底となる。

杯1（663～690）第64図

口縁部

杯1の口縁部は計28点図化した。口径は11cmから15cmを計る。口径差4cmの杯群となる。図面は口径の大きいものから並べている。口径の判る杯1は、口縁部から底部付近まで残るものから口縁部しか残らないものまである。器形を復元できるのは、杯（663、664、666～669、676～678、680、682、685、689）の13点の半数である。

杯1－a（663、666、680、676）等

体部下部から直線的に延び、他よりも直行して口縁端部にいたる。横ナデによる凹凸の強調が強く、間隔が短くなる。器壁厚は薄くつくられ、軽くなるという特徴が挙げられる。端部は丸く成形される。杯（663）は口縁部を横ナデによって薄く成形してるため、端部が鋭くなる。器壁の厚さは、残存部の下においても器壁の厚さは変わらない。杯（666）は口縁端部から5.0cm下で器壁厚が変化する。杯1－a類は杯（690）の器高4.7cmよりも高い器高をすると思われる。

杯1（677）

杯1－a類と形態を同じだが、器壁の厚さがあり、比重が高い。端部をやや肥厚した丸い形で成形されている。

杯1（689）

底部まで残す杯1で、高台を伴うものと思われる。器高5.2cm以上となる。底部から大きく内湾して口縁部に向かって直線的に延びていく。あまり大きく内湾しない部位から上は杯1－a′と同じ形態をする。内面は外面で内湾する部位で最も厚みのある器壁をつくる。調整に横ナデによる凹凸は残るが比較的丁寧なミガキがかけられる。

杯1－b類（664、667、669、677、678、685）等

杯1－a類に対する杯となる。器壁の厚いもので比重がある。体部は丸味を持つ。横ナデによる凹凸の強調感が少ない。端部は丸く成形される。杯（690）の口縁部もこの類に入る。杯1－b類の器高は5.0cm前後になると思われる。

杯（667）と（664）は調整面で他の杯1－bと異なる。内外面に丁寧なミガキを施されているため、横ナデによる表面の凹凸が消されている。

杯2　黒色土器（733～750）第67図

黒色土器の破片が50点近く出土した。内面のみ黒色に燻されている。その中でそれぞれ口縁部と底部を17点図化できた。個体数は10点程度と思われる。同じく完全に復元できるものはなかった。

口縁部（733～743）

口縁部を図化できた杯2は11点で、最大口径は17cmで最小口径は11cmであった。口径差は6cmとなり、杯1よりも多くのバリエーションが予想できる。器形は大きく2種に分かれる。

杯2－a類（733、735～742）

体部から内湾気味に伸びていく、杯1－a類に近い。口縁部も直線的に延びるものもあるが、やや外反して端部に至る。杯1－a類よりも厚みのある端部をする。形態は均勢の取れた形をする。

杯2（733）は底部付近までよく残している。高台付の杯となる。付底部から口縁端部までの器高は5.6cmを計る。高台の接合部から内湾気味に外側に延びていく。口縁部では少し外反して、杯1よりも肥厚した丸い端部を成形する。梅木原では大型の部類に入る。椀形に近いと思われる。

杯2－b類（734、743）

肥厚した体部の下から口縁端部に向かって、徐々に細くなっていく。口縁部をやや内反りして端部に至る。端部は鋭端に仕上げている。個体数は少ないため、種別になるか不明。

内面は黒色で統一される。杯2（733）から、底部と体部に明確な境界をもたず、底部底中央から弧を描いて口縁部に向かう形をする。表面は、**a**　丁寧なヘラ磨きによって、光沢感があり、凹凸のないもの（733、735～737等）と、**b**　くぼみが残るヘラ磨きをおこない、粗雑感のでるもの（734、739、743）がみられる。

底部（744～749）

底部は10点確認され、7点図化できた。10点中8点が高台付の底部となる。端部まで残る高台は杯2（747）のみで、底部2－a類となる。形態は接合部からやや開いた形をする。外面は端部との境を明確にして横ナデをおこなって、断面角形となる。高台の中で最も丁寧な作り方をする。無台の底部は杯2（748）で、底部1－b類となる。

内面は全て内面2になると思われる。その中で表面bは、底部1－b類となる杯2（748）のみで他は丁寧に磨かれた表面aとなる。

底部の切り離し痕は底部2－a類と同じように高台を接合後、切り離し痕に丁寧なナデ消しをおこなわれている。

墨書土器（678、725、750）第64、67図

当遺跡において墨書土器が3点確認された。杯（678）は杯1の土器で外面の口縁部に、墨汁で書かれている。欠損だが一字の墨書と思われる。土器の破片に一字完形で残る。書き順から、杯部を反対にして読むと思われる。最も近いものとして『令』の省略された字と思われる。

杯（750）は杯2の土器で、外面に墨汁で書かれている。文字とともに欠損されており、読むことはできない。書き順から、例えば『日』のような、右端の部分と思われる。また下部にも墨書らしき黒斑が観察できる。これが墨書となるか不明であり、さらに仮に墨書とすれば字数も不明となる。

杯（725）は杯1となる土器で、外面中央に付近にヘラによる刻みが確認される。線刻は細い線で、摩滅によって消えるか消えないかの状態である。正面左側が欠損しているので、全体像は不明だが、縦線が4本と横線が1本まで確認することができ、記号と考えられる。

外面が朱色となる黒色土器（749）

残存底部のみだが、表面を朱色に塗られた杯2が1点出土している。高台付となり底部2－b類の形となるが、断面「ハ」の字状には開かない。朱色の塗料は高台裏側にもみられる。高台の裏側の接合後の調整は底部2－b類にみられるように粘土滓を中央に集め、指で時計方向にねじりを入れている。

Ⅴ　布痕土器（788～796）第69図

布痕土器が30点余り、土器小片で出土した。個体数不明だが、1～2点と少ないものと思われる。図化できたのは計9点で、特に大きな破片を集めたのみである。全体的に軟質で長時間被熱を受けたような赤桃を色調をする。内面は布痕を残すが、外面は摩滅したように胎土が露出する。胎土は0.5㎝以上の大粒の小石を多量に含め、他と比べて粘土質を落としている。

布痕土器（788）は口縁部を残す、と思われる。体部から内湾気味に延びていき、端部断面を三角形に形成する。布痕土器（789）は底部である。尖底型をしている。

以上布痕土器がわずかに出土している。形を残すのは2点しかなく、それから推察しても、尖底の砲弾型をしたものと思われる。

Ⅵ　その他（556～574）第58図

上記の分別に入りにくいものを集めた。時期区分も不明である。

土器（556）は口縁部を直行しながら端部にいたる。調整にヘラ状の工具を使用し粗削りをおこなうのみである。色調は土器a群よりも深い赤褐色となる。高杯の脚口縁部とも考えられる。

土器（557）は口縁端部から底部付近まで残るもので、形態がよく分かる。鉢形をするものだが、一点しか確認されていない。丸底になると思われる底部から内湾気味に立ち上がり端部を若干外反させる。調整には一部ハケがみられるが、巻き上げ痕が明瞭に残る粗い調整で終えている。色調は土器（556）に近い。

土器（561）は直径8㎝、高さ推定5㎝前後を計る。小型の土器類になる。形態は鉢形に近いと思われる。

土器（562）は体部と口縁部の境でややくびれ、短く直行し断面3角形の端部をつくる。そして端部の先端に凹線を入れている。甕類になると思われる。

Ⅶ類　須恵器（781～787）第68図

須恵器は、破片40点余りが出土した。個体数は10点余りと思われる。計8点図化した。

口縁部は確認されなかった。断片的だが、主に甕類と思われる。

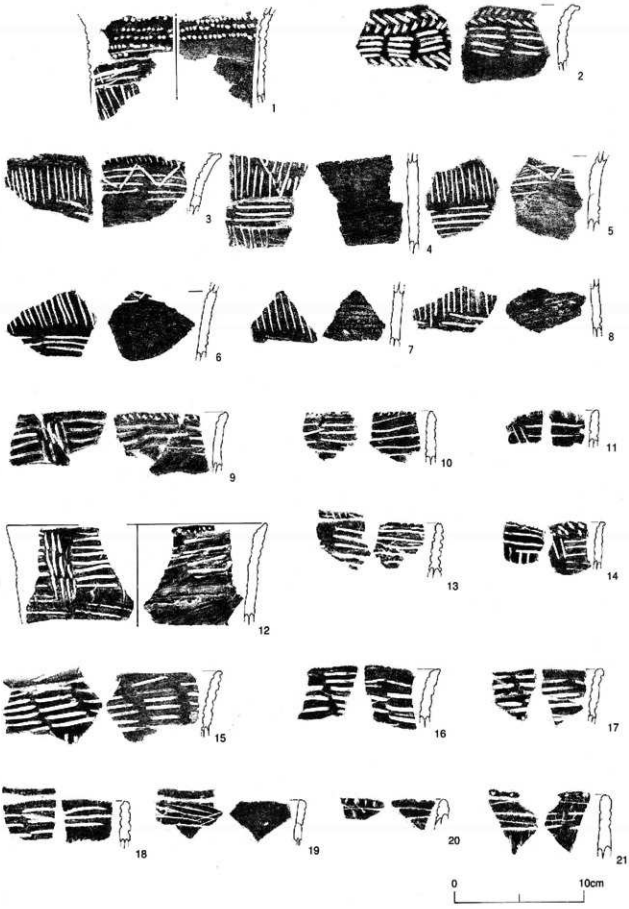
表面の調整には叩キ調整がおこなわれている。主に平行線の当テ具と格子目の叩キ具でおこなわれている。

須恵器（781、783、784）は、調整に彫の深い肌理細かな格子目叩きと平行線当て具を使用している。須恵器（781）は10点近い破片から復元できた。丸い形状を示し、前後の器壁の厚さが異なる。体部から底部にかけての部分と思われる。調整には下から上にと、上から下にと部分で分かれて叩かれている。平行線当て具は後にナデ消されている。軽く消されているため、がさつな表面となる。須恵器（783、784）は（781）と同じ調整法で成形される。同一個体とも思えるが、格子目の1辺の大きさが異なり、平行線当て具のナデ消しも丁寧におこなわれている。道具と丁寧さに多少の違いがみられる。須恵器（782）は格子目の叩きと平行線当て具を使用している。焼成が軟質のため格子目はやや摩滅している。ここでは内面の平行線当て具が消されずに残る。5条の3×3㎝の道具が使われている。須恵器（786）は外面に格子目の叩キを残す。内面は丁寧にナデ消されている。0.5×0.5㎝の格子目は他の格子目と大きさが異なる。

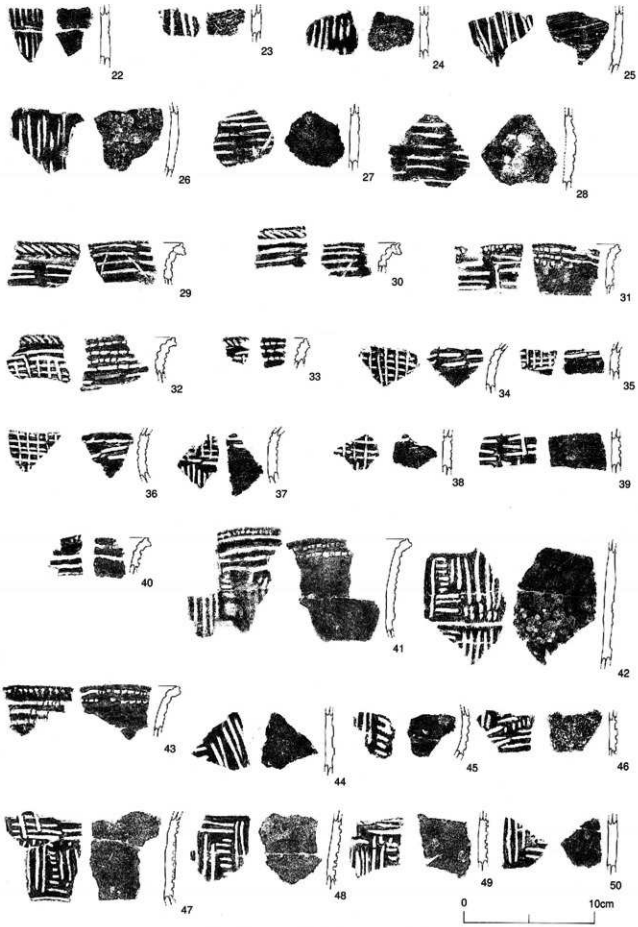
須恵器（785）は平行線の叩キと同心円文の当テ具と他の須恵器と異なる。上下は不明。青灰色に赤鉄色がかかる。須恵器片40数点中一点のみ確認された。叩キは0.6㎝の幅で、1.5～6㎝以上の長さがみられ、細かく叩かれている。同心円文は3～6条の放射状の円の跡がみられる。

須恵器（787）は平底の底部が残る。唯一法量の確認できる。直径15㎝を計る底部底から右斜めに立ち上がっていく。底部底は中央に厚みを持たせ、体部の接合面を斜めにしている。そのため外面に接合線は底部底付近となる。接合線は丁寧に消されていない。調整には外面格子目の叩きがおこなわれ、内面は当て具使用後丁寧にナデ消されている。底と底部の境面は爪の跡が残る。外面は底部下部は縦横編えて叩かれているが、上部になると斜め方向で叩かれている。底部底と体部の接合面はナデがおこなわれている。平底の底部をもつ須恵器は、一般的に碗の形が多いが詳細は不明。

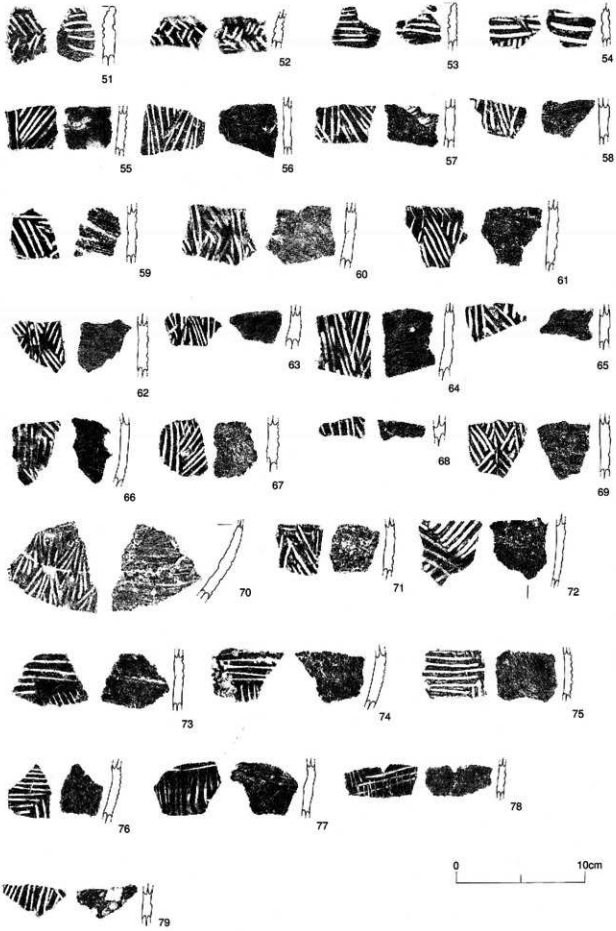
以上須恵器片を観察してきた。格子目の叩キに平行線の当テ具を使用し、内面をナデ消していることが、確認された須恵器の特徴と言える。他は平行線の叩キと同心円文の当テ具を使用したものが一点のみである。器種についても甕類と思われ、一点のみ碗形の底部が出土している。



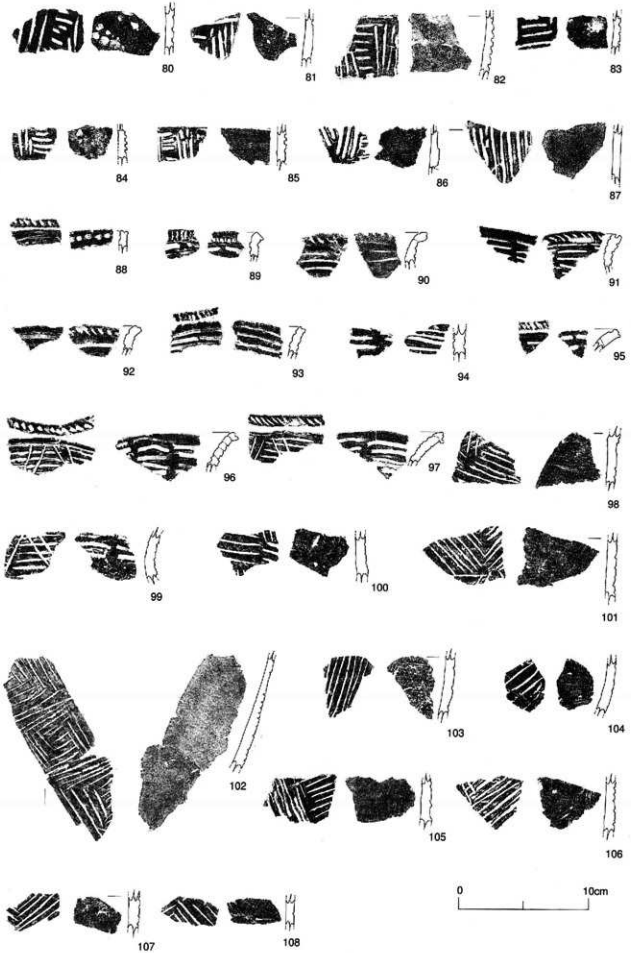
第28図　出土遺物実測図　土器（1）



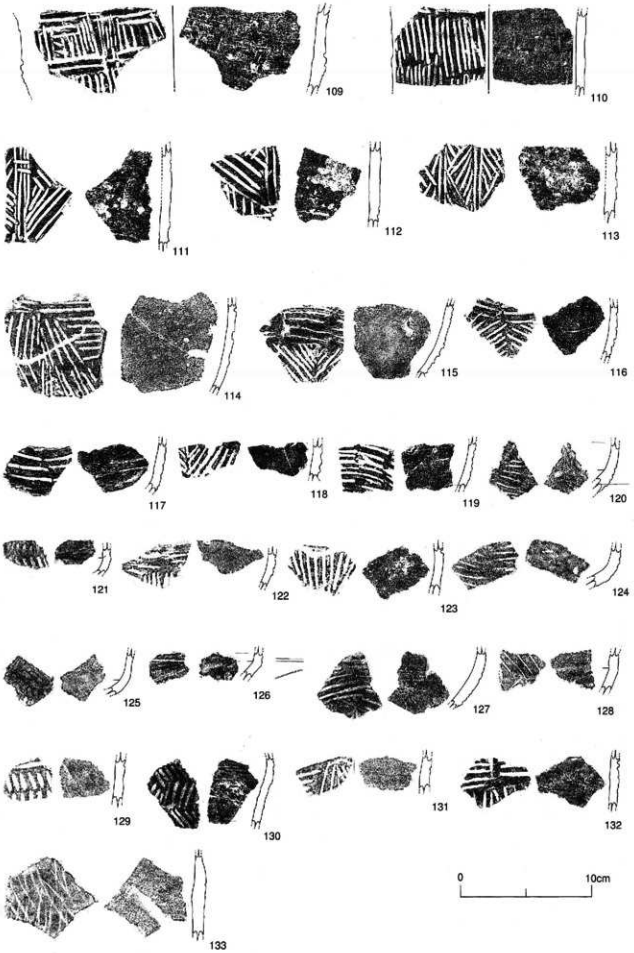
第29図　出土遺物実測図　土器（2）



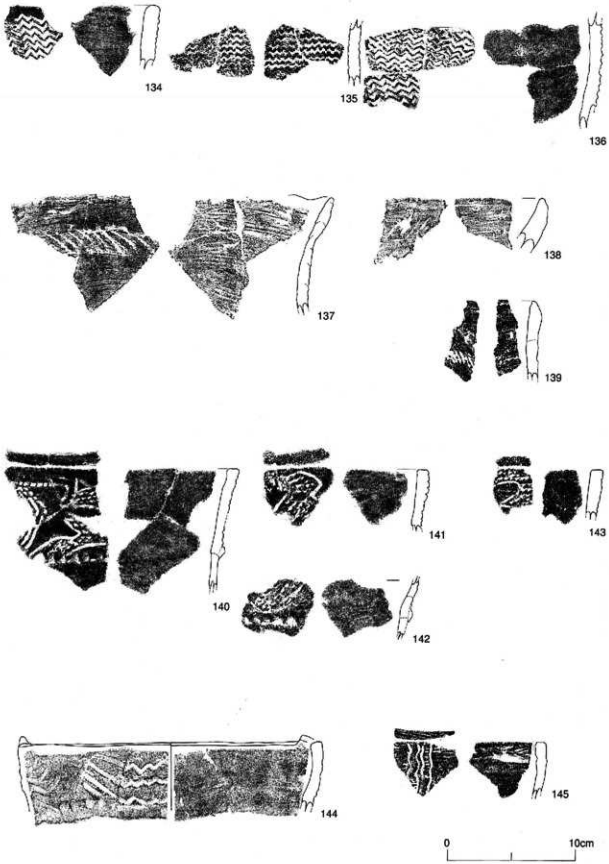
第30図　出土遺物実測図　土器（3）



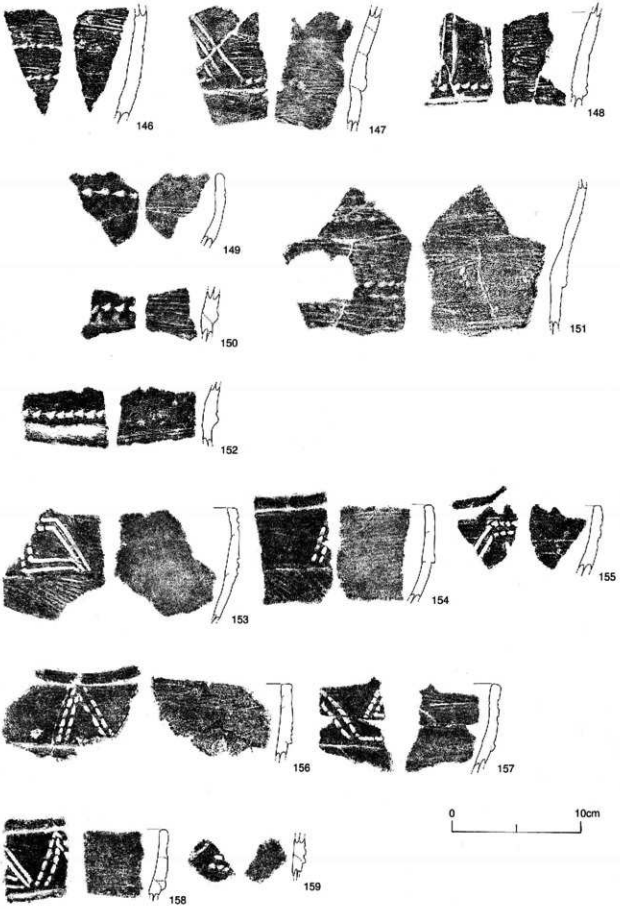
第31図　出土遺物実測図　土器（4）



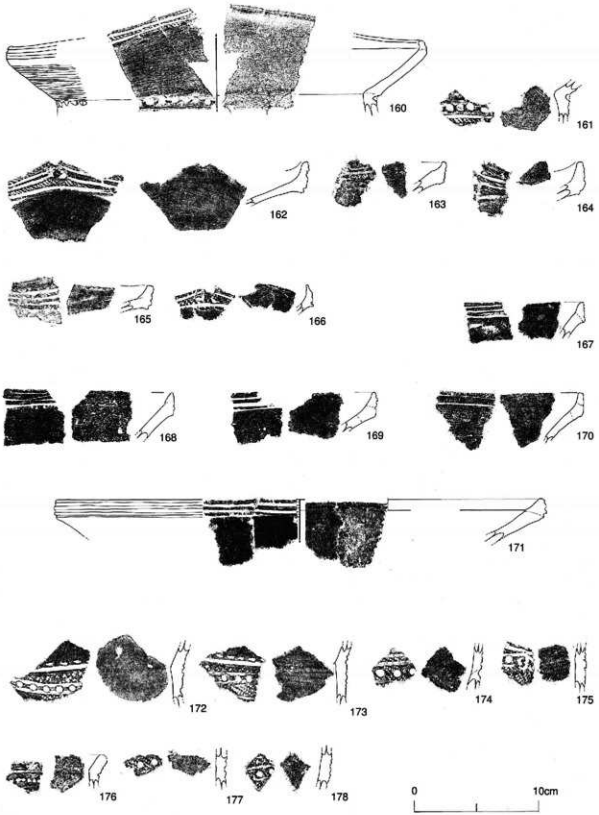
第32図　出土遺物実測図　土器（5）



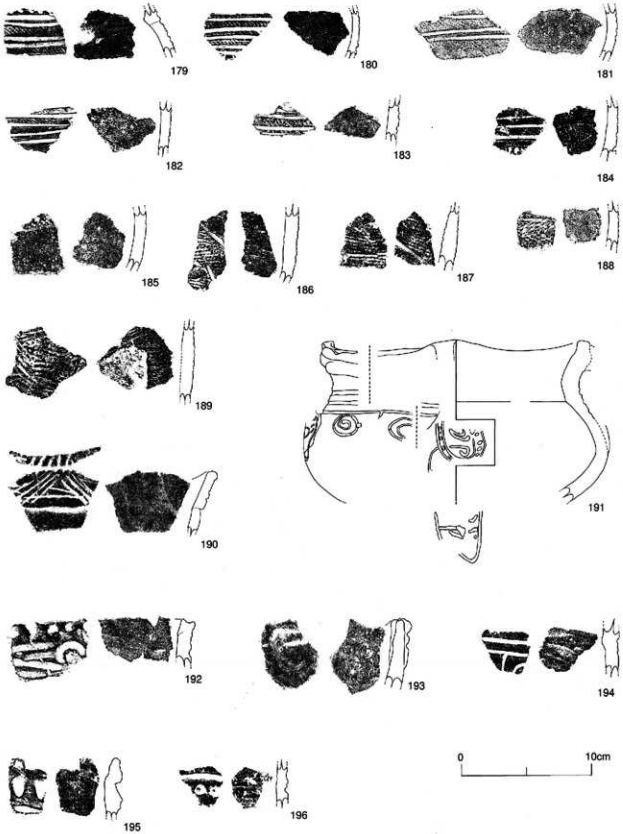
第33図　出土遺物実測図　土器（6）



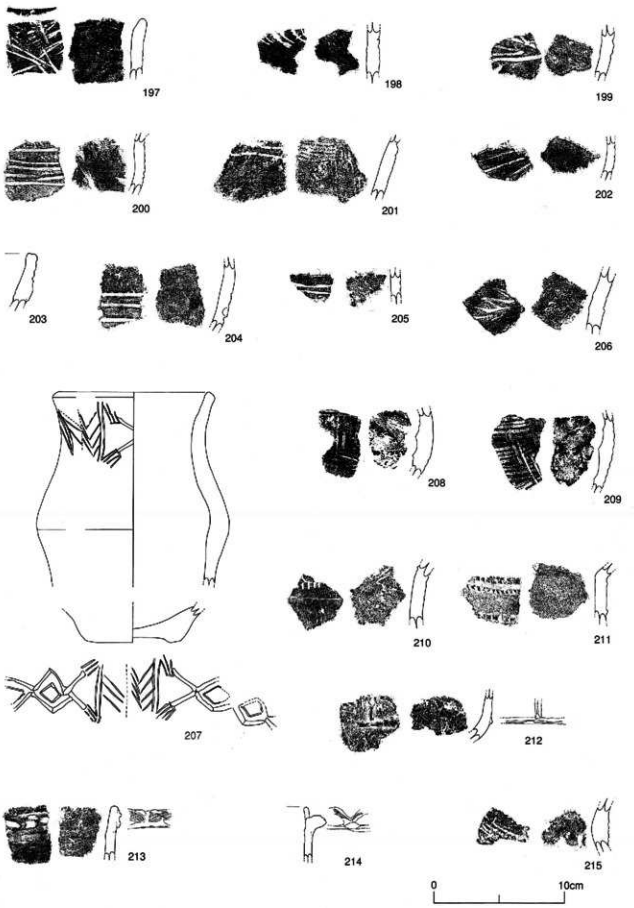
第34図　出土遺物実測図　土器（7）



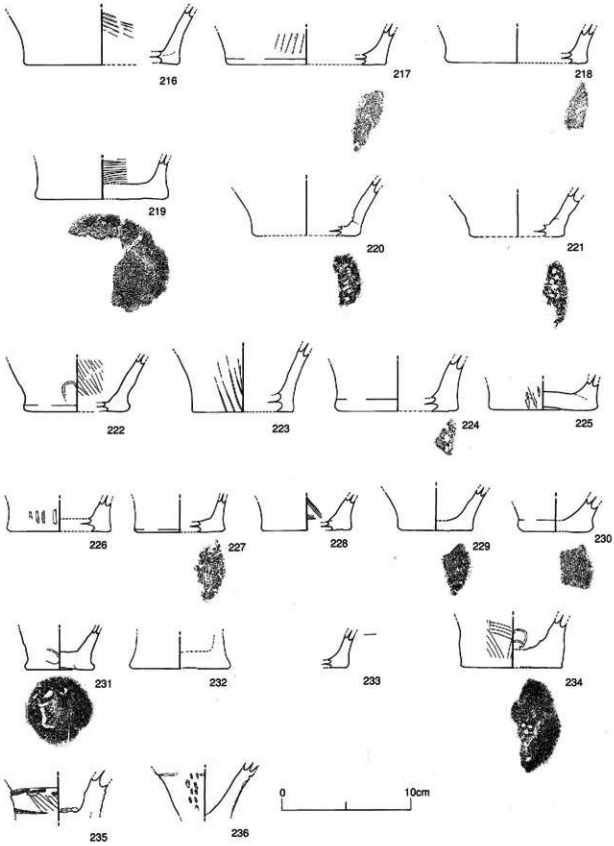
第35図　出土遺物実測図　土器（8）



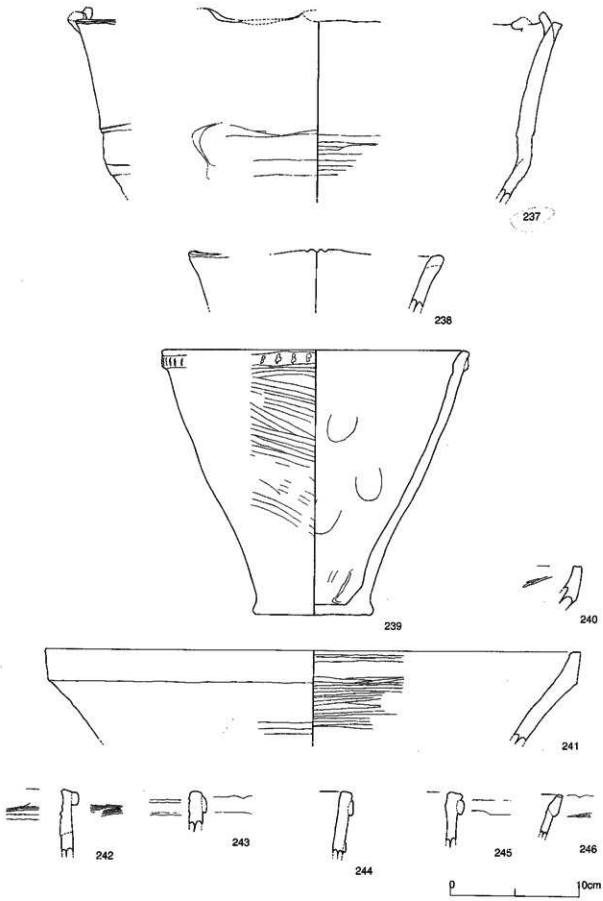
第36図　出土遺物実測図　土器（9）



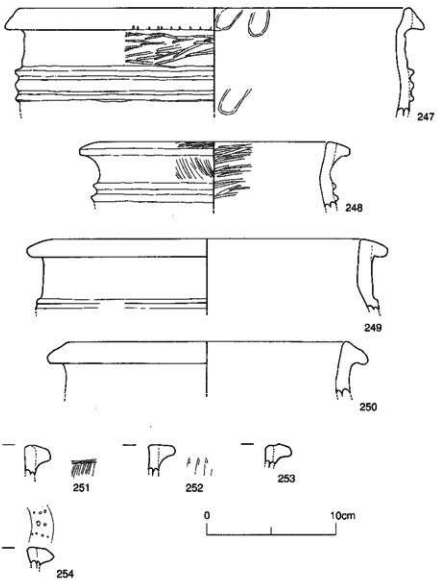
第37図　出土遺物実測図　土器（10）



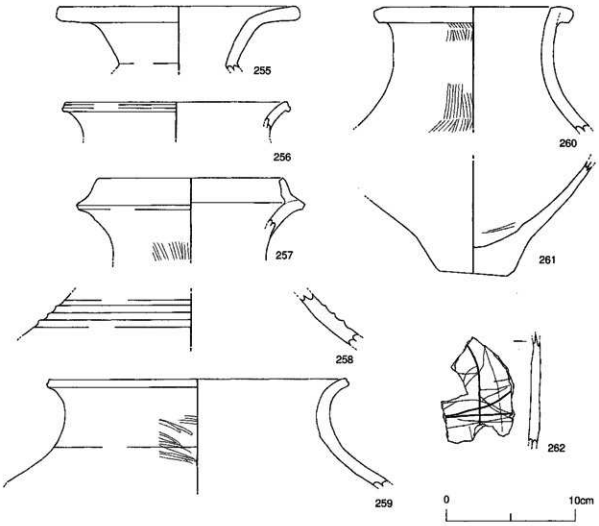
第38図　出土遺物実測図　土器（11）



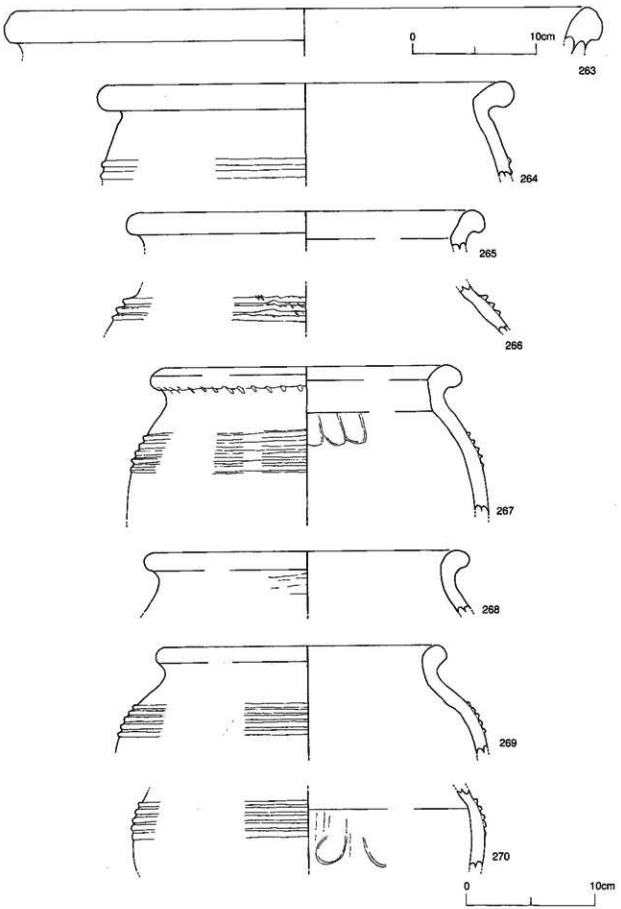
第39図　出土遺物実測図　土器（12）



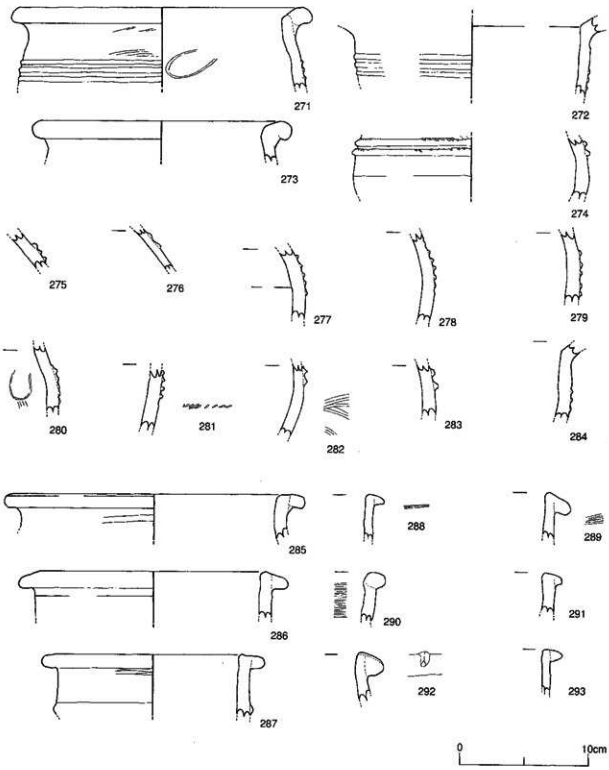
第40図　出土遺物実測図　土器（13）



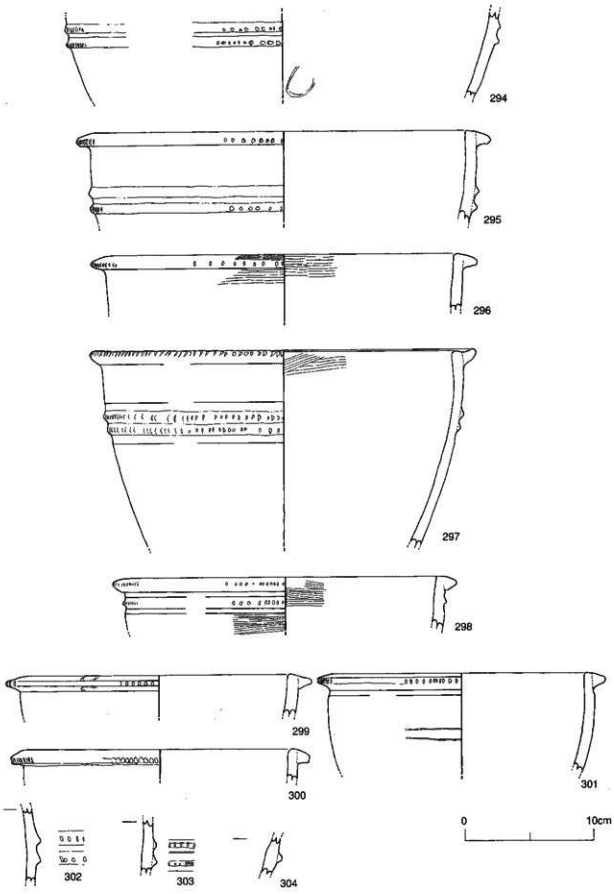
第41図　出土遺物実測図　土器（14）



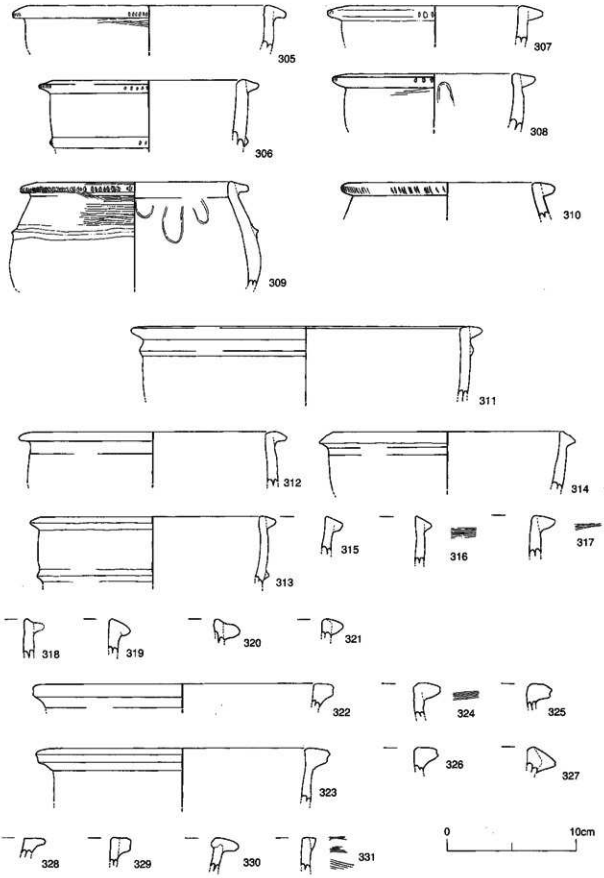
第42図　出土遺物実測図　土器（15）



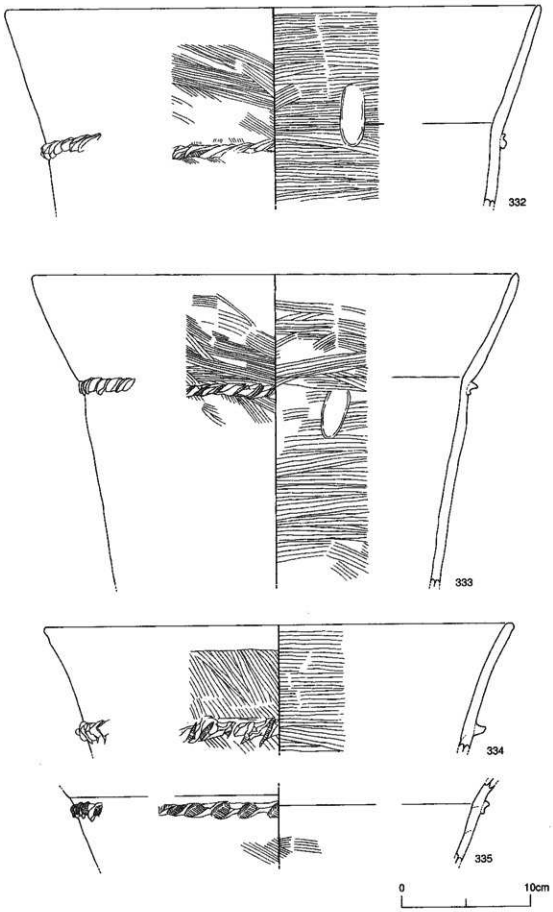
第43図　出土遺物実測図　土器（16）



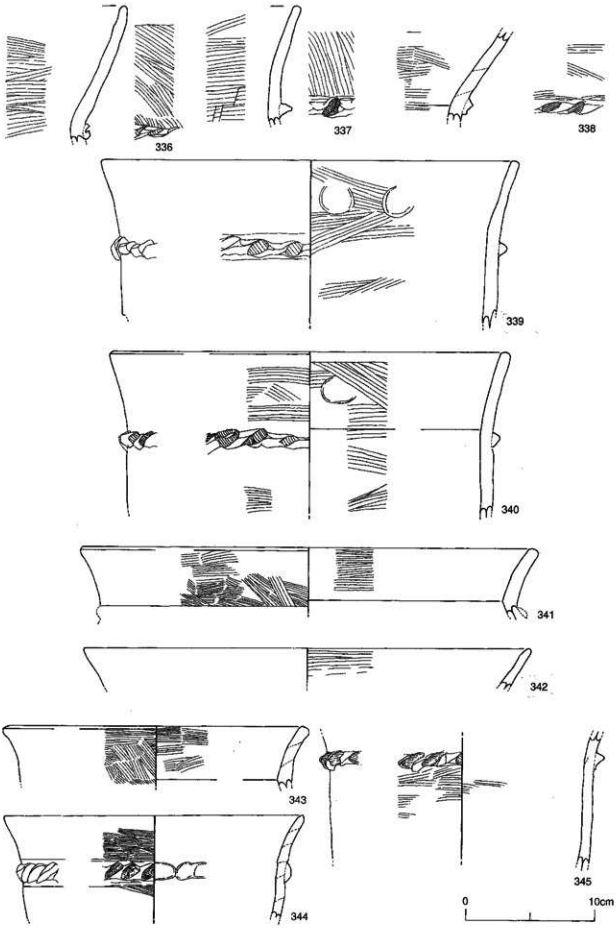
第44図　出土遺物実測図　土器（17）



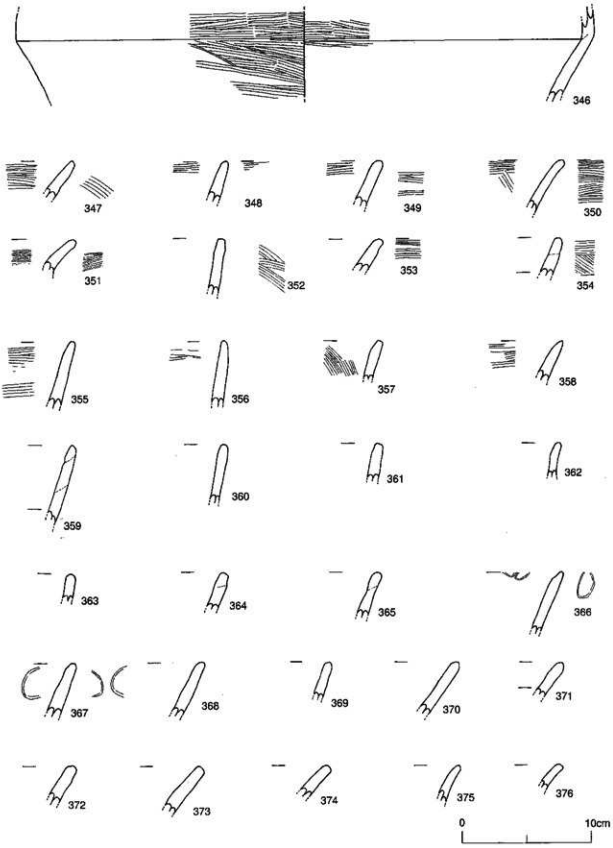
第45図　出土遺物実測図　土器（18）



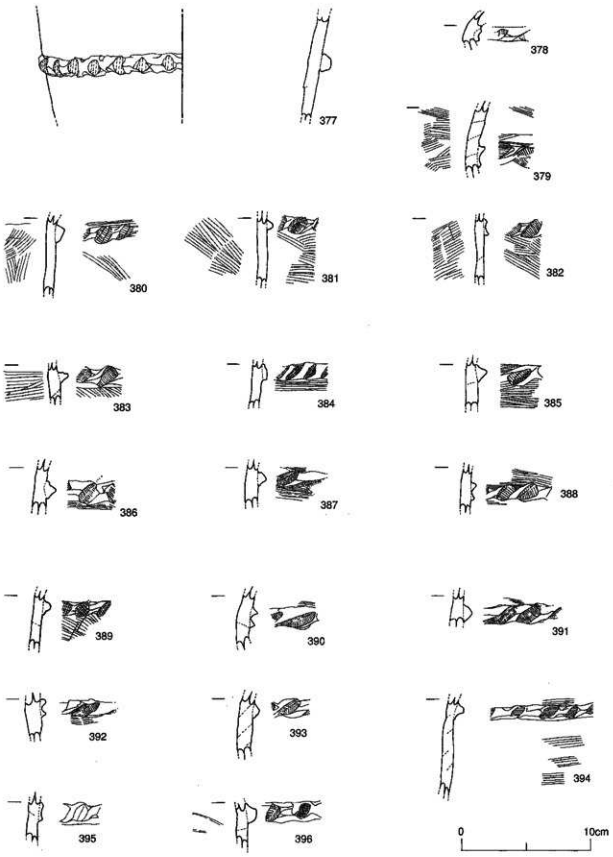
第46図　出土遺物実測図　土器（19）



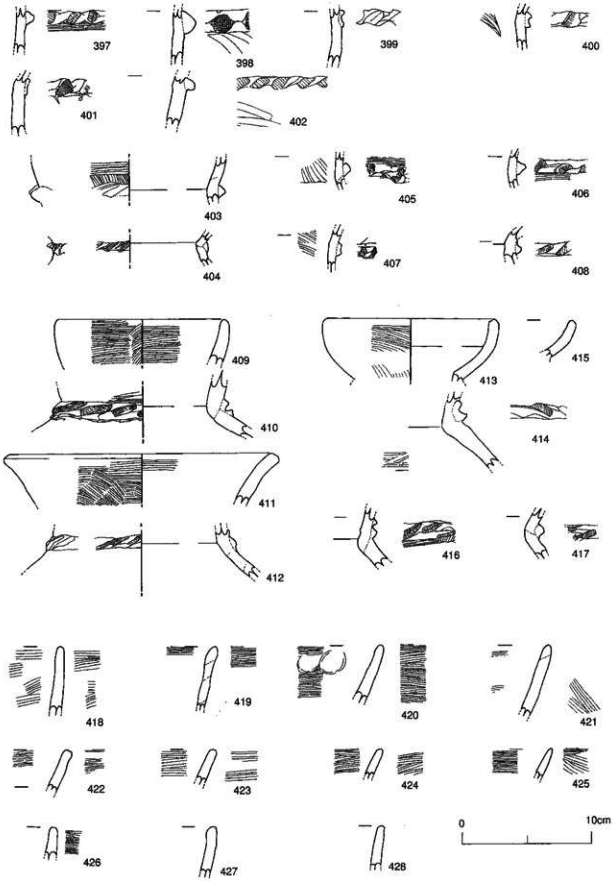
第47図　出土遺物実測図　土器（20）



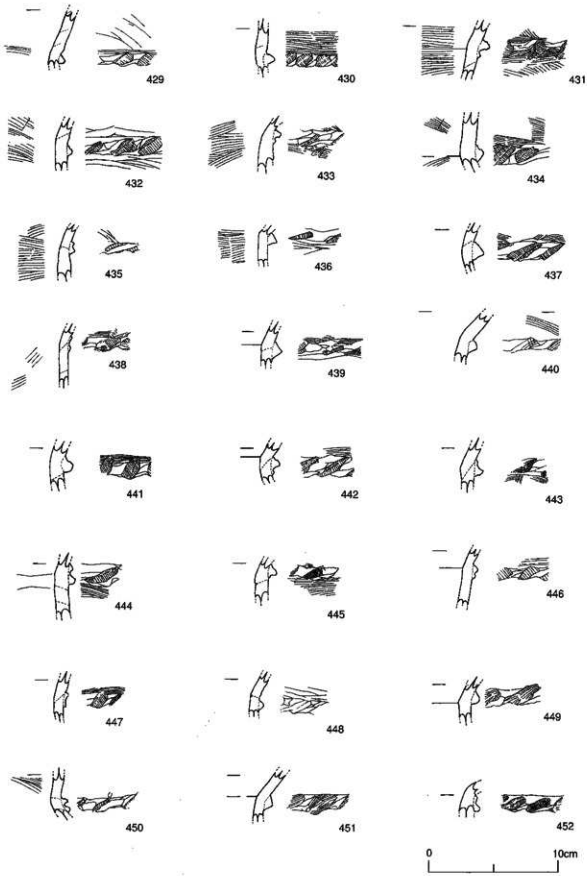
第48図　出土遺物実測図　土器（21）



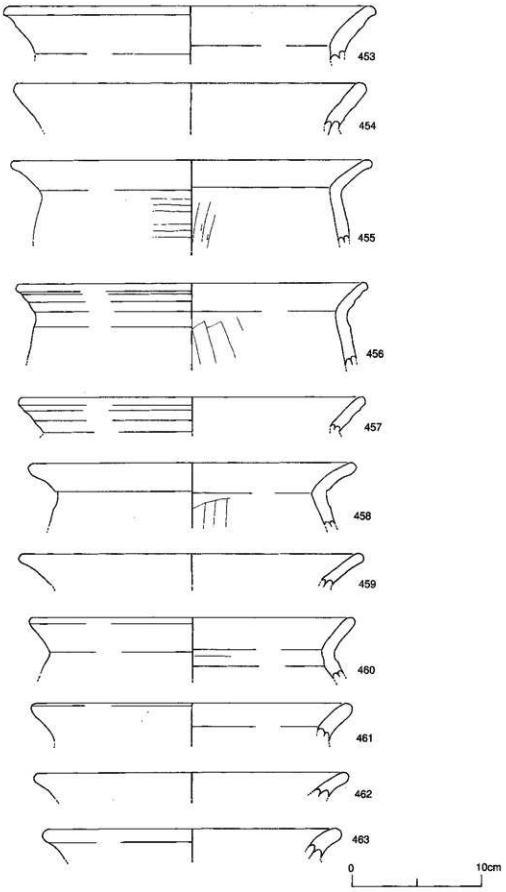
第49図　出土遺物実測図　土器（22）



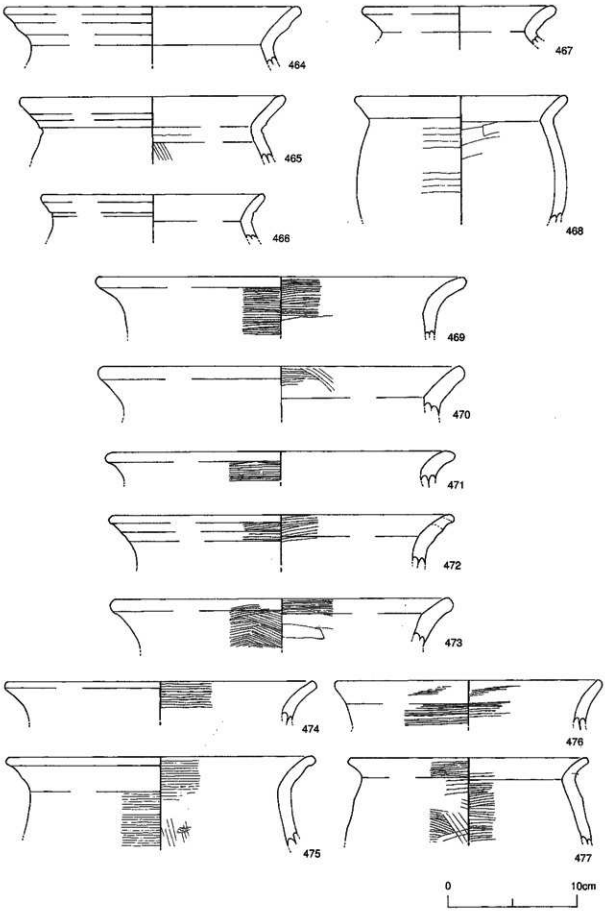
第50図　出土遺物実測図　土器（23）



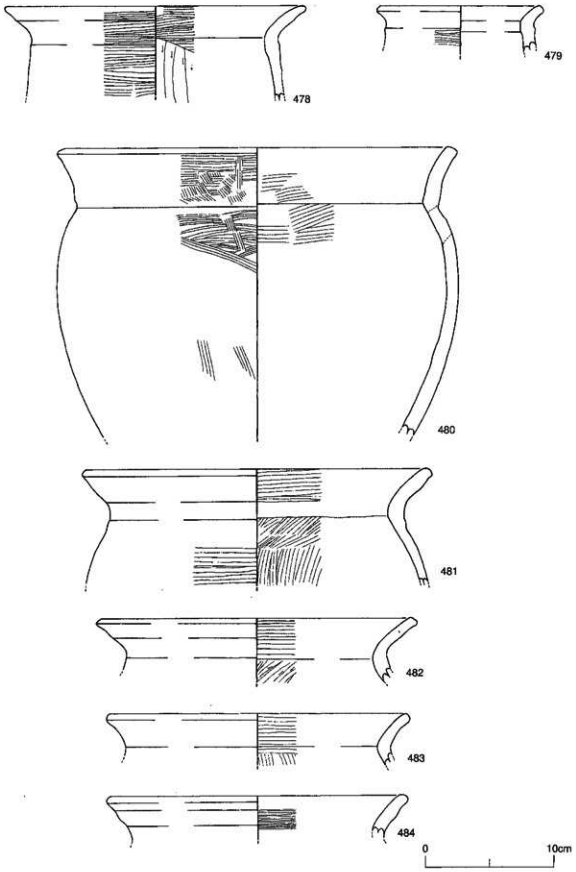
第51図　出土遺物実測図　土器（24）



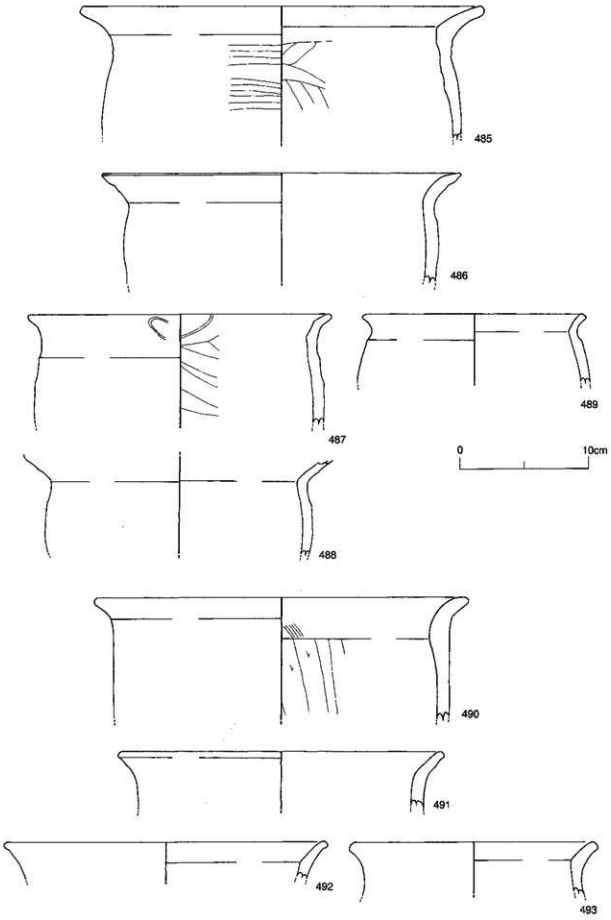
第52図　出土遺物実測図　土器（25）



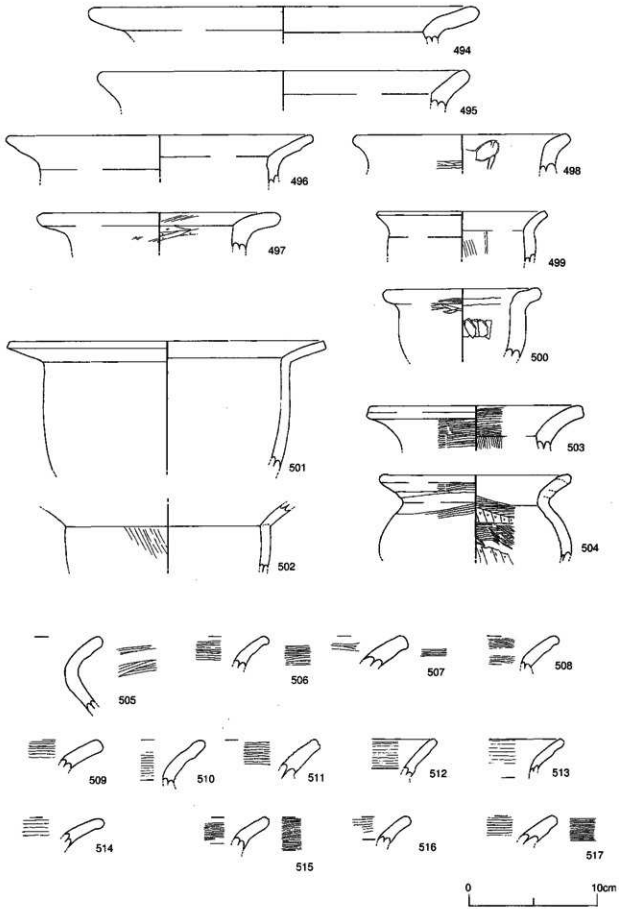
第53図　出土遺物実測図　土器（26）



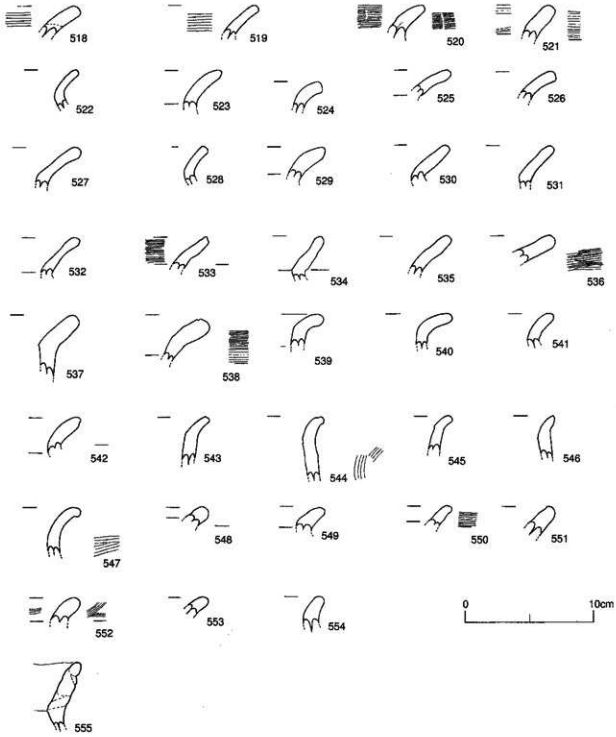
第54図　出土遺物実測図　土器（27）



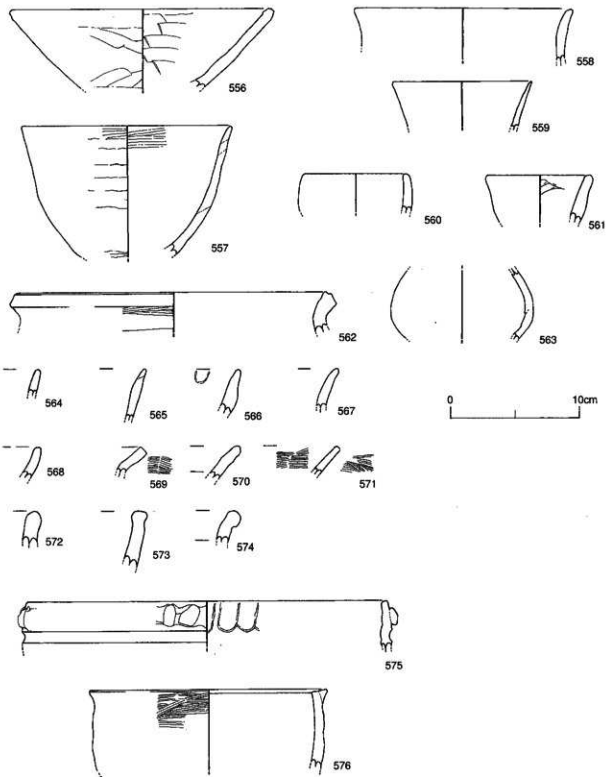
第55図　出土遺物実測図　土器（28）



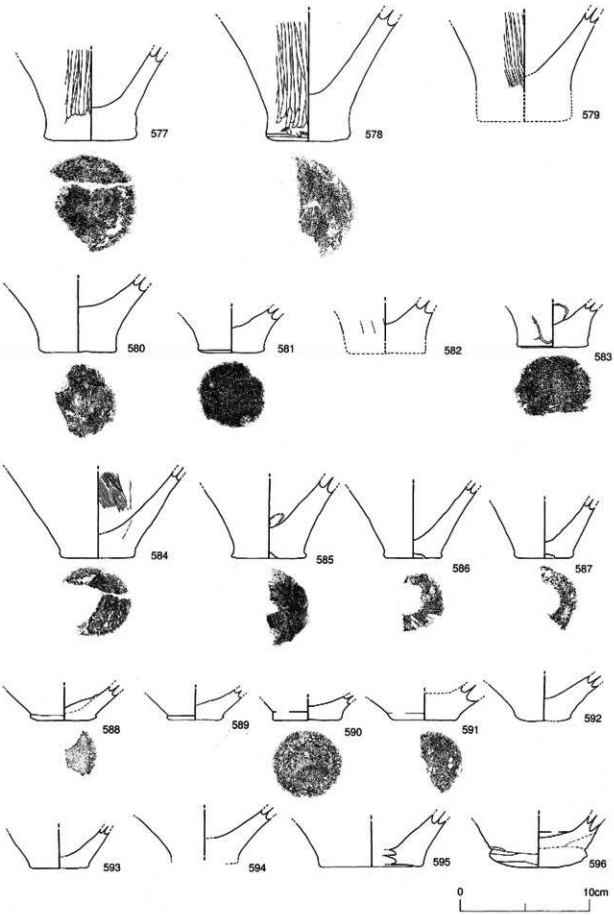
第56図　出土遺物実測図　土器（29）



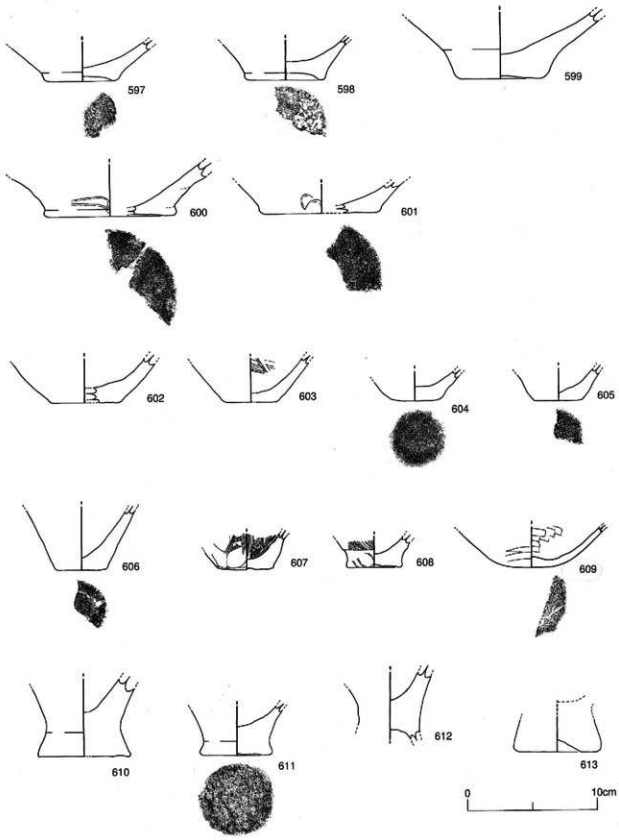
第57図　出土遺物実測図　土器（30）



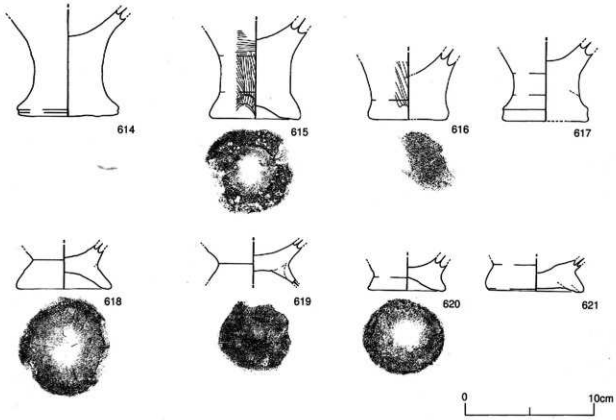
第58図　出土遺物実測図　土器（31）



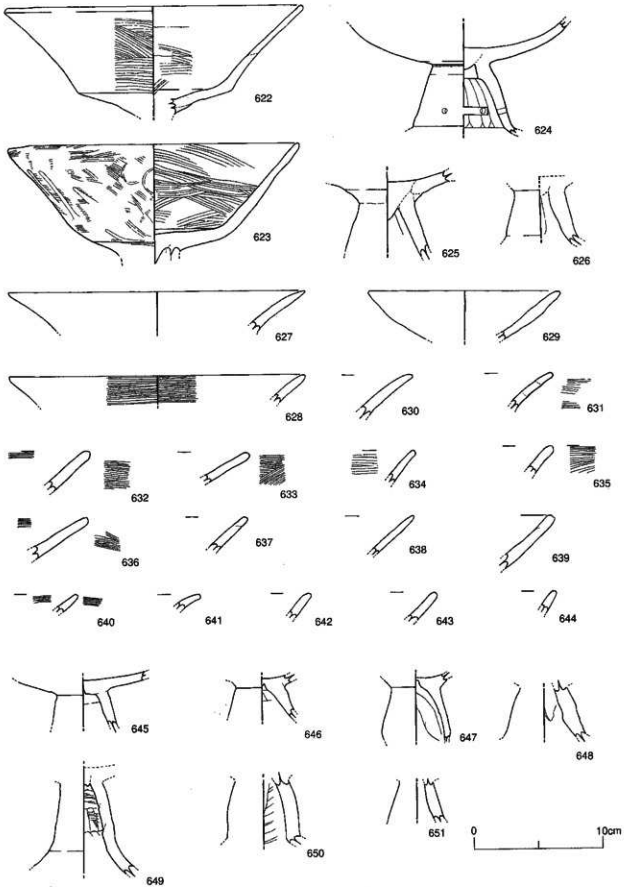
第59図　出土遺物実測図　土器（32）



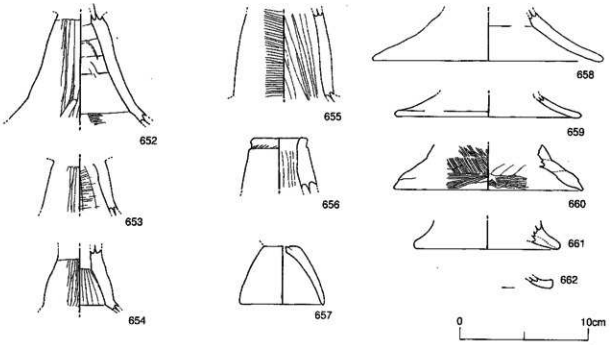
第60図　出土遺物実測図　土器（33）



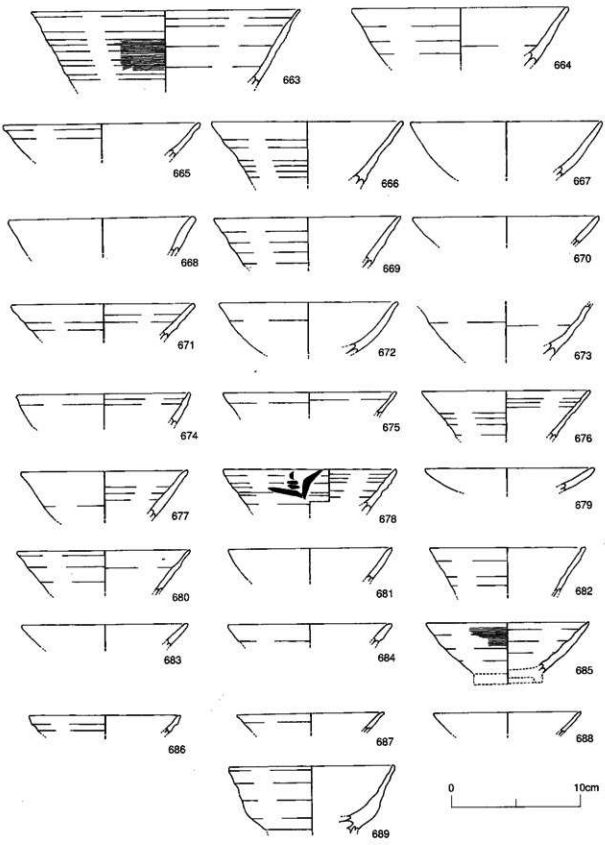
第61図　出土遺物実測図　土器（34）



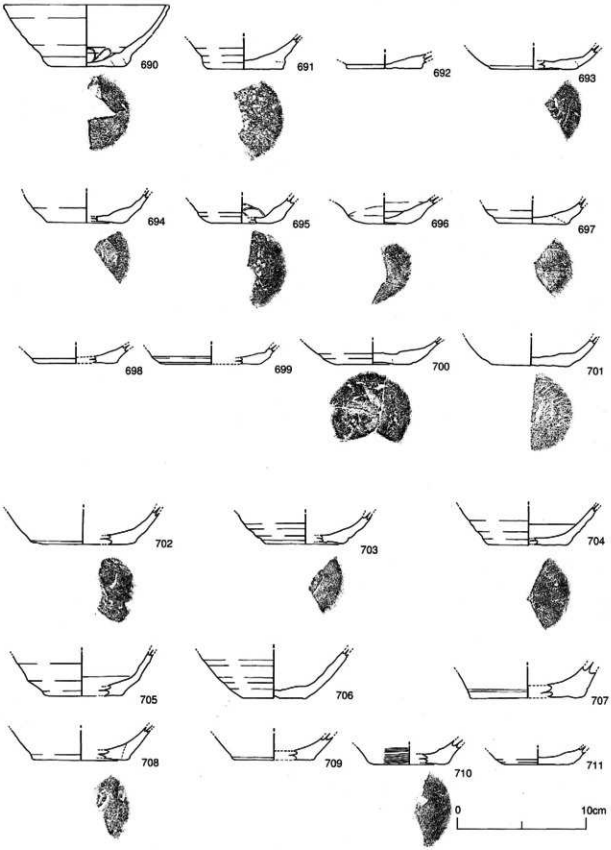
第62図　出土遺物実測図　土器（35）



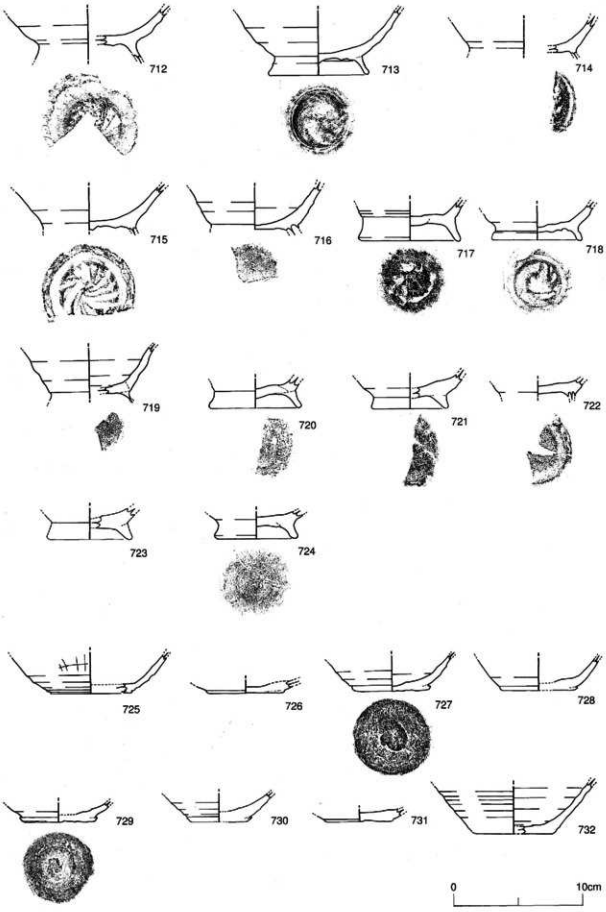
第63図　出土遺物実測図　土器（36）



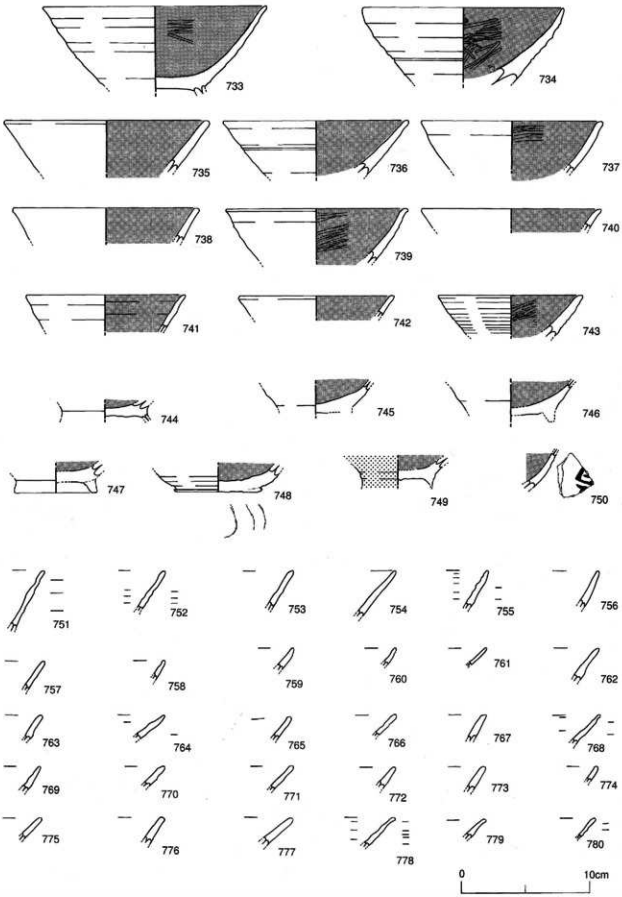
第64図　出土遺物実測図　土器（37）



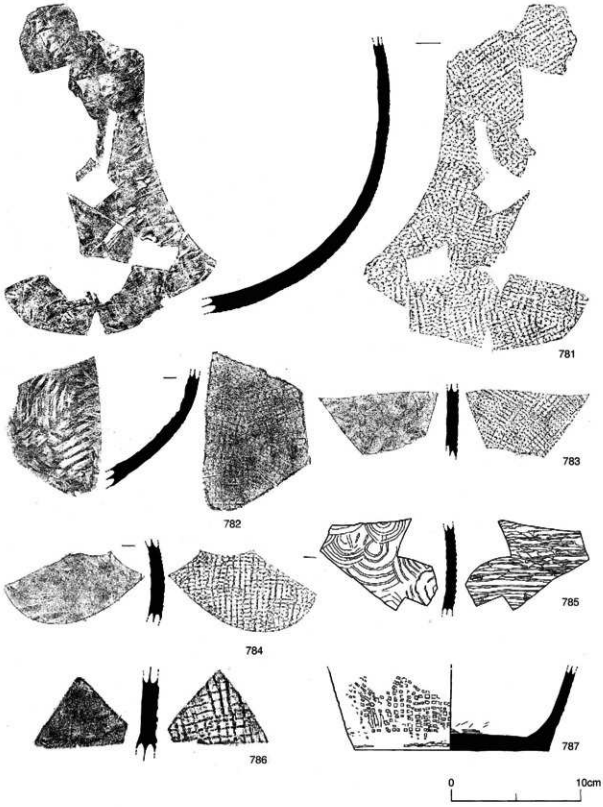
第65図　出土遺物実測図　土器（38）



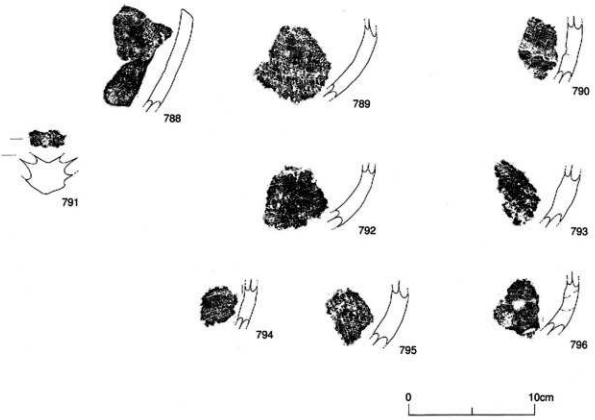
第66図　出土遺物実測図　土器（39）



第67図　出土遺物実測図　土器（40）



第68図　出土遺物実測図　土器（41）



第69図　出土遺物実測図　土器（42）

Ⅱ　石類（797～966、968）第70～84図

土器と並んで、遺物の50%近い量で検出された。大半は焼礫と黒曜石の剥片であった。

石器と思われるものは171点確認できた。検出された層は全て第Ⅱ層で、耕作土中からも表採された。出土分布は土器と同じく6区、7区が中心となる。組成は、石鏃、石匙、石錐、石斧、石錘、凹石、敲石、磨石、石皿、石庖丁、石核、使用痕と観察できる剥片、剥片、焼礫である。

打製石鏃（797～844）第70・71図

打製石鏃は48点確認できた。その内12点は未製品と思われる。法量は全体的に小型の製品が多く、1.0～2.5㎝を計るもので占める。

形状は、**A**　正三角形と**B**　二等辺三角形の2つに分かれる。B類は長さ:幅が3:2を占めている。例外は（823）である。断面形は剥離調整によって、中央部を盛り上げて、辺側を鋭角にしているものが多いが、平面形に辺側のみ鋭角に仕上げたものも見られる。

脚部から先端までの両側辺は、Ⅰ　微妙に内湾するもの、Ⅱ　直線的なもの、Ⅲ　外湾するものになる。Ⅳ　基部から内湾しながら立ち上がり、先端部近くで曲がり直線的になるものに分類できる。その他に側辺部を鋸歯状に剥離されたものがみられる。

形状の違いは脚部と基部でみられる。脚部は、**a**　先端を尖らせるもの、**b**　丸くするものになる。基部は残るもので、凹基式と、平基式がみられ、抉りが入らないものと入るものに分かれる。

磨製石鏃（845～852）第71図

磨製石鏃は12点確認でき、6点が完形品であった。未製品は2点図化できたが、二等辺三角形の平基式に形作った段階で、止めている。

完形品6点は、法量・形状がそれぞれが異なる。形状はA類とB類に分かれる。形状が残る4点から、長さ:幅は1:1と3:2を計る。基部は凹基式と平基式に分かれ、凹基式は緩やかな弧を描くように内側に入っていく。側辺部は基部から立ち上がりぎみに直行し、直ぐに内側に折れ、直線的に延びていく。そして先端部で再び折れて、矢先を鋭角に調整している。

法量は幅が1.4㎝、2.2㎝、2.9㎝の3つに大まかに分けられる。それに長さと幅の比率から最も大きいものと小さいものは3倍近い差がある。

調整は研磨によっておこなわれている。全体的に平坦に仕上げ、側辺部断面を鋭角に磨き上げている。中心から徐々に側辺に向かって緩やかなレンズ状になるものと、側辺部2㎜前から鋭角に磨かれているものがある。また基部は断面角形のまま仕上げたものと側辺部と同じように鋭角に磨かれたものがある。

石匙（856～866）第72・73図

石材の一部に抉りを入れて、つまみ部を作りだしている石器を集めた11点を「石匙」と分類し、図化した。つまみ部を上に置き、両側の抉りを軸として並べた。そのため刃部は主に縦方向になったものが多い。加工には縦長と横長の剥片を使用している。刃部は両面に加工を施すものや一面のみおこなったものや、剥離面をそのまま利用したものが見られる。

石錐（867～873）第74図

石材を縦長に加工し、その一端を鋭く仕上げた石器を7点集めて「石錐」として分類し、図化した。他の石器と異なり、（870、873）のように軟らかい石材を使用したものもある。形状は錐部を長くするもの（873）や短くするもの（869、870）が見られる。断面は平坦なものと丸いものに分かれる。断面丸型に対しては（871）のように石核と考えられるものが含まれる。

その他（875～877）第74図

その他分類分けに入らなかった3点をここにおいた。剥片には2次加工が見られる。主に石匙の一部と思えるが、確定できなかった。

石核（878）第75図

石核と思えるものは数点あった。図化された（878）以外は全て黒曜石である。剥離痕が見られない原石も確認できる。（878）は変成岩と思われる。変成岩の剥片は多く検出されたが、石器としてのもは少ない。（878）は石核の中で最も大きなもので、剥離面も最も多い。剥離面は6面体からなり、広い面が2面ある。広い面は細かく剥離された面とある程度大きく剥離された面に分かれている。部分的に原石の表面が残るため、原石から大きく変わるものではないと思われる。

石斧　第76・77図

第76・77図には石斧と思われるものを集めた。しかし混乱もあって曖昧なものも含まれている。ここでは訂正も含めて述べていきたい。

（883）は頭部に両面から打撃を加えて、撥り状の部位をつくっている。刃部にあたる部位も打撃が加えられ、尖ってはいない。使用によって潰れたのか不明。下方は調整しておらず自然面を残す。側辺の断面は楕円形となる。最大幅は打撃面と自然面の境界にあたり、中央付近になる。

（884）は両面に自然面を残す。表の面は研磨されたように滑らかな表面となる。刃部にあたる部位も剥離されているが尖ってはいない。側辺は表の面のみに剥離を加えて調整している。表の面左側が刃部の可能性もある。頭部は折れたような痕跡が見られ、撥り状の部位があった可能性があるが不明。全体的に粗雑に成形されている。

（885）は剥片に対して、刃部にあたる部位のみ2次加工をおこなっている。側辺は石核から剥離した段階で止めており、断面短冊型となる。右側は刃部成形後に剥離されたと思われる。表の面からの一方向からの剥離で、カンナ状となる。

（879、882）は敲打痕が観察される。ほぼ未加工である。（879）は敲打面から中心に沿って、切り目が観察される。

磨製石斧（886～891）第77図

表面に研磨部分が観察され、縦長の石材を利用した石器を磨製石斧とした。その中で（886、888、889）の3点は下部を薄くする刃部とする。大小の2つの法量がある。大小の長さの比は約2：1となる。（886）は最も法量の大きいものと思われる。石材が軟らかく、研磨の痕跡が観察されにくい。刃部は両面から研磨され、中央にそろった両刃となる。側辺の断面は厚みのあるレンズ状の形をして、全体的に刃部のような成形をしている。最大幅は下方の刃部となる。刃部から7.3㎝上まで内傾し、そこから立ち上がり頭部を小さくする。頭部も刃部のように先端を細くしている。長さ:最大幅:最大厚は7:3:1となる。

（888）は最も法量の小さいものと思われる。刃部は両面から研磨されて両刃となるが、やや一方に傾いているため、カンナ状になる。側辺の断面は一辺のみ鋭角に研磨された砲弾状となる。最大幅は下方刃部にあるが、最小幅の差は0.6㎝のみ計り、長方型に近い。長さ:最大幅:最大厚は5:3:2となる。

（889）は頭部を欠損している。法量は（886）に近いと思われ、同じく最大幅が刃部にくる。刃部は片刃状となる。

（890、891）は刃部にあたる部分が剥離している。研磨が見られるが自然石の状態に近い。側辺の断面は楕円状となり前者の3点とは様相が異なる。研磨部分があるということでここにおいたが、

(879、882) と同じく敲石と思われる。

以上主に縦長の石器を集めて「石斧」としていたが、その形状の違いに混乱をきたしている。ここで確実に石斧といえるものは、刃部の成形と見られるもので、その他は刃部と思われるものは欠損または無い。(884、885) は刃部の成形が見られるが、石核と剥片しか出土していない変成岩の石器の中で唯一2次加工が見られる2点である。その点を考えて製品となるのか不明である。(880、881) は欠損が多く不明。(887) は形状から磨製石斧に入ると思われる。(883、890、891) は形状は石斧に近いが、刃部が大きく欠けている。(879、882) は敲石になる。

その他 (892～894) 第78図

板状の薄い石材の周辺を打ち欠いて刃部を作りだしている。3点とも同じ軟らかく脆い石材を使用している。同じ原石が多数出土している。(894) は円盤状石器である。打製石斧と考えられている。(892、893) は (894) と同じ石材を使用しており、同じような打ち欠き方をしている。一部割れたような形をするため全体の形態は不明である。同じく打製石斧になると思われる。

石錘 (895～931) 第79図

石錘が37点出土している。その内切り目石錘が34点、打製石錘が3点となる。

切り目石錘は主に長短の差がある楕円形、円形、不定形の川原石を利用する。小さいものほど不定形の石を使用する傾向がある。切り目は基本的に長部両端に2本の切り目を入れている。中には (925) のように一端のみ切り込むものもある。石錘の横断面は1.0cm前後の薄い板状となるが、(927) のように厚みのあるものも検出された。長部の長さは2.1cm～7.8cmを計る。重さは2.7g～71.3gを計る。切り目は両面から、断面三角に切り込まれている。1～3回の切り痕が観察できる。切り込みは主に2.1cm前後の長さを計り、徐々に浅く細くなって消えていくように削られていく。中には (923) のように均一の切り目を入れるものや (921) のように切り込みの長さが0.5cmと短いものがある。また (915) には切り目以外に石の表面に擦痕が観察できるものがある。

打製石錘は前者と同じく長短のある石を使用する。やや粗雑な打ち方をする。両端が残るものは (930) のみで、最も長短差のある石を使用している。

以上2種類の石錘をみてきた。数量の点で、切り目石錘が多いことが第一の点といえる。

凹石 (933、934) 第80図

出土した凹石は、くぼみのある薄い石の広い面の部分に径2.5cm程度、深さ0.1cm程度の窪みが観察できる。

敲石 (879、882、932～963) 第80、81図

敲打による破損が観察できる石34点を敲石とした。大きく3種類の形に分けられる。

a類は長径12.0cm前後、短径8.0cm前後を計る楕円形と、直径8.0cm前後とする円形の石で、断面を長楕円とするもので集める。敲打痕は、主に側面に観察できる。側面左右対称4方に集中された敲打痕と、(936、937) のように側面一帯に敲打痕があるものが観察される。中には (932) のように側面に加え表裏面にも敲打痕があるものが観察される。

b類は長径6.0cm前後、短径4.0cm前後を計る楕円形から直径5.0cm前後を計る円形の石を使用する。断面直径4.0cm前後の円形となり、いわゆる卵型となる。6～7区から断面直径2.0～10.0cmのこのタイプの石が200点近く出土している。敲打痕が観察できたのはその内の1/8程度である。a類と同じように数カ所に集中されたものと多面にわたるものが観察できる。全体的に後者が多い。(945) は特に敲打痕が多く観察された。そして表面全体が熱を受けて赤変している。

c類は棒状の石を使用する。10.0cm前後の長さを計る。両頂部に敲打痕が観察できる。(879) もこ

の類に入る。

以上敲石を3類に分けてみた。a類とb類は主に大小で分かれる。b類の型でも10.0㎝以上を計る石が多数あったが、敲打痕は観察されなかった。また（945）以外にも熱を受けたものはみられ、（942）は熱によって破損している。

石皿（964、965）第82図

石皿及び大石は20点近く検出されている。石の大きさは30.0～50.0㎝を計る。図化した2点は砂粒質で脆く崩れやすい。そのために顕著に凹部ができあがっている。その他図化できなかったが、平板形をした大型の石はいずれも石皿になると思われる。安山岩質の硬質の石類で明確な凹部は無いが擦痕等が観察できる。

礫

石類の90％近い量で確認された。遺物中最も多く掘り起こされたものである。自然石が主である。主な石は熱を受けており、大部分が一回以上割れていた。敲打によってではなく熱によって割れたものと思われる。割れてない自然石300点を統計に取ると、20～1500ｇの重さで、平均密度3.0kg/を計る。拳大の大きさで、200ｇ前後が最も多い。最も大きな河原石は土壙7—1の石1（第図）で、10kg近い重さと思われる。

焼礫の出土状況は土器と同じく包含の形で出土した。集石状で出土した礫はない。また割れ石の接合は土壙7—1の石1と4の一部、そして他1点の計3点見つかり、当地で割れた石があることも確認できた。

石庖丁（966）第84図

当遺跡で石庖丁が1点出土した。左右と断面の半分が欠損しており残存状況は悪い。残存の片面から2つの研磨による紐孔と表面の研ぎ跡が観察される。

土錘（967）

土錘が1点のみ出土している。同じ漁猟用具と考えられる石錘に対して少ない。

不明（968）

用途不明の石器を1点図化した。細長い棒状の石材の一部で尖端部を打ち欠かれた跡が見える。

五輪塔（969）第85図

当遺跡の第3区に、以前から畑の横に放置されていたという石塔である。空風輪のみ残っている。加工しやすい凝灰岩を使用しているため、表面が摩滅して形が崩れている。断面の半分が失われている。高さ32㎝、幅20㎝を計る。空輪部の頂部を尖端に延ばし、丸みを帯びて下方に下がっていく。最大径は中央に位置する。下の風輪部は円柱の形をする。摩滅しているため詳細は不明だが、やや丸味を帯びているものと思われる。水輪との接合部は、同じく円柱形をしているが、接合部先端の口径は幹部の口径より小さい台形の形をする。

古銭（974～977）第85図

古銭が6点第6区から出土している。銅銭が4点、鉄銭が3点（不明1点）、そして近代以降の貨幣が3点である。銅銭と鉄銭は第Ⅱ層から黒色土層の最上層の間で検出されている。鉄銭は錆が激しく図化できなかった。

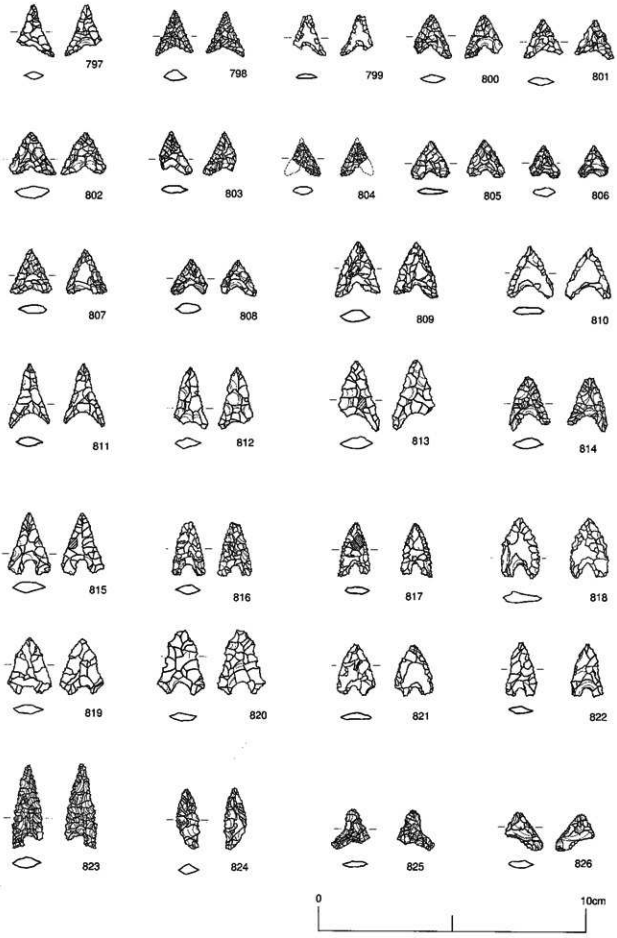
銅銭は「洪武通寶」(974、976) の2点、「永楽通寶」(975) の1点、そして「寛永通寶」(977) の1点である。裏面の…文字は判読不明である。最も状態の良好なのは (974) で、状態の悪いものは (975) の永楽通寶で厚さが0.5㎜程度に薄くなっている。「永」の字が辛うじて浮かび上がっていた。

鉄銭は「仙臺通寶」と思われる。腐食が激しく、判読は出土直後の腐食が進行する前に辛うじて一部可能だった。図面は図版のみである。この古銭は1　鉄製である、2　形態が角の丸い長方形をする、3「臺」が判読できたこと、の3点から判断している。

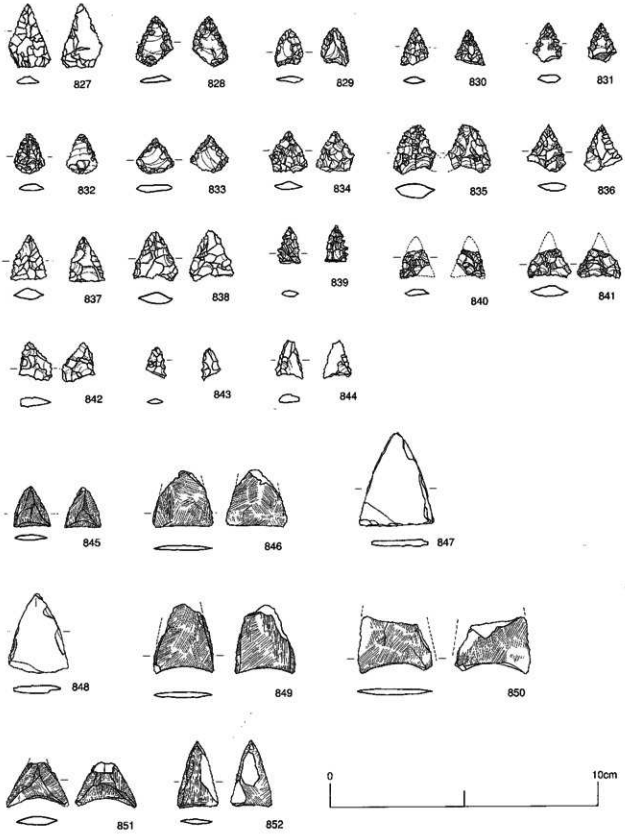
その他近代以降の貨幣として、大正、昭和の五銭と半銭が、取り出されている。

キセル (971～973) 第85図

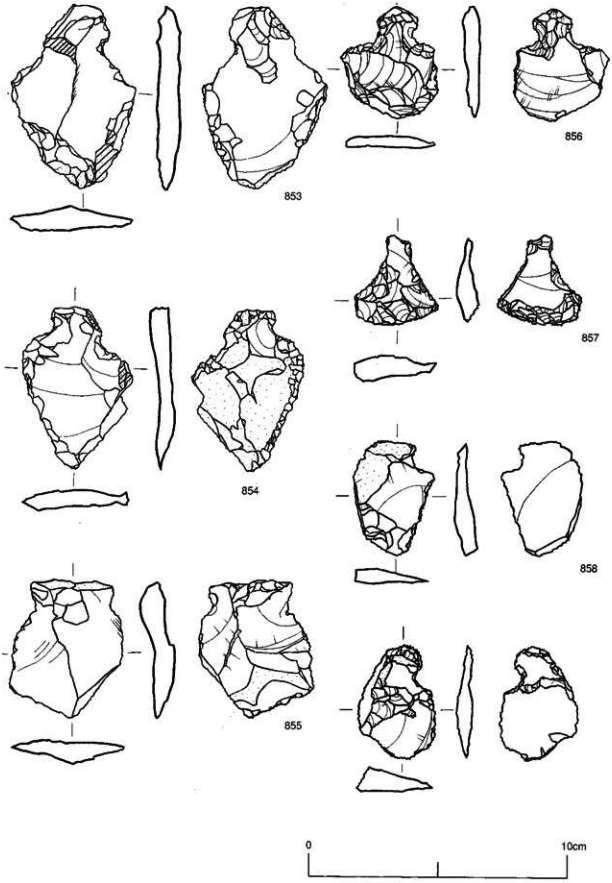
銅製のキセルが3点出土している。先の部分の煙管でそれぞれ欠損している。(971) は腐食による欠損で、(972、973) は破損によるものと思われる。盛土や第Ⅱ層から検出されている。(979) は第6区のイモ穴内から検出された。銅版を丸めて溶接しているが、溶接部を上に向けるものと正面右に向けるものに分ける。



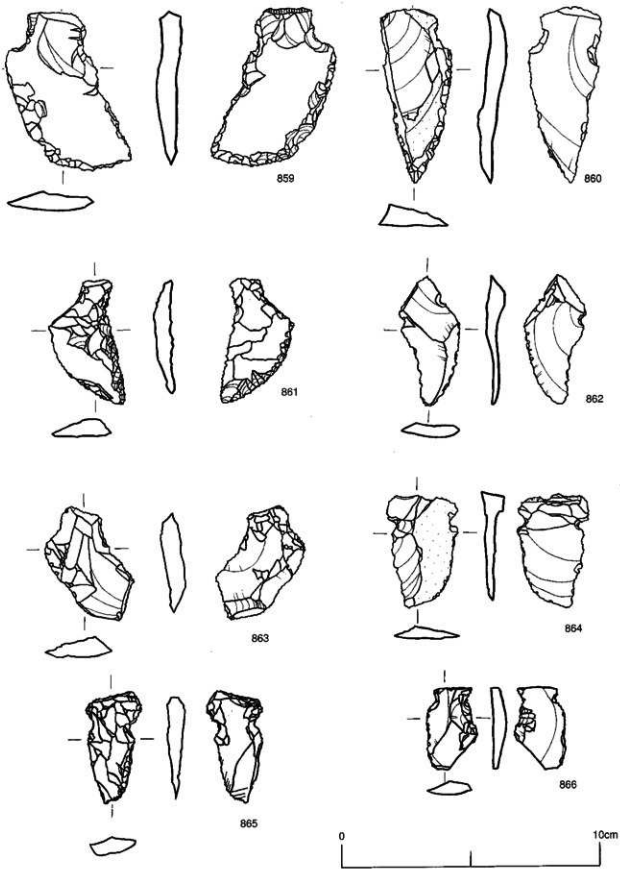
第70図　出土遺物実測図　石器（1）



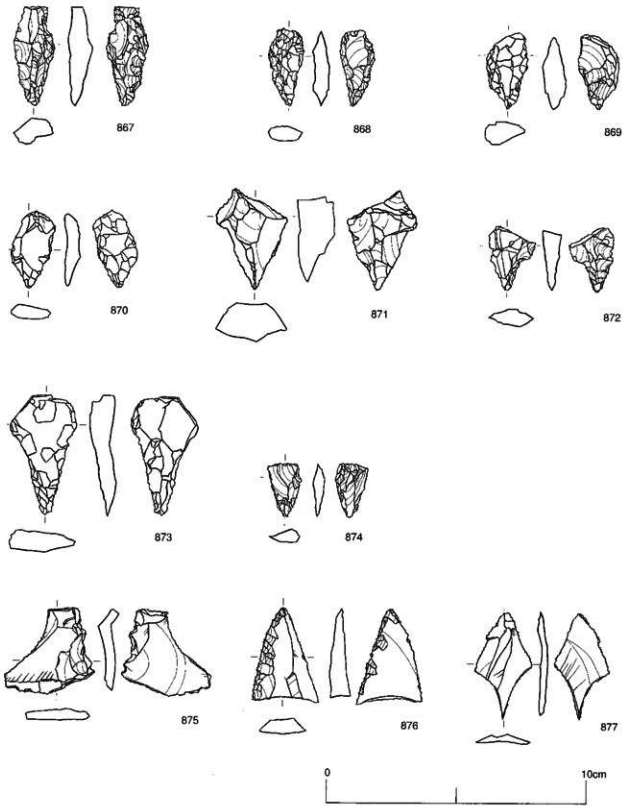
第71図　出土遺物実測図　石器（2）



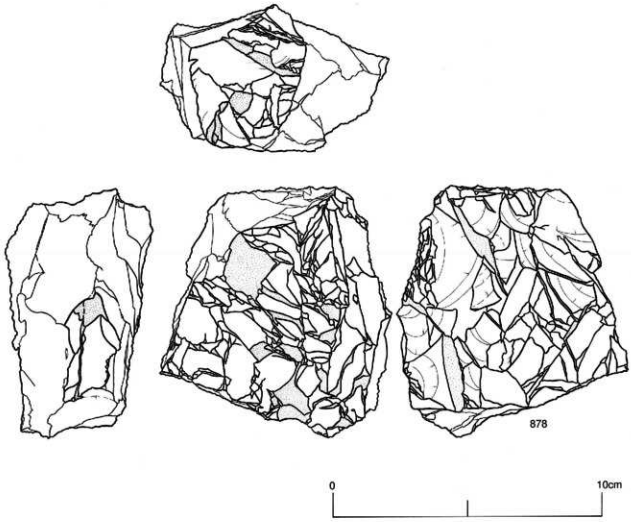
第72図　出土遺物実測図　石器（3）



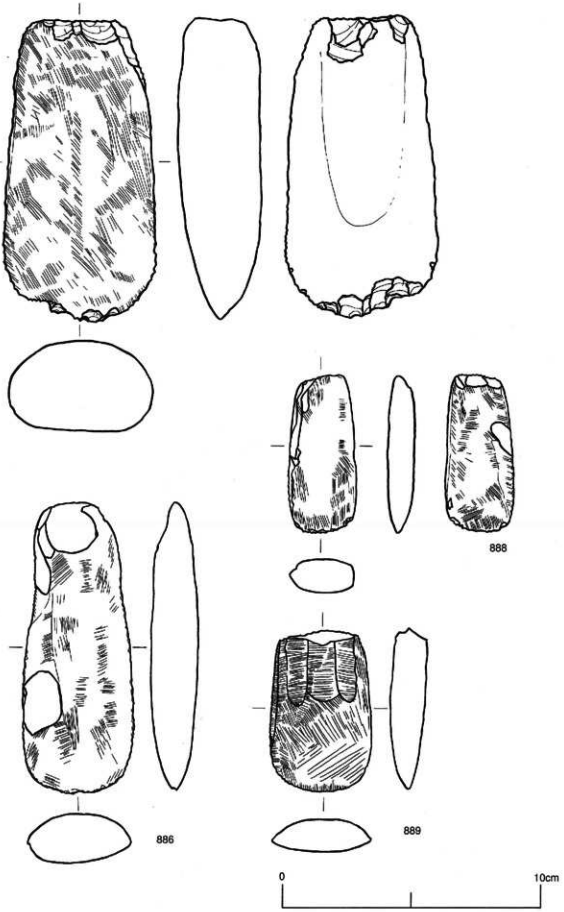
第73図　出土遺物実測図　石器（4）



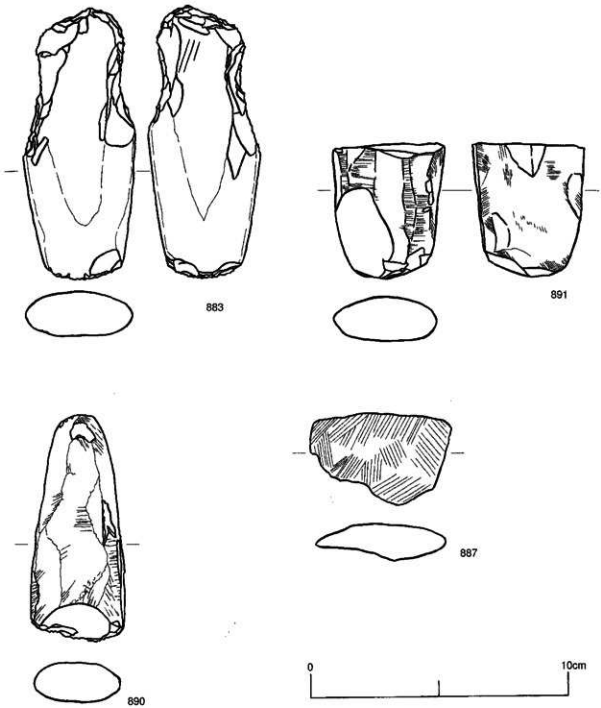
第74図　出土遺物実測図　石器（4）



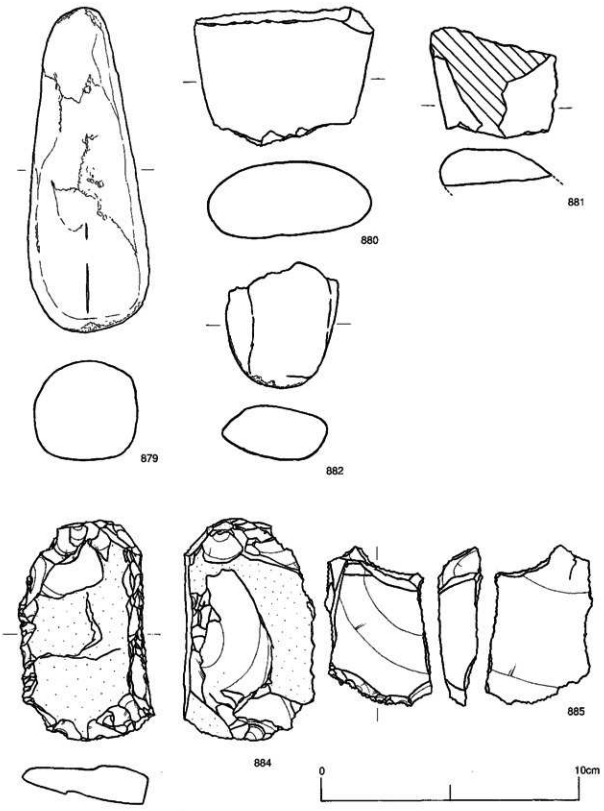
第75図　出土遺物実測図　石器（6）



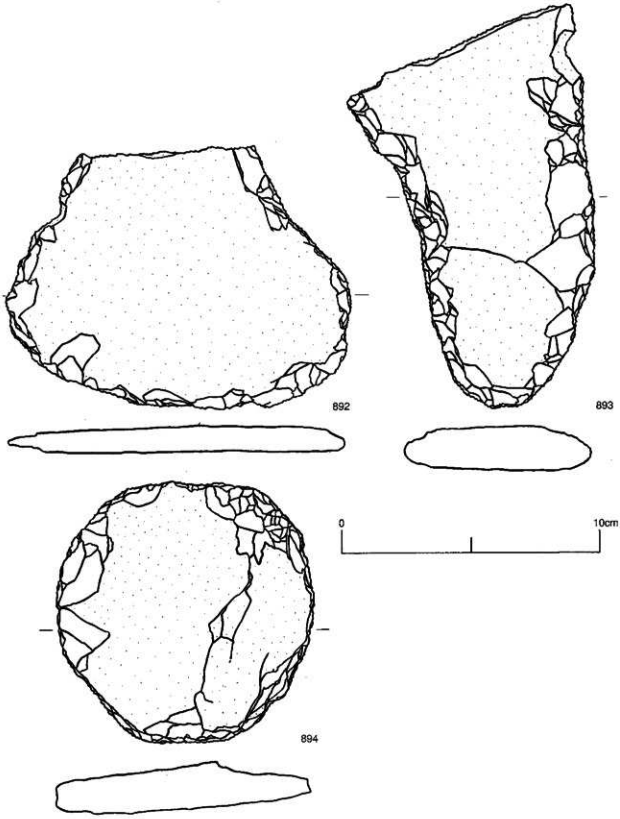
第76図　出土遺物実測図　石器（7）



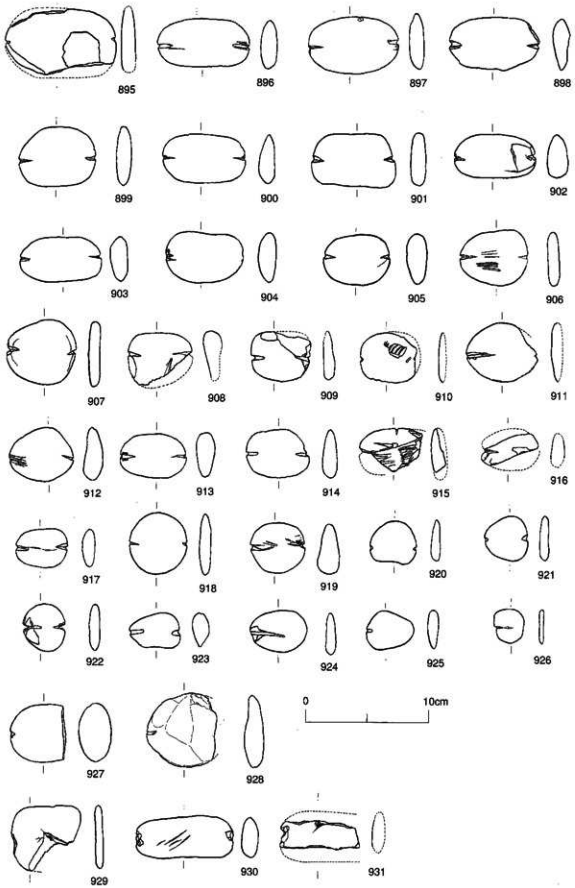
第77図　出土遺物実測図　石器（8）



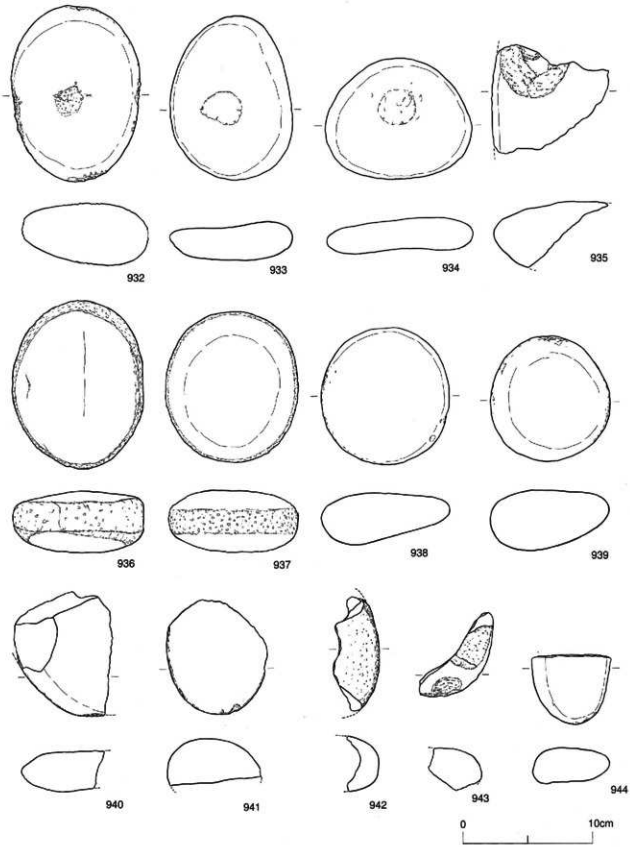
第78図　出土遺物実測図　石器（9）



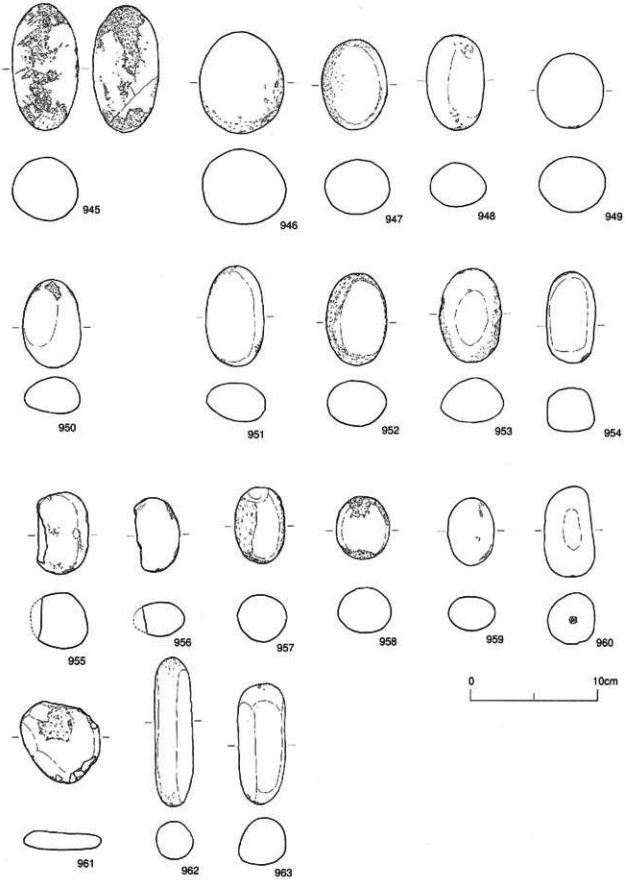
第79図　出土遺物実測図　石器（10）



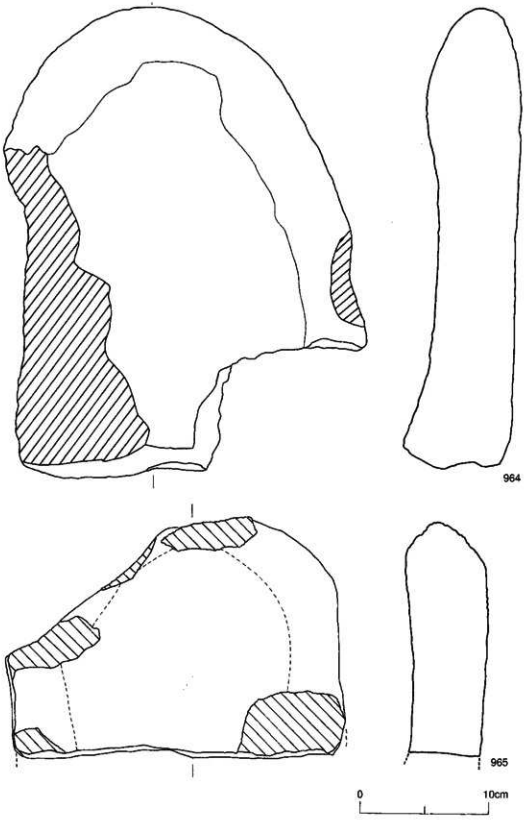
第80図　出土遺物実測図　石器（11）



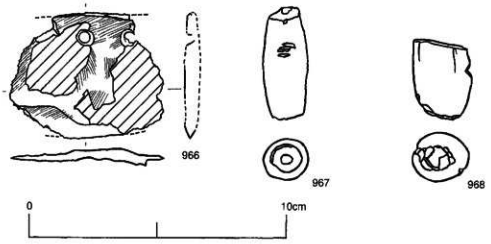
第81図　出土遺物実測図　石器（12）



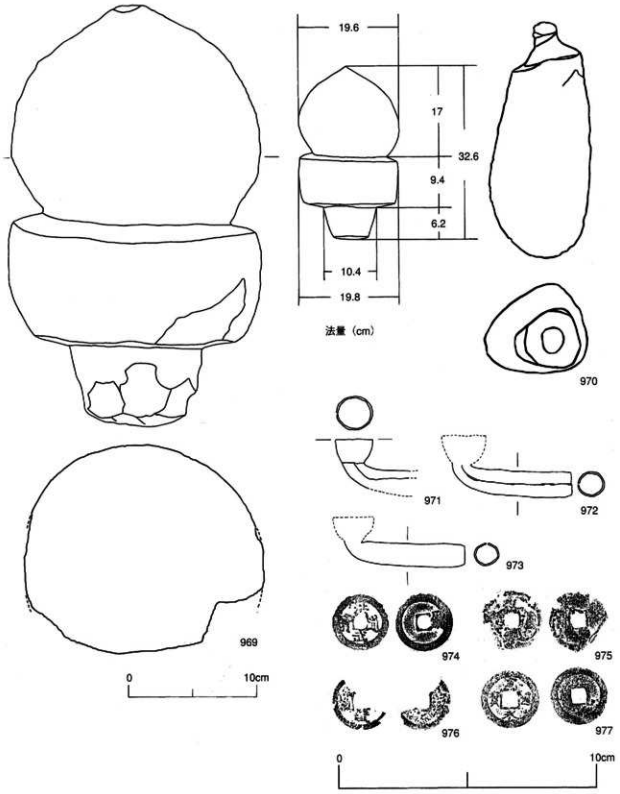
第82図　出土遺物実測図　石器（13）



第83図　出土遺物実測図　石器（14）



第84図　出土遺物実測図　石器（15）



第85図　出土遺物実測図　石器（16）貨幣、キセル

ま と め

これまでおこなった観察をある程度の整理をして、前記の追記を兼ねて若干の考察を試みてまとめにしたいと思う。

梅木原遺跡出土の土器について

梅木原遺跡(以下梅木原)の調査は約1m堆積する第Ⅲ層の黒色土に含まれる遺物の採集を中心におこなわれた。調査の性格上、縄文前期から古代まで一括した採集となった。土器の破片化がはげしく、復元径が出たものは土に大型になる。細かい断面図を呈示することによって残存状態の良い資料だけを選別することを避け、多種の器形と法量があることを示すことに努めた。挿図の編集は形の分類をおこなうを最優先とした。その結果、時間を軸とした考慮できなかったことを了承してもらいたい。ここでは観察のまとめとともに、時期を考えてみたい。

縄文時代の土器は前期から晩期まで確認される。その中で第Ⅳ層下からでる早期の押型文土器(134～136)が数点確認できた。

最も多く出土した縄文土器片は、前期の曽畑式土器(1～133)であった。ただし個体数からいえば、多いとはいえない。梅木原出土の曽畑式土器には胎土に滑石は混入されていなかった。曽畑式土器が出土した遺跡で、最も近い所で柿川内第Ⅰ遺跡がある。「南九州における曽畑式土器群の動態とその背景」(桑畑光博『鹿大考古』第6号)には、Ⅱ期の場所に柿川内第Ⅰ遺跡が明記されている。

その他の形式はいずれも数点であった。縄文土器においては前期から晩期に至るまで満遍なく資料が、確認されていることが今回の成果と言えよう。曽畑式土器はこれまでの発掘調査において西諸県郡で類例を増やしてきている。早い発掘例では「本田遺跡」(『宮崎県史』考古1)や「平木場遺跡」(『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(一)』宮崎県教育委員会 1973)、そして「柿川内遺跡」で確認され、近年の例では「内屋敷遺跡」(宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集 1999年)や「上長谷遺跡」においても出土が確認されている。梅木原における曽畑式土器は後半にあたる。前期においてはその他に野久尾式土器が指摘される。

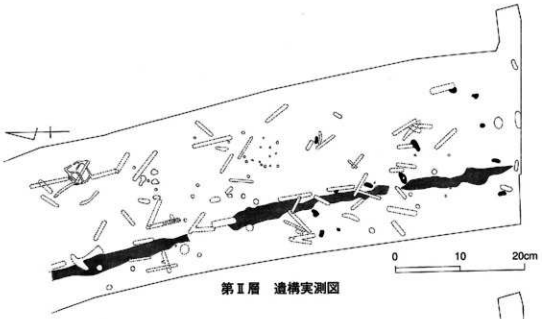
中期では前期から一時期おいて後半の春日式土器轟木ヶ迫段階から見られる。そして尾田Ⅲ式土器(144)から大平式土器(153)、阿高式土器(192)と分かれ、阿高式から岩崎式土器、そして出水式土器に続いて後期に入ると指摘された。その中で尾田Ⅲ式については特に在地化の傾向が強いと指摘を受けた。

後期も中期と同じく一時期おいてから見られる。丸尾式土器、納曽式土器、辛川式土器から始まる。そして西平式土器(160～166)、三万田式土器(167～171)が指摘される。

晩期の土器には刻み目突帯文土器(239)が確認された。

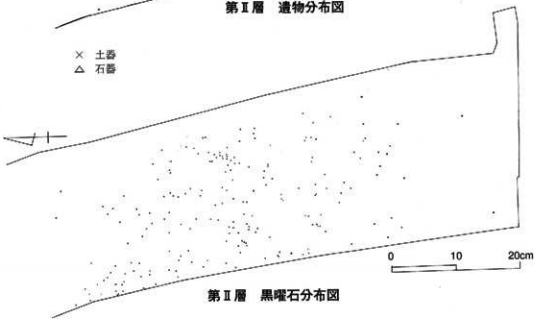
その他に網代の型をもつ底部が2点今回出土した。以上の形式名は、早期の押型文土器や前期の曽畑式土器、そして後期の西平式土器、三万田式土器等の典型例を除くと小林市においてはほとんど確認されていない。

弥生時代から古墳時代にかけての土器は主に甕、壺、高杯が出土し、その中で甕類が最も多い。甕類は主に突帯付きと無しの2種に分かれる。そしてさらに突帯付きはⅡa、Ⅱb、Ⅱcと3つに分けることができるが、基本的にⅡa、bとⅡcの2系統になると思われる。突帯は縄文晩期の刻目突帯から土師器まで幅広く見られるため、第Ⅲ層一括資料となる梅木原の突帯付の土器は、これまでの資



第Ⅱ層　遺構実測図

第Ⅱ層　遺物分布図



第Ⅱ層　黒曜石分布図

第86図　第Ⅱ層平面図（1／600）

料に頼る所が大きい。

宮崎県下の弥生時代は研究が始まりだしたころは前・中・後期３区分に大別され、近年では『宮崎考古第９号』ではさらに終末期を加え11期に細分されている。ここでは大まかに３区分で分けて、それぞれ前半・後半でみてみたい。口縁部や胴部の貼付け突帯は主に下城式土器や亀ノ甲式土器に見られ、県下では弥生時代前期後半頃から後期前半頃まで見られる。前期後半に口縁部や胴部に一条から二条の断面を三角形となる突帯を有した土器が現れる。突帯には刻目を持つものや持たないものがある。中期に盛行し、突帯の肥大化や多条化されたものが分化する。後期に再び一条から二条の断面三角形のみに戻り、後期中頃から多様化して消えていくものとおもわれる。梅木原ではⅡｂ類が最も近い形態となる。そして多条化や口縁部突帯の肥大化されたものが見られることから、Ⅱｂ類からⅡａ類にかけては弥生時代中期頃の土器と位置付けたい。

後期は土器の形態が多様化していく。瀬戸内系の搬入のように、外からの流れがみられる。また複合口縁部が現れ、頸部や体部に多重突帯が見られる。線刻土器もこの頃現れ、土器の装飾化が強まる。この時期に大萩遺跡では土壙墓に土器の副葬が見られる。梅木原では複合口縁部１点、線刻土器片１点確認される。

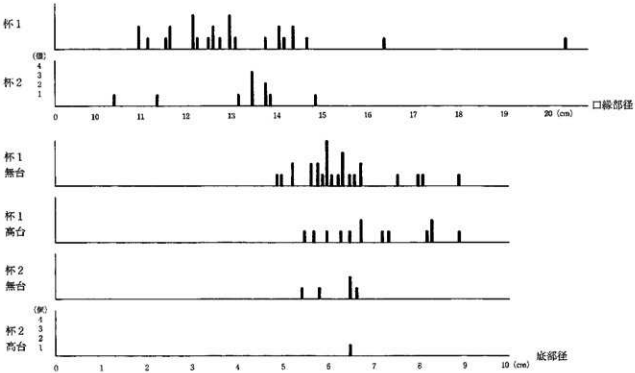
弥生式土器の伝統を引き継ぐ素焼きの土器が土師器として古墳時代には登場する。しかし県下では形態や手法もまた引き継ぐものと思われる。明確に時期を示唆するものと供伴しなければ古墳時代の土器を推定することは不可能と思われる。その意味では梅木原における古墳時代の遺物を確認することはできない。

梅木原では突帯付の土器に対して、突帯のない「ク」の字型に曲がる土器が多数出土している。個体数からいえば、最も多い出土数となる。歪みある粗雑な作りが多いが、口縁部は全体的に外反している。一括してⅢ類に分類している。「ク」の字型は、弥生時代後期に現れる。突帯をもつ「ク」の字型口縁部をする中溝式土器もこの頃現れるが梅木原では「ク」の字型口縁と突帯は接合できなかった。梅木原の「ク」の字型土器の調整は、大半が以下の通りだった。外面では口縁部を横ハケ又はカキ目調整で、体部は指ナデをおこなう。内面では口縁部を横ハケ又はカキ目調整で、体部は削られている。すべてがこの調整ではないが、弥生時代後期以降に入るものはないと考えている。またⅡａ～ｃ類はそれぞれ同一の素材を使用しているが、「ク」の字型土器は個々の粘土を使用している。「ク」の字型土器は後述する杯類との供伴が強いとおもわれる。

梅木原で同じく多く出土した遺物では杯類がある。杯類は、黒色土器と２種に分けられる。そしてさらに台付と無しに分けられる。右図は口径と底部の法量のグラフとなる。高台付の底部は、貼り付け部を計る。

口径には４cmの差が見られる。突出したものでは口径21cmを計る。数量は高台無しが多い。県下における杯類の明確な時期区分は確定していないと思われる。今回梅木原においても年代観を与えることは困難だと思われる。ここでまた荒迫遺跡を引用したい。同遺跡で検出された高原スコリアの年代観が、化学分析によって10世紀以降と分析された。これによって高原スコリアの下層から出土した杯類は高台無しの杯に限定しているが、概ね９世紀後半に位置付けられている。

また今回梅木原では、墨書土器が検出された。近年出土例を増やしているもので、えびの市の昌明寺遺跡では多量の墨書土器が見つかっている。今後小林市でも類例を増やすと予想できる。昌明寺遺跡の墨書土器は、主に杯と黒色土器に書かれ、概ね９世紀後半と位置付けている。墨書土器に関しては奈良、平安、中世を中心にみられているようで、特に９～10世紀の平安時代に多いという。



杯　法量グラフ

布痕土器は、県下においても比較的早くから発掘事例がでている。小林市でも「こまくりげ遺跡」・「竹山遺跡」で報告されている。近年の発掘では各遺跡から報告されており、(『高千穂町文化財調査報告書第11集』1999) ・一般化した遺物と言えるのではないか。10世紀代の平安期に特に多いと言われているが、正確な位置付けは出ていない。

須恵器について梅木原においても少ない量で出土する。出土量の比率からすれば県下における須恵器の出土は少数に留まると思われる。梅木原の中には平底の壷が1点確認される。この平底は、8世紀からといわれる佐土原町の下村瓦窯跡から類例が見いだされる。

以上の点で、比較的時期設定が考慮される杯や黒色土器、布痕土器、墨書土器が1時期のグループとしてまとめられるものと思われる。この点において、大半の「ク」の字型の土器や須恵器もグループ内に収めておきたい。現時点から周辺の遺跡を考慮しても、大まかに9世紀の土器群と捉えておきたい。

以上、梅木原の土器について述べてきた。集中するものは縄文時代前期、弥生時代中期、平安時代前期の3区分になると思われる。さらに今回図化されることがなかったが、近世陶磁器が入る。主に薩摩焼になると思われるが、割愛させてもらった。縄文時代では早期、中期、後期、晩期が数点ながら確認される。そして弥生時代や平安時代に関しても、大まかに類推によるものなので、前後の時期が確認される。古墳時代に関しては、不明な点が多く、Ⅱc類が古墳時代に入るのではと推察する。

遺構と遺物の関係について

今回の調査における遺構の検出は、基本的に第Ⅳ層のアカホヤ上面であった。遺構内の埋土は全て

黒色土が入り込む。黒色土は基本的に第Ⅲ層と変わらない土質をしている。その中で第Ⅲ層を掘り下げる中でも遺構の確認はできた。後述するとして、最初にアカホヤ上面で検出された遺構を見ていく。最も多い遺構は総数約5000のピット群であった。県下においてピット数そのものは突出したものではないが、大部分は用途不明となることである。実際に掘建柱建物として並ぶと思われるものもあったが、今回は敢えて割愛させてもらった。このようにアカホヤ上面から検出された遺構は不明な部分が目立つ。その中で唯一類例が確認できたのは2基の陥穴状土壙であった。同じく荒迫遺跡において、似た土壙が2基確認されている。概略するが、2基とも底部面積が1.7×0.58mを計る。梅木原遺跡の2基は1.9×0.5mと1.5×0.44mを計る。主に長方の法量に違いが見られる。

ところで今回の今回の調査において、諸制約上から全て遺物の出土地点を把握することはできなかった。そこで第86図を参考に、概ねの出土状況からⅢ層内の状況を見ていきたい。

第86図は6区第Ⅲ層の分布図である。6区は遺構と遺物が最も集中した区で、第Ⅲ層もゴボウ穴による撹乱も無く良好な層であった。図には主に土器や石器等の製品類、そして主に黒曜石、チャート、変成岩、玉髄等の剥片類の出土地点を落とした。出土地点から以下の傾向があった。

土器片は中央を中心に満遍なく分散している。時期的に見ると、杯や甕形の土器Ⅰ－a～c類等の弥生から古代を中心とする土器片は中央部に密集して集まっていた。そして縄文時代の土器片は全体的に分散して採集された。層位的に見ると古代を中心とする土器片は第Ⅱ層下からⅢ層上までに主だったものが採集され、縄文時代の土器片はⅢ層下から採集された。剥片類は6区の中央部を中心に分散して広がっている。層位的にも第Ⅲ層に満遍なく分散していた。遺物はⅣ層上面約20㎝までくると、ほとんど採集されていない。このことは遺構と遺物の間には溝が生じることとなった。そこで第Ⅲ層の掘り下げ中から確認することができた遺構を把握しておきたい。

確認された遺構は、橙色土が入り込む土壙と第Ⅴ層を含む第Ⅳ層が天地返しによって浮き上がった撹乱壙の2種類である。橙色土壙は中央から南側に集中する。橙色土壙は本文では焼土壙として捉えている。同じⅢ層内からは焼礫が大量に出土している。数点接合できたことから、同地で剥れたものもあると考えられる。しかし3区において焼礫は数点しか出土してない。橙色土壙内から焼礫が伴うものは僅かで、2～3点しか出土していない。基本として橙色土壙内から遺物は見つかっていないが、同じ面から縄目状刻目突帯土器(333)がまとまった形で出土した。また第86図1に示すように6区では南北に幅約2.0mの硬く踏み締められた黒色土の帯が検出された。厚さは5～6㎝で所々で切れている。断面ブロック状となるため、遺構となるのか1層位となるのか今回類例を調べるまでにはいたらなかった。同じ面からは(787)の須恵器や火石等の遺物や橙色土壙が出土している。

ところで6区のアカホヤ層面の検出は緩やかな傾斜面上となった。梅木原は基本的に傾斜面の遺跡である。しかし橙色の土壙と撹乱壙から第Ⅲ層で検出される遺構は、アカホヤ層の傾斜とは関係なく平面上となる。場所によってアカホヤ層を切るものある。6区の第Ⅲ層中にある遺跡は半地になると思われる。

さらに上の層を見ていきたい。第Ⅱ層と第Ⅲ層の間からは、「洪武通寶」や「寛永通寶」、「仙臺通寶」が出土し、「イモ穴」内からはキセル(973)が出土している。主に陶磁器を中心とする遺物が採集された。「仙臺通寶」は仙台藩によって天明四年(1784)から5年間鋳造されている。第Ⅲ層を切る遺構は、第86図1に点線で示されたもので、細長いものと丸いものに分けられる。本文では「イモ穴」と明記し、撹乱壙としたものである。しかし第20図35が示すように、第Ⅱ層の土が入る。第Ⅱ層は2～3㎝の薄い層とブロック状の層で構成する複合層で、火山灰層となる。梅木原遺跡における火山灰層の分析はおこなわれなかった。イモ穴の埋土は大粒のスコリアを含む暗灰色の湿り気の無い土だった。所々に空

洞が見られた。1つの「イモ穴」の底から藁または筵と思われる炭化物が検出された。

東方栗巣野地区について

梅木原遺跡は、三方を河川に一方を山稜に囲まれた河岸段丘にある。立地は閉鎖的な空間にある。梅木原のような立地条件は、東方地区において何処にでも見られる普通の条件である。梅木原の調査区域は立地条件によって二つに分けられる。4～7区は後方から延びる山稜の尾根部に位置し、1～3区は谷部に位置する。このような立地条件の違いは遺構には見られなかったが、遺物に大きな差があった。繰り返すように梅木原の遺物は4～7区で占めている。1～3区では土器や礫を含む石器類がほとんど出土していない。1～3区から出た遺物は、西半式等の縄文時代後期から晩期の土器、脚台付の底部やⅡc類の土器、そしてキセルや「寛永通寶」を含む近世陶磁器である。いずれも数点となる。ここで今回梅木原地区でおこなわれた発掘調査について、再確認しておきたい。

調査は1～7区で、総面積約2万㎡となる。梅木原全体の第5図が示すように1/10にも満たない面積である。

縄文時代は、調査において、前期から晩期まで確認される。最も多く確認された曽畑式土器は周辺の遺跡でも多くみられ、この時期の盛行さをうかがわせる。また縄文時代の特徴として、石器の製品と石材が確認されたことだった。石材は黒曜石が最も多く、未加工の原石まであった。確認される製品の石材のほとんどが、梅木原に持ち込まれ、原石から加工されたものと思われる。ただし姫島産については不明である。遠方からの搬入は黒曜石のみで、他の石材は周辺から集めたと思われる。この時期の住居等の生活跡は確認されなかった。4～7区は石器の製作場としての様相が強く周辺に生活場があると思われる。現在の所、周辺に集落跡は見つかっていない。梅木原周辺から見つかる可能性も考えられる。

小林市における弥生時代は、不明な点が多く、辛うじて野尻町大萩遺跡等によって弥生時代後期の様相が伺うことができる。この点から梅木原から出土した弥生土器を中期に中心をおくことは現段階で早計と思われる。西諸地区における明確な時期編年を待ちたい。

古代の栗巣野は西海道の整備とともに発展していったと思われる。冒頭で述べたが、栗巣野から1㎞程南には、日向国府から肥後国府を結ぶ内廻りの官道があったと推定される。明確なルートを推定することは栗巣野を含め周辺の歴史性を研究するための課題の一つと思われる。梅木原と官道との関係を結ぶものでは布痕土器が上げられる。今回出土した量は少ないが、梅木原出土の布痕土器も官道ルートによって運ばれた製品の一つと思われる。この時期の梅木原は焼土壙、根痕、陥穴状土壙、井戸状土壙、集石状土壙がセットになると思われる。すべて同時期といえるのか不明だが、ある程度の大木が茂っていたと思われる。この時期に荒迫遺跡では大規模な開墾がおこなわれている。梅木原でも畝状遺構が検出されるが、時期決定には至らなかった。陥穴状土壙から猟場の様な時期や焼土壙、井戸状土壙から生産場のような時期があったと思われる。掘立柱建物は数件建つが、仮小屋の要素が強い。焼土壙は炉跡とともに取れるが、現段階では用途不明としておきたい。いずれにしても弥生時代以降、再び活性化された時期と受け止められる。

中世の遺構や遺物は特に多くは出土していない。五輪塔の一部、空風輪や「洪武通寶」、「永楽通寶」の出土に留まる。この時期のものとして、岩瀬川沿いには永仁元年(1293)銘の古碑、栗巣野には永正一四年(1517)銘と、天文一九年(1550)銘の六地蔵、高津佐や穂屋下集落には古墓が残る。

近世の遺物では、「仙臺通寶」が出土する。鋳造年間が5年という短い時期なので、細かい層位区分ができたかもしれなく、今回できなかったことが残念に思う。

土器観察表（1）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	石量	焼成	実測図	備考
					口径	高	底径	表	裏	表	裏					
28	1	4区 耕作土層	鉢	口縁部～胴部	－	－	－	横位の刺突、横位→縦位のやや浅い沈線文→ナデ	横位の刺突→ナデ	灰褐 (5YR4/2)	にぶい赤褐 (5YR4/2)	0.1㎜～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白、2㎜の白色の粒	少	○	断面	
	2	6区 黒色土下層	鉢	口縁端部～	－	－	－	斜位、横位の沈線文（羽状文）→ナデ	斜位、横位の沈線文（羽状文）→ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色0.5～1㎜の透色、灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	3	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁端部	－	－	－	口縁部：縦位の沈線文 胴部：横位の沈線文→ナデ	端部：縦位の刺突 口縁部：横位→斜位の沈線文→ナデ	黒褐 (5YR3/1)	灰褐 (5YR4/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、黒透色、白透色、茶色の粒	少	△	断面	煤（外面）
	4	6区Ⅱ 黒色土上下層	鉢	胴部	－	－	－	縦位、横位、斜位のやや浅い沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒褐 (10YR3/1)	0.1～0.5㎜の透色、灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	5	7区A－Ⅰ	鉢	口縁部～胴部	－	－	－	口縁部：縦位の沈線文 胴部：横位の沈線文→ナデ	条痕→横位→縦位の沈線文→ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、黒透色、灰色、乳白色、白透色の粒	少	○	断面	
	6	6区Ⅲ 黒色土上下層	鉢	口縁部～胴部	－	－		口縁部：沈線文 胴部：横位の沈線文→ナデ	条痕→横位→縦位の沈線文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR4/2)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、黒透色、乳白色、白透色の粒	少	○	断面	
	7	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	胴部	－	－	－	縦位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	横位の条痕→ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	灰褐 (7.5YR5/2)	0.1㎜の透色、0.5～2㎜の灰白、白透色、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	8	7区A－Ⅰ	鉢	胴部	－	－		横位、縦位のやや浅い沈線文→ナデ	ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、白透色、黒透色、3㎜の灰色の粒	少	○	断面	煤（内面）
	9	5区 黒色土層	鉢	口縁端部～	－	－	－	横位、縦位の浅い沈線文→ナデ	横位の浅い沈線文 端部：斜位の短沈線文→ナデ	にぶい黄 (10YR7/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、0.5～1㎜の灰白の粒	少	○	断面	
	10	6区 表採	鉢	口縁端部～	－	－		横位のやや浅い沈線文ナデ、端部：刺突	横位のやや浅い沈線文→ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、白透色、灰白の粒	少	○	断面	煤（外面）
	11	6区Ⅱ 黒色土上層	鉢	口縁端部～	－	－		縦位、斜位のやや浅い沈線文→ナデ	横位の沈線文	灰褐 (7.5YR5/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5～1㎜の乳白色、灰白の粒	少	○	断面	煤（内面）
	12	6区 表採	鉢	口縁端部～	－	－		横位、縦位の浅い沈線文→粗雑なナデ	条痕→横位の浅い沈線文、端部：刺突→ナデ	黒褐 (10YR3/1)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、灰白、黒透色の粒	少	○	断面	煤
	13	7区A－Ⅰ	鉢	口縁端部～	－		－	横位の沈線文→ナデ 端部：縦位→斜位の刺突	横位の沈線文→ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の褐色、白透色、茶色、0.5～1㎜の灰色、乳白色、黒透色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	14	6区 黒色上下層	鉢	口縁端部～	－		－	縦位、横位の沈線文→ナデ 端部：沈線文	横、縦位の沈線文	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	15	6区Ⅱ 黒色土上下層	鉢	口縁端部～	－		－	横位、縦位のやや浅めの沈線文	横位のやや浅い沈線文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、灰白、乳白色の1㎜の茶色、濃茶色の粒	中	○	断面	煤
	16	6区 表採	鉢	口縁端部～	－		－	横位のやや浅い沈線文→ナデ	横位のやや浅い沈線文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	明褐灰 (7.5YR7/2)	0.1㎜の透色0.5㎜の白透色、灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	17	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁端部～	－	－	－	縦位、斜位のやや浅い沈線文→ナデ	横位のやや浅い沈線文→ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	0.1㎜の透色0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	中	○	断面	煤
	18	7区A－Ⅰ	鉢	口縁端部～		－	－	横位の沈線文→ナデ	横位の沈線文→ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、乳白色0.5～1㎜の茶色、濃茶色の粒	少	△	断面	
	19	6区Ⅰ 黒色土下層	鉢	口縁端部～		－	－	横位、斜位の浅い沈線文→ナデ	丁寧なナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	0.1㎜の透色、白透色、黒透色の粒	少	○	断面	煤
	20	6区 黒色土	鉢	口縁端部～	－	－	－	横位の浅い沈線文、端部：刺突	横位の沈線文→ナデ	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、白透色、0.5㎜の灰白、黒透色の粒	少	○	断面	煤
	21	7区A	鉢	口縁端部～	－	－	－	横位の沈線文、縦位の浅い沈線文→ナデ 端部：刺突	横位の沈線文→ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	0.1㎜の透色0.5㎜の灰白、白透色、黒透色の粒	中	○	断面	煤
29	22	6区Ⅲ 黒色土下層	鉢	胴部	－	－	－	縦位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、黄鉄色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	23	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	胴部	－	－	－	縦位のやや浅い沈線文→ナデ	横位のナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	灰オリーブ (5Y4/2)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、黒透色、乳白色の粒	中	○	断面	煤
	24	7区A－Ⅰ	鉢	胴部	－	－	－	やや浅い、長短組み合わせの沈線文→ナデ	横位のナデ	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	橙 (5YR6/6)	0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、灰色、赤褐色、乳白色の粒	中	×	断面	
	25	7区Ⅰ	鉢	胴部	－	－		縦位の浅い粗雑な沈線文→ナデ	横位の条痕	灰褐 (7.5YR4/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	26	6区Ⅲ 黒色土上層	鉢	胴部	－		－	縦位、横位の沈線文、縦位の押引文	丁寧なナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	27	7区A－Ⅱ	鉢	胴部	－		－	横位の浅い幅広の沈線文	丁寧なナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色、茶色、黄鉄色、灰色の粒	少	×	断面	煤
	28	6区Ⅱ 黒色土上層	鉢	胴部		－	－	横位のやや浅い沈線文	粗いナデ	赤褐 (5YR4/6)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、白透色黒透色、白透色の粒	少	△	断面	煤
	29	6区 黒色土下層	鉢	口縁端部～	－	－	－	横位の沈線文→ナデ 端部：斜位の短い沈線文→ナデ	横位→斜位の沈線文→粗いナデ	にぶい赤褐 (5YR4/3)	褐 (7.5YR4/4)	0.1～0.5㎜の白透色、灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	30	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁端部	－	－	－	横位の沈線文→ナデ 端部：斜位の短い沈線文→ナデ	横位の沈線文→粗いナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1～0.5㎜の白透色、透色、灰白、黒透色、乳白色、茶色の粒	中	○	断面	煤

土器観察表（2）

挿図	図版番号	出土地区	器種	残存	法量（cm） 口径	高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
29	31	6区 黒色土下層	鉢	口縁端部〜	−	−	−	横位→縦位の沈線文、斜方向の刺突→ナデ	横位の押引文、縦位の短い沈線文→ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.5㎜の白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	32	7区A−I	鉢	口縁端部	−	−	−	横位→縦位の沈線文、斜位の沈線文→ナデ	横位の押引文→沈線文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、白透色、灰白、乳白色の粒	少	○	断面	
	33	7区A−II	鉢	口縁端部	−	−	−	横位→縦位の沈線文、斜位の沈線文→ナデ	横位→の押引文→ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5㎜の黒透色、白透色、灰白の粒	少	○	断面	
	34	7区A−I	鉢	口縁部	−	−	−	横位→縦位の沈線文→ナデ	横位の押引文、やや短い沈線文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5〜1㎜の白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	
	35	7区A−I	鉢	口縁部	−	−	−	横位の浅い沈線文→縦位の沈線文	横位の沈線文→ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5〜1㎜の黒透色、白透色、茶色、灰白の粒	少	○	断面	
	36	7区A−I	鉢	口縁部	−	−	−	横位→縦位の沈線文→ナデ	横位の押引文、沈線文→ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5〜1㎜の黒透色、白透色、茶色、灰白の粒	少	○	断面	
	37	6区I 黒色土下層	鉢	口縁部〜胴部	−	−	−	横位、縦位の沈線文→ナデ	横位の沈線文→ナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5㎜の黒透色、白透色、乳白色、灰白の粒	少	○	断面	
	38	7区A−I	鉢	口縁部	−	−	−	横位→縦位の沈線文→ナデ	横位の沈線文→ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5〜1㎜の黒透色、白透色、乳白色、茶色、灰白の粒	少	△	断面	
	39	6区III 黒色土下層	鉢	胴部	−	−	−	横位、縦位の沈線文	ナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1〜0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白の粒	少	○	断面	
	40	6区II 黒色土上層	鉢	口縁端部	−	−	−	横位の押引文、刺突→ナデ	やや浅い横位の押引文→ナデ	赤褐 (5YR4/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1〜0.5㎜の透色、黒透色、白透色、灰白、乳白色の粒	少	○	断面	
	41	6区87番 黒色土層	鉢	口縁端部〜胴部	−	−	−	横位の押引文、縦位の沈線文	横位の押引文、縦位の押引文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色、灰白の粒	少	△	断面	煤
	42	6区I 黒色土下層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位の沈線文、短い沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.5㎜の白透色、黒透色、灰色、乳白色、灰白の粒	少	○	断面	
	43	6区 黒色土下層	鉢	口縁端部〜	−	−	−	横位の押引文→縦位の沈線文→斜方向からの刺突→ナデ	横位の押引文、刺突→ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、白透色、灰白の粒	少	△	断面	
	44	6区III 黒色土下層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位の沈線文	横位の条痕	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	0.1〜1㎜の透色、黒透色、白透色、灰色、乳白色の粒	少	○	断面	朱（外面）
	45	6区III 黒色土下層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	条痕	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.5㎜の黒透色、灰白、白透色の粒	少	○	断面	
	46	6区 表採	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位、斜位の沈線文→ナデ	摩滅	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜の黒透色、0.1〜0.5㎜の褐色、乳白色、白透色の粒	少	△	断面	
	47	6区III 黒色土下層	鉢	胴部		−	−	縦位、横位の沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5〜1㎜の黒透色、白透色、乳白色、灰白の粒	少	○	断面	朱（外面）
	48	6区III 黒色土上層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位の沈線文、短い沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5㎜の黒透色、白透色、灰白、乳白色、5㎜の黄鉄色の粒	少	○	断面	
	49	6区III 黒色土上層	鉢	胴部			−	縦位、横位の沈線文→ナデ	条痕	にぶい黄橙 (10YR6/3)	褐 (7.5YR4/3)	0.1〜0.5㎜の透色、黒透色、白透色、灰白、乳白色の粒	少	○	断面	朱（外面）
	50	6区III 黒色土上層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位の沈線文→ナデ	条痕	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、灰白、灰色の粒	少	○	断面	
30	51	6区8番 黒色土上層	鉢	口縁部	−	−	−	斜位の沈線文（羽状文）→ナデ	弧状の粗雑な横位の沈線文、斜位の連点状の沈線文→ナデ	褐 (10YR4/4)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	0.1〜0.5㎜の透色、黒透色、白透色、0.5〜1㎜の灰白、茶色、暗茶褐色、乳白色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	52	表採	鉢	口縁部	−	−	−	斜位の短い沈線文（粗雑な羽状文）→ナデ	斜位の短い沈線文（粗雑な羽状文）→ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1〜0.5㎜の透色、白透色、0.5〜1㎜の黒透色、乳白色、1〜2㎜の茶色の粒	中	○	断面	
	53	6区II 黒色土下層	鉢	口縁部	−	−	−	横位のやや浅い沈線文	横位の沈線文→一条の山形状の沈線文→ナデ	黒褐 (10YR3/1)	灰白 (10YR8/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、白透色、黒透色の粒	少	△	断面	煤
	54	6区II 黒色土下層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、横位の浅い幅広の沈線文→ナデ	横位の幅広の沈線文→ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐灰 (10YR4/1)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の白透色、茶色、1㎜の灰色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	55	7区A−I	鉢	胴部	−	−	−	縦位、斜位の沈線文（菱形文）→ナデ	ナデ	灰褐 (5YR4/2)	橙 (5YR6/6)	0.1〜0.5㎜の透色、灰白、茶色、黒透色、1㎜の白透色の粒	少	○	断面	
	56	7区A−I	鉢	胴部	−	−	−	斜位のやや浅い沈線文→ナデ	貝殻状条痕→ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1〜0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白0.5〜1㎜の茶色の粒	少	○	断面	煤 朱（内面）
	57	6区II 黒色土下層	鉢	胴部	−	−	−	縦位、斜位のやや浅い沈線文（菱形文）→ナデ	横位のナデ	灰褐 (7.5YR6/2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	煤
	58	7区A−II	鉢	胴部			−	斜位の沈線文→粗雑なナデ	横位のナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.1〜0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	煤
	59	7区A−I	鉢	胴部	−	−	−	斜位の沈線文→粗雑なナデ	貝殻条痕→ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1〜0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、2㎜の乳白色の粒	少	○	断面	煤
	60	7区A−I	鉢	胴部	−	−	−	縦位、斜位の浅い沈線文（菱形文）→ナデ	貝殻条痕→ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜の透色0.5〜1㎜の白透色、灰白、茶色、灰色の粒	中	△	断面	煤（外面）

土器観察表（3）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
30	61	6区II 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	縦位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	条痕→ナデ	灰白 (10YR8/2)	褐灰 (10YR6/1)	0.1mmの透色、黒透色、灰白、1mmの灰色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	62	6区 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	縦位、斜位のやや浅い沈線文（菱形文）→ナデ	横位の条痕	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1~0.5mmの透色、黒透色、灰白、乳白色、茶色の粒	少	×	断面	煤
	63	6区III 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	縦位、斜位のやや浅い沈線文（菱形文）→ナデ	横位の条痕→ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	0.1~0.5mmの黒透色、白透色、茶色、灰白の粒	少	△	断面	煤（外面）
	64	7区A-I	鉢	胴部		-	-	斜位の浅い沈線文→ナデ	条痕→ナデ	褐灰 (10YR4/1)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、黒透色、灰白の粒	少	△	断面	
	65	6区III 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	縦位、斜位のやや浅い沈線文（菱形文）→ナデ	条痕→丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/2)	褐灰 (10YR6/1)	0.1mmの透色、黒透色、3mmの白透色の粒	少	○	断面	
	66	6区II 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	斜位の浅い沈線文（菱形文）→ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐灰 (7.5YR4/1)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒透色、灰色、灰白の粒	少	○	断面	煤（外面）
	67	6区 表採	鉢	胴部		-	-	斜位のやや浅い沈線文	横位の条痕	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR5/4)	0.1~0.5mmの白透色、黒透色、灰白、灰色、1mmの赤褐色、茶色の粒	中	○	断面	
	68	6区III 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	縦位、斜位のやや浅い沈線文→ナデ	条痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	0.1mmの黒透色、白透色、灰白、1mmの白色の粒	少	△	断面	
	69	6区I 黒色土下層	鉢	胴部		-	-	斜位のやや浅い沈線文（菱形文）→ナデ	横位の条痕	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	灰黄褐 (10YR6/2)	0.1~0.5mmの黒透色、白透色、灰白、0.5~1mmの白色の粒	少	○	断面	煤
	70	7区A-I	鉢	胴部		-	-	斜位、縦位の浅い沈線文（菱形文）→ナデ	横位の細い条痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.5mmの白透色、黒透色、茶色、1mmの茶色、乳白色の粒	少	△	断面	煤（外面）
	71	6区I 黒色土下層	鉢	胴部	-	-	-	縦位、斜位の沈線文（菱形文）→粗雑なナデ	横位の条痕→ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/3)	0.1mmの透色、0.5mmの黒透色、白透色、茶色、乳白色、1mmの白色の粒	少	○	断面	
	72	7区A-I	鉢	胴部	-	-	-	横位の浅い沈線文→やや浅い沈線文→ナデ	斜位の条痕	にぶい赤褐 (5YR4/3)	橙 (5YR6/6)	0.5~1mmの白透色、黒透色、灰白、乳白色、灰色の粒	中	○	断面	煤
	73	7区A-I	鉢	胴部	-	-	-	横位、斜位のやや浅い→ナデ	横位のナデ	暗赤褐 (5YR3/2)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	0.1~0.5mmの透色、黒透色、乳白色、0.5~1mmの暗茶褐色、灰白、赤褐色の粒	中	○	断面	煤
	74	7区A-I	鉢	胴部	-	-	-	縦位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	横位のナデ	橙 (5YR6/8)	黒褐 (5YR3/1)	0.5~1mmの透色、灰白、茶色、黒透色の粒	中	○	断面	
	75	6区 表採	鉢	胴部	-	-	-	縦位、横位の沈線文（四角文）→ナデ	横位のナデ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	黒 (7.5YR2/1)	0.1mmの透色、0.5mmの灰白、1mmの茶色、灰色の粒	少	○	断面	煤
	76	6区I	鉢	胴部	-	-	-	浅い沈線文→ナデ	ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	灰褐 (7.5YR6/2)	0.1~0.5mmの白透色、黒透色、灰白、黄透色、0.5~1mmの赤褐色の粒	少	△	断面	煤
	77	7区A-II	鉢	胴部	-	-	-	縦位の浅い沈線文→横位のやや浅い沈線文→ナデ	斜位のナデ	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR6/2)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒透色、白透色、茶色、灰白、乳白色の粒	少	○	断面	煤
	78	7区A-I	鉢	胴部	-	-	-	横位の浅い沈線文→縦位の細い沈線文→ナデ	ナデ	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1~0.5mmの白透色、黒透色、灰白、乳白色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	79	6区I 黒色土上層	鉢	胴部	-	-	-	やや浅い沈線文→ナデ	ナデ	黒褐 (5YR3/1)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	少	△	断面	煤
31	80	6区III 黒色土上層	鉢	胴部	-	-	-	縦位、横位の沈線文→ナデ	横位の条痕	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	0.1mmの透色、0.1~0.5mmの黒透色、白透色、1mmの乳白色の粒	少	○	断面	
	81	6区III 黒色土上層	鉢	胴部	-	-	-	縦位、横位の沈線文→ナデ	横位の条痕	灰褐 (7.5YR5/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1~0.5mmの黒透色、透色、灰白の乳白色、灰白の粒	少	○	断面	
	82	6区 黒色土上層	鉢	胴部	-	-	-	縦位、横位の沈線文→ナデ	条痕	褐 (7.5YR4/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒透色、灰白、白透色の粒	少	○	断面	朱（外面）
	83	7区A-II	鉢	胴部	-	-	-	縦位、横位の沈線文→ナデ	条痕	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	0.1mmの透色、0.1~0.5mmの黒透色、白透色、褐色、乳白色、茶色の粒	少	○	断面	
	84	6区II 黒色土下層	鉢	胴部	-			斜位、横位の沈線文	条痕	黒褐 (7.5YR3/2)	黒褐 (7.5YR3/1)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、灰白の粒	少	△	断面	
	85	6区 表採	鉢	胴部	-		-	縦位、横位の沈線文、短い沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.1~1mmの透色、黒透色、灰白、黄褐色の粒	少	○	断面	煤
	86	7区A-II	鉢	胴部		-	-	斜位の沈線文（菱形文）→ナデ	横位の条痕	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤黒 (2.5YR2/1)	0.1mmの透色、0.1~0.5mmの黒透色、乳白色、白透色、灰色、茶色の粒	少	△	断面	
	87	6区III 黒色土上層	鉢	胴部		-	-	縦位の沈線文、短沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	少	○	断面	
	88	7区A-I	鉢	口縁部	-	-	-	横位の細い沈線文	横位の押引文→ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰褐 (7.5YR4/2)	0.1~0.5mmの白透色、黒透色、赤褐色、乳白色の粒	少	○	断面	煤
	89	6区II 黒色土下層	鉢	口縁部~	-	-	-	横位の沈線文→ナデ 端部：縦位の細い沈線文	横位の押引文、沈線文→ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/3)	暗褐 (7.5YR3/4)	0.1~0.5mmの白透色、透色、黒透色、乳白色、灰白の粒	中	○	断面	煤
	90	6区I 黒色土上層	鉢	口縁部~	-	-	-	横位のやや浅い沈線文→ナデ	横位の浅い沈線文→ナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1~0.5mmの透色、白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	

土器観察表（4）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
31	91	6区I 黒色土下層	鉢	口縁端部～	ー			横位の沈線文→ナデ 端部：斜位の沈線文	横位の沈線文→ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/3)	暗赤褐 (5YR3/3)	0.1～0.5mmの白透色、黒透色、灰白、0.5～1mmの灰色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	92	6区III 黒色土上下層	鉢	口縁端部～	ー	ー		横位の浅い沈線文→ナデ 端部：斜位の沈線文	横位の沈線文→ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	黒褐 (10YR3/2)	0.1～0.5mmの白透色、黒透色、灰白、灰色の粒	少	○	断面	
	93	7区A－I	鉢	口縁端部～	ー	ー		横位の浅い沈線文→ナデ 端部：刺突	横位の押引文→ナデ	褐 (7.5YR4/3)	褐 (7.5YR4/4)	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、灰白、乳白色の粒	少	○	断面	煤
	94	7区A－II	鉢	口縁部	ー	ー		横位の沈線文→ナデ	横位の沈線文→ナデ	黒褐 (7.5YR2/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1～0.5mmの灰白、0.1mmの黒透色、透色の粒	少	○	断面	煤
	95	7区A－I	鉢	口縁端部～	ー	ー		横位の浅い沈線→ナデ 端部：斜位の細い沈線文	横位の沈線文→ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒透色、白透色、乳白色、灰白の粒	少	○	断面	
	96	6区I 黒色土下層	鉢	口縁端部～	ー	ー		口縁部：横位、斜位の沈線文 端部：斜位の押引文→ナデ	条痕→横位の沈線文→ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	灰褐 (5YR4/2)	0.1～0.5mmの透色、灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	97	6区 黒色土上下層	鉢	口縁端部～	ー	ー	ー	条痕→横位、斜位の沈線文→ナデ、端部：斜位の短沈線文→ナデ	横位の沈線文→ナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	0.1～0.5mmの透色、灰白、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤（内面）
	98	6区III 黒色土上下層	鉢	口縁部～胴部	ー	ー	ー	口縁部：横位、沈線文 胴部：斜位の沈線文→ナデ	横位の沈線文	黒褐 (7.5YR3/2)	灰褐 (7.5YR5/2)	0.1mmの透色、0.5～1mmの黒色、茶色、灰白、乳白色、暗茶褐色の粒	少	○	断面	
	99	6区III 黒色土上層	鉢	口縁部	ー	ー	ー	横位→斜位の沈線文→ナデ	条痕→横位の沈線文→ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	灰褐 (5YR5/2)	0.1mmの透色、黒透色、灰白、0.5～1mmの茶色、暗茶色の粒	少	○	断面	
	100	6区III 黒色土下層	鉢	胴部	ー	ー	ー	横位、斜位のやや浅い沈線文→ナデ	条痕→ナデ	暗褐 (7.5YR3/3)	暗褐 (10YR3/3)	0.1mmの透色、白透色、黒透色、茶色0.5～1mmの灰白の粒	中	○	断面	煤（外面）
	101	6区III 黒色土下層	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文	条痕→ナデ	暗褐 (7.5YR3/3)	暗褐 (10YR3/3)	0.1mmの透色、黒透色、0.5～1mmの暗茶褐色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	
	102	6区III 黒色土下層	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文（四角文）→ナデ	条痕→ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1mmの透色、0.5～1mmの黒透色、茶色、乳白色、灰色、暗茶褐色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	103	6区III 黒色土上層	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文→ナデ	条痕	黒褐 (7.5YR3/1)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒透色、0.5～1mm茶色、灰白、赤褐色の粒	少	△	断面	
	104	7区A－I	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文→ナデ	貝殻条痕	褐 (7.5YR4/3)	黒褐 (7.5YR3/1)	0.1mmの透色、0.5～1mmの灰白、灰色、白透色、黒透色、茶色の粒	中	○	断面	
	105	6区 黒色土下層	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文→ナデ	条痕→ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	灰褐 (7.5YR5/2)	0.1mmの透色、黒透色、0.5～1mmの茶色、灰白の粒	少	○	断面	
	106	6区	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文→ナデ	貝殻状条痕→ナデ	黒褐 (7.5YR3/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1mmの透色、0.5～2mmの茶色、灰色の粒	少	○	断面	
	107	6区III 黒色土上層	鉢	口縁部～胴部	ー	ー	ー	口縁部：横位→斜位の沈線文	ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1mmの透色、0.1mmの黒透色、茶色、5mmの灰白の粒	少	○	断面	
	108	6区III 黒色土上層	鉢	胴部	ー	ー	ー	斜位の沈線文→ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰褐 (7.5YR6/2)	0.1mmの透色、黒透色、0.5mmの灰白、茶色の粒	少	○	断面	煤
32	109	6区 表採	鉢	胴部		ー	ー	縦位、横位の沈線文	横位の条痕	黒褐 (10YR3/1)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1～0.5mmの透色、黒透色、褐色、白色、1mmの茶色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	110	7区A－II	鉢	胴部			ー	縦位の沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1mmの透色、0.1～1mmの白透色、黒透色、茶色、茶褐色の粒	中	○	断面	
	111	7区A－II	鉢	胴部	ー		ー	縦位、斜位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	ナデ	褐 (7.5YR4/3)	明褐 (7.5YR5/6)	0.1～0.5mmの白透色、黒透色、灰色、灰白、乳白色、茶色の粒	中	○	断面	煤
	112	6区A－II	鉢	胴部	ー	ー		縦位、斜位、横位のやや浅い沈線文→ナデ	ナデ	黒褐 (5YR3/1)	橙 (5YR6/6)	0.5mmの白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	少	○	断面	煤（外面）
	113	7区A－II	鉢	胴部	ー	ー		縦位、斜位のやや浅い沈線文（菱形文）→ナデ	横位の貝殻条痕→ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1mmの透色0.5～1mmの白透色、黒透色、茶色、灰白、乳白色の粒	少	△	断面	煤（外面）
	114	6区II 黒色土上下層	鉢	底部	ー	ー	ー	斜位の沈線文（菱形文）→斜位の連点状の沈線文→ナデ	横位のナデ	黒褐 (7.5YR2/2)	黒褐 (7.5YR3/2)	0.1～0.5mmの透色、黒透色、0.5～1mmの白透色、灰白、赤褐色、乳白色の粒	中	○	断面	煤
	115	6区III 黒色土上下層	鉢	底部	ー	ー	ー	横位の沈線文、斜位の沈線文（三角文）→ナデ	横位のナデ	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1mmの透色、0.5～1mmの黒透色、乳白色、茶色、赤褐色の粒	中	△	断面	煤
	116	6区	鉢	底部	ー	ー	ー	横位の沈線文、斜位の沈線文（三角文）→ナデ	横位の丁寧なナデ	にぶい赤褐 (5YR4/3)	黒褐 (5YR2/1)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、茶色、黒透色の粒	少	○	断面	煤
	117	6区 表採	鉢	底部	ー	ー	ー	横位の浅い沈線文→ナデ	横位のナデ→？	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒褐 (10YR3/1)	0.5mmの白透色、黒透色、灰白の粒	中	○	断面	煤
	118	7区A－II	鉢	底部		ー	ー	斜位の沈線文（菱形又は三角文）→ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	赤灰 (2.5YR4/1)	0.1～0.5mmの透色、黒透色、灰白、乳白色の粒	少	○	断面	煤
	119	7区A－II	鉢	底部	ー		ー	横位のやや浅い沈線文→縦位のナデ	丁寧なナデ	赤黒 (2.5YR2/1)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒透色、白透色、1mmの茶色、灰白の粒	少	△	断面	煤
	120	6区II 黒色土下層	鉢	底部	ー			横位の浅い沈線文→ナデ	横位のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1～0.5mmの白透色、透色、黒透色、0.5～1mmの乳白色の粒	中	△	断面	煤

土器観察表（5）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）口径	底	器高	調整及び文様 表	裏	色調 表	裏	胎土	石英	徴成	焼成	遺存部	備考
32	121	7区A－1	鉢	底部	－	－	－	斜位の浅い北縁文	横位のナデ	黒褐(7.5YR2/1)	褐(7.5YR3/1)	0.1mの透色、黒透色、0.5mmの茶色、灰白の粒	少	○	良好	底（外面）	
	122	6区黒色土下層	鉢	底部	－	－	－	横位の弱い北縁文、横位の北縁文→粗いナデ	横位のナデ	暗褐(7.5YR4/4)	黒褐(7.5YR3/1)	0.1mの透色、黒透色、0.5mmの白透色、乳白色の粒	少	○	良好	底（内面）	
	123	6区B黒色土上層	鉢	底部	－	－	－	横位の波状状の北縁文→横位の北縁文→丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	暗赤褐(7.5YR3/6)	0.1～0.5mの透色、黒透色、0.5～1mの白透色、乳白色、灰色、褐赤褐色の粒	中	△	良好	底（内面）	
	124	7区A－1	鉢	底部	－	－	－	横位、浅い北縁文→ナデ	横位、ナデ	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1～0.5mの白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	△	良好	底（外面）	
	125	6区B黒色土下層	鉢	底部	－	－	－	横位の浅い北縁、若干状文→ナデ	条痕→ナデ	黒褐(7.5YR3/1)	褐(7.5YR4/4)	0.1～0.5mの透色、黒透色、乳白色、灰白の粒	中	○	良好	底（外面）	
	126	7区A－1	鉢	底部	－	－	－	横位、斜位の浅い北縁文→ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	黒褐(7.5YR3/1)	0.1mの透色、0.5mの白透色、黒透色、灰白の粒	中	△	良好	底（内面）	
	127	6区B黒色土上層	鉢	底部	－	－	－	横位の浅い北縁文→ナデ	横位の丁寧なナデ、縦位のナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	褐灰(7.5YR4/1)	0.1mの透色、0.5～1mの白透色、黒透色、乳白色の粒	少	△	良好	底（内面）	
	128	7区A	鉢	底部	－	－	－	斜位の浅い北縁文→ナデ	横位の条痕	灰(7.5YR2/1)	黒褐(7.5YR3/1)	0.1～0.5mの白透色、茶色、黒透色、0.5～1mの灰白、赤の粒	中	○	良好	底（外面）	
	129	7区A－1	鉢	胴部	－	－	－	横位の北縁文、縦位の短い北縁文→ナデ	ナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	明赤褐(5YR5/6)	0.1～0.5mの透色、黒透色、乳白色、0.5～1mの白透色の粒	中	○	良好	底	
	130	7区A－1	鉢	胴部	－	－	－	斜位の浅い北縁文（羽状文）→ナデ	横位の条痕	明赤褐(5YR5/6)	赤褐(5YR4/6)	0.1～0.5mの透色、黒透色、0.5～1mの白透色、赤色の粒	中	○	良好	底	
	131	6区B黒色土下層	鉢	胴部	－	－	－	横位の北縁文、斜位のやや浅い北縁文→ナデ	ナデ	褐灰(7.5YR4/1)	黒褐(7.5YR3/1)	0.1～0.5mの透色、黒透色、0.5～1mの白透色、灰白、褐赤褐色の粒	中	△	良好	底（内面）	
	132	6区B黒色土下層	鉢	胴部	－	－	－	縦位、横位の北縁文	ナデ	灰白(7.5YR8/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.1mの透色、0.5mの白透色、黒透色、灰白、3mの茶色の粒	少	△	良好	底	
	133	6区P－3	鉢	胴部	－	－	－	斜位の浅い北縁文→ナデ	横位のナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/2)	0.1～0.5mの白透色、黒透色、乳白色、茶色、1～2mの茶色の粒	少	○	良好	底	
33	134	6区B黒色土下層	鉢	口縁端部	－	－	－	山形押型文	ナデ	鶯茶(7.5YR5/1)	灰黄褐(10YR5/2)	0.1～0.5mの透色、茶色、黒色、灰白、乳白色の粒	少	△	良好		
	135	7区A－1	鉢	口縁部	－	－	－	山形押型文	押型文	にぶい黄橙(10YR7/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.5mの透色、黒透色、0.5～2mの乳白色、灰色の粒	中	×	良好	底	
	136	6区B黒色土下層	鉢	頸部	－	－	－	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	0.1～0.5の透色、黒透色、灰白、0.1mの茶色、乳白色、暗赤褐色の粒	少	×	良好		
	137	3区黒色土層	鉢	口縁端部～胴部	－	－	－	貝殻条痕→斜位の貝殻刺突	貝殻条痕	にぶい橙(5YR6/3)	橙(5YR6/6)	0.1mの透色、黒褐色、白透色、灰白、灰色、0.5～1mの茶色の粒	中	△	良好	底（外面）	
	138	7区A－1	鉢	口縁端部～	－	－	－	貝殻条痕→斜位の貝殻刺突→ナデ	貝殻条痕	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	0.1mの透色、0.5mの白透色、黒透色の粒	少	○	良好		
	139	7区A－1	鉢	胴部～頸部	－	－	－	条痕→斜位の貝殻刺突→ナデ	条痕→ナデ	褐(7.5YR4/4)	灰(N5/0)	0.1mの透色、0.5mの白透色、黒透色、乳白色、茶色の粒	中	○	良好		
	140	6区B黒色土下層	鉢	胴部～頸部	－	－	－	櫛状貼付→条痕→沈線文、押引文、貝殻刺突、ナデ	横位の条痕→ナデ	にぶい橙(7.5YR6/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	0.1～0.5mの白透色、灰白色、灰白、黒褐色、透明の粒	中	×	良好	底（外面）	
	141	6区B黒色土下層	鉢	口縁端部～	－	－	－	条痕→沈線文→ナデ	横位の条痕	にぶい黄橙(10YR6/3)	褐灰(7.5YR4/1)	0.1～0.5mの透色、0.5～1mの白透色、灰白、茶色、中の透色の粒	中	×	良好	底（外面）	
	142	6区B黒色土下層	鉢	口縁部～頸部	－	－	－	爪形貼付→沈線文、調文→ナデ	条痕	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1mの透色、0.5～1mの白透色、黒褐色、灰白、茶色、灰色の粒	中	×	良好		
	143	7区A－1	鉢	口縁端部	－	－	－	沈線文→貝殻刺突→ナデ	ナデ	にぶい橙(5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	0.1mの透色、0.5～1mの灰白、黒褐色、白透色、乳白色の粒	中	○	良好	底	
	144	6区B黒色土上層	鉢	口縁部～	－	－	－	横位の浅い北縁文、→ナデ	横位の条痕	黒褐(7.5YR3/1)	橙(7.5YR4/4)	0.1～0.5mの透色、白透色、灰白の粒	多	△	良好	底（内面）	
	145	6区黒色土下層	鉢	口縁端部～	－	－	－	縦位の北縁文→条痕	貝殻条痕→ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR4/3)	0.1～0.5mの透色、白透色、中、黒褐色、1mの灰白の粒	中	○	良好	底（内面）	
34	146	6区B黒色土下層	鉢	口縁部～頸部	－	－	－	貝殻条痕→刺突→ナデ	貝殻条痕	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	0.1～0.5mの透色、黒透色、灰白、乳白色、茶色の粒	中	×	良好		
	147	表採	鉢	口縁部～頸部	－	－	－	爪形貼付→貝殻条痕→沈線文、刺突→ナデ	横位の貝殻条痕	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1mの透色、0.5～1mの灰白色、白透色、茶色、黒色、赤色の粒	中	×	良好	底（外面）	
	148	6区B黒色土下層	鉢	口縁部～頸部	－	－	－	爪形貼付→貝殻条痕→櫛描→沈線文、刺突→ナデ	横位の貝殻条痕	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)	0.1～0.5mの透色、黒褐色、白透色、灰白、灰色の粒	中	×	良好	底	
	149	表採	鉢	口縁端部～	－	－	－	条痕→刺突→ナデ	条痕→ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	明黄褐(10YR6/6)	0.1～0.5mの透色、黒透色、灰白、乳白色の粒	中	×	良好	底	
	150	6区I黒色土下層	鉢	底部	－	－	－	条痕→刺突、ナデ	横位の貝殻条痕	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	0.1mの透色、0.5～1mの灰白色、白透色、灰色、黒透色、灰色の粒	中	×	良好	底（外面）	

土器観察表（6）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm） 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
34	151	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁部~胴部	–	–	–	突帯貼付→貝殻条痕→刺突→ナデ	横位の貝殻条痕	橙(5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、乳白色、灰白の粒	中	×	断面	煤
	152	6区Ⅰ 黒色土下層	鉢	口縁部~胴部	–	–	–	突帯貼付→貝殻条痕→刺突、円形刺突→ナデ	横位の条痕	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、灰白、乳白色の粒	中	○	断面	煤
	153	6区82番 黒色土層	鉢	口縁部~胴部	–	–	–	突帯貼付→貝殻条痕→押引文→沈線文→ナデ	条痕→横位のナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	橙(5YR6/6)	0.1~1㎜の透色、黒透色、白透色、灰白、乳白色、2㎜の茶色、赤褐色の粒	多	×	断面	
	154	6区81番 黒色土層	鉢	口縁部~胴部	–	–	–	突帯貼付→横位の条痕→押引文→ナデ	横位の条痕→ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1~1㎜の透色、黒透色、白透色、乳白色、茶色、灰白の粒	多	△	断面	
	155	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁部~	–	–	–	条痕→押引文	貝殻条痕→ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/3)	0.1~1㎜の透色、黒透色、灰白、乳白色、2㎜の茶色の粒	多	○	断面	煤（外面）
	156	6区11番 黒色土下層	鉢	口縁部~胴部	–	–	–	突帯貼付→横位の条痕→押引文→ナデ	横位の貝殻条痕	にぶい赤褐(5YR4/4)	明赤褐(5YR5/6)	0.1~1㎜の透色、黒透色、灰白、灰色、1~2㎜の茶色の粒	多	△	断面	煤（外面）
	157	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁部~胴部		–	–	突帯貼付→条痕→押引文→ナデ	横位の貝殻条痕	赤褐(5YR4/6)	にぶい褐(7.5YR5/3)	0.1~1㎜の透色、黒透色、灰白、乳白色、茶色、白透色の粒	多	×	断面	
	158	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	口縁部~胴部		–	–	突帯貼付→横位の条痕→押引文、沈線文→ナデ	横位の貝殻条痕	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.1~1㎜の透色、黒透色、乳白色、灰白、黄色、暗茶褐色、灰色の粒	多	×	断面	煤（外面）
	159	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	胴部	–	–	–	突帯貼付→沈線文、縄文→ナデ	条痕→ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	橙(7.5YR6/6)	0.1~1㎜の透色、黒透色、灰白、茶色の粒	多	×	断面	
35	160	3区 黒色上層	鉢	口縁部	–	–	–	頸部：磨消縄文→沈線 口縁部：ヘラ磨き 胴部：刺突	丁寧なナデ	明赤褐(5YR5/6)	褐(7.5YR4/4)	0.1㎜の透色、0.1~1㎜の白透色、灰色、黒透色、乳白色、茶色、褐色、暗茶褐色の粒	中	△	断面	
	161	3区 黒色上層	鉢	頸部	–		–	横位の沈線文→斜位の刺突、縄文→ナデ	丁寧なナデ	黒褐(7.5YR3/1)	明赤褐(5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5~2㎜の灰白、0.5㎜の白透色、乳白色の粒	中	○	断面	
	162	3区 黒色土層	鉢	口縁部~胴部	–		–	口縁部：横位の沈線文→縄文、竹状刺突→ナデ（膨） 胴部：丁寧な磨き	条痕→磨き	灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰色の粒	少	○	断面	
	163	3区 黒色土層	鉢	口縁端部~	–		–	横位の沈線文→縄文→ナデ、磨き	丁寧なナデ	灰黄褐(10YR5/2)	灰黄褐(10YR5/2)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の灰白、茶色、黒透色、白透色の粒	少	△	断面	
	164	3区 黒色土層	鉢	口縁端部	–	–	–	横位の沈線文→磨き	磨き	にぶい褐(7.5YR5/3)	にぶい褐(7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、黄透色の粒	中	△	断面	
	165	3区 黒色土層	鉢	口縁端部~	–	–		横位の沈線文→磨き	丁寧な磨き	にぶい黄褐(10YR5/4)	にぶい黄褐(10YR5/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、黄透色の粒	少	△	断面	
	166	3区 黒色土層	鉢	口縁端部	–	–	–	横位の沈線文→縄文、刺突、→ナデ、磨き	条痕→ナデ	黒褐(10YR3/2)	褐灰(10YR4/1)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、灰白の粒	少	○	断面	
	167	7区A－Ⅰ	鉢	口縁端部~	–	–	–	横位のやや浅い沈線文→丁寧な磨き	ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.1~0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、茶色、暗茶褐色の粒	中	○	断面	
	168	7区A－Ⅰ	鉢	口縁部	–	–	–	口縁部：丁寧なナデ 頸部：沈線文→ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい褐(7.5YR6/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、灰色、灰白、茶色の粒	中	○	断面	煤
	169	6区 黒色土下層	鉢	口縁端部~	–	–	–	横位の沈線文→縄文→丁寧な磨き	条痕→横位のナデ	褐(7.5YR4/3)	灰褐(7.5YR6/1)	0.1~0.5㎜の透色、黒透色、白透色、茶色、灰白の粒	中	△	断面	
	170	7区A－Ⅱ	鉢	口縁端部~胴部		–	–	条痕→横位の浅い沈線文→磨き	条痕→横位の丁寧なナデ	褐(7.5YR4/3)	黒(7.5YR2/1)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	171	7区A－Ⅰ	鉢	口縁部		–	–	口縁部：横位、胴部：横位の磨き	横位の磨き	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、暗茶褐色、灰白の粒	中	○	断面	
	172	3区 黒色上層	鉢	頸部~胴部	–		–	横位の沈線文→円形押圧、磨き、刺突→ナデ	条痕→ナデ	黒褐(7.5YR2/2)	黒褐(10YR3/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、白透色、赤褐色の粒	中	×	断面	煤（外面）
	173	3区 黒色上層	鉢	胴部	–		–	横位の沈線文→円形押圧、磨き、刺突→ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	灰褐(7.5YR4/2)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	中	○	断面	
	174	3区 黒色土層	鉢	胴部	–	–		横位の沈線文→円形押圧、磨き、刺突→ナデ	条痕→ナデ	橙(5YR6/6)	灰褐(5YR4/2)	0.1~0.5㎜の白透色、灰白、黒透色、乳白色の粒	中	○	断面	
	175	3区 黒色土層	鉢	胴部	–	–	–	横位の沈線文→円形押圧、磨き、刺突→ナデ	条痕→ナデ	褐(7.5YR4/3)	褐(7.5YR4/3)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、灰白、灰色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	176	3区 黒色土層	鉢	頸部~胴部	–	–	–	横位の沈線文→刺突→ナデ	条痕	黒褐(10YR3/2)	にぶい黄褐(10YR4/3)	0.1~0.5㎜の透色、白透色、0.5~1㎜の灰白、茶色の粒	中	△	断面	
	177	3区 黒色土層	鉢	胴部	–	–	–	横位の沈線文→円形押圧、縄文→ナデ	条痕→ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	0.1~0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白の粒	中	×	断面	
	178	3区 黒色土層	鉢	胴部	–	–	–	横位の沈線文→円形押圧、縄文→ナデ	条痕	にぶい赤褐(5YR4/4)	灰褐(5YR4/2)	0.1~0.5㎜の白透色、黒透色、灰白の粒	中	×	断面	
36	179	3区 黒色上層	鉢	頸部~胴部	–	–	–	横位の沈線文→縄文→丁寧な磨き	丁寧なナデ	黒(7.5YR2/1)	褐灰(7.5YR5/1)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の灰白、茶色、白透色の粒	少	○	断面	
	180	7区A－Ⅱ	鉢	胴部	–	–	–	横位の沈線文→縄文→ナデ	横位の条痕→ナデ	黒褐(7.5YR3/1)	灰褐(7.5YR5/2)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の灰白、白透色、黒透色の粒	中	○	断面	煤（外面）

土器観察表（7）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）口径	器高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
36	181	3区 黒色土層	鉢	胴部		−	−	横位の沈線文→縄文→丁寧なナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、白透色、灰白、茶色、乳白色の粒	中	△	断面	
	182	6区Ⅲ 黒色土下層	鉢	胴部		−	−	横位の沈線文→縄文→丁寧なナデ	丁寧なナデ	灰褐(7.5YR4/2)	明褐(7.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、灰白、赤褐色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	183	3区 黒色土層	鉢	胴部		−	−	横位の沈線文→縄文→ナデ	ナデ	黒褐(5YR3/1)	にぶい赤褐(5YR4/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、白透色、茶色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	184	4区 耕作土層	鉢	胴部		−	−	横位の沈線文→縄文刺突→ナデ	ナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	赤褐(5YR4/6)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白の粒	少	○	断面	煤（外面）
	185	4区 耕作土層	鉢	胴部	−	−	−	横位の沈線文→縄文→ナデ	条痕	にぶい褐(7.5YR5/3)	黒褐(10YR3/2)	0.1～1㎜の透色、白透色、黒透色、灰白、乳白色の粒	中	△	断面	煤（外面）
	186	4区 耕作土層	鉢	口縁部		−	−	浅い沈線文→縄文→ナデ	条痕→ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、茶色の粒	中	×	断面	
	187	4区 耕作土層	鉢	胴部	−	−	−	貝殻条痕	貝殻条痕→ナデ	にぶい赤褐(5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR6/3)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、灰白、黒透色、乳白色の粒	中	×	断面	
	188	3区 黒色土層	鉢	胴部	−	−	−	沈線文→縄文→ナデ	ナデ	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	黒褐(10YR3/2)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、1～2㎜の灰白、茶色の粒	中	△	断面	煤（外面）
	189	6区 表採	鉢	胴部	−	−	−	貝殻条痕	条痕→ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	褐灰(7.5YR6/1)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、乳白色、灰色の粒	中	○	断面	
	190	7区A−Ⅰ	鉢	口縁部～胴部	−	−	−	斜位、横位の沈線文、刺突→ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	黒褐(7.5YR3/1)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、白透色、灰白の粒	中	△	断面	煤
	191	6区 黒色土層	鉢	口縁部1/8	−	−	−	沈線、凹線→ナデ	ナデ	橙(2.5YR6/6)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	0.1～1㎜の透色、黒透色、乳白色、灰色、灰白、茶色の粒	中	○	反転	
	192	4区 耕作土層	鉢	口縁部～胴部	−	−	−	浅い沈線文→ナデ 端部：円形押圧	条痕→ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	明赤褐(5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、灰色、黒透色の粒	中	△	断面	
	193	4区 耕作土層	鉢	口縁部～胴部	−	−		条痕→沈線文→ナデ 端部：刺突	条痕→ナデ	橙(5YR6/6)	褐灰(10YR4/1)	0.1～1㎜の透色、黒透色、白透色、灰白の粒	多	×	断面	
	194	6区 表採	鉢	胴部	−	−	−	やや浅い沈線文→ナデ	条痕→ナデ	明赤褐(2.5YR5/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰白、乳白色の粒	中	△	断面	
	195	4区 耕作土層	鉢	口縁端部～	−	−		棒状工具による刺突→ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR6/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、灰白、茶色の粒	多	○	断面	
	196	4区 耕作土層	鉢	胴部	−	−	−	沈線文、棒状工具による刺突→ナデ	条痕→ナデ	明褐灰(7.5YR7/2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、灰白、茶色、乳白色の粒	中	○	断面	
37	197	7区A−Ⅰ	鉢	口縁部～胴部	−	−	−	粗雑な浅い沈線文→ナデ	条痕→ナデ	褐灰(10YR4/1)	にぶい黄橙(10YR6/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、灰色、白透色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	198	3区 黒色土層	鉢	胴部	−	−	−	爪形状工具による刺突→ナデ	条痕→ナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	暗赤褐(5YR3/3)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	中	○	断面	煤
	199	6区Ⅰ 黒色土下層	鉢	胴部	−		−	浅い沈線文、刺突→ナデ	条痕→ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	灰褐(7.5YR4/2)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	中	△	断面	煤（内面）
	200	3区 黒色土層	鉢	頸部又は胴部		−	−	横位の浅い沈線文→縄文→ナデ	丁寧なナデ	黒褐(7.5YR3/1)	黒褐(10YR3/2)	0.1～1㎜の透色、白透色、茶色の粒	多	○	断面	
	201	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	胴部		−	−	条痕→やや浅い沈線文→ナデ	貝殻条痕→ナデ	黄灰(2.5YR4/1)	褐灰(10YR5/1)	0.1～1㎜の透色、黒透色、乳白色、灰白、1～3㎜の茶色、5㎜の暗茶褐色の粒	多	○	断面	煤（外面）
	202	3区 黒色土層	鉢	胴部	−	−	−	浅い沈線文→ナデ	丁寧なナデ	にぶい褐(2.5YR5/4)	にぶい褐(2.5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、灰白の粒	中	○	断面	煤（外面）
	203	−	鉢	口縁部	−	−	−		−	−	−	−	−	−	断面	
	204	3区 黒色土層	鉢	胴部	−	−	−	横位の沈線文→ナデ	丁寧なナデ	褐(7.5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	0.1～1㎜の透色、白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	多	×	断面	
	205	3区 黒色土層	鉢	胴部	−	−	−	横位の沈線文→ナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	0.1～1㎜の白透色、黒透色、褐色、茶褐色の粒	中	△	断面	煤（外面）
	206	7区A−Ⅱ	鉢	胴部	−	−		条痕→貝殻刺突→ナデ	条痕→ナデ	灰褐(7.5YR4/2)	にぶい赤褐(5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、乳白色、灰白の粒	中	○	断面	
	207	6区 黒色土層	壺	口縁端部～底部1/3	12.6		7.4	沈線→ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	0.1～1㎜の白透色、透色、黒透色、褐色、茶色、灰白の粒	多	△	反転	[illegible](5YR4/1)
	208	7区A−Ⅰ	鉢	胴部	−		−	貝殻条痕	条痕→指圧痕	にぶい赤褐(5YR4/3)	にぶい赤褐(5YR4/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、灰白、2㎜の赤褐色の粒	中	○	断面	煤（外面）
	209	7区A−Ⅰ	鉢	胴部		−	−	貝殻条痕	丁寧なナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	210	6区Ⅲ 黒色土上層	鉢	胴部		−	−	横位の浅い沈線文、端部：斜沈線文→ナデ	条痕→ナデ	黒褐(7.5YR3/1)	褐(7.5YR4/3)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、1㎜の白透色、灰白、茶色、赤褐色の粒	多	○	断面	煤（外面）

土器観察表（8）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	含量	焼成	実測面	備考
					口径	高	底部径	表	裏	表	裏					
	211	7区A－Ⅰ	鉢	胴部又は頸部	－	－	－	突帯貼付→刻目→横位の沈線文	丁寧なナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄褐(10YR5/3)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、黒透色、灰白、茶色、暗茶褐色の粒	中	△	断面	
	212	6区Ⅱ 黒色土下層	鉢	胴部	－	－	－	突帯貼付け→ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5～2mmの茶色、赤褐色、灰色の粒	中	△	断面	
	213	4区 耕作土層	鉢	口縁端部～	－	－	－	突帯貼付→櫛状工具による刺突→ナデ	条痕→ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい褐(7.5YR5/4)	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	中	△	断面	
	214	4区 耕作土層	鉢	口縁端部	－	－	－	横位の条痕、沈線文	条痕	にぶい赤褐(5YR4/3)	明赤褐(5YR5/6)	0.mmの透色、0.5～3mmの白透色、黒透色、茶色、黄透色、灰色の粒	多	○	断面	
	215	3区 黒色土層	鉢	頸部	－	－	－	横位の浅い多重沈線文	ナデ	橙(5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	0.1mmの透色、0.5～1mmの黒透色、白透色、灰色の粒	中	△	断面	
38	216	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/8	－	－	12.2	底部：指ナデ	底部：指ナデ	橙(5YR6/6)	浅黄(2.5YR7/4)	0.1mmの透色、0.5～1mm白透色、黒透色、茶色、灰白、乳白色の粒	少	△	反転	
	217	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/8	－	－	12.6	沈線又は叩き	底部：指ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、乳白色、赤褐色、茶色、黒透色の粒	少	△	反転	
	218	6区 黒色土下層	甕	底部1/12	－	－	11.2	底部：指ナデ	底部：指ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、0.5～1mmの乳白色、褐色の粒	中	△	反転	
	219	6区30番 黒色土下層	甕	底部3/4	－	－	10.4	底部：指ナデ	底部：条痕	橙(5YR6/6)	黒褐(10YR3/1)	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの乳白色、褐色、灰色、茶色の粒	中	△	反転	
	220	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部			－	網代底→ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	0.1～1mmの透色、白透色、灰白、暗茶褐色の粒	中	×	断面	
	221	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部	－		－	網代底→ナデ	ナデ	黄橙(7.5YR8/8)	にぶい赤褐(5YR5/4)	0.1～1mmの黒透色、白透色、灰白の粒	中	△	断面	
	222	6区 黒色土下層	甕	底部1/8	－		8.2	底部：指ナデ	底部：条痕	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄褐(10YR5/4)	0.1mmの透色、0.1～1mm灰白、乳白色、黒透色、茶色の粒	中	△	反転	煤
	223	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/12	－	－	8.0	沈線文	底部：指ナデ	赤褐(5YR4/6)	黒褐(5YR3/1)	0.1mmの透色、0.5～1mmの灰白、灰色、赤褐色、乳白色の粒	中	△	反転	煤
	224	4区 耕作土層	甕	底部1/8	－	－	9.6	底部：指ナデ	底部：指ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	0.5～1mmの灰色、白色、茶色、茶褐色、褐色の粒	多	×	反転	
	225	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部1/3	－	－	8.4	底部：条痕→ナデ 底：指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐(5YR5/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	0.1～1mmの透色、白透色、黒透色、褐色、灰色、乳白色、茶色の粒	中	△	反転	
	226	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部1/8	－	－	8.2	条痕	底部：指ナデ	にぶい赤褐(5YR4/4)	黒褐(10YR3/1)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、灰白の粒	中	△	反転	
	227	4区 耕作土層	甕	底部	－	－	7.1	底部：指ナデ	底部：指ナデ	橙(5YR6/6)	灰(5Y4/1)	0.5mmの乳白色、白透色、茶色、褐色、灰色の粒	中	△	反転	煤
	228	6区 黒色土下層	甕	底部1/10	－	－	7.1	底部：指ナデ	底部：条痕	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	0.1mmの透色、0.5～1mmの乳白色、白透色、黒透色、赤褐色、灰白の粒	中	△	反転	
	229	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部1/4	－	－	5.9	底部：指ナデ	底部：条痕	橙(5YR6/8)	にぶい黄褐(10YR5/8)	0.1～0.5mmの透色、白透色、乳白色、灰色、黒透色、黒色、褐色の粒	多	△	反転	
	230	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部	－	－	6.0	底部：指ナデ	底部：指ナデ	橙(7.5YR6/8)	明黄褐(10YR7/6)	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透色、黒透色、乳白色、灰色、茶色の粒	多	△	反転	
	231	4区 耕作土層	甕	底部	－	－	5.3	脚部：指ナデ	底部：指ナデ	明赤褐(5YR5/6)	黒褐(2.5YR3/2)	0.1～1mmの透色、黒透色、乳白色、茶色、灰白の粒	多	△	反転	
	232	6区－Ⅰ 黒色土下層	甕	底部	－	－	－	指ナデ	－	にぶい橙(7.5YR6/4)	褐灰(7.5YR5/1)	0.5～2mmの灰色、茶色、褐色、茶色、乳白色の粒	多	△	反転	
	233	4～7区 黒色土下層	甕	底部1/12			－	底部：指ナデ	底部：指ナデ	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1mmの透色、0.5～1mmの黒透色、白透色、灰白、乳白色の粒	中	△	反転	
	234	6区 黒色土下層	甕	底部1/2	－	－	8.0	底部：指ナデ	底部：指ナデ、指押サエ	にぶい黄褐(10YR5/3)	明褐(7.5YR5/8)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、黒透色、灰白、灰色の粒	中	△	反転	
	235	7区A－Ⅱ 黒色土層	甕	底部1/2	－	－	6.9+α	底部：指ナデ	底部：指ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	灰褐(7.5YR6/2)	0.1mmの透色、0.5mmの灰白、乳白色、茶色、赤褐色の粒	中	○	反転	
	236	6区 黒色土下層	甕	底部	－	－	－	沈線、刺突→ナデ	指ナデ	橙(7.5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、褐色、黒色、乳白色の粒	多	△	反転	
39	237	3区 黒色土上層	甕	口縁部1/4	－	－	－	ナデ	貝殻条痕→ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	にぶい黄(2.5YR6/3)	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、褐色、茶色の粒	中	○	反転	
	238	6区－Ⅲ 黒色土上層	甕	口縁部1/6	－	－	－	口縁部：ナデ 頸部：短沈線文	ナデ	橙(5YR6/6)	黒褐(5YR3/1)	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透色、黒透色、灰色、白色、暗褐色の粒	少	○	反転	
	239	6区 黒色土上層	甕	口縁部～底部1/2	24.0	－	－	口縁部：突帯貼付→貝殻刺突 体部：条痕	指ナデ、指押サエ	にぶい橙(5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	0.1～1mmの白透色、黒透色、灰色、褐色、茶色、白色の粒	多	×	反転	出土状況図有
	240	6区 黒色土上層	甕	口縁部	－	－	－	口縁：横ナデ 体部：ヘラ磨き	ヘラ磨き、指ナデ	赤灰(2.5YR4/1)	赤(10YR5/6)	0.5mmの白透色、黒透色、1～2mmの茶色、乳白色の粒	中	○	断面	

土器観察表（9）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm） 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
39	241	6区−Ⅲ 黒色土上層	鉢	口縁部1/6	−	−	−	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	黒褐 (7.5YR3/2)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	0.1mmの透色、0.1〜1mmの褐色、白透色、黒透色、1mmの茶色、暗茶褐色の粒	多	△	反転	煤（外面）
	242	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	口縁部：条痕 体部：指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、灰白、乳白色の粒	中	△	断面	煤
	243	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	暗赤褐 (5YR3/2)	0.1mmの透色、0.5〜2mmの灰白、黒透色、茶色の粒	多	△	断面	煤
	244	6区 黒色土下層	甕	口縁部	−	−	−	突帯貼付→ナデ	指ナデ	黒褐 (10YR3/2)	赤褐 (5YR4/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、褐色、白色、茶色、黒透色、暗茶褐色、乳白色の粒	中	△	断面	
	245	6区 黒色土層	甕	口縁部	−			指ナデ	指ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/8)	0.1mmの透色、0.5〜1mmの白透色、乳白色、灰白、茶色の粒	多	△	断面	煤
	246	表採	甕	口縁部	−	−	−	条痕	条痕	褐灰 (10YR4/1)	黒褐 (10YR3/1)	0.1〜0.5mmの透色、白透色、黒透色、褐色、黒色の粒	中	×	断面	
40	247	4区 耕作土層	甕	口縁部1/11	32.8	−	−	ヘラ磨キ	指ナデ、指押サエ	橙 (5YR6/8)	赤褐 (5YR4/8)	0.1〜1mmの透色、白透色、黒透色、灰白、赤褐色の粒	多	×	反転	
	248	6区 黒色土層	甕	口縁部1/3	21.7	−	−	ハケ又は条痕	ヘラ磨キ	赤褐 (2.5YR4/8)	暗赤褐 (5YR3/2)	0.1〜0.5mmの透色、白透色、1mmの茶色、乳白色の粒	中	○	反転	
	249	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	28.5	−		指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	1mmの白透色、黒透色、灰白、灰色の粒	多	×	反転	
	250	7区 黒色土層	甕	口縁部1/5	21.0	−	−	横ナデ	指ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	橙 (7.5YR6/6)	0.1〜0.5mmの透色、白透色、黒透色、灰色、灰白の粒	多	○	反転	煤
	251	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	口縁部：指ナデ、体部：ハケ	指ナデ	暗赤褐 (2.5YR3/6)	暗赤褐 (5YR3/2)	0.5〜1mmの白透色、灰白の粒	中	○	断面	
	252	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	ヘラ削り	指ナデ	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	黒褐 (10YR3/2)	0.1〜1mmの白透色、黒透色、乳白色、茶色の粒	多	○	断面	
	253	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	暗赤灰 (2.5YR3/1)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.5〜1mmの白透色、黒透色、1.5mmの茶色の粒	多	△	断面	
	254	6区 黒色土層	甕	口縁部周辺	−	−	−	指ナデ	指ナデ	赤褐 (2.5YR4/8)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	1mmの白透色、黒透色、1〜3mmの乳白色、茶色の粒	多	○	断面	端部上に穴有
41	255	6区 黒色土層	甕	口縁部1/5	19.0	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	1〜3mmの茶色、灰白の粒	多	×	反転	
	256	7区 黒色土層	壺	口縁部	16.2	−	−	横ナデ	横ナデ	−	−	−		×	反転	
	257	7区 黒色土層	壺	口縁部1/6	14.5	−	−	口縁部：指ナデ、体部：ハケ	指ナデ	橙 (2.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	1〜3mmの灰色、灰白の粒	多	○	反転	
	258	6区 黒色土層	壺	頸部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5〜2mmの透色、灰白、黒透色、茶色の粒	多	×	反転	
	259	7区 黒色土層	壺	口縁部1/18	43.6	−	−	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ磨キ	口縁部：指ナデ、体部：指ナデ	橙 (7.5YR6/8)	浅黄橙 (10YR8/4)	1〜2mmの透色、灰色、黒透明、茶色の粒	多	○	反転	
	260	6区 黒色土層	皿	口縁部1/2	15.6	−	−	指ナデ	指ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR6/8)	0.5〜1mmの乳白色、灰白、灰色、茶色、黒色の粒	多	×	反転	
	261	6区 黒色土層	底部	底部	−	−	6.0	指ナデ	指ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR6/8)	0.5〜1mmの乳白色、灰白、灰色、茶色、黒色の粒	多	×	反転	
	262	6区Ⅲ 黒色土下層	−	胴部	−	−	−	ハケ→線刻	ハケ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1mmの透色、黒透色、0.5mmの白透色、灰白、1mmの茶色、乳白色の粒	少	○	断面	
42	263	4区 耕作土層	甕	口縁部1/14	49.2	−	−	指ナデ	指ナデ	橙 (2.5YR6/8)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1mmの透色、0.5〜1mmの白透色、黒透色、茶色の粒	多	○	反転	
	264	6区 黒色土層	甕	口縁部1/3	33.0	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	橙 (7.5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、黒透色、灰白、赤褐色、灰色の粒	中	△	反転	煤
	265	6区 黒色土層	甕	口縁部1/9	28.2	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	橙 (7.5YR7/6)	0.5〜1mmの白透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	中	△	反転	煤（外面）
	266	6区、7区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	明褐 (7.5YR5/8)	0.5〜1mmの白透色、黒透色、乳白色、茶色、灰色の粒	多	△	反転	煤
	267	6区 黒色土層	甕	口縁〜体部1/2	24.4	−	−	口縁部：指ナデ 体部：指ナデ	口縁部：指ナデ、体部：指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1mmの透色、0.1〜0.5mmの黒透色、白透色、灰白、茶色、褐色の粒	多	△	反転	煤
	268	6区 黒色土層	甕	口縁部1/10	25.6	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/8)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.5〜1mmの白透色、黒透色、灰白、乳白色、茶色の粒	多	×	反転	
	269	6区 黒色土層	甕	口縁部1/11	22.8	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	明赤褐 (5YR6/6)	0.1〜0.5mmの白透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	多	×	反転	
	270	6区 黒色土層	甕	体部		−	−	口縁部：指ナデ 体部：指ナデ	指ナデ、指押サエ	浅黄橙 (10YR8/4)	黒褐 (10YR3/1)	0.5〜1mmの透色、白透色、黒透色の粒	多	△	反転	

土器観察表（10）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
43	271	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	23.5	−	−	横ナデ	指ナデ、指押サエ	黄橙 (10YR8/6)	暗褐 (10YR3/3)	0.1～1㎜の透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	多	△	反転	
	272	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	横ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、乳白色の粒	中	△	反転	
	273	6区 黒色土層	甕	口縁部2/3	20.2	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい褐 (7.5YR4/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色の粒	多	△	反転	煤
	274	6区 黒色土層	不明	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	黒褐 (7.5YR3/2)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	多	○	反転	煤
	275	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の白透色、透色、2㎜の乳白色の粒	中	○	断面	突帯は5つか
	276	6区 黒色土層	不明	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR7/8)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の乳白色、灰白の粒	中	○	断面	煤
	277	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	横ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR8/6)	0.5㎜の白透色、黒透色、灰白、2㎜の茶色の粒	中	○	断面	
	278	6区 黒色土層	甕	体部	−		−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい褐 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、白透色、乳白色の粒	中	△	断面	煤
	279	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (5YR6/6)	0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、1㎜の茶色、乳白色の粒	少	△	断面	煤
	280	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	横ハケ	指ナデ、指押サエ	浅黄橙 (10YR8/3)	黄灰 (2.5Y5/1)	0.1～0.5㎜の透色、1㎜の黒透色、白透色の粒	中	△	断面	
	281	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5～1.5㎜の白透色、茶色、黒透色、乳白色の粒	中	○	断面	
	282	7区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	口縁部：指ナデ 体部：横ハケ	指ナデ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/3)	1～1.5㎜の黒透色、乳白色、灰白、白透色の粒	多	○	断面	突帯は2つか
	283	7区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	0.5～1㎜の白透色、黒透色、2～4㎜の茶色の粒	多	○	断面	煤
	284	6区 黒色土層	甕	口縁部1/8	−	−	−	横ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.5㎜の透色、黒透色、白透色、1㎜の乳白色の粒	中	△	断面	
	285	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	23.5	−	−	横ナデ	横ナデ	明赤褐 (5YR5/8)	褐 (7.5YR4/3)	0.1～1㎜の透色、黒透色、2㎜の灰白の粒	多	×	反転	摩滅、煤（外面）つなぎ目の観察がよくできる。
	286	6区 黒色土層	甕	口縁部1/10	21.2	−	−	横ナデ	指ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	0.5～1㎜の透色、黒透色の粒	中	○	反転	
	287	6区 黒色土層	甕	口縁部	17.4	−	−	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ磨キ	指ナデ	橙 (5YR7/6)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色の粒	中	○	反転	煤
	288	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	横ナデ	—	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR6/8)	0.5～1㎜の灰色、白透色、茶色、暗茶褐色、乳白色の粒	多	×	断面	摩滅、煤
	289	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ磨キ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄 (2.5Y7/4)	0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	少	○	断面	煤
	290	7区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	口縁部：指ナデ、ヘラ削り 体部：ヘラ磨キ	口縁部：指ナデ 体部：ハケ	黒褐 (7.5YR3/1)	褐灰 (7.5YR4/1)	0.1～0.5㎜の透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	291	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	黒褐 (7.5YR3/2)	黒褐 (10YR3/2)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、1㎜の茶色、乳白色の粒	中	○	断面	
	292	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	0.5㎜の白透色、黒透色の粒	中	○	断面	
	293	7区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.1㎜の透色、0.1～1㎜の黒透色、乳白色、茶色、黒色、褐色の粒	多	○	断面	煤（外面）
44	294	7区 黒色土層	甕	体部	−		−	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	指ナデ、指押サエ	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1㎜の透色、0.5～2㎜の灰白、赤褐色、白透色、黒透色、茶色の粒	多	○	反転	
	295	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	32.4	−	−	丁寧な横ナデ	指ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	0.5～2㎜の赤褐色、茶褐色、黒透色、茶色、乳白色の粒	多	×	反転	上部の突帯の刻み目は摩滅による有無不明
	296	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	30.2	−		口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	指ナデ	灰白 (10YR8/2)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	0.5～2㎜の茶色、黒透色、白透色、乳白色の粒	多	○	反転	
	297	6区、7区 黒色土層	甕	口縁部1/2	30.2	−	−	横ナデ	口縁部：ハケ 体部：指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	0.1㎜の透色、1～3㎜の茶色、暗褐色の粒	多	○	反転	一片のみ別地点から出土、煤
	298	4区 耕作土層	甕	口縁部1/13	27.0	−	−	ハケ	口縁部：ハケ 体部：指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5～2㎜の茶色、赤褐色、暗茶褐色、灰色の粒	多	○	反転	煤
	299	7区 黒色土層	甕	口縁部1/9	20.0	−	−	口縁部：指ナデ 体部：横ナデ	指ナデ	褐 (7.5YR4/4)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、灰色、赤色、赤褐色、白透色の粒	中	×	反転	煤
	300	6区 黒色土層	甕	口縁部1/11	23.5	−	−	指ナデ	指ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.5～1㎜の乳白色、灰色、透色、黒透色、赤褐色、白透色の粒	多	△	反転	煤

土器観察表（11）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底部径	調整及び文様 表	調整及び文様 裏	色 表	色 裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
44	301	6区 黒色土層	甕	口縁部1/10	22.6	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1mmの透色、0.5~1.5mmの茶色、赤褐色、黒透色、白透色、灰白の粒	多	△	反転	
	302	6区 黒色土層	甕	体部	−	−		指ナデ	指ナデ	淡黄 (2.5Y8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5mmの灰白、1~3mmの赤褐色、灰色の粒	多	△	断面	煤
	303	7区 黒色土層	不明	体部	−	−		指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	褐灰 (10YR4/1)	0.1mmの透色、0.5~2mmの灰白、灰色、乳白色の粒	多	○	断面	煤
	304	7区 黒色土層	甕	体部	−	−		横ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	明赤褐 (5YR5/6)	0.5~3mmの茶褐色、灰色、赤褐色、灰白の粒	中	△	断面	突帯はひとつか
45	305	6区 黒色土層	甕	口縁部1/10	21.4	−	−	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	灰白 (10YR8/2)	0.5~1mmの黒色、灰色、灰白、茶褐色の粒	多	△	反転	煤
	306	6区 黒色土層	甕	口縁部1/9	17.2		−	横ナデ	横ハケ	明赤褐 (5YR5/6)	橙 (5YR6/8)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒透色、茶色、赤褐色、白透色の粒	中	△	反転	煤
	307	6区 黒色土層	甕	口縁部1/9	16.9		−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、黒透色、茶色、赤褐色、乳白色の粒	多	○	反転	煤
	308	6区 黒色土層	甕	口縁部1/9	15.8		−	横ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	1mmの灰白、茶色、灰色、白透色の粒	多	△	反転	突帯付甕の口縁部と思われる
	309	7区 黒色土層	甕	口縁部1/4	14.6	−	−	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	指ナデ、指押サエ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5~2mmの黒透色、茶褐色、茶色、赤褐色、灰色、乳白色の粒	多	○	反転	煤
	310	7区 黒色土層	甕	口縁部1/8	16.6	−	−	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.5~3mmの黒透色、灰白、灰色、茶褐色、白透色の粒	多	△	反転	
	311	3区 赤ホヤ上面	甕	口縁部	−	−	−	−	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	0.1~2mmの茶色、灰色、褐色、茶褐色、乳白色、白色の粒	多	×	反転	煤（内面）
	312	6区 黒色土層	甕	口縁部1/14	21.0	−	−	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	1~1.5mmの茶色、灰白、乳白色、灰色、透色の粒	多	△	反転	
	313	6区 黒色土層	甕	口縁部1/15	19.4	−	−	指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	褐灰 (10YR4/1)	0.1mmの透色、1~2mmの灰白、乳白色、茶色、灰色、赤褐色の粒	中	○	反転	
	314	6区 黒色土層	甕	口縁部1/11	20.1	−	−	横ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1~1mmの透色、白透色、黒透色、茶色、赤褐色の粒	少	○	反転	煤
	315	6区 黒色土層	甕	口縁部		−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1mmの乳白色、灰白、灰色、透色の粒	中	△	断面	煤
	316	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	口縁部：横ハケ、指ナデ 体部：指ナデ	指ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	淡赤橙 (2.5YR7/3)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、黒透色、茶色、赤褐色、灰色の粒	中	○	断面	
	317	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−		口縁部：横ハケ、指ナデ 体部：指ナデ	指ナデ	赤黒 (2.5YR2/1)	明褐 (7.5YR5/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、灰白の粒	中	△	断面	
	318	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−		指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1~0.5mmの白透色、茶色、褐色、黒透色の粒	中	△	断面	煤（外面）
	319	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、茶色、灰色、赤褐色、黒透色の粒	多	△	断面	煤
	320	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	0.5mmの黒透色、白透色の粒	少	○	断面	
	321	6区 黒色土層	甕	口縁部	−		−	指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒透色、白透色、茶色、1mmの灰白の粒	少	○	断面	
	322	6区 黒色土層	甕	口縁部1/9	23.6		−	横ナデ	指ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2~4mmの茶色、灰色、0.5mmの黒透色、白透色の粒	多	△	反転	煤
	323	6区 黒色土層	甕	口縁部1/8	23.0	−	−	横ナデ	横ナデ	黒 (7.5YR2/1)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2~4mmの茶色、灰色、0.1mmの透色の粒	中	△	反転	煤
	324	6区 黒色土層	甕	口縁部		−	−	横ハケ、指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	灰黄褐 (10YR6/2)	0.5mmの黒透色、灰白、白透色、乳白色の粒	中	○	断面	
	325	7区 黒色土層	甕	口縁部		−	−	指ナデ	指ナデ	淡橙 (5YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5mmの灰色、茶色、乳白色、白透色、黒透色の粒	中	○	断面	煤
	326	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−		指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1mmの黒透色、茶色、乳白色、白透色の粒	多	△	断面	
	327	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−		指ナデ	指ナデ	橙 (2.5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/6)	0.5~1mmの白透色、黒透色、乳白色、茶色の粒	中	×	断面	
	328	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	横ナデ	ヘラ削り	褐灰 (7.5YR4/1)	褐灰 (10YR4/1)	0.1mmの透色、0.5~1mmの白透色、黒透色、乳白色、灰白、茶色、銅色の粒	中	○	断面	
	329	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.1mmの透色、1~2mmの茶色の粒	中	△	断面	煤
	330	6区 黒色土層	甕	口縁部	−		−	指ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	0.5~1mmの透色、白透色、黒透色、乳白色の粒	中	○	断面	

土器観察表（12）

挿図	図版番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	底	反転	調整及び文様 表	裏	色調 表	裏	胎土	石英	焼成	残存	備考
45	331	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ハケ	指ナデ	黒褐 (7.5YR3/1)	暗赤灰 (2.5YR3/1)	0.1mの透明、1mmの灰白、暗茶褐色の粒	少	○	胴部	煤
46	332	6区 黒色土層	深	口縁部1/11	42.0	—	—	口縁部：横ハケ 体部：横ハケ	口縁部：横ハケ、指押エ 体部：横ハケ、指押エ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	0.1mの透明、0.5mmの白濁色、乳白色、黒褐色、灰色の粒	少	○	反転	煤
	333	6区 黒色土層	深	口縁部1/5	38.0	—	—	口縁部：横ハケ 体部：横ハケ	口縁部：横ハケ 体部：横ハケ、指押エ	赤褐 (5YR4/6)	橙 (5YR4/4)	0.1mの透明、0.5～1mmの灰白、白濁色、2～5mmの茶色の粒	中	○	反転	煤
	334	7区 黒色土層	深	口縁部1/7	36.6	—	—	口縁部：ハケ 体部：ハケ	口縁部：横ハケ 体部：横ハケ	にぶい橙 (7.5YR5/4)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1mの透明、0.5～1mmの白濁色、黒褐色、灰白、茶色の粒	中	○	反転	煤
	335	6区 黒色土層	深	突帯部	強的	—	—	口縁部：指ナデ 体部：横ハケ	口縁部：指ナデ 体部：横ハケ	橙 (7.5YR4/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1～0.5mmの透明、白濁色、黒褐色、灰色、茶褐色、茶の粒	多	○	反転	
47	336	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ナデ ハケ	横ハケ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1mの透明、0.5～1mmの白濁色、黒褐色、乳白色、茶の粒	中	○	断面	煤
	337	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ナデ ハケ	横ハケ	にぶい赤褐 (5YR4/3)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1mの透明、0.5mmの白濁色、黒褐色、灰色の粒	少	○	断面	煤
	338	6区 黒色土層	深	くびれ部	—	—	—	横ハケ、指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1mの透明、黒褐色の粒	少	○	断面	煤
	339	6区、7区 黒色土層	深	口縁部1/7 体部：横ナデ	32.8	—	—	口縁部：横ハケ、指押エ 体部：横ハケ	口縁部：横ハケ、指押エ 体部：横ハケ	明赤 (7.5YR5/6)	明褐 (7.5YR5/6)	0.1～0.5mmの透明、黒褐色、灰色、灯白色、茶色の粒	少	○	反転	
	340	6区、7区 黒色土層	深	口縁部	31.6	—	—	L1縁部：横ハケ、指押エ、指ナデ 体部：横ハケ、指ナデ	L1縁部：横ハケ、指押エ、指ナデ 体部：横ハケ、指ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	0.1～0.5mmの透明、黒褐色、灯白色の粒	少	○	反転	
	341	6区 黒色二層	深	口縁部1/10	35.8	—	—	ハケ	横ハケ	赤褐 (2.5YR4/8)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1mの透色、黒褐色、0.5～2mの茶褐色の粒	少	○	反転	煤
	342	6区 黒色土層	深	口縁部1/12	35.0	—	—	横ハケ、横ナデ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.5mの透色、黒褐色、乳白色の粒	少	○	反転	
	343	6区 黒色土層	鉢	L1縁部1/9	34.0	—	—	L1縁部：横ハケ 体部：ハケ	横ハケ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.1mの透色、1mmの赤褐色、茶色、灰白、白濁色の粒	少	○	反転	
	344	7区 黒色二層	鉢	L1縁部1/7	23.6	—	—	L1縁部：横ハケ 体部：横ハケ	口縁部：横ナデ、指押エ 体部：横ハケ	赤褐 (2.5YR4/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.1～0.5mmの透色、灰白、黒褐色、褐色灰色、乳白色の粒	少	○	反転	煤
	345	3区 包含層	深	突帯部1/6	—	—	—	横ハケ	横ハケ	褐橙 (10YR5/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	0.1～1mmの透色、白濁色、黒褐色、褐色灰色、乳白色の粒	多	△	反転	器（内面）
48	346	4区 整体土層	深	体部	—	—	—	横ハケ	口縁部：横ハケ 体部：横ナデ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1mの透色、1mmの白濁色、灰色、2mmの乳白色の粒	多	○	反転	
	347	6区 黒色土層	深	L1縁部	—	—	—	横ハケ、指ナデ	横ハケ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1～0.5mmの透色、黒褐色、1mmの白濁色、3mmの灰白の粒	少	○	断面	
	348	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	橙 (5YR6/6)	0.1～0.5mmの透色、黒褐色、1mmの灰白、3mmの茶色の粒	中	○	断面	
	349	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ハケ→指ナデ	横ハケ→指ナデ	暗赤灰 (2.5YR2/1)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.1mの透色、0.5mmの灰白、茶色の粒	中	○	断面	煤
	350	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ハケ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1～0.5mmの透色、白濁色、灯白色、1mmの灯色の粒	中	○	断面	
	351	7区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	口縁部：指ナデ 体部：ハケ	口縁部：指ナデ 体部：ハケ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1mの透色、1mmの白濁色、灰色、灰白、灰白の粒	少	○	断面	
	352	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ハケ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1mの透色、0.5～1mmの白濁色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	
	353	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR5/4)	橙 (7.5YR6/6)	0.1mの透色、1mmの白色の粒	少	○	断面	
	354	7区 黒色二層	深	口縁部	—	—	—	ハケ	横ナデ	赤褐 (2.5YR4/8)	赤 (10YR5/6)	0.3mの透色、黒褐色、1～3mmの灰白、茶色の粒	中	○	断面	煤
	355	6区 黒色土層	深	L1縁部	—	—	—	指ナデ	横ハケ	明赤褐 (2.5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.1mの透色、0.5～1mmの白濁色、赤褐色、4mmの灰色の粒	中	○	断面	底
	356	6区 黒色土層	深	L1縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mの透色、0.5mmの白濁色、黒褐色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	
	357	6区 黒色土層	深	L1縁部	—	—	—	指ナデ	ハケ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1～0.5mmの透色、黒褐色、1mmの白濁色、茶褐色の粒	少	△	断面	煤
	358	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	横ハケ	横ハケ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1～0.5mmの透色、黒褐色、灰白の粒	少	○	断面	
	359	7区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/3)	—	—	○	断面	
	360	6区 黒色土層	深	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	暗赤灰 (2.5YR2/1)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1mの透色、0.5mmの乳白色、1mmの茶色の粒	少	○	断面	

土器観察表（13）

挿図	実測番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	石量	焼成	実測図	備考
					口径	高	底径	表	裏	表	裏					
48	361	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	指ナデ	指ナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1㎜の透色、黒透色、1㎜の乳白色、灰白の粒	少	○	断面	
	362	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、灰色の粒	少	○	断面	
	363	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–		指ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.5㎜の白透色、乳白色、茶色、灰白の粒	中	○	断面	
	364	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–		指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	少	○	断面	
	365	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–		指ナデ	指ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の白透色の粒	少	○	断面	
	366	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	指押サエ、指ナデ	指ナデ	赤褐 (2.5YR4/6)	赤褐 (2.5YR5/6)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、灰白、茶褐色の粒	少	○	断面	
	367	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–		口縁部：指押サエ 体部：指ナデ	口縁部：指押サエ 体部：指ナデ	灰褐 (5YR4/2)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の白透色、2～3㎜の茶色の粒	少	○	断面	煤
	368	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、1㎜の灰白、茶色の粒	少	○	断面	煤
	369	4区 耕作土層	甕	口縁部	–		–	横ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	灰赤 (2.5YR4/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、乳白色の粒	少	○	断面	
	370	6区 黒色土層	甕	口縁部	–		–	指ナデ	指ナデ	褐灰 (5YR4/1)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、赤褐色の粒	少	○	断面	
	371	7区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、灰色、茶色の粒	中	△	断面	
	372	6区 黒色土層	甕	口縁部		–	–	指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	暗褐 (7.5YR3/3)	0.1㎜の透色、乳白色、茶褐色の粒	少	○	断面	
	373	6区 黒色土層	甕	口縁部		–	–	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/7)	0.5～1㎜の白透色、灰色、乳白色、茶色の粒	多	△	断面	煤
	374	6区 黒色土層	甕	口縁部		–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1～0.5㎜の白透色、1㎜の白色の粒	中	△	断面	
	375	6区 黒色土層	甕	口縁部		–	–	横ナデ	横ナデ	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、灰色の粒	少	○	断面	
	376	表採	甕	口縁部		–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.5㎜の白透色、黒透色、1㎜の乳白色、茶色の粒	中	○	断面	
49	377	6区 黒色土層	甕	突帯周辺		–	–	口縁部：横ナデ 体部：横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：横ナデ	橙 (2.5YR7/8)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色、灰白、茶色の粒	中	○	反転	煤
	378	6区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	–	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	暗赤褐 (2.5YR3/3)	0.5㎜の透色、灰白、1～3㎜の茶色の粒	中	○	断面	
	379	6区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	横ハケ、指ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、灰白の粒	少	○	断面	
	380	7区 黒色土層	甕	体部	–	–	–	ハケ、指ナデ	ハケ	黒褐 (5YR3/1)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰色、乳白色の粒	少	○	断面	煤
	381	6区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	横ハケ	ハケ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、乳白色、茶褐色の粒	中	○	断面	
	382	7区 黒色土層	甕	突帯部	–	–		ハケ	横ハケ	明赤褐 (5YR5/6)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5～1㎜の灰白、3㎜の茶色の粒	中	○	断面	
	383	7区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	ハケ	横ハケ	褐灰 (5YR4/1)	赤 (10YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、白透色、茶色の粒	少	○	断面	
	384	6区 黒色土層	甕	突帯部	–		–	横ハケ、指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、茶色の粒	少	×	断面	
	385	6区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	横ハケ	指ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色、灰色の粒	少	△	断面	
	386	7区 黒色土層	甕	突帯部		–	–	横ハケ	指ナデ	褐灰 (7.5YR4/1)	赤褐 (5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、灰白、2㎜の茶色の粒	中	○	断面	
	387	6区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	横ハケ	指ナデ	暗赤褐 (2.5YR3/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、乳白色、3～5㎜の灰白の粒	少	○	断面	煤
	388	7区 黒色土層	甕	突帯部	–	–	–	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	明褐 (7.5YR5/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の白透色、乳白色の粒	少	△	断面	煤
	389	6区 黒色土層	甕	突帯部周辺	–	–	–	横ハケ	指ナデ	褐 (7.5YR4/4)	浅黄橙 (7.5YR5/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の乳白色、白透色の粒	少	○	断面	煤
	390	6区 黒色土層	甕	突帯部	–	–		口縁部：ハケ 体部：指ナデ	指ナデ	赤褐 (5YR4/6)	黒褐 (5YR2/1)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、白透色、茶色、3～5㎜の灰色の粒	中	○	断面	

土器観察表（14）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	色 裏	胎土	石量	焼成	実測区	備考
49	391	6区 黒色土層	甕	突帯部	−	−	−	ハケ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	赤褐 (5YR4/8)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、1～2㎜の灰色、赤褐色、乳白色の粒	少	○	断面	
	392	6区 黒色土層	甕	突帯部	−	−	−	横ハケ	指ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	中	○	断面	
	393	6区 黒色土層	甕	突帯部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	赤褐 (5YR4/6)	0.1～0.5㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、赤褐色、乳白色の粒	中	○	断面	
	394	6区 黒色土層	甕	突帯部		−	−	横ハケ	横ハケ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色の粒	中	×	断面	
	395	6区 黒色土層	甕	突帯部		−	−	横ナデ	指ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR6/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰白の粒	少	△	断面	
	396	6区 黒色土層	甕	体部	−	−	−	横ハケ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	黒褐 (2.5Y3/1)	0.1㎜の透色、1㎜の白透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
50	397	7区 黒色土層	甕	突帯部	−	−	−	横ハケ、指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の白透色、乳白色の粒	少	△	断面	煤
	398	6区 黒色土層	甕	突帯部付近	−		−	横ハケ	横ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の乳白色、白透色、赤褐色の粒	少	○	断面	煤
	399	7区 黒色土層	甕	突帯部	−		−	指ナデ	指ナデ	黒褐 (5YR2/1)	赤褐 (5YR4/6)	0.1～0.5㎜の透色、1㎜の白透色、灰白、3㎜の赤褐色の粒	中	○	断面	
	400	7区 黒色土層	甕	突帯部	−		−	横ナデ	ヘラ削り、指ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5～1㎜の茶色、灰白の粒	少	△	断面	
	401	7区 耕作土層	甕	突帯部	−	−	−	横ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	赤褐 (2.5YR4/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、黒透色、乳白色、3㎜の灰色、茶色の粒	中	○	断面	
	402	7区 黒色土層	甕	突帯部	−	−	−	指ナデ、ヘラ磨キ	指ナデ	赤褐 (2.5YR4/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の乳白色、白透色、灰色の粒	少	○	断面	煤
	403	6区 黒色土層	壺	突帯部	−	−	−	横ハケ	横ナデ	赤 (10R4/8)	橙 (2.5YR7/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5～1㎜の乳白色、茶色の粒	少	○	反転	
	404	7区 黒色土層	壺	体部	12.7	−	−	横ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.1㎜の透色、1㎜の茶色、灰色の粒	少	○	反転	
	405	6区 黒色土層	壺	突帯部	−	−		横ハケ	ハケ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	赤褐 (5YR4/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色の粒	少	○	断面	煤
	406	6区 黒色土層	壺	突帯部	−	−	−	口縁部：横ナデ 体部：横ハケ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の茶色、灰色、灰白の粒	少	○	断面	
	407	6区 黒色土層	壺	突帯部	−	−		口縁部：横ナデ、ヘラ削り 体部：横ナデ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1㎜の透色の粒、0.5～1㎜の灰白、茶色の粒	中	○	断面	
	408	6区 黒色土層	壺	突帯	−	−	−	−	横ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、2㎜の茶褐色の粒	少	○	断面	
	409	6区 黒色土層	壺	口縁部1/7	13.8	−	−	横ハケ	横ハケ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰色、乳白色の粒	中	○	反転	
	410	6区 黒色土層	壺	突帯部	復元 15	−	−	口縁部：横ハケ 体部：横ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤褐 (2.5YR4/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、灰色、灰白、茶色の粒	中	○	反転	
	411	6区 黒色土層	壺	口縁部1/7	21.6	−	−	横ハケ	横ハケ、横ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	0.1㎜の透色、0.5～2㎜の白透色、赤褐色、灰色、灰白の粒	少	○	反転	煤
	412	3区 黒色土層	壺	突帯部1/10	−	−	−	指ナデ	指ナデ	黒褐 (10YR3/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、乳白色、黒透色、茶色の粒	中	○	反転	煤
	413	7区 黒色土層	壺	口縁部1/6	13.0	−	−	口縁部：ハケ 体部：ヘラ状の工具で押圧	横ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の透色、茶色の粒	中	○	反転	
	414	6区 黒色土層	壺	くびれ部	−	−	−	指ナデ	横ハケ、指ナデ	橙 (2.5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色、2～3㎜の茶色の粒	少	○	断面	
	415	7区 黒色土層	壺	口縁部	−	−	−	ハケ	ハケ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (5YR6/6)	0.1～0.5㎜の乳白色、灰色の粒	中	○	断面	
	416	6区 黒色土層	壺	突帯部	−	−		横ナデ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR5/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、茶色、灰白の粒	中	○	断面	煤
	417	6区 黒色土層	壺	突帯部	−	−	−	口縁部：横ナデ 体部：横ナデ	指ナデ	赤褐 (5YR4/8)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1㎜の透色、1㎜の白透色、乳白色、茶色の粒	多	○	断面	
	418	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	横ハケ、指ナデ	横ハケ、指ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、1㎜の乳白色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	419	6区 黒色土層	甕	口縁部	−	−	−	口縁部：横ハケ 体部：ハケ	ハケ	赤黒 (2.5YR2/1)	赤褐 (2.5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色の粒	少	○	断面	煤
	420	6区 黒色土層	甕	口縁部		−	−	横ハケ	横ハケ、指押サエ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/7)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰色、乳白色の粒	少	○	断面	

土器観察表（15）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測区	備考
50	421	6区 黒色土層	甕	口縁部	－		－	ハケ、指ナデ	横ハケ、指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	橙 (2.5YR6/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色の粒	中	○	断面	
	422	7区 黒色土層	甕	口縁部	－		－	ハケ	ハケ	赤 (10R5/8)	赤黒 (10R2/1)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の乳白色、白透色、茶色の粒	多	△	断面	
	423	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ハケ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、乳白色の粒	中	○	断面	
	424	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ハケ	横ハケ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、黒透色の粒	少	○	断面	
	425	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ハケ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1㎜の透色、黒透色、2㎜の茶色の粒	中	○	断面	
	426	7区 黒色土層	甕	口縁部		－	－	横ハケ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の灰色、黒透色、白透色、2㎜の白色の粒	少	○	断面	
	427	6区 黒色土層	甕	口縁部		－	－	指ナデ	指ナデ	黒 (7.5YR2/1)	橙 (7.5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の乳白色、褐色、茶色の粒	中	○	断面	
	428	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ハケ	横ハケ	褐灰 (7.5YR4/1)	橙 (7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、茶色、褐色、乳白色の粒	少	○	断面	
51	429	7区 黒色土層	甕	体部	－	－	－	ハケ	ハケ	暗赤褐 (5YR3/3)	黒褐 (5YR2/1)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰白、乳白色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	430	7区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ	指ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/8)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、1㎜の乳白色、灰色の粒	少	○	断面	煤
	431	7区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	ハケ	横ハケ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の乳白色、黒透色、白透色の粒	少	○	断面	
	432	4区 耕作土層	甕	突帯部	－	－	－	横ナデ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、1㎜の白透色、茶色、乳白色、灰色の粒	中	○	断面	
	433	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	ハケ	横ハケ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、1㎜の灰白の粒	少	○	断面	
	434	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ	横ハケ、指ナデ	赤褐 (5YR4/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1～0.5㎜の透色、1～2㎜の乳白色、茶色、白透色の粒	中	○	断面	煤
	435	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－		口縁部：ハケ 体部：指ナデ	横ハケ	赤褐 (5YR4/8)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、白透色、灰白、茶色の粒	中	○	断面	
	436	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	ヘラ削り	横ハケ	橙 (5YR6/6)	赤褐 (2.5YR4/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、茶色、灰色の粒	少	○	断面	
	437	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ、指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	赤褐 (5YR4/6)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、白透色、乳白色、赤褐色の粒	中	△	断面	
	438	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	口縁部：横ハケ 体部：横ナデ	ハケ、指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰白、灰色の粒	少	△	断面	煤
	439	6区 黒色土層	甕	突帯部	－		－	横ハケ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、灰白、2～4㎜の赤褐色の粒	中	○	断面	
	440	6区 黒色土層	甕	くびれ部	－	－	－	横ハケ、指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1～0.5㎜の透色、乳白色、灰白の粒	中	△	断面	煤
	441	7区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ナデ	指ナデ	暗赤褐 (2.5YR3/6)	赤褐 (2.5YR4/8)	0.1㎜の透色、1～2㎜の赤褐色、乳白色の粒	少	○	断面	
	442	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ	指ナデ	赤灰 (2.5YR4/1)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の乳白色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	443	6区 黒色土層	甕	突帯部		－	－	口縁部：ハケ 体部：横ハケ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	赤褐 (2.5YR4/8)	0.1㎜の透色、黒透色、1～2㎜の乳白色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	444	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ	ヘラ削り	赤褐 (5YR4/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色、灰白の粒	中	○	断面	煤
	445	6区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ	指ナデ	にぶい赤褐 (5YR4/4)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰白、茶色、乳白色の粒	中	○	断面	煤
	446	7区 黒色土層	甕	突帯部	－	－		横ハケ、指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、黒透色、2㎜の灰白の粒	少	△	断面	煤
	447	7区 黒色土層	甕	突帯部	－	－	－	横ハケ、指ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色、灰色の粒	中	○	断面	
	448	7区 黒色土層	甕	突帯部	－		－	指ナデ、ヘラ削り	指ナデ	黒褐 (5YR3/1)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の灰白、白透色、茶色の粒	少	○	断面	煤
	449	6区 黒色土層	甕	突帯部	－		－	横ナデ	口縁部：指ナデ 体部：指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5～1㎜の白透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	
	450	4区 耕作土層	甕	突帯部	－		－	横ナデ	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1～1㎜の透色、黒透色、灰白、茶色、白透色の粒	中	○	断面	

土器観察表（16）

挿図	図版番号	出土地区	器種	残存	法量（cm） 口径	器高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
51	451	6区 黒色土層	甕	突帯部		–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の乳白色、黒透色の粒	少	×	断面	
	452	7区 黒色土層	甕	突帯のみ		–	–	横ナデ	横ナデ	赤褐 (5YR4/8)	赤褐 (5YR4/5)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、灰白、白透色の粒	中	○	断面	
52	453	7区 黒色土層	甕	口縁部1/6	29.0	–	–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ削り	浅黄橙 (10YR8/4)	橙 (5YR6/6)	1㎜の黒透色、灰色、0.1㎜の透色、3㎜の茶色の粒	中	○	反転	煤
	454	7区A 黒色土層	甕	口縁部1/12		–	–	–		–	–	–	–	○	反転	
	455	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	28.2	–	–	横ハケ	口縁部：横ハケ 体部：ヘラ削り	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5～1㎜の透色、灰色、乳白色、茶色の粒	多	×	反転	
	456	7区 黒色土層	甕	口縁部1/8	26.4	–	–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜透色、0.5㎜の黒透色、1㎜の茶色の粒	中	○	反転	煤
	457	7区 黒色土層	甕	口縁部1/12	26.2	–	–	横ナデ	横ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1～1㎜の透色、黒透色、1㎜の灰色、茶色の粒	多	△	反転	煤
	458	7区 黒色土層	甕	口縁部1/10	25.6	–	–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ削り	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1～2㎜の透色、黒透色、灰色、乳白色、3㎜大の茶色の粒	多	○	反転	
	459	6区 黒色土層	甕	口縁部1/11	27.0	–	–	横ナデ	横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1～2㎜の透色、茶色、黒透色の粒	多	×	反転	
	460	7区 黒色土層	甕	口縁部1/11	24.2		–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	1㎜の透色、黒透色、灰色、茶色、白色の粒	多	△	反転	
	461	7区 黒色土層	甕	口縁部1/14	23.6			横ナデ	横ナデ	橙 (2.5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色の粒	中	○	反転	
	462	6区 黒色土層	甕	口縁部1/8	24.7			横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1㎜の透色、灰色、黒透色、1～2㎜の茶色の粒	多	△	反転	
	463	7区 黒色土層	甕	口縁部	23.4	–		横ナデ	横ナデ	橙 (2.5YR6/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、1㎜の乳白色、茶色の粒	少	○	反転	
53	464	7区 黒色土層	甕	口縁部1/10	22.4			横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：指ナデ	橙 (7.5YR8/3)	橙 (7.5YR7/6)	1㎜の透色、灰色、茶色、黒透色、乳白色の粒	中	×	反転	
	465	7区 黒色土層	甕	口縁部1/3	20.8	–		横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	橙 (2.5YR7/6)	1～2㎜の透色、灰色、茶色の粒	多	△	反転	
	466	7区 黒色土層	甕	口縁部1/10	16.6	–		横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：指ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の透色、灰色、茶色の粒	多	△	反転	
	467	7区 黒色土層	甕	口縁部1/9	14.5	–		横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (10YR8/2)	0.5㎜の灰色、茶色、0.1㎜の透色、2㎜の茶色の粒	中	○	反転	煤
	468	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	16.6	–		ハケ	口縁部：横ハケ 体部：横方向ヘラ削り	橙 (2.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	1㎜の透色、灰色の粒	多	×	反転	磨滅
	469	6区 黒色土層	甕	口縁部1/15	28.8	–	–	横ハケ	横ハケ	黄橙 (7.5YR7/8)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜以下の透色、0.5㎜の乳白色、黒灰色、灰白の粒	少	○	反転	
	470	7区 黒色土層	甕	口縁部1/5	27.0	–	–	指ナデ	口縁部：ハケ 体部：ヘラ	橙 (2.5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	0.1㎜の透色、1㎜の白透色、乳白色、2㎜の白色の粒	中	○	反転	煤
	471	6区 黒色土層	甕	口縁部	17.5	–	–	横ハケ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	灰黄 (2.5Y6/2)	0.1㎜の黒透色、透色の粒	少	○	反転	
	472	6区 黒色土層	甕	口縁部1/7	17.2	–	–	口縁部：横ナデ 体部：指ナデ	口縁部：横ナデ 体部：指ナデ	浅黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1㎜の透色、1㎜の透色、黒透色、茶色の粒	中	○	反転	
	473	7区 黒色土層	甕	口縁部1/15	25.0	–	–	横ナデ	口縁部：横ハケ 体部：ヘラ	橙 (2.5YR6/6)	黒褐 (2.5YR3/2)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の乳白色、黒透色の粒	中	○	反転	
	474	7区 黒色土層	甕	口縁部	24.6	–	–	横ナデ	横ハケ	浅黄橙 (7.5YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.5㎜の白透色、黒透色、灰色、茶色、2㎜の茶色の粒	中	×	反転	
	475	6区、7区 黒色土層	甕	口縁部1/2	24.2		–	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	口縁部：ハケ 体部：ヘラ削り	灰白 (2.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2～4㎜の茶色、灰白の粒	多	○	反転	
	476	7区A 黒色土層	甕	口縁部1/12	–			–	–	–		–	–	○	反転	
	477	6区 黒色土層	甕	口縁部1/8	18.7	–		横ハケ	口縁部：横ナデ 体部：横ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の透色、黒透色、灰色、2～3㎜の透色、茶色の粒	多	△	反転	煤
54	478	6区 黒色土層	甕	口縁部1/10	23.6	–	–	横ハケ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ削り	灰黄 (2.5Y7/2)	橙 (2.5YR6/8)	1㎜の透色、黒透色、乳白色、3㎜の茶色の粒	多	○	反転	
	479	7区 黒色土層	甕	口縁部1/8	12.3	–	–	口縁部：指ナデ 体部：ハケ	口縁部：指ナデ 体部：指ナデ	淡黄 (2.5Y8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1～0.5㎜の透色、灰色の粒	中	○	反転	
	480	6区 黒色土層	甕	口縁部1/4	31.4	–	–	口縁部：ハケ 体部：指ナデ	口縁部：ハケ 体部：指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	暗褐 (10YR3/3)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、灰色、1～4㎜の灰白の粒	中	○	反転	

土器観察表（17）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm） 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
54	481	6区 黒色土層	甕	口縁部1/2	27.4	–	–	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	ハケ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色の粒	中	○	反転	
	482	6区 黒色土層	甕	口縁部1/12	25.0			横ナデ	口縁部：横ハケ 体部：ヘラ削り	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	0.5㎜の透色、黒透色、2㎜の茶色	中	○	反転	
	483	7区 黒色土層	甕	口縁部	22.8	–		横ナデ	口縁部：横ハケ 体部：ハケ		–	0.5～1㎜の灰色、黒透色、透色の粒	多	△	反転	
	484	7区 黒色土層	甕	口縁部1/8	22.0			横ナデ	横ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	2～4㎜の茶色、灰白、乳白色の粒	中	○	反転	
55	485	6区 黒色土層	甕	口縁部1/4	31.4	–	–	口縁部：指ナデ 体部：横ハケ	口縁部：横ハケ 体部：ヘラ削り及び指ナデ	黄橙 (10YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1㎜の透色、灰白、茶色の粒	多	△	反転	摩滅
	486	7区 黒色土層	甕	口縁部1/5	28.0		–	指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	1㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	多	○	反転	
	487	7区 黒色土層	甕	口縁部1/7	23.8	–	–	指ナデ	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ削り	橙 (7.5YR6/6)	黒褐 (10YR3/1)	1～2㎜の茶色、灰色、灰白の粒	多	○	反転	煤
	488	7区 黒色土層	甕	体部	24.[illegible]	–	–	指ナデ	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ削り	黄橙 (7.5YR8/8)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	1㎜の白透色、黒透色、茶色	多	○	反転	
	489	7区 黒色土層	甕	口縁部1/11	16.4	–	–	指ナデ	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ削り	灰白 (10YR8/2)	灰黄 (2.5YR7/2)	0.5㎜の透色、灰色、1㎜の茶色	中	○	反転	
	490	6区 黒色土層	甕	口縁部1/2	29.4	–	–	口縁部：横ナデ 体部：縦方向指ナデ	縦方向ヘラ削り	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、1～2㎜の茶色の粒	中	○	反転	煤
	491	7区 黒色土層	甕	口縁部1/10	24.2	–	–	指ナデ	指ナデ	にぶい黄 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰色	少	○	反転	
	492	7区 黒色土層	甕	口縁部1/19	24.3	–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5㎜の透色、黒透色の粒	少	○	反転	
	493	7区 黒色土層	甕	口縁部1/7	18.5	–	–	指ナデ	口縁部：指ナデ 体部：ヘラ削り	橙 (2.5YR7/8)	灰黄褐 (10YR4/2)	0.1㎜の透色の粒	少	△	反転	煤
56	494	6区、7区 黒色土層	甕	口縁部1/3	30.6	–	–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ削り	橙 (5YR7/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.5㎜の黒透色、白透色の粒	中	○	反転	
	495	7区 黒色土層	甕	口縁部1/7	29.0	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色の粒	少	○	反転	煤
	496	6区 黒色土層	甕	口縁部1/10	24.2	–	–	横ナデ	横ハケ	黄橙 (10YR8/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	1㎜の透色、灰色、黒透色、3～4㎜の茶色の粒	多	△	反転	
	497	6区 黒色土層	甕	口縁部1/7	19.0	–	–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ削り	赤褐 (2.5YR4/6)	褐 (7.5YR4/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、1㎜の灰色、茶色、乳白色の粒	少	○	反転	煤
	498	7区 黒色土層	甕	口縁部1/5	17.0	–	–	口縁部：指ナデ 体部：部分的ヘラ磨キ	指ナデ	橙 (2.5YR6/8)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、乳白色、茶色の粒	少	○	反転	指でえぐった大きなくぼみ有
	499	7区 黒色土層	甕	口縁部1/6	12.5			横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ハケ	灰白 (10YR8/2)	灰黄 (2.5YR6/2)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色の粒	中	○	反転	
	500	7区 黒色土層	小型甕	口縁部1/5	12.4	-	–	口縁部：ヘラ磨キ 体部：指ナデ	口縁部：ヘラ削り 体部：指ナデ、指押サエ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1～0.5㎜の白透色、灰白、灰色、乳白色の粒	中	○	反転	煤
	501	7区 黒色土層	甕	口縁部1/9	24.8		–	丁寧な横ナデ	横ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	0.5～1㎜の黒透色、白透色、灰白、灰色の粒	中	△	反転	
	502	3区 黒色土層	甕	頸部1/6		–	–	指ナデ→ミガキ	横ナデ	褐灰 (10YR4/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰色、茶色、1㎜の乳白色、茶褐色の粒	中	△	反転	煤（外面）
	503	6区 黒色土層	甕	口縁部1/7	16.9	–	–	横ハケ	口縁部：横ハケ 体部：ハケ	橙 (2.5YR6/8)	橙 (2.5YR6/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰色、乳白色の粒	少	○	反転	
	504	6区 黒色土層	甕	口縁部1/7	15.0	–	–	横ハケ、指ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ削り	浅黄橙 (10YR8/4)	灰黄 (2.5Y7/2)	0.5㎜の黒透色、乳白色、2～4㎜の茶色の粒	中	○	反転	
	505	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	口縁部：横ハケ、指ナデ 体部：横ハケ、指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	灰白 (2.5Y8/2)	0.1㎜の黒透色、1～3㎜の茶色、灰色、乳白色の粒	多	×	断面	
	506	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	横ハケ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、白色の粒	中	○	断面	
	507	6区 黒色土層	甕	口縁部	–	–		横ハケ、指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1㎜の透色、1㎜の灰色、灰白の粒	中	○	断面	
	508	7区 黒色土層	甕	口縁部	–			横ナデ	ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.1㎜の透色、0.5～1.5㎜の透色、黒透色、茶色の粒	中	○	断面	
	509	6区 黒色土層	甕	口縁部		–	–	指ナデ	横ハケ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR7/6)	0.5～1㎜の透色、灰色の粒	多	△	断面	
	510	7区 黒色土層	甕	口縁部		–	–	指ナデ	ハケ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の乳白色の粒	少	○	断面	

土器観察表（18）

挿図	図版番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底径	装飾及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石英	雲母	焼成	写真図版	備考
	511	6区黒色土層	壺	口縁部	–			横ナデ	横ハケ	灰 (7.5YR7/1)	灰 (7.5YR7/1)	0.5～1㎜の白色粒、黒色色、乳白色の粒	中	×	断面		
	512	7区黒色土層	壺	口縁部	–	–		横ナデ	ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の透色、灰白の粒	中	○	断面		
	513	7区黒色土層	壺	口縁部	–	–		横ナデ	ハケ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	1～2㎜の灰白、乳白色の粒	多	○	断面		
	514	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	指ナデ	横ハケ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.5～1㎜の透色、黒透色、赤色の粒	中	○	断面		
	515	7区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	ハケ	LR縄文：指ナデ 体部：ハケ	黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	少	○	断面		
	516	7区黒色土層	壺	口縁部31/10	16.0	–	–	ハケで調整後指ナデ	指ナデ	暗赤褐 (5YR3/2.1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	0.5～1㎜の白透色、乳白色、赤色の粒	中	△	反転		
	517	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	横ハケ	横ハケ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	1㎜の透色、灰色、茶色、黒透色の粒	中	○	断面		
57	518	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ハケ	にぶい橙 (5YR7/4)	橙 (5YR7/6)	0.1～1㎜の白透色、黒透色、褐色、透色、乳白色、白色の粒	多	×	断面		
	519	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ハケ	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	0.5～1㎜の黒透色、白透色、赤色、灰色、褐色の粒	多	×	断面	煤	
	520	7区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	横ハケ	横ハケ	黒褐 (5YR3/1)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	0.5～1㎜の褐色、茶色、黒色の粒	少	○	断面	煤	
	521	7区黒色土層	壺	LR縄文	–	–	–	横ナデ	ハケ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、1㎜の乳白色、灰白、茶色の粒	中	○	断面		
	522	6区黒色土層	壺	LR縄文	–	–	–	横ナデ	横ナデ	灰白 (7.5Y8/1)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1㎜の透色、2㎜の茶色、灰色の粒	中	○	断面	煤	
	523	7区黒色土層	壺	LR縄文	–	–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5～1㎜の透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	多	×	断面		
	524	7区黒色土層	壺	LR縄文	–	–	–	指ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、褐色、黒透色の粒	少	○	断面		
	525	7区黒色土層	壺	LR縄文	–	–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.5～1㎜の透色、黒透色、灰色、茶色の粒	多	△	断面		
	526	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/3)	灰黄褐 (10YR5/2)	0.1㎜の透色、1～2㎜の灰白、灰色の粒	少	○	断面		
	527	6区黒色土層	壺	口縁部	–		–	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/6)	浅黄橙 (2.5Y8/3)	1～2㎜の透色の粒	多	△	断面		
	528	6区黒色土層	壺	口縁部	–		–	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	0.1㎜の透色、黒透色、1～2㎜の茶色、灰色、褐色の粒	中	○	断面		
	529	7区黒色土層	壺	口縁部	–		–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	橙 (5YR7/6)	1～2㎜の透色、白透色、灰色、茶色の粒	多	△	断面		
	530	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–		横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	橙 (7.5YR7/6)	1～2㎜の透色、黒透色、赤色の粒	多	×	断面		
	531	6区黒色土層	壺	口縁部	–	–		横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	1～3㎜の透色、乳白色、灰白、茶色の粒	多	×	断面		
	532	7区黒色土層	壺	胴部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	1㎜の透色、黒透色、灰色、茶色の粒	多	×	断面		
	533	7区黒色土層	壺	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ハケ	黄橙 (5YR8/6)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、2～4㎜の透色、灰色、赤褐色の粒	少	○	断面		
	534	6区黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1㎜の透色、灰色、乳白色の粒	中	○	断面		
	535	6区黒色土層	甕	口縁部	–		–	横ナデ	横ナデ	橙 (2.5YR6/6)	灰 (5YR6/4)	0.1㎜の透色、1㎜の灰色、乳白色の粒	中	○	断面		
	536	6区黒色土層	甕	口縁部	–		–	横ハケ	横ナデ	橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1～0.5㎜の黒透色、灰色、乳白色の粒	中	○	断面		
	537	6区黒色土層	甕	口縁部	–	–	–	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ハケ後ミガキ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、1～2㎜の白透色、灰色、赤褐色の粒	中	○	断面	煤	
	538	7区黒色土層	甕	口縁部27	–	–	–	横ハケ	ヘラ刻り	橙 (2.5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色、3㎜の灰白の粒	少	○	断面		
	539	7区黒色土層	坩	口縁部	–	–	–	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色の粒	少	○	断面		
	540	6区黒色土層	坩	口縁部	–	–	–	指ナデ	指ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄 (2.5Y8/3)	0.5㎜の黒透色、1㎜の灰色、透色、茶色の粒	多	×	断面		

土器観察表（19）

挿図番号	図版番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	石英	焼成	混和材	備考
					口径	高	底径	表	裏	表	裏					
57	541	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	灰白（10YR8/2）	灰白（2.5Y8/1）	0.5～1 mmの灰色、白透色、黒透色、乳白色、茶色、褐色の粒	中	○	断面	
	542	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	橙（2.5YR7/6）	1 mmの透色、乳白色、黒透色の粒	多	△	断面	
	543	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ヘラ割り	黄灰（2.5Y8/2）	にぶい黄橙（10YR6/3）	0.5～1 mmの透明、黒透色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	544	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	ヘラ割り	赤褐（2.5YR4/8）	暗赤褐（2.5YR3/4）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの灰色、茶色の粒	中	○	断面	口縁の調整に手法
	545	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	ハケ	橙（2YR6/6）	灰褐（7.5YR4/2）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの白透色、黒透色の粒	少	○	断面	
	546	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	明赤褐（2.5YR5/8）	にぶい橙（7.5YR6/4）	0.1mmの透色、0.5mmの乳白色、黒透色、茶色、灰色、灰色の粒	中	○	断面	
	547	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ハケ	灰黄褐（10YR6/2）	明黄褐（2.5Y7/6）	0.5～2 mmの黒透色、透色、灰色、乳白色の粒	多	×	断面	
	548	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	橙（5YR6/6）	にぶい黄橙（10YR6/3）	0.1～0.5mmの透色、白透色、1 mmの茶色、灰白の粒	少	○	断面	
	549	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	橙（2.5YR6/6）	明赤褐（5YR5/6）	0.1～0.5mmの白透色、乳白色、黒透色の粒	少	○	断面	
	550	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	ハケ	横ナデ	にぶい黄橙（10YR5/4）	にぶい橙（7.5YR5/4）	0.1mmの透色、0.5mmの灰色の粒	少	○	断面	煤
	551	4区 排作土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	橙（5YR6/6）	にぶい橙（7.5YR6/4）	0.1mmの透色、0.5mmの黒透色、白透色の粒	少	×	断面	
	552	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	ハケで調整後横ナデ	ハケで調整後横ナデ	赤褐（10R5/6）	にぶい赤褐（2.5YR5/4）	0.1mmの黒透色、1 mmの灰色、茶色、透気の粒	少	○	断面	
	553	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	指ナデ	浅黄橙（10YR8/3）	にぶい黄橙（10YR7/2）	0.5mm黒透色、灰色の粒	少	○	断面	
	554	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	明赤褐（5YR5/6）	赤褐（5YR4/4）	0.1mmの透色、0.1～1 mmの白透色、乳白色、褐色、茶色、黒透色の粒	中	○	断面	煤
	555	7区A～I 黒色土層	甕	口縁部1/8	—	—	—	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙（10YR7/4）	橙（7.5YR6/6）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの灰色、黒色、褐色、乳白色の粒	中	○	断面	煤
58	556	7区 黒色土層	甕	口縁部1/3	20.6	—	—	指ナデ	ヘラ割り	明赤褐（2.5YR5/6）	明赤褐（2.5YR5/6）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの黒透色、白透色、乳白色、茶色の粒	多	○	灰断	煤
	557	6区 黒色土層	鉢	口縁部1/2	16.5	—	—	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	黒褐（5YR2/1）	明赤褐（5YR5/6）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの白透色、乳白色、茶色の粒	中	○	灰断	煤
	558	6区 I 黒色土層	甕	口縁部1/6	15.0	—	—	横ハケ	横ハケ	橙灰（10YR6/1）	灰黄（2.5Y7/2）	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透色、褐色、赤色、黒透色、白色の粒	少	○	灰断	煤（外面）
	559	6区 黒色土層	壺	口縁部1/8	11.0	—	—	横ハケ	横ナデ	にぶい黄橙（10YR7/2）	浅黄（2.5Y7/3）	0.1mmの透色、黒透色、1 mmの乳白色の粒	少	○	灰断	
	560	6区 黒色土層	小型甕	口縁部1/6	8.0	—	—	指ナデ	指ナデ	灰（7.5YR7/1）	灰（7.5YR7/1）	0.1mmの透色、灰色の粒	少	△	灰断	
	561	6区 黒色土層	甕	口縁部1/6	8.4	—	—	指ナデ	口縁部：ヘラ 体部：横ナデ	明赤褐（2.5YR5/6）	明赤褐（2.5YR5/6）	0.1mmの透色、0.5mmの乳白色、1 mmの透色の粒	少	○	灰断	
	562	6区 黒色土層	甕	口縁部1/7	22.5	—	—	横ハケ	指ナデ	明赤褐（2.5YR5/6）	にぶい赤褐（5YR5/4）	0.1～0.5mmの透色、黒透色、白透色、灰白の粒	中	○	灰断	
	563	6区4b層 黒色土層	坩	肩部	—	—	—	丁寧なナデ	指ナデ	明赤褐（2.5YR5/6）	明赤褐（2.5YR5/6）	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、茶色の粒	中	○	灰断	煤（外面）
	564	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	明赤褐（5YR5/6）	明赤褐（5YR5/6）	0.1mmの透色、白透色、黒透色の粒	少	○	断面	
	565	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	赤褐（2.5YR4/8）	赤褐（2.5YR4/6）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの白透色、白色、黒透色の粒	中	○	断面	
	566	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ、指押サエ	明赤褐（2.5YR5/8）	赤褐（5YR4/6）	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透色	中	○	断面	
	567	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ハケ	横ハケ	にぶい黄橙（10YR8/3）	橙灰（10YR5/1）	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透明、褐色、黒色、黒透色、乳白色の粒	少	△	断面	
	568	6区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	橙（7.5YR6/6）	暗（7.5YR4/3）	0.1mmの透色、0.5mmの乳白色の粒	少	○	灰黒	煤
	569	7区A 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	黒褐（2.5YR3/1）	にぶい黄橙（10YR7/3）	0.1mmの透色、1～2 mmの茶色、褐色、赤褐色の粒	中	○	断面	
	570	7区 黒色土層	甕	口縁部	—	—	—	指ナデ	指ナデ	赤褐（10R5/6）	明赤褐（5YR5/6）	0.1mmの透色、0.5～1 mmの白透色、乳白色、茶色の粒	中	○	断面	

土器観察表（20）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	石量	焼成	実測図	備考
					口径	高	底部径	表	裏	表	裏					
58	571	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ハケ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.1～0.5mmの白透色、黒透色の粒	少	○	断面	
	572	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	指ナデ	指ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	0.1～1mmの透色、白透色の粒	多	△	断面	
	573	6区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ナデ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、黒透色、茶色、灰白、赤褐色の粒	中	○	断面	
	574	7区 黒色土層	甕	口縁部	－	－	－	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、黒透色、灰白の粒	少	○	断面	
	575	4区 耕作土層	甕	口縁部1/17	29.8	－	－	横ナデ	口縁部：指押サエ 体部：指ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mmの白透色、黒透色、灰色、2mmの茶色の粒	多	○	断面	
	576	7区 黒色土層	甕	口縁部	16.5	－	－	指ナデ	横ハケ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/6)	0.1～0.5mmの黒透色、黒色、灰色、0.5～1mmの乳白色の粒	多	△	断面	
59	577	6区Ⅲ 黒色土上層	甕	底部	－	－	7.1	ヘラ磨キ、指ナデ	指ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	0.1～1mmの透色、黒透色、灰白、赤褐色の粒	多	△	部分的反転	
	578	6区Ⅲ 黒色土上層	甕	底部1/2	－	－	6.6	ヘラ磨キ	指ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、黒透色、1mmの灰色、乳白色、灰白、茶色の粒	中	○	反転	煤表に剥離
	579	6区Ⅰ15番 黒色土上層	甕	底部1/2	－	－	7.4	指ナデ	ヘラ磨キ	黄橙 (10YR8/6)	黄灰 (2.5Y4/6)	0.1～1mmの透色、黒透色、灰白、赤褐色、灰色の粒	中	○	反転	焼成部分的軟
	580	4区45番 黒色土下層	甕	底部1/2	－	－	6.0	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	灰白 (10YR8/2)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、黒透色、灰白、茶色、暗茶褐色の粒	中	○	反転	
	581	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部	－	－	5.2	指ナデ	指ナデ	赤褐 (5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1mmの透色、0.5～2mmの乳白色、茶色、白透色、灰色の粒	中	△	完形	煤
	582	6区 43番	甕	底部1/2	－	－	6.0	ヘラ削リ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	0.1～1mmの白透色、黒透色、茶色、灰色の粒	多	×	反転	
	583	6区Ⅰ 57番	甕	底部	－	－	5.6	指ナデ	指ナデ、指押サエ	赤褐 (5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1mmの透色、黒透色、0.5～1mmの白透色、1～2mmの灰白、茶色、暗茶褐色の粒	中	△	完形	
	584	6区Ⅰ3番 黒色土上層	甕	底部1/2	－	－	5.8	指ナデ	ハケ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5～1mm白透色、乳白色、3mmの茶色の粒	中	△	完形	
	585	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部1/2	－	－	5.6	指ナデ	指ナデ、指押サエ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	0.1～0.5mmの透色、黒透色、茶色の粒	少	△	反転	煤
	586	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部1/3	－	－	4.5	指ナデ	指ナデ	橙 (5YR6/8)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透色、黒透色、1mmの茶色、乳白色、褐色の粒	中	○	反転	
	587	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/2	－	－	4.6	指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR6/4)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、黒透色、灰白、灰色、茶色の粒	中	○	反転	
	588	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部1/3	－	－	5.2	指ナデ	指ナデ	黄褐 (2.5Y5/3)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.5～1mmの白透色、黒透色、白色、褐色の粒	中	△	反転	煤
	589	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部	－	－	4.4	指ナデ	指ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	黒褐 (7.5YR2/2)	0.1mmの透色、0.1～0.5mmの白透色、乳白色、褐色、茶色の粒	少	△	反転	煤
	590	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部			5.4	指ナデ	指ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	0.5mmの白透色、白色、黒透色、乳白色、黒色、褐色の粒	多	△	完形	
	591	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部	－		5.4	指ナデ		橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	0.1～0.5mmの白透色、乳白色、白色、黒透色、褐色の粒	中	△	反転	煤
	592	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部1/4	－	－	4.3	指ナデ	指ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1mmの透色、0.5～2mmの乳白色、茶色、赤褐色、灰色の粒	少	○	反転	底部底は欠損の可能性有
	593	3区 黒色土層	甕	底部1/3	－	－	4.6	指ナデ	縦方向ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色、茶色、褐色、1mmの茶色の粒	中	△	反転	煤
	594	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部1/4	－	－	5.4	指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1mmの透色、黒透色、茶色、2mmの灰色、赤褐色の粒	中	△	反転	
	595	4区 耕作土層	甕	底部	－	－	7.3	指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.5～1mmの白透色、灰色、0.5～3mmの乳白色の粒	多	△	反転	
	596	6区24番 黒色土上層	甕	底部	－	－	6.8	指ナデ	指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (2.5YR6/6)	0.1mmの透色、0.5～1mmの白透色、黒透色、2mmの茶色、乳白色の粒	中	○	反転	
60	597	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部1/4	－	－	5.8	指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	灰黄 (7.5YR7/2)	0.1mmの透色、灰色、灰白、黒色、3mmの茶色の粒	少	△	反転	
	598	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/2	－	－	6.4	指ナデ	指ナデ	明赤褐 (5YR5/8)	黒褐 (10YR3/2)	0.1～1mmの透色、黒透色の粒	中	△	反転	
	599	6区Ⅰ，Ⅱ 黒色土上層	甕	底部		－	7.3	指ナデ	指ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	黒褐 (2.5Y3/1)	0.1mmの透色、0.5～2mmの白透色、乳白色、茶色、黒色、赤褐色、黒透色の粒	多	△	完形	煤
	600	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/2	－	－	10.4	横方向指ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	0.1～0.5mmの透色、白透色、黒透色、灰白、茶色の粒	中	△	反転	

土器観察表（21）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	石量	焼成	実測図	備考
					口径	高	底径	表	裏	表	裏					
60	601	6区Ⅱ 黒色土下層	甕	底部	－	－	9.4	指ナデ	指ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	明黄褐(10YR7/6)	0.1～1㎜の透色、白透色、黒透色、灰色の粒	多	△	反転	
	602	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部	－	－	5.6	横ナデ	指ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい黄橙(10YR7/2)	0.1㎜の透色、0.1～1㎜の乳白色、白色、茶色、黒透色、1～3㎜の褐色、茶色の粒	多	○	反転	
	603	3区 包含層	甕	底部1/3	－	－	4.3	横方向指ナデ	ハケ	黒褐(5YR3/1)	明赤褐(5YR5/6)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色、褐色、白色の粒	多	○	反転	煤
	604	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/1	－	－	3.9	指ナデ	指ナデ	橙(7.5YR7/6)	明赤褐(5YR5/6)	0.5㎜の透色、白透色、乳白色、黒透色、褐色の粒	中	○	反転	煤
	605	6区Ⅰ 黒色土下層	甕	底部1/3	－	－	3.8	指ナデ	指ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒褐色、灰色、白透色、茶色、乳白色の粒	中	△	反転	
	606	6区Ⅰ 黒色土上層	甕	底部1/2	－	－	4.2	指ナデ	指ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色、茶色、灰色の粒	少	△	反転	煤
	607	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部	－	－	4.2	ハケ、指押サエ	ハケ	にぶい橙(7.5YR7/4)	明赤褐(7.5YR7/2)	0.1㎜の透色、3㎜の茶色の粒	少	○	断面	煤
	608	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部	－	－	4.4	ハケ、指押サエ	指ナデ 一部ハケ	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄褐(10YR5/3)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色、乳白色の粒	中	○	断面	底は焼成時にはがれたもの
	609	6区Ⅰ 黒色土上層	甕	底部	－	－	3.9	ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	橙(2.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、乳白色の粒	少	○	反転	
	610	7区A－Ⅱ 黒色土層	甕	底部	－	－	7.2	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	0.1～1㎜の透色、黒透色、茶色、灰白、赤褐色、乳白色の粒	多	△	反転	
	611	6区78番 黒色土層	甕	底部	－	－	5.7	指ナデ	指ナデ	灰白(10YR8/2)	灰白(2.5YR8/1)	0.1～0.5㎜の黒透色、0.5～2㎜の茶色、赤褐色、灰白、乳白色の粒	多	△	断面	煤
	612	6区 黒色土層	甕	底部	－	－	4.9	指ナデ	指ナデ	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	中	△	断面	
	613	7区A 黒色土層	甕	底部	－	－	6.8	指ナデ	－	にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(7.5YR8/4)	0.5～1㎜の白透色、乳白色、黒透色、黒色、灰色、茶色、茶褐色の粒	中	△	反転	煤
61	614	6区19番 黒色土上層	甕	底部	－	－	8.0	指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	黒褐(2.5YR3/2)	0.5～2㎜の茶色、灰色、乳白色、黒透色、白透色の粒	多	△	完形	
	615	表採	甕	底部	－	－	7.2	指ナデ、横ナデ、縦方向ハケ	指ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	褐(10YR4/4)	0.1～1㎜の乳白色、黒透色、1～3㎜の白透色の粒	多	○	完形	
	616	7区A－Ⅰ 黒色土層	甕	底部1/2	－	－	6.3	ヘラ磨キ	指ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	黒褐(10YR3/1)	0.1～1㎜の透色、黒透色、2～3㎜の灰白の粒	中	△	反転	
	617	5区 黒色土層	甕	底部	－	－	6.8	指ナデ	指ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	0.5㎜の黒透色、灰色、赤褐色、白透色、茶色の粒	多	△	部分的反転	煤
	618	6区25番 黒色土層	甕	底部	－	－	7.5	指ナデ	指ナデ	赤褐(2.5YR4/8)	赤褐(2.5YR4/8)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色、灰白の粒	中	△	完形	煤
	619	6区32番 黒色土上層	甕	底部	－	－	7.1	指ナデ	ヘラ磨キ	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(5YR6/8)	0.1㎜の透色、1～2㎜の灰白、白透色の粒	中	○	完形	
	620	6区21番 黒色土上層	甕	底部	－	－	6.0	指ナデ	指ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、1～3㎜の灰白、乳白色、茶褐色の粒	中	△	完形	
	621	6区89番 黒色土層	甕	底部	－	－	6.8	指押サエ	指ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.1㎜の透色、黒透色、1～2㎜の乳白色、茶色の粒	少	○	完形	煤
62	622	6区 黒色土層	高杯	口縁部1/2	23.6	－	－	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	横ハケ、指ナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒透色、白色、灰色、1㎜の茶色の粒	中	○	反転	
	623	7区 黒色土層	高杯	杯部2/3	23.0	－	－	ハケ、ヘラで調整後指押サエ、指ナデ	ハケ	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、2～5㎜の乳白色、茶色の粒	中	△	両面	内側に丸い形で傷がつく
	624	7区 黒色土層	高杯	杯底部～脚上部	－	－	－	横ナデ	指ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.1㎜の透色、白透色、黒透色、白色、褐色の粒	少	△	両面	
	625	6区Ⅰ、Ⅱ 黒色土上層	高杯	底部～脚上部	－	－		杯部：指ナデ 脚部：指ナデ	杯部：－ 脚部：指ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の白透色、黒透色、灰色、茶色の粒	中	○	完形	
	626	7区A－Ⅰ 黒色土層	高杯	脚部	－	－	－	指ナデ	指ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、黒透色、茶色の粒	少	△	反転	
	627	6区 黒色土層	高杯	口縁部1/16	23.2	－	－	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/6)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒透色、茶色、白透色の粒	中	×	反転	
	628	6区 黒色土層	高杯	口縁部1/12	23.2	－	－	横ハケ	横ハケ	浅黄橙(7.5YR8/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の灰、黒透色、2㎜の茶色の粒	中	○	反転	
	629	6区－Ⅰ 黒色土上層	高杯	杯部	13.4	－	－	指ナデ	指ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒透色、白透色、灰色、乳白色の粒	少	○	反転	
	630	7区 黒色土層	高杯	口縁部	－	－	－	丁寧な指ナデ	丁寧な指ナデ	橙(5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/4)	0.1㎜の透色、灰色、黒透色、白色の粒	少	○	断面	

土器観察表（22）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
62	631	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ハケ、指ナデ	横ナデ	褐灰 (5YR4/1)	橙 (5YR6/6)	0.1~0.5㎜の透色、黒透色の粒	中	○	断面	煤
	632	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ハケ	横ハケ、指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、黒透色の粒	少	○	断面	煤
	633	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ハケ	横ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	橙 (5YR6/6)	0.1~0.5㎜の白透色、黒透色の粒	中	○	断面	煤
	634	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	指ナデ	横ハケ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1~0.5㎜の透色、黒透色の粒	中	○	断面	
	635	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ハケ	指ナデ	赤褐 (2.5YR4/6)	橙 (2.5YR6/8)	0.1㎜の透色、黒透色の粒	少	○	断面	
	636	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ハケ、指ナデ	横ハケ、指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1~0.5㎜の透色、白透色の粒	少	○	断面	
	637	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.1㎜の透色の粒	少	○	断面	
	638	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	ヘラ磨キ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (10YR4/1)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、灰色の粒	中	○	断面	煤
	639	7区A−I 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	橙 (7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.1~0.5㎜の白透色、黒色、黒透色、茶色の粒	少	○	断面	煤（外面）
	640	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	口縁部：横ハケ 体部：指ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	明赤褐 (2.5YR5/6)	0.1㎜の透色、黒透色の粒	少	△	断面	煤
	641	6区 黒色土層	高杯	口縁部		–	–	横ナデ	横ナデ	赤褐 (2.5YR4/6)	赤褐 (5YR4/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の乳白色の粒	中	△	断面	
	642	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	0.1㎜の透色、黒透色の粒	少	○	断面	
	643	7区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (5YR6/8)	0.1㎜の透色、1㎜の白透色、黒透色の粒	少	△	断面	
	644	6区 黒色土層	高杯	口縁部	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1~0.5㎜の透色、灰色の粒	中	○	断面	
	645	6区I 黒色土上層	高杯	底部~脚上部	–	–	–	杯部：ヘラ磨キ 脚部：ヘラ磨キ	杯部：丁寧なナデ 脚部：指ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の乳白色、灰色、茶色の粒	少	○	完形	
	646	7区A−I 黒色土層	高杯	底部~脚上部	–	–	–	脚部：指ナデ	杯部：丁寧なナデ 脚部：指ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1㎜の透色、黒透色、2~4㎜の茶色の粒	少	○	完形	
	647	7区 黒色土層	高杯	底部~脚上部	–	–	–	脚部：ヘラ磨キ	脚部：指ナデ	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色の粒	少	△	反転	
	648	7区A−I 黒色土層	高杯	脚部上	–	–	6.1	脚部：ヘラ磨キ	脚部：指ナデ	橙 (7.5YR6/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の乳白色、白透色の粒	少	△	反転	
	649	6区42番 黒色土上層	高杯	脚部上	–	–	–	脚部：指ナデ、指押サエ	脚部：ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (2.5YR6/8)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	少	○	完形	煤
	650	7区A−I 黒色土層	高杯	脚部上	–	–	6.0	脚部：指ナデ	脚部：ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰黄褐 (10YR6/2)	0.5㎜の透色、2㎜の茶色の粒	少	○	反転	煤
	651	7区A−I 黒色土層	高杯	脚部上	–	–	–	丁寧な指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/3)	暗灰黄 (2.5YR5/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、茶色の粒	少	△	反転	
63	652	6区I 黒色土上層	高杯	脚部上	–	–	–	脚部：ヘラ磨キ	脚部：指ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (2.5YR6/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の白透色の粒	少	○	反転	
	653	7区A 黒色土層	高杯	脚部上	–	–	–	脚部：ヘラ磨キ	脚部：指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄褐 (10YR7/6)	0.1~0.5㎜の透色、黒透色、2~4㎜の乳白色の粒	中	△	完形	
	654	6区98番 黒色土層	高杯	脚部上	–		–	脚部：ヘラ磨キ	脚部：指ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、茶色の粒	少	○	完形	
	655	7区A−I 黒色土層	高杯	脚部上	–	–	–	脚部：横ハケ	脚部：ナデ	灰白 (2.5YR8/2)	灰白 (2.5YR8/2)	0.1㎜の透色、黒灰色、3㎜の茶色の粒	少	×	反転	
	656	6区 黒色土層	高杯	脚部	4.4	–	–	指ナデ	粗雑な指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1~0.5㎜の透色、白透色、黒透色、白色、乳白色、灰色の粒	少	△	両面	6区と7区の境
	657	6区I 58番 黒色土上層	高杯	脚部	–	–	6.5	脚部：横ナデ	脚部：指ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5~1㎜の白透色、乳白色の粒	中	△	完形	
	658	7区A−I 黒色土上層	高杯	脚部下	–	–	16.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1㎜の透色、0.1~0.5㎜の白透色、黒透色、茶色、灰色、乳白色、黒色の粒	中	○	反転	煤
	659	7区 黒色土層	高杯	脚部1/8	–	–	12.8	横ナデ	指ナデ	黄橙 (10YR8/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1㎜の透色、0.1~0.5㎜の白透色、黒透色、乳白色の粒	中	△	反転	煤
	660	7区 黒色土層	高杯	脚部1/8	–	–	14.8	ハケ	指ナデ、横ハケ	にぶい橙 (5YR7/4)	褐 (7.5YR4/4)	0.1㎜の透色、0.1~0.5㎜の乳白色、白色、白透色、茶色、暗茶褐色の粒	中	○	反転	

土器観察表（23）

挿図	図版番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
63	661	7区 黒色土層	高杯	脚部1/7	−	−	10.2	指ナデ	−	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1mmの透色、0.1〜0.5mmの黒透色、白色、白透色、褐色の粒	中	△	反転	
	662	6区 黒色土層	高杯	脚端部	−	−	−	横ハケ	指ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.5mmの白色、0.5〜1mmの黒透色、1〜2mmの灰色、茶色の粒	多	△	断面	煤
64	663	7区 黒色土層	杯	口縁部	21.0	−	−	口縁部：横ナデ 体部：横ハケ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.5mmの灰色、白透色、乳白色、茶色、黒透色の粒	少	○	反転	
	664	6区 黒色土層	杯	口縁部1/5	17.0	−	−	横ナデ	ヘラ磨き	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1mmの黒透色、透色の粒	少	○	反転	
	665	表採	杯	口縁部1/16	15.4	−	−	横ナデ	横ナデ	灰白 (10YR8/2)	灰白 (2.5Y8/2)	0.1mmの黒透色、灰色、茶色の粒	少	△	反転	
	666	6区 黒色土層	杯	口縁部1/4	15.0	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	0.1mmの透色、黒透色、0.1〜1mmの茶色、白透色の粒	少	△	反転	
	667	6区 黒色土層	杯	口縁部1/6	15.0	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (2.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1mmの透色、0.5mmの白透色の粒	少	○	反転	煤
	668	6区 黒色土層	杯	口縁部1/9	14.7	−	−	横ナデ	指ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	0.1〜0.5mmの白透色、黒透色、白色の粒	中	○	反転	
	669	7区 黒色土層	杯	口縁部1/11	14.7	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR7/8)	0.1mmの黒透色、乳白色の粒	少	×	反転	
	670	7区 黒色土層	杯	口縁部1/10	14.8	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (5YR7/6)	0.1mmの透色、0.1〜2mmの茶色、白透色、乳白色の粒	少	×	反転	
	671	7区 黒色土層	杯	口縁部1/12	14.4	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、灰色、黒透色、1〜2mmの茶色の粒	少	○	反転	
	672	6区−Ⅲ 黒色土上層	杯	口縁部	12.3	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄 (2.5YR7/3)	浅黄 (2.5YR7/4)	0.1〜0.5mmの白透色、黒色、茶色、褐色、灰色の粒	少	○	反転	
	673	6区 黒色上層	杯	体部	−	−	−	口縁部：横ナデ 体部：横ハケ	指ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR7/8)	0.1mmの透色、1〜0.5mmの白透色、白色、灰色、黒色の粒	少	△	反転	
	674	7区 黒色上層	杯	口縁部1/14	13.7	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの透色、灰色、黒透色、乳白色の粒	少	○	反転	
	675	7区 黒色上層	杯	口縁部1/15	13.6	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1mmの透色、0.5mmの茶色、灰色の粒	中	×	反転	
	676	6区 黒色上層	杯	口縁部1/7	13.2	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.1mmの黒透色の粒	少	×	反転	
	677	6区 黒色上層	杯	口縁部1/5	13.1	−	−	横ナデ	指ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/6)	0.5〜1mmの透色、灰白、茶色、赤褐色、白透色の粒	少	×	反転	
	678	6区 黒色上層	杯	口縁部1/5	13.6	−		横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	−	−	○	反転	黒色土器
	679	6区 黒色上層	杯	口縁部1/12	13.4			横ナデ	横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1mmの透色、0.1〜0.5mmの黒透色、灰色の粒	中	○	反転	
	680	7区 黒色土層	杯	口縁部1/6	13.6	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの灰色、黒透色の粒	少	×	反転	
	681	6区 黒色土層	杯	口縁部1/5	12.8	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.1mmの透色、黒色、0.5mmの茶色の粒	少	×	反転	
	682	7区A−1 黒色土層	杯	口縁部	12.3	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	0.1〜0.5mmの透色、黒色、灰色、茶色の粒	少	○	反転	
	683	6区 黒色土層	杯	口縁部1/9	13.2	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、白透色、茶色の粒	中	×	反転	
	684	6区 黒色土層	杯	口縁部1/7	12.8	−	−	横ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	0.1mmの灰色の粒	少	○	反転	
	685	7区 黒色土層	杯	口縁部	12.8	−	−	横ハケ、指ナデ	横ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.5mmの灰色、白透色、乳白色、茶色、黒透色の粒	中	○	反転	
	686	6区 黒色土層	杯	口縁部1/9	11.8	−	−	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1mmの透色、0.1〜0.5mmの黒透色、白透色、茶色の粒	中	○	反転	
	687	6区 黒色上層	杯	口縁部1/10	11.6	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄 (2.5Y7/3)	0.1mmの透色、白透色、黒透色の粒	少	△	反転	
	688	7区 黒色上層	杯	口縁部1/12	11.6			横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.1mmの透色、0.5mmの茶色、灰色の粒	少	×	反転	
	689	6区Ⅰ 黒色土上層	杯	口縁部〜体部1/4	12.4	4.2	−	杯部：横ナデ	杯部：横ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1mmの透色の粒	少	△	反転	
65	690	6区41番 黒色土上層	杯	口縁部〜体部1/4	12.9	4.2	6.0	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ 高部：指押サエ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.1mmの透色、0.5〜1mmの黒色、乳白色、茶色の粒	中	○	反転	

土器観察表（24）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	器高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
65	691	7区A−I 黒色土層	杯	底部	−	−	6.4	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後土圧痕	杯部：指ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒色、茶色の粒	中	△	反転	底に土の圧痕有
	692	6区8番 黒色土上層	杯	底部	−	−	6.0	底部：ヘラ切離後ナデ	杯部：横ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、灰色、0.5~1mmの茶色、赤褐色の粒	少	△	反転	
	693	6区II 黒色土上層	杯	底部	−	−	6.7	底部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、0.5~1mmの茶色の粒	中	×	反転	
	694	7区A−I 黒色土層	杯	底部1/6	−	−	6.0	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、黒透色、乳白色の粒	中	△	反転	煤
	695	6区II 黒色土上層	杯	底部	−	−	5.0	杯部：横ナデ 底部：指ナデ調整後土圧痕	杯部：横ナデ、指押サエ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、黒色、0.5~1mmの乳白色、茶色の粒	少	△	反転	
	696	6区II 黒色土上層	杯	底部	−	−	5.8	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	0.1mmの透色、0.1~0.5mmの黒色の粒	少	○	反転	煤
	697	6区II 黒色土上層	杯	底部	−	−	5.6	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	橙(2.5YR6/8)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、黒透色、茶色の粒	少	△	反転	
	698	6区−II 黒色土下層	杯	底部	−	−	6.5	杯部：横ナデ	杯部：指ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、茶色、褐色の粒	少	×	反転	
	699	6区II 黒色土上層	杯	底部	−	−	8.0	杯部：横ナデ	杯部：指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/2)	0.1~0.5mmの白透色、黒透色、茶色、灰白、灰色の粒	少	○	反転	
	700	7区A−I 黒色土層	杯	底部	−	−	6.7	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、茶色の粒	少	△	完形	
	701	7区A−I 黒色土層	杯	底部	−	−	5.8	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後やや粗雑な指ナデ	杯部：横ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5~1mmの灰色、赤褐色の粒	多	△	反転	
	702	6区I 黒色土上層	杯	底部	−	−	8.2	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	橙(5YR7/8)	灰白(2.5Y8/2)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、灰色、黒透色、赤褐色の粒	少	△	反転	
	703	7区A−I 黒色土層	杯	底部	−	−	6.4	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、黒透色、乳白色の粒	少	△	反転	
	704	6区7番 黒色土上層	杯	底部1/4		−	6.4	杯部：指ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	0.1mmの透色、黒色、0.5~1mmの茶色の粒	少	○	反転	煤（外面）
	705	6区II 黒色土上層	杯	底部1/6	−		6.0	杯部：横ナデ	杯部：横ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの茶色の粒	少	△	反転	
	706	6区46番 黒色土層	杯	底部	−		5.0	杯部：横ナデ	杯部：指ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	0.1~0.5mmの黒色、灰色、茶色の粒	中	○	反転	煤（外面）
	707	7区A 黒色土層	杯	底部1/6	−		8.8	杯部：横ナデ	杯部：指ナデ	にぶい黄褐(10YR4/3)	褐(10YR4/4)	0.1mmの透色、0.1~1mmの黒透色、乳白色、灰褐色、茶色の粒	多	×	反転	
	708	6区I 黒色土上層	杯	底部	−	−	7.6	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後指ナデ	丁寧なナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/8)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒透色、灰色の粒	中	×	反転	
	709	6区II 黒色土上層	杯	底部	−	−	6.4	杯部：横ナデ	杯部：指ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.1mmの透色、0.1~0.5mmの白透色、黒透色、乳白色、灰色の粒	中	○	反転	煤
	710	6区37番 黒色土上層	杯	底部	−	−	6.1	外部：横ハケ 底部：ロクロ切離後指ナデ	杯部：横ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、乳白色、0.5~1mmの茶色の粒	少	○	反転	煤（外面）
	711	6区−I 黒色土上層	杯	底部	−	−	5.3	杯部：横ナデ 底部：ヘラ切離後ナデ	杯部：横ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの灰色、乳白色、白透色、茶色の粒	中	△	反転	煤（内面）
66	712	7区A−I 黒色土層	杯	高台	−	−	8.3	杯部：横ナデ 底部：時計回り指圧による粘土ねじりによる後高台を貼付け	杯部：横ナデ	橙(2.5YR7/8)	橙(2.5YR7/6)	0.1mmの透色、黒色、0.5~1mmの茶色、灰色の粒	少	×	完形	
	713	6区40番 黒色土上層	杯	高台1/3	−	−	6.8	杯部：横ナデ 底部：時計回り指圧による一部粘土ねじり	杯部：横ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、灰色、茶色、乳白色の粒	少	△	反転	
	714	7区A−I 黒色土層	杯	高台	−	−	8.2	杯部：横ナデ 底部：時計回り指圧による粘土ねじり後高台貼付け	杯部：横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、0.5~1mmの茶色の粒	少	△	反転	
	715	6区I 黒色土上層	杯	高台	−	−	7.2	杯部：横ナデ 底部：時計回り指圧による粘土ねじり	杯部：横ナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(10YR8/4)	0.1mmの透色、0.5~1mmの黒色、茶色、赤褐色の粒	少	○	反転	
	716	7区A−I 焼土1	杯	高台		−	8.9	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離後高台を貼付け、丁寧な指ナデ	杯部：横ナデ、指押サエ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、0.5~1mmの茶色の粒	中	○	反転	焼土内出土
	717	6区14番 黒色土上層	杯	高台	−	−	7.3	杯部：横ナデ 底部：時計回り指圧による粘土ねじり後高台を貼付け	杯部：横ナデ	橙(5YR7/6)	にぶい橙(5YR7/4)	0.1mmの透色、黒色、0.5~1mmの茶色の粒	少	△	完形	
	718	6区I 黒色土上層	杯	高台	−	−	6.3	杯部：横ナデ 底部：時計回り指圧による一部粘土ねじり	杯部：横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	橙(5YR7/6)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、0.5~1mmの茶色の粒	少	△	完形	
	719	7区A−I 黒色土層	杯	高台	−	−	8.3	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離し後指ナデ	杯部：横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/4)	0.1mmの透色、0.5~1mmの灰色、茶色、赤褐色の粒	少	△	反転	
	720	7区A 黒色土層	杯	高台1/8	−	−	6.5	杯部：横ナデ 底部：切離し後高台貼付け後指ナデ	杯部：指ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1mmの透色、0.5mmの黒色、乳白色の粒	少	△	反転	煤（外面）

土器観察表（25）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量(cm) 口径	高	底部径	調整及び文様 表	裏	色 表	裏	胎土	石量	焼成	実測図	備考
66	721	7区A－I 黒色土層	杯	高台	－	－	5.5	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離し後高台貼付け	杯部：横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、灰色、0.5～1㎜の茶色の粒	少	×	反転	
	722	7区A－I 黒色土層	杯	高台	－	－	6.8	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離し後高台貼付け、指ナデ	杯部：横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、黒透色、0.5～1㎜の茶色の粒	少	△	反転	
	723	7区A－I 黒色土層	杯	高台	－	－	6.0	杯部：横ナデ 底部：指ナデ	杯部：横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、乳白色、茶色の粒	少	△	反転	
	724	6区Ⅲ 黒色土上層	杯	高台	－	－	5.7	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離し後高台貼付け	杯部：横ナデ	淡黄 (2.5Y8/3)	灰黄 (2.5Y7/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、白透色、0.5～1㎜の茶色の粒	少	△	反転	被熱有 時計回りの回転有
	725	6区Ⅰ 黒色土上層	杯	底部	－	－	6.2	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離し後高台貼付け	杯部：横ナデ	橙 (2.5YR7/6)	にぶい橙 (5YR7/4)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒透色、茶色、黒色、灰色の粒	少	△	反転	煤 ヘラ記号のようなもの有
	726	6区Ⅰ 黒色土上層	杯	底部1/3	－		6.0	杯部：横ナデ 底部：切離し後指ナデ	杯部：横ナデ	橙 (2.5YR7/6)	にぶい橙 (5YR7/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、黒透色、1～2㎜の茶色の粒	中	△	反転	
	727	6区Ⅰ 黒色土下層	杯	底部	－		6.6	杯部：横ナデ 底部：ロクロ切離し後横ナデ	杯部：横ナデ	橙 (5YR7/8)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.1㎜の透色、0.5～1㎜の黒透色、黒色、乳白色、1～2㎜の茶色の粒	中	△	反転	
	728	3区 黒色土層	杯	底部1/3		－	6.0	杯部：横ナデ 底部：ヘラ切離し後指ナデ	杯部：横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	灰黄 (2.5Y7/2)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、黒色、茶色、赤褐色の粒	少	○	反転	
	729	7区A－I 黒色土層	杯	底部	－	－	5.7	杯部：横ナデ 底部：ヘラ切離し後指ナデ	杯部：横ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、茶色の粒	少	△	反転	体部のみ
	730	7区A－I 黒色土層	杯	底部	－	－	4.9	杯部：横ナデ 底部：ヘラ切離し後指ナデ	杯部：横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	0.1㎜の透色、黒色、0.5～1㎜の茶色の粒	少	△	反転	煤（外面）
	731	7区A－I 黒色土層	杯	底部	－	－	5.3	杯部：横ナデ 底部：ヘラ切離し後指ナデ	杯部：横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、黒色、茶色の粒	少	△	反転	
	732	6区 黒色土層	杯	底部	－	－	6.4	杯部：横ナデ	杯部：横ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.1～0.5㎜の透色、白透色、黒透色、灰色、灰白、乳白色、茶色の粒	少	○	反転	
67	733	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/12～底部1/4	－	－	7.4	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	黒 (7.5YR2/1)	0.1㎜の透色、0.5㎜の乳白色の粒	少	○	反転	
	734	6区Ⅱ 黒色土上層	黒色土器	口縁部～体部1/4	15.5	－	－	杯部：横ナデ	杯部：ヘラ磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	暗灰 (N3)	0.1㎜の乳白色の粒	少	△	反転	
	735	7区A－Ⅱ 黒色土層	黒色土器	口縁部1/10	14.5	－	－	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	暗灰 (3N)	0.5～1㎜の白透色、黒透色、茶色、黒色の粒	少	○	反転	
	736	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/12	14.4	－	－	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	暗灰 (3N)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒色、乳白色、白色、褐色の粒	中	○	反転	
	737	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/10	14.1	－	－	杯部：横ナデ	杯部：ヘラ磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	暗灰 (N3)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒褐色、黒色、白色の粒	少	○	反転	
	738	6区Ⅰ 黒色土上層	黒色土器	口縁部1/10	14.4	－	－	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	オリーブ黒 (5Y3/1)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白透色、白色、乳白色の粒	少	○	反転	
	739	4区 黒色土下層	黒色土器	口縁部1/12	14.1	－	－	杯部：横ナデ	杯部：一部ヘラ磨キ	灰黄 (2.5Y7/2)	黄灰 (2.5Y4/1)	0.1～0.5㎜の黒褐色、茶色、白透色の粒	少	△	反転	
	740	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/12	14.1	－	－	杯部：横ナデ	杯部：ヘラ磨キ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	黒褐 (2.5Y3/1)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の白色の粒	少	○	反転	
	741	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/10	13.8	－		杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	灰黄褐 (10YR5/2)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の茶色、白透色、黒透色の粒	少	○	反転	
	742	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/12	12.0	－	－	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (10YR4/1)	0.1㎜の透色、0.1～0.5㎜の黒透色、茶色の粒	少	○	反転	墨（外面）
	743	7区A－I 黒色土層	黒色土器	口縁部1/10	11.1		－	杯部：横ナデ	杯部：一部ヘラ磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (10YR5/1)	0.1～0.5㎜の黒透色、黒色、白透色の粒	中	○	反転	
	744	6区31掌 黒色土上層	黒色土器	底部	－	－	6.8	杯部：横ナデ	ミガキ	浅黄橙 (10YR8/3)	黒 (7.5YR2/1)	0.1㎜の透色の粒	中	△	完形	
	745	6区Ⅰ 黒色土下層	黒色土器	底部		－	5.8	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒褐 (10YR3/1)	0.1～0.5㎜の白色、黒色、茶色の粒	少	△	反転	
	746	7区A 黒色土層	黒色土器	底部1/2	－	－	6.8	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	浅黄橙 (10YR8/4)	灰 (10Y5/1)	0.1～0.5㎜の透色、黒透色、茶色、黒色の粒	少	×	反転	
	747	6区－I 黒色土下層	黒色土器	高台1/4	－	－	6.5	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	0.1～0.5㎜の黒透色、茶色、白透色、白色の粒	少	○	反転	
	748	6区－I 黒色土下層	黒色土器	底部1/6	－	－	6.9	杯部：横ナデ	杯部：ヘラ磨キ	灰黄 (2.5Y6/2)	黄灰 (2.5Y4/1)	0.1㎜の透色、白色、茶色の粒	少	△	反転	
	749	6区Ⅱ 黒色土上層	黒色土器	底部1/1	－	－	5.4	杯部：横ナデ	杯部：ヘラ磨キ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	褐灰 (10YR6/1)	0.5㎜の透色、茶色、赤褐色、黒透色、白透色、灰白の粒	中	△	完形	
	750	7区A－Ⅱ 黒色土層	黒色土器	体部	－	－	－	杯部：横ナデ	杯部：磨キ	橙 (7.5YR6/6)	黒褐 (7.5YR3/1)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒色、乳白色、茶色の粒	少	×	完形	

土器観察表（26）

挿図	図面番号	出土地区	器種	残存	法量（cm）			調整及び文様		色		胎土	石量	焼成	実測図	備考
					口径	高	底径	表	裏	表	裏					
67	751	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(2.5YR7/8)	橙(5YR7/8)	0.1㎜の透色、0.1〜0.5㎜の乳白色、白色、白透色の粒	中	△	断面	煤
	752	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(2.5YR7/8)	橙(5YR7/6)	0.1〜0.5㎜の茶色、灰色の粒	少	×	断面	
	753	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	0.5〜0.5㎜の透色、灰色、灰白、茶色、黒透色の粒	少	○	断面	
	754	6区−I 黒色上下層	杯	口縁部1/10	−	−	−	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙(10YR5/3)	明黄褐(10YR7/6)	0.1〜0.5㎜の白透色、黒透色、灰色、乳白色、茶色の粒	少	△	反転	煤
	755	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	0.1〜0.5㎜の透色、黒透色、灰白、茶色の粒	少	○	断面	墨汁留か
	756	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	橙(2.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.1㎜の透色、黒透色、灰白の粒	少	○	断面	煤
	757	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	橙(5YR7/6)	0.1㎜の透色、黒透色、灰白の粒	少	×	断面	
	758	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	0.1〜0.5㎜の透色、白透色、灰色、黒透色の粒	少	△	断面	
	759	7区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	黄橙(10YR7/4)	0.1㎜の透色、黒透色、灰色の粒	少	△	断面	
	760	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	0.1㎜の透色、白透色、灰色、茶色の粒	少	×	断面	
	761	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、茶色、灰色の粒	少	×	断面	
	762	7区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(2.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/6)	0.1〜0.5㎜の透色、茶色、灰色、乳白色の粒	少	△	断面	
	763	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	橙(7.5YR7/6)	0.1〜0.5㎜の透色、灰色、乳白色、茶色の粒	少	×	断面	
	764	7区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	指ナデ	横ナデ	橙(5YR7/8)	浅黄橙(7.5YR8/6)	0.1㎜の透色、0.5〜1㎜の茶色、乳白色、灰色の粒	中	△	断面	
	765	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	橙(5YR6/6)	0.1㎜の透色、灰白、灰色、0.5㎜の白透色の粒	少	△	断面	
	766	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/4)	0.1〜0.5㎜の透色、茶色、灰色の粒	少	×	断面	
	767	7区A−I 黒色土層	杯	口縁部		−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄(2.5Y7/3)	0.1㎜の透色、0.1〜0.5㎜の白透色、黒透色、灰色の粒	少	×	断面	
	768	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)	0.1〜0.5㎜の透色、白透色、灰色、黒透色の粒	中	×	断面	
	769	7区 黒色土層	杯	口縁部	−		−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	0.1㎜の灰色、乳白色、茶色の粒	少	△	断面	
	770	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/8)	0.1〜1.5㎜の乳白色、灰色、茶色、透色の粒	中	△	断面	
	771	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−		指ナデ	横ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR7/6)	0.1㎜の透色の粒	少	×	断面	
	772	表採	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR7/6)	淡橙(5YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5〜2㎜の茶色、灰白の粒	少	×	断面	
	773	7区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	0.1〜0.5㎜の透色、茶色、灰色、灰白の粒	少	×	断面	
	774	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR7/6)	0.1㎜の透色、黒透色、0.5㎜の灰色の粒	少	△	断面	
	775	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	橙(7.5YR7/6)	0.1〜0.5㎜の黒透色、黒色、茶色の粒、灰褐色、茶色の粒	中	×	断面	煤
	776	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	指ナデ	指ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR6/6)	0.1㎜の透色、0.5㎜の黒透色、乳白色、灰色の粒	少	△	断面	
	777	6区 黒色土層	杯	口縁部	−	−	−	横ナデ	横ナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(10YR8/4)	0.1㎜の透色、0.5㎜の白透色、白色、黒色の粒	中	△	断面	
	778	6区 黒色土層	杯	口縁部		−	−	横ナデ	横ナデ	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	0.1〜0.5㎜の灰色、茶色、透色の粒	少	△	断面	
	779	6区 黒色土層	杯	口縁部		−	−	横ナデ	横ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	0.1㎜の透色、灰色、乳白色の粒	少	△	断面	
	780	7区 黒色土層	杯	口縁部	−		−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	0.1㎜の透色、灰色、茶色の粒	少	×	断面	

土器観察表（27）

挿図	図版番号	出土地区	部位	残存	法量(cm) 口径	高	底径	調整及び文様 表	裏	色調 表	裏	胎土	石英	焼成	実測	備考
68	781	6区 黒色上層	胴部破片	体部	－	－	－	格子目タタキ	平行線文→指ナデ	暗灰 (10YR3/1)	黄灰 (2.5YR5/1)	0.1～0.5mmの透色、白色、黒色の粒	少	○	断面	住居の壁は不明、民調になるか
	782	6区I 黒色上層	宝形系	体部	－	－	－	格子目タタキ	平行線文	灰黄 (2.5Y6/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	0.1～0.5mmの透色、黒色、灰色、褐色の粒	少	○	断面	
	783	6区東 黒色上層	体部	体部	－	－	－	格子目タタキ	横ナデ	灰 (5Y4/1)	灰 (5Y5/1)	0.1mmの透色、白色、黒色の粒	少	○	断面	
	784	6区I 黒色上層	体部	体部	－	－	－	格子目タタキ	横ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	0.1～0.5mmの白色、灰色、黒色の粒	少	○	断面	
	785	7区 黒色上層	体部	体部	－	－	－	平行線タタキ	同心円文	にぶい橙 (5YR4/3)	褐灰 (5YR5/1)	0.5mmの白色、灰色、赤橙色、乳白色、黒色の粒	中	○	断面	
	786	6区II 黒色上層	宝形系	体部	－	－	－	格子目タタキ	横ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄 (2.5Y7/4)	0.1mmの透色、黒透色、0.5mmの茶色の粒	多	○	断面	
	787	6区 黒色二層	底部系	底部	－	－	13.5	格子目文	指ナデ	褐灰 (10YR5/1)	褐灰 (10YR5/1)	0.5～1mmの黒色、褐色の粒	少	○	底転	検出状況の写真有
69	788	7区A－1	胴部破片	胴部	－	－	－	…	布目	にぶい橙 (7.5YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	0.5mmの白透色、乳白色、2～5mmの茶色の粒	中	×	断面	
	789	7区A－1	胴部破片	底部	－	－	－	…	布目	橙 (2.5YR6/6)	赤褐 (2.5YR4/6)	2～6mmの茶色、赤褐色の小石の粒	多	×	断面	
	790	7区A－1	胴部破片	胴部	－	－	－	…	布目	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	0.1～0.5mmの黒透色、灰白、2～5mmの茶色、赤褐色の粒	多	×	断面	
	791	6区I 黒色上層	胴部破片	胴部	－	－	－	…	布目	橙 (2.5YR6/6)	にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	1～6mmの赤色、赤褐色、灰色の粒	多	×	断面	
	792	7区A－1	胴部破片	体部	－	－	－	…	布目	橙 (2.5YR6/6)	にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	1～5mmの灰色、茶色、褐色の粒	多	×	断面	
	793	6区M62層 黒色十層	胴部破片	胴部	－	－	－	…	布目	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	2～5mmの茶色、茶色、0.5～1mmの黒透色の粒	多	×	断面	
	794	7区A－1	胴部破片	胴部	－	－	－	…	布目	橙 (2.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	2～5mmの灰色、茶色、赤褐色の粒	多	×	断面	
	795	6区I 黒色十上層	胴部破片	胴部	－	－	…	…	布目	橙 (2.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR5/4)	0.5～4mmの灰色、茶色の粒	多	×	断面	
	796	7区A－1	胴部破片	胴部	－	－	…	…	布目	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR5/4)	2～6mmの茶色、薄茶色の粒	多	×	断面	

石器観察表（1）

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	偶面実測	備考
797	7区 黒色土層	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.3	0.4	断面	
798	3区 黒色土層	石鏃	チャート	1.7	1.5	0.4	0.5	断面	
799	6区 黒色土層	石鏃	チャート	1.5	1.2	0.1	0.2	断面	
800	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石 黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.4	断面	
801	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.5	1.5	0.3	0.3	断面	
802	7区 黒色土層 7区	石鏃	黒曜石	1.6	1.7	0.5	0.6	断面	
803	黒色土層	石鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.3	断面	
804	4～7区	石鏃	黒曜石	(推定) 1.4	(推定) 1.4	0.3	0.2	断面	
805	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.4	1.5	0.2	0.3	断面	
806	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.2	1.2	0.4	0.3	断面	
807	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.6	断面	
808	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	0.8	1.4	0.4	0.3	断面	
809	3区 黒色土層	石鏃	チャート	2.1	1.6	0.5	1.0	断面	
810	4～7区	石鏃	チャート	2.0	1.8	0.3	0.8	断面	
811	6区 黒色土層	石鏃	チャート	2.4	1.4	0.4	0.6	断面	
812	7区 黒色土層	石鏃	変成岩	2.3	1.3	0.4	0.7	断面	
813	3区 黒色土層	石鏃	変成岩	2.7	1.6	0.5	1.1	断面	
814	6区 黒色土層	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.4	0.7	断面	
815	4区 包含層	石鏃	チャート	2.3	1.6	0.4	0.8	断面	
816	4～7区	石鏃	チャート	2.0	1.3	0.4	0.7	断面	
817	6区 黒色土層	石鏃	チャート	2.0	1.2	0.2	0.5	断面	
818	4区 包含層	石鏃	変成岩	2.5	1.5	0.4	1.1	断面	
819	3区 黒色土層	石鏃	チャート	2.1	1.7	0.4	1.0	断面	
820	4区 包含層	石鏃	チャート	2.4	1.8	0.3	1.1	断面	
821	4～7区	石鏃	チャート	1.9	1.4	0.2	0.7	断面	
822	6区 黒色土層	石鏃	変成岩	2.0	1.2	0.2	0.6	断面	
823	4区 包含層	石鏃	黒曜石	3.1	1.2	0.4	1.2	断面	
824	3区 黒色土層	石鏃	黒曜石	2.2	0.9	0.3	0.5	断面	
825	4～7区	石鏃	黒曜石	1.5	1.5	0.2	0.3	断面	
826	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.	1.5	0.3	0.4	断面	

石器観察表（2）

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	側面実測	備考
827	4～7区	石鏃	チャート	2.4	基部1.6	0.3	1.2	断面	
828	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.6	断面	
829	7区 黒色土層	石鏃？	チャート	1.4	1.1	0.2	0.4	断面	
830	6区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.5	断面	
831	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.5	1.1	0.2	0.4	断面	
832	6区 黒色土層	石鏃	チャート	1.5	1.7	0.3	0.4	断面	
833	5～7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.2	0.2	断面	
834	6区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.5	断面	
835	7区 黒色土層	石鏃？	黒曜石	1.8	1.6	0.5	0.9	断面	
836	4区 包含層	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.5	断面	
837	4区 表採	石鏃	チャート	1.7	1.3	0.4	0.7	断面	
838	4～7区	石鏃	チャート	1.9	1.7	0.4	0.9	断面	
839	3区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.4	0.9	0.2	0.2	断面	
840	6区 黒色土層	石鏃	黒曜石	(基)0.6	1.1	0.2	0.3	断面	
841	6区 黒色土層	石鏃	黒曜石	(基)0.7	1.7	0.4	0.6	断面	
842	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.4	0.5	断面	
843	7区 黒色土層	石鏃	黒曜石	1.2	0.8	0.2	0.1	断面	
844	7区 黒色土層	石鏃	チャート	1.4	1.1	0.3	0.3	断面	
845	7区 黒色土層	磨製石斧	変成岩	1.5	1.4	0.2	0.4	断面	
846	4区 包含層	磨製石斧	片岩	2.1	2.3	0.2	1.6	断面	
847	5区 黒色土層	磨製石斧	片岩	3.5	2.8	0.3	3.0	断面	
848	5区 黒色土層	磨製石斧	片岩	3.0	2.3	0.3	2.2	断面	
849	3区 黒色土層	磨製石斧	片岩	2.6	2.2	0.2	1.2	断面	
850	3区 黒色土層	磨製石斧	変成岩	2.2	2.8	0.2	2.2	断面	
851	2区 黒色土層	磨製石斧	変成岩	1.7	2.3	0.3	0.9	断面	
852	6区 黒色土層	磨製石斧	片岩	2.5	1.6	0.2	0.7	断面	
853	4～7区	石匙	玉髄	7.2	4.9	0.9	36.2	断面	
854	4～7区	石匙	玉髄	6.9	4.4	0.6	21.4	断面	
855	7区 黒色土層	石匙	チャート	5.4	4.5	0.85	24.1	断面	
856	7区 黒色土層	石匙	チャート	4.4	3.8	0.4	9.2	断面	

石器観察表（3）

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	側面実測	備考
857	7区 黒色土層	石匙	チャート	3.5	3.35	1.0	8.2	断面	
858	7区 黒色土層	石匙	チャート	4.5	3.1	0.6	10.3	断面	
859	7区 黒色土層	石匙	チャート	6.2	4.9	0.8	22.3	断面	
860	6区 黒色土層	石匙	玉髄	4.9	2.9	0.8	14.9	断面	
861	6区 黒色土層	石匙	チャート	4.9	2.9	0.65	8.7	断面	
862	4～7区	石匙	砂岩	5.1	1.4	0.45	5.2	断面	
863	7区 黒色土層	石匙	チャート	4.7	2.8	0.8	10.8	断面	
864	7区 黒色土層	石匙	玉髄	4.5	2.8	0.5	7.5	断面	
865	4～7区	石匙	チャート	4.4	2.2	0.6	6.1	断面	
866	不明	石匙	チャート	3.2	1.95	0.5	4.3	断面	
867	7区 黒色土層	石匙	チャート	3.9	1.6	0.95	5.1	断面	
868	4～7区	石匙	チャート	3.0	1.4	0.55	2.4	断面	
869	7区 黒色土層	石匙	チャート	3.0	1.6	0.9	4.0	断面	
870	不明	石匙	チャート	3.0	1.5	0.5	3.4	断面	
871	不明	石匙	チャート	3.9	2.8	1.45	11.8	断面	
872	6区 黒色土層	石匙	チャート	2.5	1.7	0.6	2.2	断面	
873	6区 黒色土層	石匙	チャート	4.7	2.6	0.7	9.1	断面	
874	7区 黒色土層	剥片	チャート	2.1	1.4	0.5	1.0	断面	未製石錐
875	7区 黒色土層	二次加工剥片	変成岩	3.3	3.3	0.4	5.7	断面	
876	7区 黒色土層	剥片	チャート	2.5	2.3	0.5	5.9	断面	
877	3区 黒色土層	二次加工剥片	変成岩	4.1	2.2	0.3	2.0	断面	
878	7区 黒色土層	石核	変成岩	9.13	7.54	4.02	478	見通し	
879	4区 包含層	敲石	砂岩	12.6	4.6	3.9	310	断面	
880	3区 黒色土層	石錘	砂岩	…	6.8	2.8	145.6	断面	
881	4区 包含層	石錘	砂岩	3.9	4.8	1.4	35.7	断面	
882	4区 包含層	敲石	砂岩	4.7	4.3	2.0	52.4	断面	
883	4区 包含層	石剣	砂岩	10.6	4.3	1.7	121.1	断面	
884	4区 包含層	スクレイパー	変成岩	8.6	4.9	1.4	106.7	断面	
885	6区1 黒色土層	スクレイパー	変成岩	6.15	4.1	1.7	—	見通し	
886	4区 包含層	石剣	頁岩	11.4	4.3	1.9	129.5	断面	

石器観察表（4）

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	備面実測	備考
887	4区 包含層	石斧	頁岩	3.5	5.4	1.4	33.0	磨面	
888	4区 包含層	石斧	砂岩	6.1	2.6	1.3	29.4	磨面	
889	4区 包含層	石斧	頁岩	6.3	3.8	1.2	50.5	磨面	
890	4区 包含層	石斧	頁岩	8.7	3.5	1.5	71.3	磨面	
891	4区 包含層	石斧	砂岩	－	4.3	1.7	58.0	磨面	
892	6区II 黒色土層 6区III	－	花崗岩	10.35	13.5	1.15	229.7	磨面	
893	黒色土層	－	花崗岩	15.8	9.75	1.75	308	磨面	
894	6区II 黒色土層	円盤状 石器	花崗岩	10.2	10.1	1.7	239.8	磨面	
895	6区 黒色土層	石錘	変成岩	9.2	－	1.2	71.3	磨面	
896	6区 黒色土層	石錘	変成岩	7.6	3.5	1.4	58.3	磨面	
897	4区 包含層	石錘	砂岩	7.4	4.1	1.3	62.9	磨面	
898	6区 黒色土層	石錘	変成岩	7.4	3.8	1.4	49.0	磨面	
899	6区 黒色土層	石錘	頁岩	6.3	4.3	1.3	50.5	磨面	
900	6区 黒色土層	石錘	砂岩	6.9	3.6	1.3	49.9	磨面	
901	6区 黒色土層	石錘	変成岩	6.9	3.9	1.3	54.5	磨面	
902	4区 包含層	石錘	変成岩	6.8	3.1	1.8	48.9	磨面	
903	6区 黒色土層	石錘	頁岩	6.7	3.2	1.5	43.5	磨面	
904	6区 黒色土層	石錘	変成岩	6.4	3.7	1.5	51.3	磨面	
905	6区 黒色土層	石錘	－	5.4	3.6	1.7	45.9	磨面	
906	7区A 黒色土層	石錘	砂岩	5.6	3.8	0.9	37.2	磨面	
907	7区 黒色土層	石錘	変成岩	5.7	4.6	1.0	37.9	磨面	
908	7区 黒色土層	石錘	変成岩	5.3	－	－	25.3	磨面	
909	6区 黒色土層	石錘	変成岩	4.9	3.6	1.0	21.1	磨面	
910	3区 黒色土層	石錘	変成岩	－	3.6	－	10.3	磨面	
911	7区 黒色土層	石錘	変成岩	5.9	4.2	－	20.4	磨面	
912	6区 黒色土層	石錘	変成岩	5.3	3.8	1.6	34.1	磨面	
913	6区 黒色土層	石錘	変成岩	5.5	3.2	1.6	35.8	磨面	
914	6区 黒色土層	石錘	変成岩	5.2	3.5	1.3	29.0	磨面	
915	4区 包含層	石錘	変成岩		－	1.1	17.5	磨面	
916	4区 包含層	石錘	変成岩	－	－	－	10.7	磨面	

石器観察表（5）

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	側面実測	備考
917	6区 黒色土層	石鏃	変成岩	4.3	2.8	1.2	19.0	断面	
918	6区 黒色土層	石鏃	変成岩	4.8	4.7	0.9	30.8	断面	
919	6区 黒色土層	石鏃	変成岩	4.5	3.6	1.8	33.5	断面	
920	4区 包含層	石鏃	変成岩	3.8	2.9	0.8	12.1	断面	
921	4区 包含層	石鏃	変成岩	3.6	3.3	0.8	12.1	断面	
922	6区 黒色土層	石鏃	変成岩	3.5	3.4	0.9	13.6	断面	
923	4区 包含層	石鏃	変成岩	4.2	2.5	1.4	17.9	断面	
924	4～7区	石鏃	変成岩	4.7	3.0	0.9	18.4	断面	
925	6区 黒色土層	石鏃	変成岩	3.9	2.8	0.9	12.2	断面	
926	4区 包含層	石鏃	変成岩	2.6	2.5	0.4	2.7	断面	
927	7区 黒色土層	石鏃	砂岩	4.6	4.2	2.7	70.2	断面	
928	5区 黒色土層	石鏃	変成岩	5.75	5.25	1.55	55.2	断面	
929	5区 黒色土層	石錐	砂岩	5.9	4.5	0.6	28.5	断面	
930	4区 包含層	石錐	砂岩	8.0	3.1	1.4	51.0	断面	
931	3区 黒色土層	石錐	変成岩	6.6	1.9	—	20.6	断面	
932	7区 黒色土層	敲石	変成岩	13.65	9.9	4.85	775.2	断面	
933	7区 黒色土層	凹石	変成岩	12.75	9.55	3.0	548	断面	
934	6区 黒色土層	凹石	変成岩	9.5	11.3	2.75	417	断面	
935	4区 包含層	敲石	変成岩	—	—	—	236.0	断面	
936	4区 包含層	磨石	砂岩	13.1	10.15	4.75	917.1	見通し	
937	—	磨石		11.7	10.3	4.85	950.1	見通し	
938	7区 黒色土層	磨石	変成岩	10.7	9.9	4.0	532	断面	
939	4区 包含層	敲石	変成岩	9.7	9.25	4.6	594.9	断面	
940	6区 黒色土層	敲石	変成岩	9.7	7.6	3.4	324.9	断面	
941	6区 黒色土層	磨石	砂岩	8.9	7.75	—	330.2	断面	
942	7区 黒色土層	磨石	砂岩		—	—	105.1	断面	
943	7区 黒色土層	敲石	変成岩	6.55	2.5	3.3	89.4	断面	
944	4区 包含層	敲石	変成岩	5.4	6.25	2.8	136.3	断面	
945	4区	敲石	変成岩	10.0	5.25	4.95	358	断面	
946	包含層	磨石	砂岩	8.1	6.6	5.95	445	断面	

石器観察表（6）

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	側面実測	備考
947	7区 黒色土層	敲石	一変成岩	7.1	5.15	4.3	213.8	断面	
948	—	敲石	変成岩	7.5	4.55	3.5	183.4	断面	
949	4区 包含層	敲石	変成岩	5.9	5.25	4.3	179.9	断面	
950	7区 黒色土層	敲石	変成岩	7.0	4.6	2.95	127.6	断面	
951	3区 黒色土層	敲石	変成岩	7.9	4.6	3.1	154.5	断面	
952	3区 黒色土層	敲石	砂岩	7.3	4.75	3.6	172.6	断面	
953	7区 黒色土層	敲石	砂岩	7.35	4.9	3.45	172.2	断面	
954	3区 黒色土層	敲石	変成岩	7.2	3.85	3.45	150.6	断面	
955	4区 包含層	敲石	砂岩	6.5	3.9	4.4	164.0	断面	
956	7区 黒色土層	敲石	変成岩	5.85	3.4	2.7	75.3	断面	
957	3区 黒色土層	敲石	砂岩	6.1	4.0	3.75	111.6	断面	
958	4区 包含層	敲石	頁岩	4.9	4.25	3.6	105.7	断面	
959	1区 黒色土層	敲石	変成岩	53.5	3.65	2.7	74.6	断面	
960	7区 黒色土層	敲石	凝灰岩	7.2	3.9	4.05	168.1	断面	
961	4区 包含層	敲石	真岩	6.5	6.35	1.5	79.8	断面	
962	4区 包含層	敲石	変成岩	11.8	3.1	3.0	174.2	断面	
963	4区 包含層	敲石	変成岩	9.5	2.2	3.75	208.8	断面	
964	—	石皿	凝灰岩	35.8	28.15	9.15		断面	
965	—	石皿	凝灰岩	18.7	26.6	6.5	—	断面	
番号なし	—	石錘	—	11.8	6.0	3.6	—	断面	

その他

図面番号	出土地区	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	側面実測	備考
966	4～7区	石鏃工	凝灰岩	3.84	—	—	1.3	断面	
967	3区 黒色土層	土錘	—	4.4	1.8	1.7	11.0	断面	
968	6区 黒色土層	〃	—	3.2	2.3	1.9	18.9	見通し	
969	3区 盛土	石皿	凝灰岩	32.8	19.6	16.1	—	断面	
970	6区 黒色土層	〃	砂岩	9.2	3.9	3.4	147.6	断面	

古銭観察表

図面番号	出土地区	貨名	時代	材質	残存	径(cm)	備考
974	6区 黒色土上層	皇武通寶	中世	銅		2.25	
975	6区 黒色土上層	永楽通寶	中世	銅		2.1	
976	5区 黒色土上層	寛永通寶	近世	銅		2.25	
977	5区 黒色土上層	寛永通寶	近世	銅		2.25	
—	6区 黒色土上層	仙臺通寶	近世	鉄		—	同面なし
	6区 黒色土上層	仙臺通寶	近世	鉄		—	同面なし
—	3区 表土	半銭	近代	銅		2.2	同面なし
	3区 表土	五銭	近代	銅		1.9	同面なし
—	6区 表土	—	—	鉄		—	同面なし

キセル観察表

図面番号	出土地区	種類	残存	材質	径(cm)	長さ(cm)	備考
971	3区 黒色土層	キセル	火皿	銅	—	—	
972	6区 黒色土層	キセル	雁首	銅	1.0	4.8	
973	6区 黒色土層	キセル	雁首	銅	0.9	4.8	

図　　版

図版1

梅木原地区調査前

調査風景

基本土層

図版2

2区全景　北より

3区全景　北より

4-c，d区全景　南西より

6区上層全景　北西より

7区全景　南より

7区全景　北西より